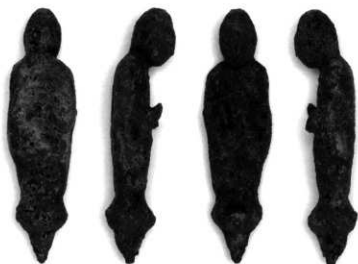


宝満山遺跡群 6

—第31・32・33・34・35・36・37・38・39・40次調査—



宝満山遺跡群第34次出土小金銅仏

平成22(2010)年

太宰府市教育委員会

宝満山遺跡群 6

—第31・32・33・34・35・36・37・38・39・40次調査—

平成22(2010)年

太宰府市教育委員会



竈門神社から見た宝満山頂



宝満32次 伝有智山城跡

山陽会土山支社 高宮



宝满 34 次金銅仏出土状態

福山県宝満町豊心寺跡門前



宝満 34 次出土金銅仏

福山県宝満町 宝満山

序

本書は、太宰府市の北東部に位置する大字北谷、内山で行われた宝満山遺跡群に係わる埋蔵文化財発掘調査報告書です。

宝満山は平安時代から筑紫の霊峰として全国に存在が知られ、今なおその命脈は竈門神社や宝満山修験会などによる行事に受け継がれています。

本書は平成17年度から5カ年をかけておこなった宝満山中での遺跡の広がりや残り具合を確認し、主要な遺構についての詳細な実測図を作成した国庫補助事業による調査や、平成21年度までに遺跡内でおこなわれた民間開発や農地転用事業に伴う緊急発掘調査を収録しています。

本書が学術研究はもとより文化財への理解と認識を深める一助となり、広く活用され、ひいては文化財愛護の精神が高揚することを心より願っております。

最後になりましたが、本調査に対しご理解ご協力いただきました、地元区をはじめとする関係各位ならびに諸機関の方々に心からお礼申し上げます。

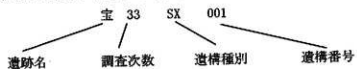
平成22年3月

太宰府市教育委員会

教育長 關 敏治

例言

- 本書は太宰府市大字北谷、内山で行われた宝満山遺跡の発掘調査報告書である。
- 遺構の実測には、国土調査法第II座標系を利用した。したがって本書に示される方位は特に注記のない限りG.N.（座標北）を示し、本文中に記載される遺構の角度もこれを基準としたものである。
- 本書に掲載される遺構番号は、以下の要領で理解される。なお遺構の性格を表記する記号については、SA 掃列跡、SB 掘立柱建物跡、SD 溝、SF 道路状遺構、SI 住居跡、SK 土坑、ST 墳墓、SX その他の遺構 などであり、略号として以下のように記載している。



- 第31、32、34、35、37、38次の測量および図化の一部は株式会社理蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 遺構の実測および遺構写真撮影は担当者の他32次は井上信正、柳智子、下高大輔、久味木理恵、34次は柳、久味木が行った。
- 第33、34、37、39、40次調査の空中写真撮影は（有）空中写真企画（代表塩路夫）が行った。
- 遺物の実測は調査担当者の他、柳智子、久家春美、木戸雅美、福井円が行った。
- 遺物の整理接合・復元作業は馬場由美、住山景子、末永亜由子が行った。金属製品の整理接合・復元作業・保存処理業務は株式会社タクトに委託した。
- 遺物の写真撮影は山村、柳が行った。
- 表入力・写真整理は柳、瀬戸口みな子、市川晴美、中原順子が行った。
- 図の浄書は調査担当者および遺物実測者が行った。
- 本書に用いた分類は以下のとおり。
須臾器・・・『宮ノ本遺跡II 一露跡篇一』（太宰府市の文化財第10集）1992
陶磁器・・・『大宰府条坊跡XV 一陶磁器分類一』（太宰府市の文化財第49集）2000
土器・・・『大宰府条坊跡II』（太宰府市の文化財第7集）1983
瓦・・・『大宰府史跡出土軒瓦・叩打痕文字瓦型式一覧』2000 九州歴史資料館
『宝満山遺跡群4』（太宰府市の文化財第79集）2005
瓦質・土師質土器・・・『大宰府出土の瓦質土器』山村信榮『中近世土器の基礎研究VI』1990
- 遺物は基本的に土器1/3、石・金属・土製品1/2、瓦1/4の大きさで図示している。
- 執筆は第31、32、33、34、35、38次遺構を山村が、36次を下高、遠藤西、39次を宮崎亮一、37、38次遺物、40次を高橋宇が行い、編集は山村が担当した。
- 付属のCD-ROMには本文、写真図版のpdfデータ、表などを収録している。第32、35、38次の踏査に関する詳細な画像や図はCD内のフォルダに収容している。

目次

I、遺跡の位置と歴史	1
II、調査の経緯	7
III、調査体制	9
IV、調査および整理方法	11
V、調査報告	17
1、第31次調査	17
(1) 調査に至る経緯	17
(2) 調査の概要	17
(3) 検出遺構	17
(4) 小結	17
2、第32次調査	23
(1) 調査に至る経緯	23
(2) 調査の概要	23
(3) 検出遺構	23
(4) 出土遺物	37
(5) 小結	40
3、第33次調査	43
(1) 調査に至る経緯	43
(2) 調査の概要	43
(3) 検出遺構	43
(4) 出土遺物	43
(5) 小結	49
4、第34次調査	52
(1) 調査に至る経緯	52
(2) 調査の概要	52
(3) 検出遺構	52
(4) 出土遺物	65
(5) 小結	76
5、第35次調査	81
(1) 調査に至る経緯	81
(2) 調査の概要	81
(3) 検出遺構	81
(4) 出土遺物	81
(5) 小結	89
6、第36次調査	93
(1) 調査に至る経緯	93
(2) 調査の概要	93

(3) 検出遺構	93
(4) 出土遺物	105
(5) 小結	120
7、第37次調査	129
(1) 調査に至る経緯	129
(2) 調査の概要	129
(3) 検出遺構	130
(4) 出土遺物	137
(5) 小結	149
8、第38次調査	157
(1) 調査に至る経緯	157
(2) 調査の概要	157
(3) 検出遺構	157
(4) 出土遺物	163
(5) 小結	171
9、第39次調査	177
(1) 調査に至る経緯	177
(2) 調査の概要	177
(3) 検出遺構	177
(4) 出土遺物	183
(5) 小結	191
10、第40次調査	197
(1) 調査に至る経緯	197
(2) 調査の概要	197
(3) 検出遺構	197
(4) 出土遺物	206
(5) 小結	225
VI、総括	235

I、遺跡位置と歴史

1 宝満山遺跡群の概要

太宰府市は玄界灘を臨む博多湾より南約10km、筑後平野と福岡平野とを繋ぐ溝状の地狭帯に位置し、西に脊振山塊より派生した丘陵、東に三郡山系から連なる山に囲まれている。宝満山遺跡群は、古代大宰府条坊の北東に位置し、宝満山(標高829m)を主峰とし愛嶽(おたけ)山裾までを含む太宰府市から筑紫野市域の山中に展開する遺跡群で、旧石器時代から修験道やその他の信仰に係る近現代までの遺構が調査報告されている(図1)。

7世紀末から8世紀初頭の段階で内山集落のト宮地区、中腹の辛野地区および山頂東下の東院谷地区において土器が出土し、8世紀中葉から後半の段階で南西側の原遺跡や中腹の辛野地区の21次において土師器甕に供養具を伴う土器相を持つ生活具のある遺跡が形成されている。さらに山頂南東斜面における祭祀、南東斜面の大南窟(室構造を持つ巨岩露窟)の使用がこの時期に始まっている。平安後期以降は山中に広く遺物の散布地が知られており、太宰府市側の内山、北谷をはじめ筑紫野市側の原、大石、本道寺などの集落、山中の東院谷、西院谷周辺などでは当該時期の遺物が燼壇状の造成面で広く採取されている。壺門神社下宮にある礎石群は平安後期の整地層上にあり、筑前観世音寺講堂や宇佐赤勒寺講堂と同規模クラスの拠点性を持つ建物が成立している。遺跡の西側では大字内山字辛野と大字北谷字小野に跨る丘陵頂部の平坦面においておこなった21次調査で8世紀後半の遺物包含層を埋めて13世紀頃に造成し、前面に2段の石垣と石階段、後背面に土塁と景石を用いた庭園遺構が存在することが判明し、平成16年1月に市の指定史跡となっている。その地点以下の北谷地区や南谷地区では在来下法による石垣や石段を用いて区画した燼壇状の造成遺構とその上に展開する掘立柱建物群が検出された。この段階にあっては山裾の内山、北谷地区と裾から一段上がった南谷、辛野地区に遺構が集中し、中宮周辺の西院谷、筑紫野市側の8合目付近にある東院谷地区などに若干住空間があったものと思われる。

遺跡群の外延の平野部においても11世紀後半以降には大宰府条坊北東から安楽寺天満宮(現太宰府天満宮)周辺の馬場、奥園、大町、連歌屋、三条遺跡にかけての広いエリア(大宰府条坊北東部外)で盛んに遺構が形成されるようになり四王寺山東麓の原遺跡においても同時期に寺院やそれに関連した坊跡が形成された様相が見られ、14世紀前半頃までは安定してその場が利用されている。安楽寺天満宮境内においても12世紀以降に盛んに境内が整地整備され、これらが折しも大宰府条坊終焉期に同時的に開発の機運が興ったものと見られ、宝満山での遺跡の盛衰と呼応する様相を呈している(図2、3)。

2 黎明期の宝満山

内山辛野遺跡や筑紫野市本道寺の東院谷では番番調査や平成15年7月の水害調査で遺物が採取されているが、その中に8世紀初頭に位置づけられる須恵器の坏が見られる。8世紀も中頃以降になると、山裾では原遺跡で「歯」銘の墨書土器を含む生活跡が、至近の33次調査では二彩陶器が出土している。下宮地区では瓦を伴った包含層が、さらにその上の内山辛野での21次調査では煮炊具としての甕を含む土器群と整地層が見つかり、その眼上に祭祀遺跡である辛野、山頂遺跡が展開している。その他、下宮から中宮に至る間の独立峰である3、30、34次地点の頂部付近で須恵器の坏や蓋の破片が採取されている。このような状況を総合的に判断すると、宝満山での遺跡の形成は8世紀初頭にはじまり、8世紀中頃には原遺跡などの山裾で一定期間の滞在を可能にする生活空間が形成され、21次地点のような山中でのキャンプサイトがそれに連動して展開し、現在の登拝ルート沿いの独立峰の頂部で小規模な土器

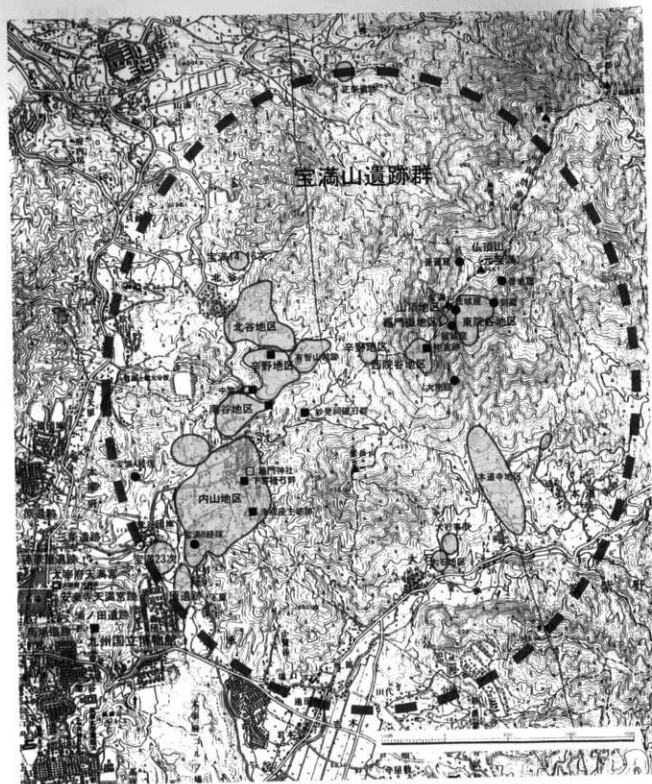


fig. 1 宝満山周辺の遺跡図 (1/30000)

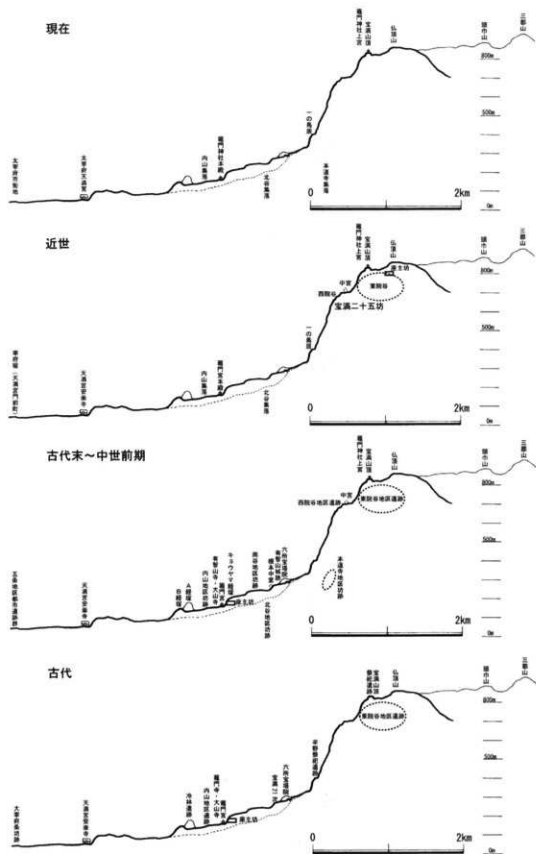


fig. 2 宝満山遺跡の時代別垂直分布図 (1/5000)

を用いた祭祀が連続的におこなわれて、北西面では辛野遺跡、南西面では山頂遺跡が最大の祭祀場となっていたことが理解される。

山頂での祭祀は9世紀前半にピークを迎え、土器の投棄は12世紀までおこなわれている。多量の土器と伴に銅製鏡、奈良三彩、施釉陶器、皇朝銭などの特殊な遺物が山頂東直下の崖下で採取されている。ここで出土する多くの土器の縁には油煙の跡が残され、闇の中で土器に油を注いで火を灯して巨岩の上で祈りがさげられていた光景が想像される。また、出土した墨書土器に「寺」鏡のものがあり、祭祀のために山中に入っていた者の中に仏教を背景とした人間が含まれていたことは考えられる。なお、下宮地区周辺での奈良時代の瓦の出土から、この時期に堂舎の存在した可能性が指摘されているが、奈良時代の瓦はどの地点においても平安時代の多種類の瓦と併せて1割以下の程度での出土状況であり、平安時代に安楽寺や奈坊地区から持ち込まれた瓦の中に奈良時代のもが含まれていた可能性も十分考えられ、その存否は今後の観測といえる。

このように宝満山での遺跡の黎明は宗教を背景とした祭祀を前提に成立し、山頂での祭祀は福岡県沖ノ島一号祭祀遺跡と岡山県大飛鳥祭祀遺跡の遺物構成と類似し、遺物使派遣にかかわる国家祭祀を背景とする遺物群との評価がなされている。さらに西側の裾にある辛野地区における八世紀初頭から後半にかけての祭祀遺跡では、出土した墨書土器の文字中に「神」「諭」「寺」「知孝」「守護」など宗教性を帯びた文字が見られ、特に現代でいう外国を示すと考えられる「蕃」の文字を持つものが存在することから、古代官衙大宰府を背景とした国境祭祀をおこなうべき場として成立している。

3 山岳寺院としての宝満山

寺院に係る遺構としては、9世紀後半から10世紀になると現在の下宮と中宮跡の中間の独立峰に3間四方の礎石建物が忽然と現れる。瓦を所要したもので柱の芯心の幅は両外が2.5m、中央が3.1mの一边が8.1mのもので山を削り出して作った方形の基礎を伴っている。石で築かれた階段の位置から南を正面とした建物で、東には山頂を仰ぐ好位置に立地している。礎石の脇から平安時代の様式とされる小金銅片が出土している。この施設が近年、天台宗を開いた最澄が企画した六所宝塔のうちの日本の西端に置かれた「安西塔」であったのではないかと指摘されている建物である(本谷礎石群、34次調査)。龍門神社下宮境内において東西5間、南北7間の長大な礎柱の礎石建物が平安時代後期以降の整地層上に建てられたことが調査によって判明し(37次調査)、その前面の谷部の調査ではそれに接続すると考えられる参道と思わしき石敷きと石垣などが確認された。講堂などの性格を持つ寺の中核建物と目される。また、その北の中堂地区の谷奥には薬師仏を祭ったと伝承のある礎石建物(伝根本中堂)があったとされ(昭和の水害で流出)、隣の南谷地区の谷奥では発掘調査により桁行5間、梁行2間以上の平安後期以降の礎石建物が確認され、下宮の礎石建物より小規模な堂舎が山中の造成谷の最深部に散在していた。これら礎石建物の前面には櫛歯状の造成面があり、内山、南谷、辛野、北谷地区においては12世紀後半以降の整地層上に掘立柱建物と石垣で構成される坊跡と考えられる生活空間が発掘調査により検出され、それは14世紀前半まで引き続いて使用されている。

北谷の宝満29次では土地を10数メートルごとに低い石垣を用いて区画した様子が確認され、その区画の中で鍛冶炉が数基展開して刀剣や鏝などの残片が出土している。内山地区の21次調査地点では幅10メートルにおたる鍛冶作業をおこなう作業面が確認され、開発された空間が生活のためのみならず工房を含むものであったことが判明した。この様子は中世大宰府観音寺境内の様相と酷似しており、平安後期以降、寺社の坊にたくさんの修行僧や商人や職人が雑居していた様子が復元される。山中が一

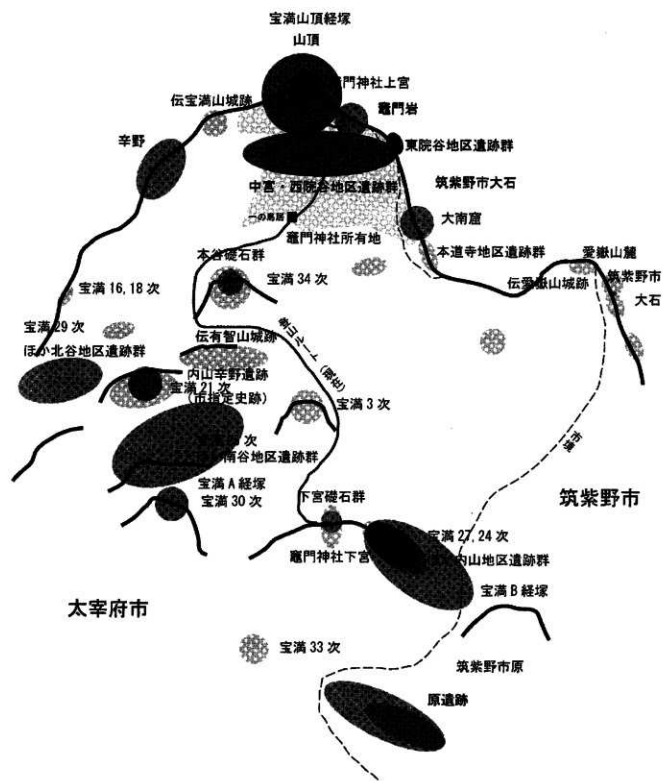


図3 宝満山遺跡の概念図

種の寺内町のような都市的な場となっていた。

坊の単位と考えられる段には谷や尾根に沿う道に面して計画的に配置されたものや、谷部を魚鱗状に利用するものなど幾種類かの傾向が見られる。推定跡跡の最高所の幸野地区にある宝満21次調査で検出した13世紀後半頃の遺構は、正面の造成崖に二段の石垣と食い違いた石段、段の上がりに四脚門、奥には土塁状の造成崖下に枯山水風の庭園、花壇状遺構、それに囲まれた桁行3間、梁行2間の数寄屋風建物があり、室町期に先行する居館的な要素を備えた施設であることが判明した。その遺跡の下谷にあたる29次調査では石段や溝で区画して斜面地を有効に利用した企画性の高い推定跡跡がみつまっている。これら堂社や推定跡跡は調査の所見から平安後期に整備され始めたものと考えられ、山中での土器発掘調査後に寺社が形成された流れで捉えられる。この遺跡の坊化の開始時期は中国南産白磁が多量出土した大宰府陶磁器編年C期に該当し、同じ山岳遺跡である太宰府原山、四王寺坂本地区、福岡市東油山天福寺、脊振山東門寺山頂地区、精羅殿久山町首羅山遺跡などで分布する遺物の上限時期でもあり、北部九州においては一斉に山岳寺院が形成され始めた感がある。

4 経塚と小金銅仏

山岳寺院化のきっかけとして如法による経塚の形成が目目される。山内では経塚が内山地区の字南谷(宝満A経塚)と筑紫野市大字原(宝満B経塚)の二箇所で見られている。宝満A経塚は古くに個人によって発掘されたもので、宝珠箱と反りのある六角形の蓋を持ち、経巻とともに飛鳥様式をどめる金銅製菩薩立像が納められていた。重要文化財に指定されている。また、南谷地区の4次調査では白鳳期に位置づけられる小金銅仏が出土している。周辺は中世の坊が広がるエリアであり、宝満A経塚例のように経塚に封入されたものか坊中で祭られたものであろうか。

内山地区南端の大字原山崎の丘陵頂部の宝満B経塚では天木元(1110)年銘を持つ経筒が出土し、肥前国松浦郡出身の僧観尊が大南の毘沙門堂に数ヶ月籠って法華経を書き功徳を積んだことが窺われている。出土した石段の面に「ビシヤン」のホノケ(小地名)が残されている。この記載内容は推定跡跡地区の面的開発の端緒が発掘調査の所見では12世紀に置かれる点と整合的であり、開発に伴って山内に「堂」と生活空間としての「坊」がセットで出現したことを示唆している。このように宝満山では広大な坊と考えられる生活空間の開発の初期段階で、坊内やそれらを見下ろす丘頂部に経塚が形成されている。この形態は太宰府原山無量寺跡、須恵町佐谷建正寺跡、久山町首羅山頂光寺、福岡市西油山天福寺跡、佐賀県東脊振村電仙寺跡など北部九州の天台末となった寺院跡に共通して見られ、山中での道寺に対する一定の共通する手法や考え方があったものと考えられる。

5 その後の宝満山

14世紀後半～16世紀には現在調査している太宰府市側の推定跡跡エリアでは遺構形成が極端に少なくなり、坊・集所が廃絶し、山内の遺跡化が進行した。恐らくこの間に修験道の流入と成立が起こり天台色の衰容と衰退期であったといえよう。衰退の契機としては建武3(1336)年の菊地氏による内山攻めによる堂社の被災、弘治3(1577)年大友義隆の検地により傾野が耕作地となるなど、守護クラスの寺院に対する干渉によるところが大きかったものと考えられる。水禄元(1558)年にはあまたある坊が二十五坊となり山頂から中宮付近の西院谷、筑紫野市側の東院谷、愛藏山近傍などに坊宅を移した。

近世に至り寛文(1661～1671)年中には天台宗京都聖徳院の末寺となり、修験を専らにする近世的坊組織が成立した。奇しくも天台系寺院による地方寺院の再末寺化の一翼を担う形となった。山中に残

る石垣を多用した段造成群はこの段階での坊跡の遺構である。筑紫野市側の東院谷太宰府市側の中宮跡周辺の西院谷の名称はこの時期の坊に由来する。それとも19世紀の明治維新に際し神仏分離による修験道の停止により堂舎・仏像等が破却され、山中が官有林となつたため二十五坊は下山を余儀なくされ、坊・集所の廃絶、仏具の散逸が進んだ。堂舎の中には小祠・単寺化したものもあつたが、山内は總じて遺跡化し耕作地化が急速に進み、一部は北谷・内山などの集落域に取り込まれ現在は福門神社が太宰府市内山地区にあり、山頂の上宮を管理する形に至っている。

参考文献

- 小田富士雄『宝満山の地宝』1982年太宰府顕彰会(宝満山総合文化調査のうち1次調査は聞き取り、踏査、2次調査は山上官祭記トレンチ調査、法戒窟トレンチ調査、下宮礎石群平拓測量調査、3次調査は下宮礎石群トレンチ調査)
小田富士雄・武末純一「太宰府・宝満山の初期祭祀」『宝満山の地宝拾遺』1983年太宰府顕彰会
亀井明徳「経筒新資料について」『九州歴史資料館研究論集』1982年九州歴史資料館(宝満B経塚)
小西信二編『宝満山及び福門神社周辺の遺跡分布調査報告書』1984年太宰府顕彰会
太宰府市教育委員会『宝満山遺跡』1989年(市1～7次調査)
太宰府市教育委員会『宝満山遺跡群Ⅱ』1997年(市14,16,18次調査)
太宰府市教育委員会『宝満山遺跡群Ⅰ』2001年(市11,21次調査)
太宰府市教育委員会『宝満山遺跡群Ⅲ』1997年(市8,9,10,12,13,15,17,19,20,22,24,25,26,27,28,29次調査)
太宰府市教育委員会『宝満山遺跡群Ⅴ』1997年(市30次調査=宝満A経塚、遺跡地括)
岡寺良「宝満山近世僧坊跡の調査と検討」『九州歴史資料館研究論集33』2008年

II、調査の経緯

平成15(2003)年7月19日早陸の集中豪雨によって、山中の100を超える箇所ですり石が発生し、近世の坊跡とされた箇所では大規模に石垣が崩壊するなどした。また、平成17(2005)年3月20日に発生した福岡県西方沖地震により、伝有智山城大手門とされる場所の石垣が一部崩落するなど、自然災害による山中の遺構の荒廃が加速化している感があり、市内の個人や任意団体からも自然災害の他、心いよ山者による遺構の毀損や出土遺物の報告が、市にも届くようになっていた。

このような状況の中、市においては山中の遺構について詳細な位置や構造などの台帳的な情報を把握していなかったことから、平成17年度から同21年度までの5カ年の計画で、国庫補助事業として地元の承諾を得た上で山中の悉皆的な遺構探索をおこない、1/2,500図に個々の遺構をプロットする事業と、宝満山を代表する既知の主要遺跡として掲げられる伝有智山城土塁および周辺の図化(31,32次)、本宮(妙見洞)礎石群の確認調査(34次)、宝満山下宮礎石群の確認調査(37次)、中宮跡周辺の地形測量調査(38次)を実施した。これによって山林で遺跡の把握が遅れていた部分において遺構の所在が明確となり、主要遺跡については毀損の事態に対応するための基礎的な図を作成することが出来た。また、この間に耕作地である内山地区において、農業経営規模の変化に伴って土地が改変される状況が発生し、農地改良に対応して国庫補助事業として緊急発掘調査を実施した(36,39,40次)。また、九州国立博物館設置に伴って開通した県道古賀・筑紫野線の沿線では耕地が農家から経営の土地に転換しつあり、倉庫の建設に伴って原因者負担により緊急発掘調査を実施した(33次)。

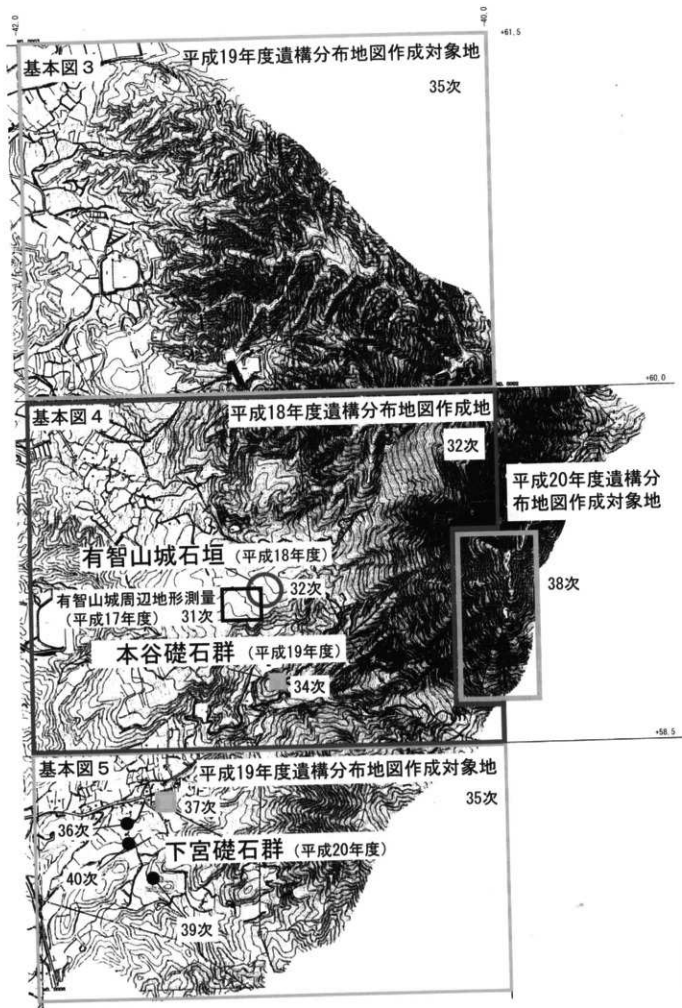


fig. 4 遺構分布図作成位置図

調査回数	年度	地番	調査原因	支出	調査担当
31	17	内山字辛野 6-10 他	測量調査	国庫補助	山村
32	18	内山字辛野 6-10 他	測量調査	国庫補助	山村
33	19	字内山字野田 445-1	民間開発	原因者負担	山村
34	19	内山字本谷 780-1・16	確認調査	国庫補助	山村
35	19	内山 793、北谷 905 他	測量調査	国庫補助	山村
36	19	内山 620、621、930	農地改良	国庫補助	下高
37	20	内山字御供屋 883、884	確認調査	国庫補助	高橋
38	20	内山字竜門山 2-1、2-2 他	測量調査	国庫補助	高橋、山村
39	21	内山字ジル谷 1030、1032	農地改良	国庫補助	宮崎
40	21	内山 68-4、68-8、75、78-2、78-3	農地改良	国庫補助	高橋

Ⅲ、調査体制

各年次の調査体制は以下の通りである。

(平成 17 / 2005 年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	木村和美 (～6月30日)
		齋藤廣之 (7月1日～)
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	齋藤実貴男
	事務主査	大石敬介
調査	主任主査	城戸康利
		山村信榮 (31次調査担当)
		中島恒次郎
	技術主査	井上信正
	主任技師	高橋 学
		宮崎亮一
	技師 (嘱託)	下川可容子
		柳 智子
		長 直信
		松浦 智

(平成 18 / 2006 年度)

総括	教育長	關 敏治
庶務	教育部長	松永栄人
	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信
	調査係長	永尾彰朗

調査	主任主査	齋藤実貴男 吉原慎一 (7月1日～)
	事務主査	大石敬介 (～6月30日)
調査	主任主査	城戸康利 山村信榮 (32次調査担当)
	技術主査	中島恒次郎
調査	主任技師	井上信正 高橋 学
	技師 (嘱託)	宮崎亮一 柳 智子
調査		下高大輔

(平成 19 / 2007 年度)

総括	教育長	關 敏治
	庶務	松永栄人 (～9月30日) 松田幸夫 (10月1日～)
調査	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	久保山元信 (～9月30日) 菊武良一 (10月1日～)
調査	調査係長	永尾彰朗
	上任主査	吉原慎一 齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利 山村信榮 (33, 34, 35次調査担当)
	技術主査	中島恒次郎
調査	主任技師	井上信正 高橋 学
	技師 (嘱託)	宮崎亮一 柳 智子
調査		下高大輔 (36次調査担当)
		大塚正樹 雄野晋平

(平成 20 / 2008 年度)

総括	教育長	關 敏治
	庶務	松田幸夫 齋藤廣之
調査	文化財課長	齋藤廣之
	保護活用係長	菊武良一
調査	調査係長	永尾彰朗
	主任主査	吉原慎一 齋藤実貴男

調査	主任主査	城戸康利 山村信榮 (38次調査担当)
	技術主査	中島恒次郎
調査	主任技師	井上信正 高橋 学 (37, 38次調査担当)
	技師 (嘱託)	宮崎亮一 柳 智子
調査		下高大輔 大塚正樹

(平成 21 / 2009 年度)

総括	教育長	關 敏治
	庶務	教育部長 山田純裕 文化財課長 齋藤廣之 保護活用係長 菊武良一
調査	調査係長	永尾彰朗 (～6月30日) 井上 均 (7月1日～)
	主任主査	吉原慎一 齋藤実貴男
調査	主任主査	城戸康利 (都市整備課併任) 山村信榮 (整理担当)
	技術主査	中島恒次郎
調査	主任技師	井上信正 宮崎亮一 (39次調査整理担当)
	技師 (嘱託)	高橋 学 (40次調査整理担当) 遠藤 茜 (36次整理担当)
調査		柳 智子

また、調査・報告に際して以下の方々に御指導・ご教示をいただいた。小西信二 (元太宰府天満宮、現太宰府市教育委員会) 小田富士雄 (元福岡大学) 森弘子 (西南学院大学) 宮本雅明 (九州大学) 河上信行 (河上信行建築事務所) 山岸常人 (京都大学) 八尋和泉 (別府大学) 井形彦 (九州歴史資料館) 下高大輔 (彦根市教育委員会) 龍門神社、春日市教育委員会 (敬称略す)

IV. 調査および整理方法

調査および整理方法については、『太宰府佐野地区遺跡群 I』(太宰府市の文化財第 14 集 1989)、『太宰府市における埋蔵文化財調査指針』(太宰府市教育委員会 2001 年 9 月改訂) に基づいている。測量基準点は、国土座標第 II 座標系の基準点から、光波測量機によって、調査地に座標を振り込み、発掘調査を行った。測量図化を目的とした 31、32、38 次については、国土座標第 II 座標系の基準点を新たに設置し、トータルステーションを基本に一部手測りで作図をし、再度、現地踏査をおこない、図を補正して清書している。

悉皆調査を伴う 32、35 次調査では 1/2,500 の作図を簡易 GPS 装置と簡易距離計測器を使用した、新

たな調査方法を取り決め、それに基づいて複数人数で作業をおこない、仮図をもとに現地で補正修正したものを製図している。業務委託時の仕様は以下の通りである。

宝満山山岳遺跡調査図化特記仕様書

第1部 総論

第1章 目的

- ・山岳に於ける歴史的事象に係る遺構について、考古学を前提とした再現性のある方法によって調査し、記録、台帳化をおこなうことを目的とする。
- ・収集する情報の均質化を図るために第2部以下の仕様を定めることとする。

第2章 理念

- ・文化財保護を目的とした行政の行う教育的行為であることを認識する。
- ・調査にあたっては対象の遺跡に対して客観的な観点に立って作業を行うことを第一義とする。

第3章 基本事項

- ・柔軟な思考で調査をおこない、過誤に気づいたときはその過程がわかる形で速やかに修正を施すこととする。
- ・調査の記録にあたっては常に再検証を可能とすることを念頭に置き作業をおこなう。
- ・現地調査作業時にはどのような形で報告を行えるかを念頭に置きながら作業を遂行する。
- ・記録内容が第三者にとって理解可能な情報として保存する。さらに、記録類は業務上取得されたものであり、個人に帰属するものではなく、公文書であることを認識する。
- ・現場作業にあたっては地元住民や地権者との関係を考慮し、慎重に行動する。違法な路上駐車などが無いよう、法の遵守に勤める。
- ・本指針は基本部分の概要であり、第2部以下に記載されている以外の記録性を高める積極的行為を行うことは奨励される。

第4章 作図の要点

本調査の要点は作図とそれに付随する記録化をおこなうことにある。

第3部1章2節の記録対象に示すように、本調査の目的は古代から中・近世にかけて成立した山岳寺院の展開の様子と、残存状況を台帳化することを目的とし、考古学的・地理学的情報を現地踏査により記録し図化するものである。しかし、現場において目視確認される人為的造作の痕跡がその場において寺院に関連するか否かは容易に判断しうるものでなく、本来は山岳寺院の造作に端を発しながらそれ以降の山城の造営や耕作地化により利用、拡張された事例も知られている。このことから本調査では単純に山中における人為的造作の痕跡を記録化することを志向する。

記録化には自治体が作成した都市計画図ないし基本図(1/2500)を使用し、現地調査においてそれに別項に定める遺跡構成要素の書き込みをおこない、付加すべき情報を別紙調査票(様式1~4)に記述する。したがって本作業は測量法という測量とは異なる。

現地における作図の基礎的技術は千田嘉博氏『城郭調査ハンドブック』新人物往来社1993年のIV章

に示された城郭調査の手法に倣うが、さらに検証可能な客観性を具備するものとする。

一般的に古代から中世の山岳寺院関連遺構は、山の尾根ないし斜面を単位とし、地形の高低差を利用して壇状に連続した平坦面を構築する様相が標準的であり方である。従って、遺構の形状や分布状況を説明する場合、尾根筋や谷筋、尾根の頂部同十などの方位を基準とし、連続した造成の方向が設定し得るわけで、これに計測の始点、造成の方向角と距離を記録化することにより、客観性を具備したデータと成す。この作業において基準点を用いた測量は実施しない。このため現地において調査後に遺る様な杭等の打設はおこなわない。

第2部 計画準備作業

第1章 準備

- ・周辺遺跡の情報収集を入念に行い、当該遺跡の問題点の抽出と仮説及び検証方法の検討を市担当者との協議を通じて行い調査方針を決定する。市担当者は受諾者との間において充分な学術的・専門的情報を開示する。
- ・調査方針にしたがい、既存の基本図を検討し調査方法の立案と段取り、調査範囲の確認等を行う。場合によっては予備調査を実施する。
- ・現地調査の着手、継続、延長、終了時期などについては事前に発注者と協議をする中で決定する。

第3部 現地調査

第1章 現地調査

1節 踏査

- ・調査対象範囲において尾根、谷、斜面を目視し確認しながら詳細記録が必要な箇所を特定する。
- ・踏査は安全を確保し、現地でのルートの再確認・再検討を必要に応じて実施する。

2節 抽出遺構の現地での記録化

- ・記録対象遺構は以下に定める。

人為的平坦面(荒地、水田、畑)

人為的マウンド

道(現況道路・小径と廃道・古道)

切り通し・造成崖

堀・溝

土塁・土橋

以上の遺構に係る斜面・法面の上端、下端

礎石

石垣

墳墓

経塚

石碑・石塔・磨崖

集石遺構

石列

上記遺構の崩壊箇所

遺物散布地

- ・上記以外で既存図に図化されていないもので考古・歴史地理学の観点が必要と考えられる事象は基本的に記録化の対象とする。また、既存図の誤り（記号やその位置他）が確認されれば記録する。
- ・記録対象事象が確認された場合、記録地点の仮番号を付与し、表記仕様に従い既存地図上に注記し記録化する。番号は「1群の1地点」という意味で「1-1」のように表記する。
- ・遺構の現地での作図に当たっては、太宰府市基本図（1/2500）を用い、100%以上の比率でコピーした下図に直接所見を書き込むか、座標軸を書き込んだ透過性のあるマイラーなどを下図に被せてその上から書き込む。下図は1/1000程度に拡大して現地で用い、編纂の時点を1/2500に戻すことは精度のより高い作図になるのであれば奨励される。
- ・記録対象事象が確認されなかった場合、その場において地図に表記仕様に従い注記する。
- ・連続した遺構群が確認された場合、調査仕様に従いその位置、規模など簡易計測し記録化をおこなう。
- ・遺構の簡易計測については以下に定める。

1 規模と位置の表記

人為的な平坦面・造成崖等については群を構成する主要なものについては1つの面の面積を算出する長さや幅を、器具を用いて計測し、メーター単位で記録する。測距にあたっては巻尺による実測のほか、ノンプリズムのレーザー測距機、クリノメータなどの使用を認める。

群構成を持つ遺構の全体の規模の位置に関する記録については、既存地図上で仮の基点を設け、ボックトランシット、クリノメータ等を用い10度半程度以上の精度で観測角を記録しながら、折れ線状、放射状に端部までの測距をおこなう。これは現場において記入しようとする位置と地図上で位置の誤認をなくするための作業であり、調査後に図上で修正作業をおこなう際の指針となるデータである。

2 基点

記録化の基点については既存図上に表記のある三角点、道の屈曲点、分岐点、狭小な尾根頂部、ないし簡易GPS（精度プラスマイナス10m以上）によって得られる緯度経度により、地図上にプロットした任意の点を用いる。

3 方向角

設定した基点において磁北を求め、図上で方位角を設定するか、基点を2箇所定めて測角を開始する。原則的に現地において観測に伴う杭の設置はこなわない。ただし、簡易のポール・杭等の使用を妨げるものではない。

4 測距

高低差のある測距の場合は即時傾斜角を測り、現地で斜距離を水平距離に換算し、その数値も記録する。測距においては光学機器の使用を認めるが、その場合、測定を複数回おこなうこと。

3節 地図情報以外の記録

・現地での地図上でのプロット作業以外に以下の記録が必要となる。

- 1 調査日誌の作成
- 2 簡易計測の数値の記録化

3 特記事項（金石文、遺物散布地等）のある遺構の記録化

4節 写真撮影

- ・踏査、簡易計測の作業風景についてはその実施概要がわかる構図で適宜写真撮影をおこなう。
- ・特記事項のある遺構については写真撮影をおこなう。
- ・写真の仕様についてはデジタルカメラを用い、2272×11704pixel（約400万画素）と同等ないしそれ以上の記録性を有するものとし、最終的にはデジタルデータとして納品する。

5節 遺物の採取

- ・遺物散布地においては既存地図にその範囲を記入し仮番号を付与し、上記様式3に散布する遺物の概要を記録する。そしてその中に遺跡・遺構の性格を特徴付ける遺物があればそれについてのみ採取し、その場で様式に定めるラベルを採取遺物に付与する。特に年代決定に寄与する遺物については採取する。

第4部 整理・浄書作業

第1章 記録整理

1節 データ整理

- ・口誌、地図、台帳類の不整合がないか確認し、記述内容は第三者が理解できるものであるか否かを確認する。
- ・仮番号が付与されたものにつき不備がある場合は、朱書きで共通する訂正箇所を同時に修正する。遺物に付与した仮番号も同じである。
- ・浄書にあたっては現地で作成した図を、計測値などから検証し、データ取り込み前に補正をおこなう。

第2章 図化

- ・CADソフトを用いてデジタルトレースを行い、仕様書に定めるフォーマットで保存する。
- ・図化にあたっては遺構の表記仕様に別途定める。
- ・遺構不在箇所の記号など、浄書に必要でない注記のレイヤーを除いたデータをマイラーに出力する。
- ・納品前段階で浄書図は必ず発注者の検査を受けることとする。

第3章 図の検査および補足調査

- ・踏査における記録を出力の前段階で、発注者の中間検査を受けるものとする。
- ・データ点検、補正時、中間検査において疑義が生じた場合は、再度現地にて検証作業を実施し、記録類に不備があれば紙データについては朱書きで修正を加える。

第5部 納品

第1章 納品項目

- ・納品の必要のあるものを以下に定める。

1 現地調査において作成した記録類

- 調査日誌
- 簡易計測の数値

特記事項

遺構を記入した下図

2 浄寺遺構図

第4部第2章で示すデジタルデータの出力図(記録遺構図、下図白図重ね焼き図)

3 デジタルデータ

・作図データを「DWG」ベクトルファイルフォーマット(AutoCAD2004に対応)とTIFFファイル形式のデータにしCD-Rに入れたもの

・写真画像データ(TIFFデータ)

・データ一覧(様式2、写真撮影台帳などのエクセルデータ)

4 採取遺物

遺物洗浄、乾燥がおこなわれた状態で、現場で付与したラベルを添えビニール袋に入れた状態のものとする。

第6部 付帯事項

本仕様で定めた事項以外で疑義が生じた場合、発注者、受注者双方で協議を行い、業務を遂行する。

参考文献

現地調査

千田嘉博他『城郭調査ハンドブック』新人物往来社1993年

土器・陶磁器

太宰府市教育委員会(1983)『大宰府条坊跡Ⅰ』

太宰府市教育委員会(2000)『大宰府条坊跡Ⅱ』

太宰府市教育委員会(1992)『宮ノ本遺跡Ⅰ-竊跡編-』

山本信夫「統計上の土器」(1990)『乙益重隆先生古希記念九州上代文化』

上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(1982)『貿易陶磁研究』No.2

森田勉「14～16世紀の白磁の分類と編年について」(1982)『貿易陶磁研究』No.2

小野正敏「15、16世紀の袋付碗、皿の分類とその年代」(1982)『貿易陶磁研究』No.2

中世土器研究会編(1995)『概観中世の土器・陶磁器』

土師質・瓦質土器

山村信英(1990)『太宰府出土の瓦質土器』『中世土器の基礎研究Ⅵ』

瓦

九州歴史資料館(2000)『大宰府史跡出土軒瓦・印打痕文字瓦型式一覧』

太宰府天満宮(1988)『太宰府天満宮』

太宰府市教育委員会(1995)『太宰府天満宮Ⅲ』

太宰府市教育委員会(2005)『宝満山遺跡群4』

近世磁器

大橋康二『肥前陶磁』(1989)ニューサイエンス社

V. 調査報告

1 宝満山遺跡群第31次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は以前より「有智山城」と呼ばれていた土塁の周辺に人為的な段造成面が展開している個所の観察と図化を目的として行った遺跡分布および測量調査である。調査は平成17(2005)年11月28日～平成18(2006)年3月31日にかけて国庫補助事業として実施した。調査面積は25000㎡である。

(2) 調査の概要

調査はトラス測量にて原点を設け、四十座標第Ⅱ座標系により位置を明示した。遺構観察用の略図を1/1000で作成し、遺構分布図は株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し1/500でトータルステーションを用いて記録した。なお伐採清掃によって確認された土塁と壕跡の形状が明確になったため、1/500で追加測量した。なお、地権者の許諾の関係で、遺構の存在は確認できたが、土塁の南西部分の一部は図化できなかった箇所がある。

(3) 検出遺構

通称「有智山城」と呼ばれてきた土塁およびその前面に広がる人為的段造成面の遺構分布状況と相關関係の確認、個別遺構の確認、遺物の採取、地形測量等をおこなった。伐採により約80面からなる段状造成で連続的に形成された縁相が確認され、傾斜方向に対し低位では縦方向、高位では横方向の道路遺構も確認された。また、3箇所で畳半畳ほどの規模の礎石を積んだ墳墓と考えられる遺構計5基を確認した。これら段造成のさらに高位に等高線方向に横に広がる2列の土塁が存在し、その中央を有智山城の「大手門」とされる現在の登山道が切り通し状に貫く形となっている。抽出された古道もこの切り通しに連なっており、切り通しは古い遺構といえる。過去に収集されている周辺から出土した遺物には土師器、輸入陶磁器類、瓦などがあり、陶磁器は大宰府編年のCないしD期に属し、平安後期から鎌倉期に位置付けられる。瓦も平安後期傾向の格子のタタキ目を有しており陶磁器の帰属時期と整合的である。

(4) 小結

遺物の時期的傾向から段造成は平安後期から鎌倉期にその主体があるものと考えられ、過去に調査を行った内山、南谷、北谷地区での段造成に伴う遺構群と一体的なものである可能性が強まった。しかし、「有智山城」と呼ばれてきた土塁は中世城郭の研究者から中世後半期のものと推定する意見が出されたが、今回の調査では掘削を伴う調査をおこなえなかったため、その可否については解決されなかった。

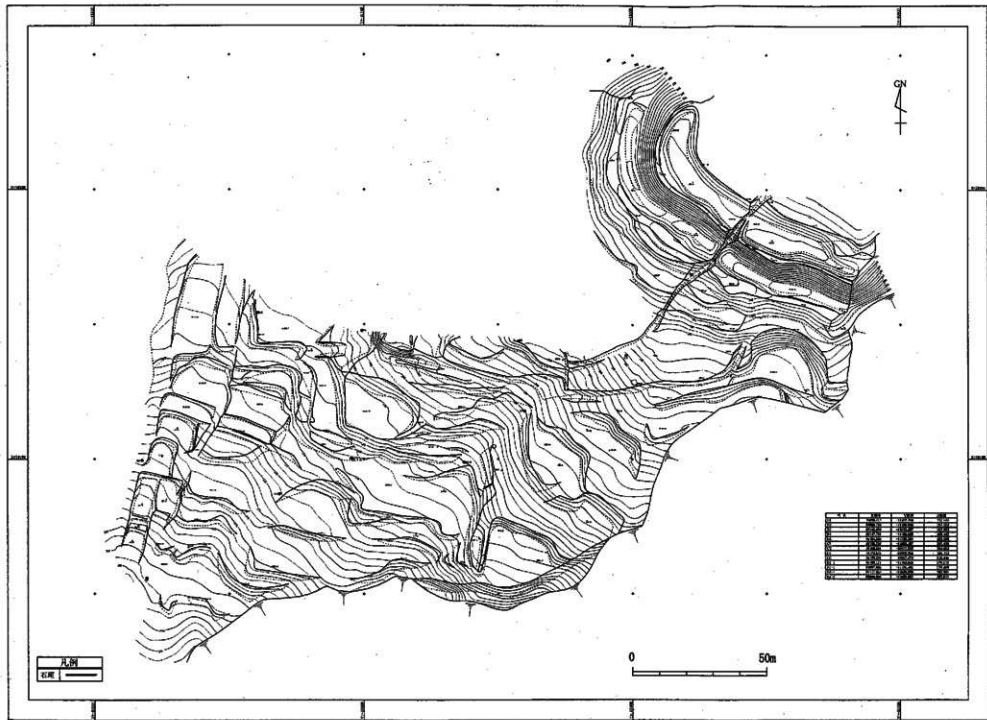


fig. 5 第31次調査全体図 (S-1/1,000)

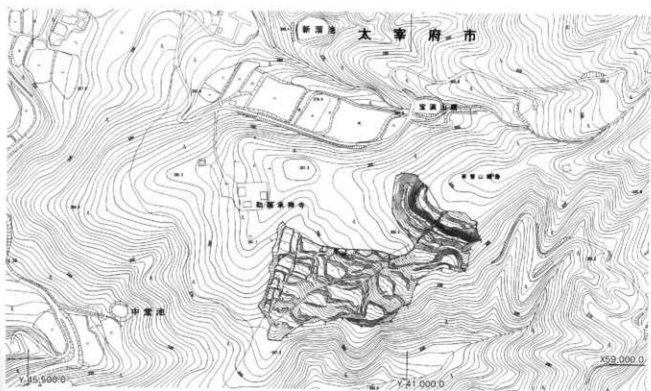


fig. 6 第31次調査周辺地形図 (S=1/5000)

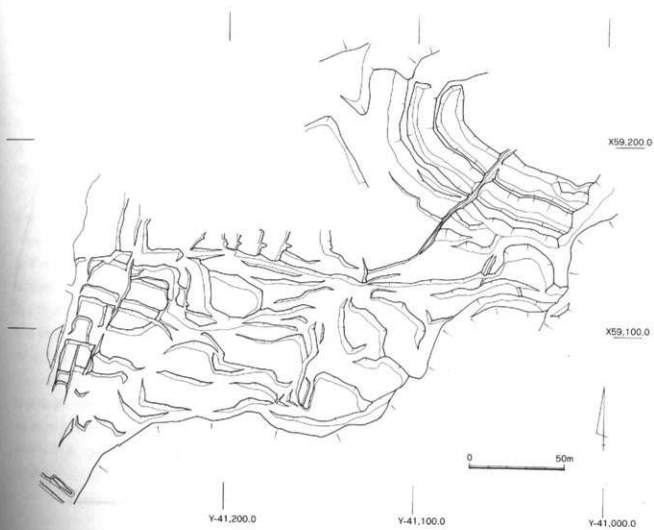


fig. 7 第31次調査地形図 (S=1/2000)

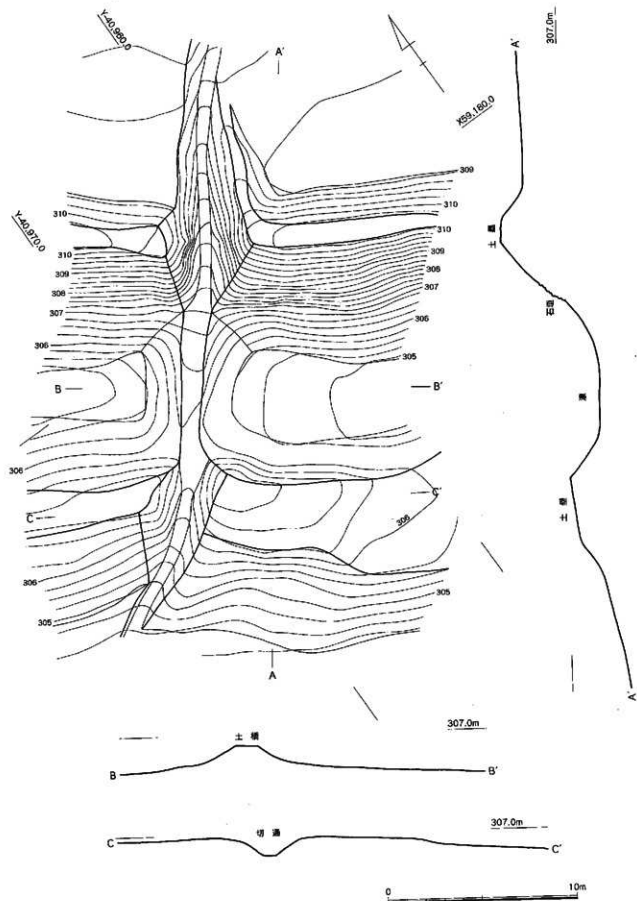


fig. 8 伝有智山城跡大手口測量図 (S=1/200)

2 宝満山遺跡群第32次調査

(1). 調査に至る経緯

調査は前年度実施した31次調査地点である伝「有智山城」跡の巨視的な位置づけをおこなうとともに、土塁遺構の現状観察と図化を目的として行った遺跡分布および測量調査である。調査は平成18(2006)年11月1日～平成19(2007)年3月31日にかけて国庫補助事業として実施した。調査面積は120,000㎡である。

(2). 調査の概要

調査自体は大宰府市基本図(1/2500) No.4の図画の範囲を悉皆調査し、段造成などの人為行為による遺構を抜き、簡易図化およびプロットするもので、宝満山山中において10箇所以上で段造成を主体とする遺構群が検出された。そのうちE3区とした伝有智山城の範囲において山林を伐採し、石垣を中心とした構築物を別途精査した。

遺構分布図は1/1000で記録したが、現地では既存の都市計画図の情報を下敷きし簡易GPS測量にて原点を設け、国土院標第II座標系により遺構の位置を記録する方法をとった(詳細前述)。なおE3区(伝有智山城跡)において伐採清掃によって確認された土塁と石垣の一部を手実測により1/20で図化された。実測は調査担当者のほか井上信正、柳智子、下高人輔、久味木がおこなった。

(3). 検出遺構

1. 踏査の概要

山中での踏査は対象地区(大宰府市基本図(1/2500) No.4)を便宜的に東西をA～Hの8区、南北を1～5の5区に分けて記録や遺物の取捨をおこなった。以下に特に所見がある個所について列挙する。A-1-a地点 北谷公民館西丘陵裾にある石垣による段造成群。近世以降の耕作による造成も含まれるものの。

A-4-a地点 中堂谷南斜面の段造成群で、中世土器小片が散在している。平成21年度に一部が宝満山遺跡41次として調査され、奈良時代以降の焼土坑、鎌倉前期頃の七坑墓などが検出されている。石垣のある部分は坊的な生活空間と考えられる。

B-1-a, C-1-c地点 北谷納骨堂周辺にある石組群で、古代末から中世前期頃の墓域と理解される。近隣では宝満14次調査などが参考になる。

B-4-a地点 南谷丘陵の最先端に位置する。高位に2条の掘り切りがあり、丘陵頂部にはおびただしい石組群が展開する。古代末から中世頃の南谷でも最大規模の墓域と理解される。

C-1地点 真峯親王碑のある谷(a)と北側(b)の段造成群である。北側は墓域と考えられる石組群がある。

C-2地点 市指定史跡内山辛野遺跡(宝満21次調査地点)の北東側にC-3-b、D-2-c地点から連続して形成される段造成群で、近世以降の耕作による段も重複するが、宝満29次調査によってその一端が明らかにされており、古代末以降の坊跡がその主体と考えられる。墳墓と考えられる石組も散在する。

C-3地点 中堂池周辺の段造成群で、池の南東(a)と北側(c)に連続して展開する。池の南には昭和48年の水害以前まで根本中堂とされる礎石があった。戦前まではここに薬師堂があったとされる。

C-4-b地点 ホノケで「オタテ」と呼ばれる水田面の南に隣接する丘で、帯状の郭と考えられる段を含む造成が見られる。

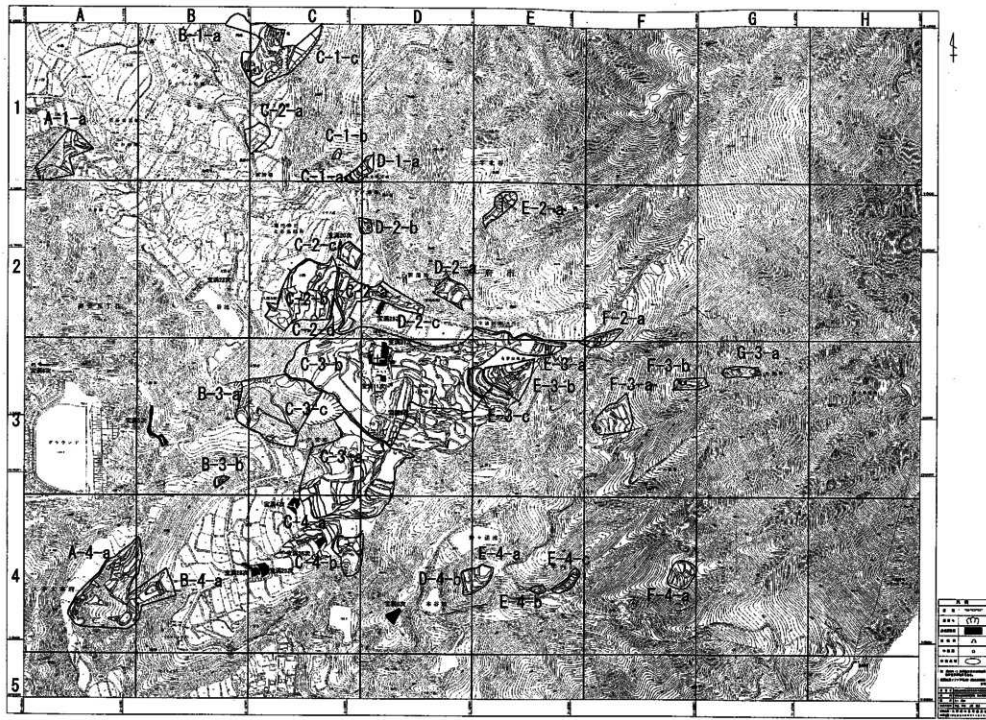


Fig. 10 第32次調査地区割付図 (S=1/8000)

D-2-a 地点 智光寺原と呼ばれる丘陵部にある段造成群。石垣や石組の墳墓も含まれ古代末以降の坊跡がその主体と考えられる。

D-2-b 地点 小さな谷を平坦にし、石組の墳墓を形成している。

D-3-b 地点 宝満 31 次調査で詳述している伝有智山城跡の前面に展開する段造成群。段中に通路や石組の墳墓、墓壇のような高まりが含まれる。古代末以降の坊跡がその主体と考えられる。

E-2-a 地点 他所と離れた山中にある段造成群で石組が数か所で見られる。坊跡がその主体と考えられる。

E3 区 伝有智山城跡で詳細は後述。

E-4-a, D-4-b 地点 宝満 34 次調査地点。本谷礎石群にともなう段造成群。礎石の西側に 4 面以上の広い平坦面がある。本谷礎石群経営に係る空間であった可能性あり。

E-4-b 地点 小規模な段造成群で石組が数か所で見られる。坊跡がその主体と考えられる。

F-2-a 地点 北谷の字小野の最深部にある段造成群で石垣が数か所で見られる。坊跡がその主体と考えられる。

F-3-a 地点 通称一の鳥居の北西の緩斜面に広がる段造成群。近世以降の造作が加わっている可能性もある。

F-3-b 地点 高所の急峻な尾根を平坦化しており、石組が見られる。古代祭祀に係る箇所か。

F-4-a 地点 九州電力の鉄塔下にある段造成群で石垣が見られる。他所と離れた山中にある。中世と思われる土師器小片が散在している。坊跡がその主体と考えられる。

G-3-a 地点 休堂西側の尾根に断続的に形成された小規模な段造成群。石組が数か所で見られる。

2. E3 区 (伝有智山城跡) の遺構

有智山城跡とされてきた上壘周辺の基本的な構造は、現在の登山路となっている通路を中心に南東側に SX002 とした土塁が、北西側に SX003 とした土塁があり、SX002 の前面に高さ 1m ほどの低い土塁 SX006 が、SX003 の前面に同じく低い土塁 SX004 がある。土塁 SX002、SX003 の北側には土塁構築のために掘られた窪地を伴っている。土塁 SX002、SX003 中にはまばらに石垣が見られる。本調査ではこの土塁中の石垣について詳細な記録をおこなった。

石垣

32SX005, 010 (fig. 11・12・13, pla. 1~7) 従来から「有智山城大手口」とされてきた人為土塁の切り抜き部分で、東側を SX005、西側を SX010 とした。伐採と清掃によって SX005 では南側で比高差約 4m の土塁高に対して高さ 2.4m の石垣が検出された。SX010 は 1.4m を測る。石は表面からの状況では土塁本体に埋め込まれるような様子で、ところどころ石がなく土が詰められたような箇所が見受けられる。石の積み方について SX005 南側では、基本的に横方向の目地が観察されるが、中央付近は箆箱を重ねたような縦の目地も見られる。使用されている石は人頭大の花崗岩自然石で、至近に由来するものである。断面観察では SX005 南側では下から約 1/3 付近が孕むようにして石材がせり出している。SX010 は南側については土塁に埋め込まれた様子で、目地がどうという風ではなく SX005 とは対照的な観を呈している。切り抜き部分については、反対に SX010 東面は幅 1m、高さ 50cm ほどの大きな石材が下に連続して据えられ、その上にやや乱れながら横方向にもう 2 段石が積み重ねられている。その対面の SX005 西面

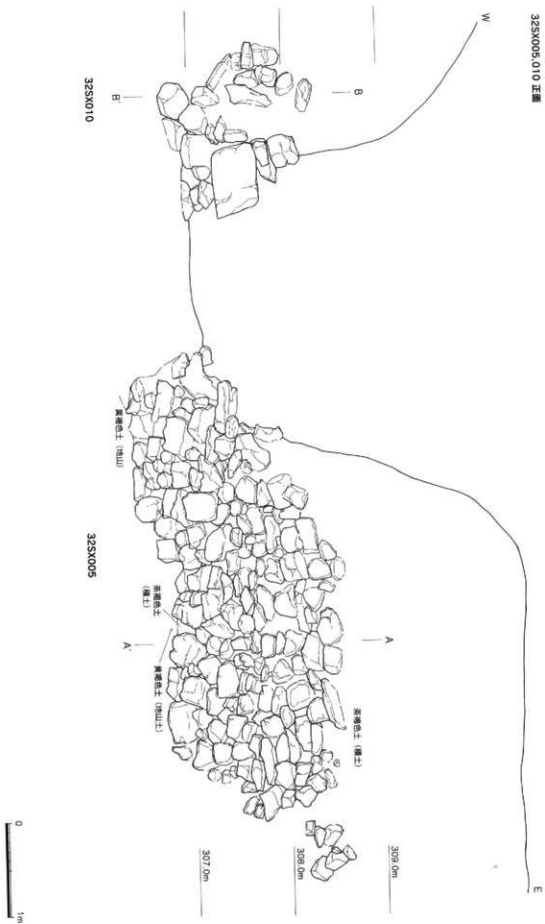


fig. 11 32SX005・010 遺構実測図 (1/40)

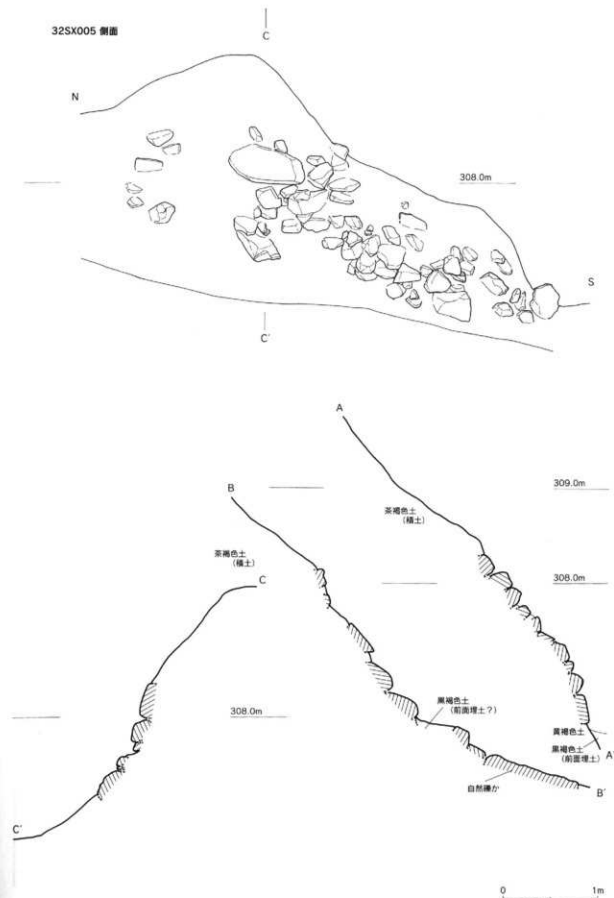


fig. 12 32SX005 遺構実測図 (1/40)

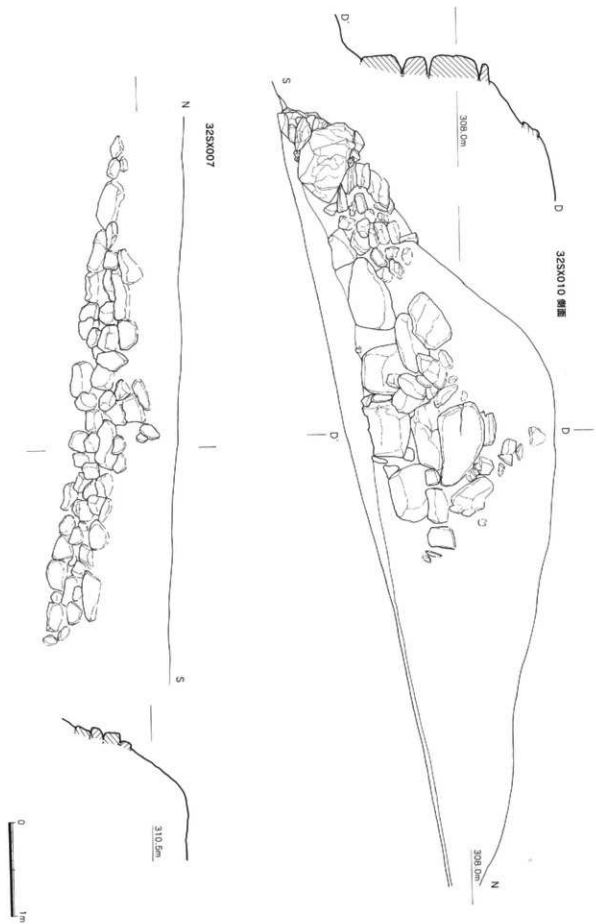


fig. 13 32SX007・010 遺構実測図 (1/40)

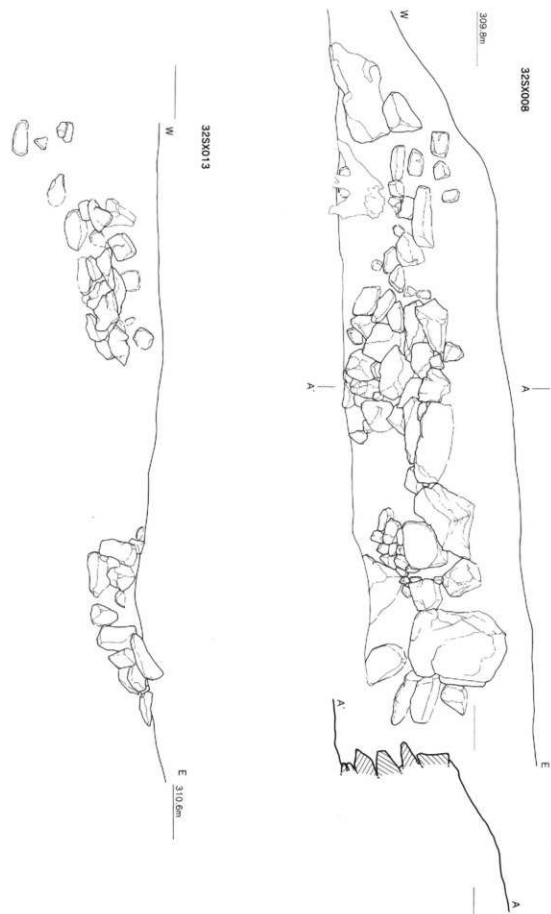


fig. 14 32SX008・013 遺構実測図 (1/40)

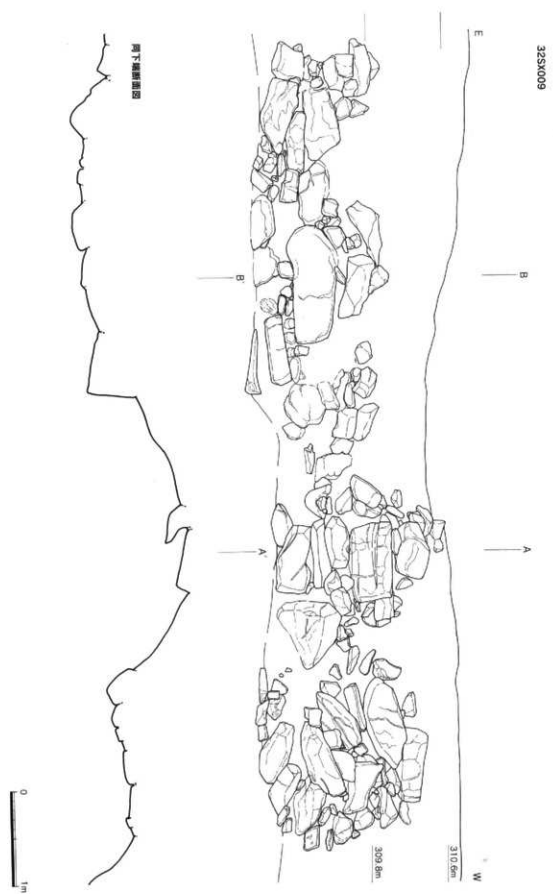


fig. 15 32SX009 遺構実測図 (1/40)

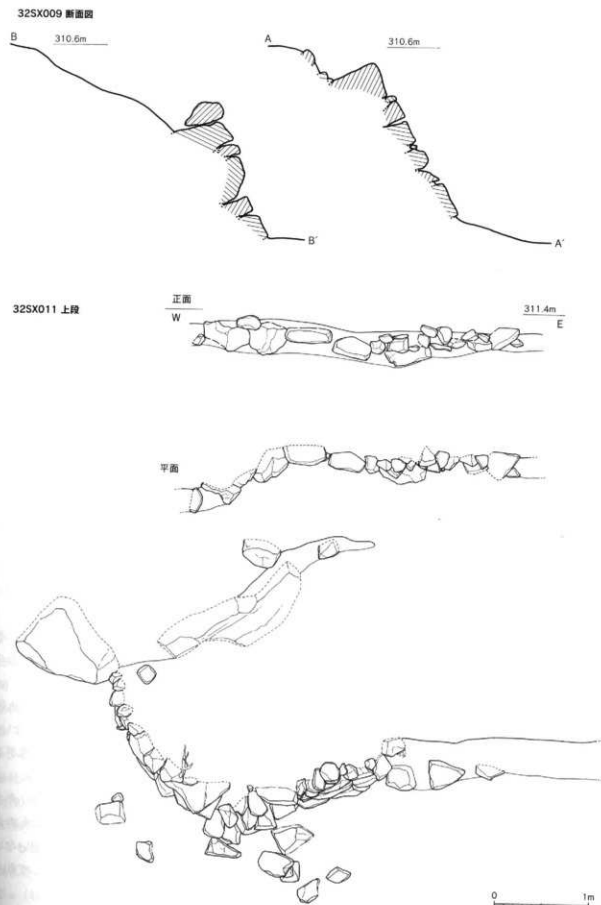


fig. 16 32SX009・011 遺構実測図 (1/40)

32SX011 下段

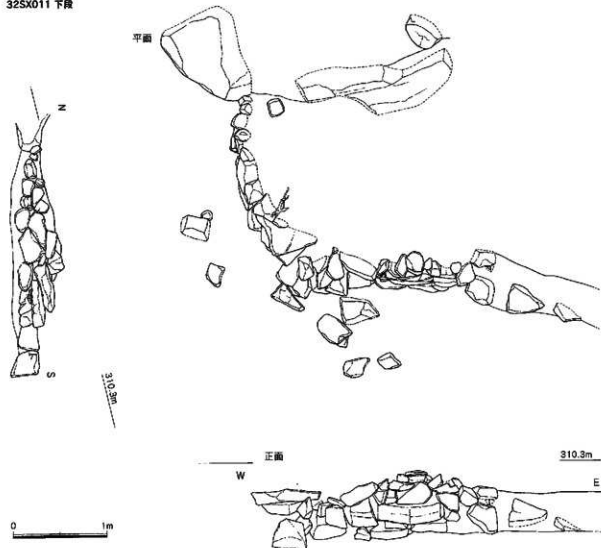


fig. 17 32SX011 遺構実測図 (1/40)

は小ぶりな人頭大の石が斜め方向に土塚の土壌に埋め込まれるような形で表れている。このように、石垣とはいながらも石の積み上げはおそらく土塚の構築と一体的におこなわれたものと判断され、あくまで土塚構築の要を石で補ったような構築物であったと判断される。

32SX007 (fig. 13) 西側土塚の南西面上側にある石垣で、幅 4.6m、高さ 1m 分が露出している。石は人頭大で右に下がる斜め横方向に 4 重の目地が見られる。1m を超えるような大きな石材は使用されていない。土塚構築の過程で形成されており、土塁線がこの部分で北に折れる箇所にあたるため、補強の意味があるのかも知れない。

32SX008 (fig. 14, pla. 8) 土塚北側の城内にあたる尾根線の東斜面に形成された石垣で、幅 7.2m、高さ 1.4m を測る。全体に統一された石積みの方が着取されにくい様子で、石も 1m を超える大きなものからこぶし大のものまでさまざまな利用されている。中央の石の塊を挟んで左右にまったく石を用いない幅 1m ほどの空白の箇所がある。断面形状は垂直に重なる。石組の約 40cm が現在の登山道として利用されている。

32SX009 (fig. 15・16, pla. 9～11) 東側土塚北面の中央付近にある石垣で、幅 8.6m、高さ 2m 分が露出している。石は幅 1m ほどの大きなものから人頭大までのものが使用されている。石組の塊としては中央付近 (A ライン) に縦方向に重箱のように重ねた箇所があり、それを挟んで左右に別の石組の群が見られる。左の群は 4 段以上の横方向に積み上げた目地が見られる。平面の形状では中央付近の石積みで土塁全体が緩やかに屈曲しており、この箇所が構築過程での境目になっていた可能性もある。土塚の上端のレベルも 20cm ほど中央の石積み付近が下がっている。

32SX011 (fig. 16・17, pla. 12・13) 東側土塚北側の対面の斜面中に構築された 2 段からなる石垣で、平面形状が上段は直線的に、下段はし字になる。石材は人頭大のものを用いて乱積みしたもので、上段は幅 3.4m、高さ 30cm、下段は幅 3m、高さ 80cm を測る。山に見られる畑の段のように見受けられる形状を呈している。土塚から北側には数か所でこのような低い段の際にこのようなごく小規模な石垣が見られる。

32SX013 (fig. 14, pla. 14) 東側土塚北面の中央付近の SX009 の対面、土塁南面にある石組で、幅 6m の間に 2 か所に分かれて観察される。石材は人頭大よりやや大きいものが使用され、左側で 20 個程度、右側で 10 個程度がやや斜め方向に石の面を合わすようなことをせざるに埋め込まれた状況を示している。土留め的な機能が期待されたものか。

32SX014 (fig. 18, pla. 15) 東側土塚北面の SX009 の東側にあり、幅 10m、高さ 1.5m 分が露出している。石材は人頭大よりやや大きいものが使用され、やや右下がりの横方向の目地が見られる。断面形状はやや平らなもので横斜れを持つ直線的な形状を呈している。石組は粗密が顕著で、ここも土塚の構築過程で必要に応じて埋め込まれたような観を呈している。

32SX016 (fig. 19, pla. 16) 東側土塚南面の東端上にあるもので、幅 3.7m、高さ 1m を測る。右下がりの横方向の目地が見られるが、石同士の間隙があまりに埋め込まれたような様相を呈する。断面形状もあんこが飛び出したような形状を成している。

32SX017 (fig. 19, pla. 17) 東側土塚北面の SX016 の対面に位置し、幅 4.8m、高さ 1m を測る。幅 1m の大きな石を横方向に用いた箇所があるが、土塁東端部は横目地をそろえた水平方向の石組となっている。

(4) 出土遺物

C-3-a 区出土遺物 (fig. 20, pla. 18・19)

白磁

碗 (1) 口縁が短く外反するもので、V-2 類ないし VIII-1, 3 類に属する。

土師質土器

鉢 (2) 口縁の上端部が平坦な AIV 類に属する。内面に細かな斜位のハケ目が残る。

C-3-b 区出土遺物 (fig. 20, pla. 18・19)

緑釉陶器

鉢 (3) やや足の長い高台の曇付け部分に浅い段を持つもので、灰黒質の焼成。東海系の所産と考えられる。底径は 9.8cm に復元される。

D-3-b 区出土遺物 (fig. 20, pla. 18・19)

須器

坏 a (4) 底部がやや突出し、体部との境が明瞭に屈曲する形状を成す。硬質に焼成される。底径は

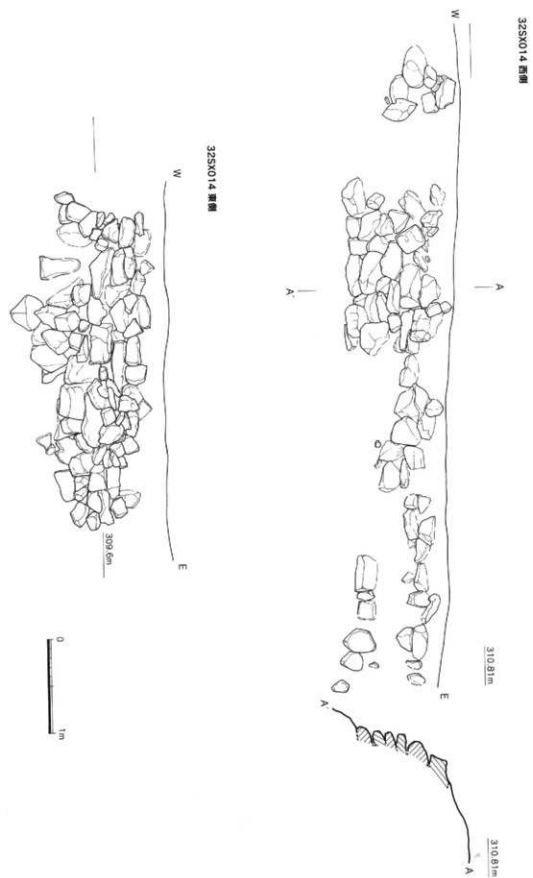


fig. 18 32SX014 遺構実測図 (S=1/40)

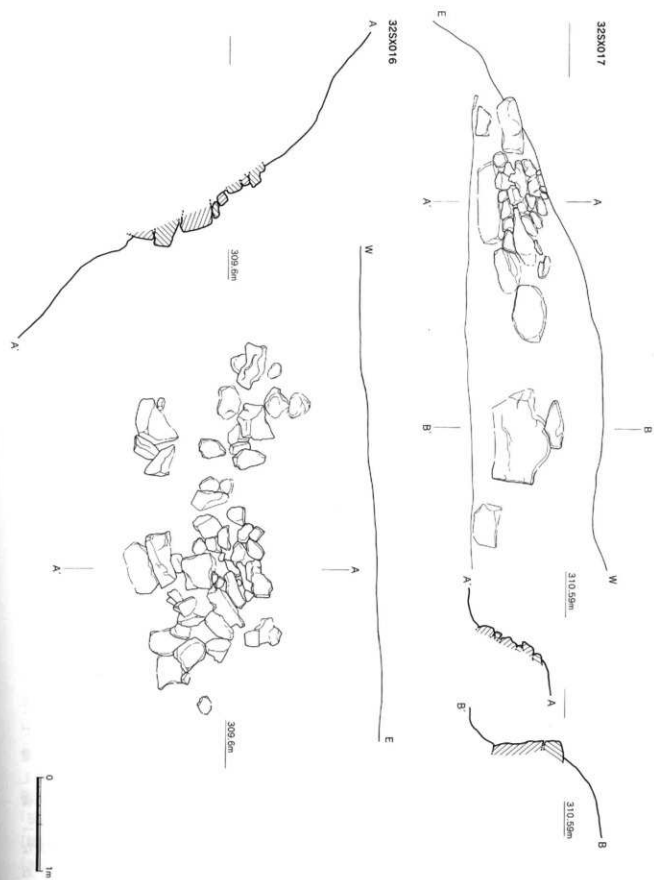


fig. 19 32SX016・017 実測図 (1/40)

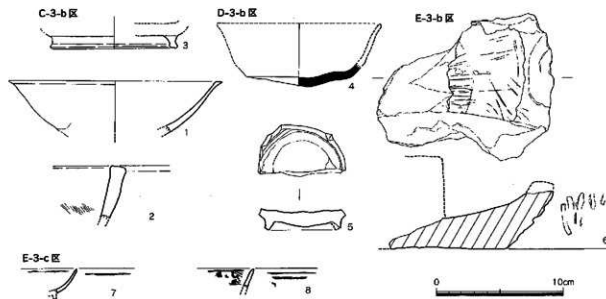


fig. 20 第32次 C-3-a・b区、D-3-b区、E-3-b・c区出土遺物実測図 (1/3)

8.4cmに還元される。大宰府IVないしV期のもので、8世紀後半から9世紀初頭頃のものか。

白磁

碗 (5) 内面には輪状に細刺ぎをおこなった痕跡のあるVIII類に属するもので、体部境目で打ち欠かれた状況を示す。底径は6.7cmを測る。

E-3-b区出土遺物 (fig. 20, p.la. 18・19・20・21)

石製品

石臼 (6) 臼の外側にせりだした鏝の部分にあたる破片で、内面は細かい線状の加工痕があり、外面は幅8mmほどの鏝の跡が縦方向に残されている。

C-3-c区出土遺物 (fig. 20, p.la. 18・19)

肥前系染付磁器

皿 (7) 浅く屈曲する薄手のもので、口径は10cm以下の小ぶりな小皿になるものと思われる。

柄 (8) 直線的に開く口縁端部の小片で、外面に2条の平行線、内面に菱形の区画線を用いた文様帯を施したもので、丸柄になるものか。近世後期の所産と考えられる。

(5) 小鉢

有智山城は建武3(1336)年に在地領主であった武康少武氏と肥後菊池氏との古戦場として知られ、土塁および空堀が往時のものと評価されてきた。しかし、現在では中世山城の構造的な研究が進む中でこの遺構がはたして南北朝初期にまで遡り得るのか、という疑義がだされるようになって来ている。遺構の分布調査の結果、土塁前後まで有智山寺に係わりと見られる坊跡関連の段造成が迫り、主郭と考えられる場所が想定しにくいことが明確となり、性格の異なる遺構が重複するものと見られる。石垣の構築手法は全ての箇所が乱積みによるもので、大半が拳大から人頭大の小さな角面礫が用いられていた。この様相は過去の周辺で行った坊跡と考えられる場所で見つかった石垣と近似しており、技術的背景ないし構築時期が近いものとも考えられる。表面で採取される遺物はごく少なく、平安後期の白磁片、近

世肥前系染付磁器などとどまり、周辺遺構の上限時期がこの頃に想定される以上の成果は上がっていない。今回は主要遺構の表面清掃に留めており、下限時期の確定には別途の調査が望まれる。

有智山城跡とされてきた土塁の構造は、平面的には東側土塁が直線的、西側土塁が両端をやや北に曲げるし字状を呈す形状を示している。今回の調査では直線的に見える東側土塁においては、土塁中央のSX009付近でやや北に方向を転じていることが確認され、切り通しから約10mまで直線的な形状を作り出して、その先は地形に応じた施工がおこなわれたことが想定されるようになった。土塁中に用いられた石垣、ないし石積みほどの箇所においても見栄えを想定したと考えられるものはなく、土壌を積み重ねる工程の中で必要に応じて埋め込まれたような様相が看取された。石積みに目地が見られる箇所はすべて右が下であり、土塁の構築にあたっては常にそのような工法が繰り返されていたものと考えられる。段の構築上必要に応じて石を埋め込む便宜的な工法で、計画的に計算された石垣を築きあげる工法とは一線を画している。このような工法は今回巡回調査をして認知された周辺の段造成の間にも見られ、在束の工法として認めてよいものと考えられる。その構築時期は宝満21次SX022、宝満25次SX006, 007例などから鎌倉時代にはすでに使用されていたものといえる。しかし、土塁の巨大さからその構築された時期はさらに時を経たものと思われ、近隣の調査事例としては佐賀県鳥栖市の勝尾城の城下と城内とを分ける大城戸の機能を有した総構えの土塁遺構などがあげられ、現状では中世後期頃が懸念状況ではなかろうか。

また、土塁北側の斜面にSX011のようなごく小規模な石垣や平坦面が検出された。このような遺構は悉皆調査でも土塁以北のいわゆる城内の複数箇所で見られた。周辺では肥前系染付の小片などが採取されており、遺構の形状から近世に至って耕作地として利用された段階での畑の痕跡ではないかと考えられる。「庵門山日記」によれば福岡藩政期に宝満山中の坊が困窮したため、豊前求菩提庵に習い茶園を経営させるため茶の実を数十石贈ったとされ、往時の修験者たちは宝満の山頂周辺に坊を構えていたが一期4、5軒の坊が山脚の茶園に居を構えたようで、その場所は「谷山九重原上辺」とあり、九重原がこの伝有智山城周辺を指すことから、これらの畑状遺構が茶園に關係するものと考えられる。記録には茶園の経営は利が出ずに終わるとも書かれているが、明治時代の初め頃に書かれた『福岡県地誌』には北谷の物産として「茶」の記載があり、栽培は修験者をはなれ里人によって続けられていたことも考えられる。伐採時に気付いたことであるが、この伝有智山城周辺に限って自然状態で茶の木が現在している。このことから、有智山城とされてきた土塁の内側に展開する段造成群の中には、特に段差の低い区画などは山城や坊の形成とは異なる耕作による区画や段の形成が重なっていることを認識しなければならぬ。とすれば従来から弱め手とされてきた自然地形上、遺構群の終息する尾根の切れるまでの間には安定した平坦面などの構築遺構は抽出しづらく、この間のみで完結する中世山城としては近隣の事例からしても説明のしづらい構造といえる。本遺構の性格は肥前勝尾城城下の総構えの例を引けば、近年、中西義昌氏などが提唱している宝満山系の防備全体の中の宝満山城の一つの構えと捉える必要があるのではなかろうか。

参考文献

- 『筑前「庵門山日記」校本』小田富士雄 1977年『九州考古学歴史研究』学生社
- 『戦国期筑前中南部における領主権力の動向』中西義昌 2002年『福岡地方史研究』40
- 『太宰府有智山城跡について』下高人輔 2006年『都府楼』38

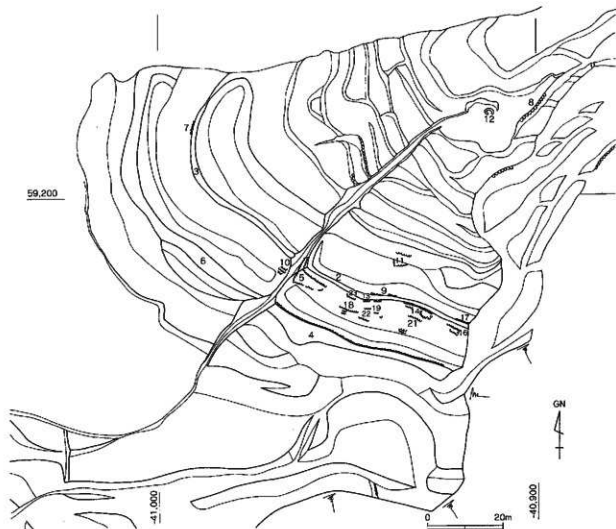


fig. 21 第32次調査E区略測図(1/200)

tab. 1 第32次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	備考
1	32SX001	土塼	土塼全体
2	34SX002	土塼	東側土塼
3	34SX003	土塼	西側土塼
4	34SX004	土塼	東側断面土塼
5	34SX005	石垣	東側土塼石垣
6	34SX006	列石	西側断面土塼
7	34SX007	石垣	西側土塼西側石垣
8	34SX008	石垣	東側土塼南東石垣
9	34SX009	石垣	東側土塼北側石垣
10	34SX010	石垣	西側土塼石垣
11	34SX011	列石	東側土塼北側石垣組み
12	34SX012	炭窯	
13	34SX013	列石	東側土塼南東石垣
14	34SX014	石垣	東側土塼南東石垣
16	34SX016	石垣	東側土塼南東石垣
17	34SX017	石垣	東側土塼北東石垣
18	34SX018	石垣	東側土塼南東石垣
19	34SX019	石垣	東側土塼南東石垣
21	34SX021	石垣	東側土塼南東石垣
22	34SX022	石垣	東側土塼南東石垣
23	34SX023	石垣	東側土塼南東石垣

tab. 2 第32次調査 出土遺物一覧表

A4④	C5
白 磁 輪: V	白 磁 輪: II IV VI × VIII 2
C3③	D2①
土 師 器 坏 ad(小)	白 磁 輪: 破片
土 師 實 土 師 殊 ALV	
C3②	D3①
白 磁 輪: V-3 × VIII 1. 3	須 恵 器 坏 ad
C4①	E3①
靑 銅 鑄 造 青 銅 輪: I-2	土 製 石 臼(右側, 赤銅石製)

3 宝満山遺跡群第33次調査

(1) 調査に至る経緯

調査対象地は太宰府市大字内山字野田445-1の個人の所有地に所在する。今回の調査は倉庫建設に伴う原因者負担事業でおこなった緊急調査である。

調査は平成19(2007)年10月10日～10月25日にかけて実施した。対象面積は567.6㎡、発掘調査面積は467㎡である。

(2) 調査の概要

遺跡は宝満山遺跡群の西側に位置し、中堂谷より発した原川が形成する谷平地の西岸に位置する。遺構が検出された面は標高約100mにあり、花崗岩風化岩盤上に堆積した第3紀礫層および沖積層上に展開する。地盤の黒色、黄色土は近隣の原遺跡では縄文早期の遺構が乗る土壌と同質のものと思われ、本調査で確認された遺構はそれ以降のものと考えられる。河川が近いためか調査区の東側は花崗岩盤が覆っている状況であった。

遺跡は南東に傾く急斜面から緩斜面に移行する地点にあり、前記地盤の上に灰色～褐色を呈する、厚さ20cm程度の遺物包含層があり、その下面でピットおよびたまり状遺構、土坑が検出された。土坑33SX005は堆積途中で焦土面を伴う特殊な遺構で、また、黒曜石の剥片が出土しており、周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性を示している。土層観察の結果、土地はすでに耕作等によって遺構検出面以下に削平が進行した箇所が多くを占め、南側は完全に遺構面が失われている状況であった。

調査は重機による表土除去作業の後に人力での遺構検出、掘り下げ作業を行い、測量・作図はトラス測量にて原点を設け、国土座標第II座標系により位置を確認した。遺物取り上げ用の略図を1/100で作成し、遺構分布図および土層図等は1/50で記録した。

(3) 検出遺構

土坑

33SX005 (fig. 23, p. 10～13) 調査区の中央よりやや西付近にある遺構で、規模は南北2.3m、南北2.3mを測る。土層は上に焼けた橙色の厚さ5cm程度で1m四方の略方形を呈す形で敷かれたような土層の上に暗灰色の粘土が乗り、その下には炭粒混じりの灰色粘土層が溜まっている。この層から鉄物質の金属滓、土器類が出土している。溶解炉や鍛冶炉の可能性も想定して掘り下げたが、滓もほとんどなく、鍛造薄片も検出されなかった。土器類は奈良時代第三四半期を前後する須恵器や土師器にまじり奈良三彩の可能性もある緑釉の壺(短頸壺か)の破片が出土している。遺構の性格は明確ではないが、橙色の土壌部分が金属加工に係る炉などの機能があったのかもしれない。しかし、焼きしまった炉壁や多量の滓、鍛造薄片などではなく、金属を直接溶解したりするほどの機能はなかったものと考えられる。

(4) 出土遺物

33SX005 灰色粘土出土遺物 (fig. 24, p. 14～19)

須恵器

蓋c (1) 口径16.4cm、器高2.9cmに復元されるボタン状の構みのついた蓋である。口縁端部は断面が三角形になる。大井部はヘラ切り後にナデで仕上げられる。大宰府土器編年IV期の所産。

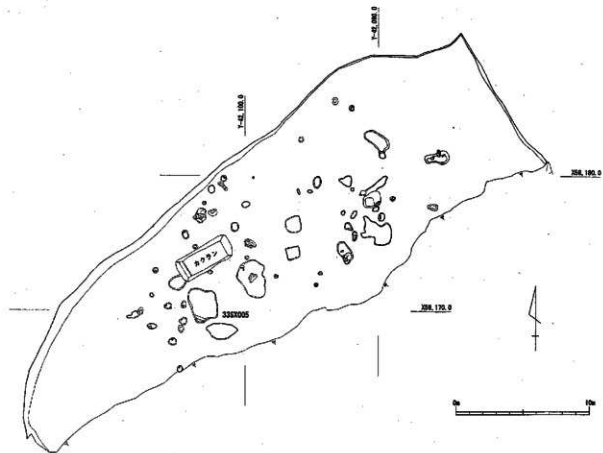
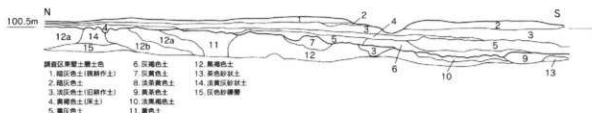
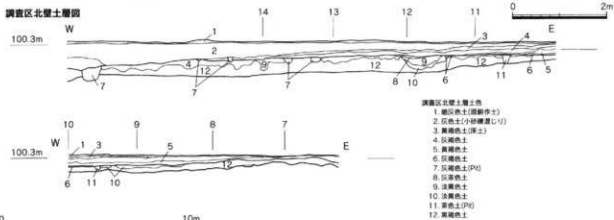


Fig22. 第33次調査全体図 (1/200)

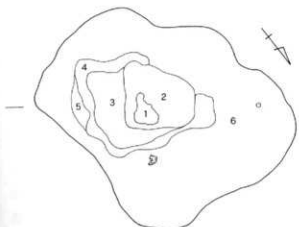
調査区東壁土層図



調査区北壁土層図



33SK005 検出時



33SK005 完壁時

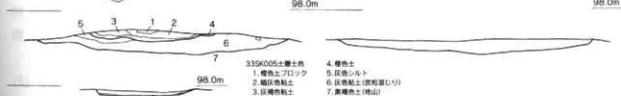
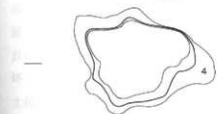
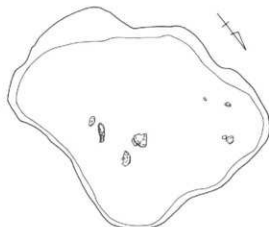


fig. 23 第33次調査土層図(1/80、1/200)、33SK005 遺構実測図(1/40)

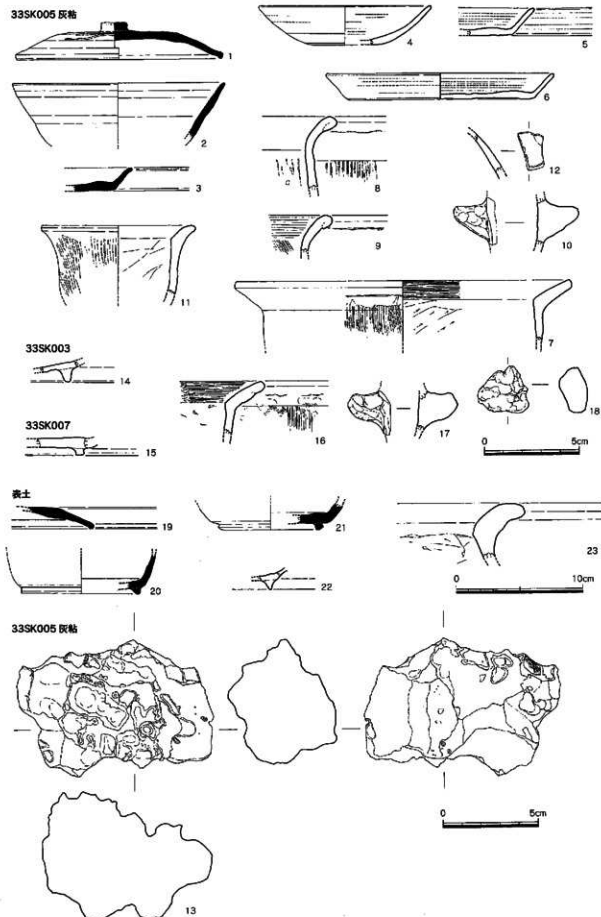


fig. 24 33SK005 灰粘、SK003・007・010、表土出土遺物実測図 (1/2、1/3)

坏 (2) 口径 16.8cm、器高 4.6cm 以上に復元される。焼成は硬質で良好。

皿 a (3) 器高 1.8cm 以上の短く直線的に延びる口縁を持つ。焼成は硬質で良好。
土師器

坏 d (4) 口径 13.6cm、器高 3.1cm、底径 6.5cm に復元される小ぶりなものである。回転を利用したミガキ a が施される。

皿 a (5, 6) 5 は器高 1.5cm 以上の短く直線的に延びる口縁を持つ。6 は口径 18.0cm、器高 2.1cm、底径 14.6cm に復元される。焼成は硬質で良好。ミガキ a が施される。いずれも明るい橙色を呈す。

甕 (7~10) 内面は上方にケズリが施される。口縁端部は粘土紐を折り曲げて丸く仕上げられている。くすんだ橙色~茶褐色を呈す。7 は口径 22.6cm、器高 4.9cm 以上に復元される。

小壺 (11) 口径 10.2cm、器高 5.5cm 以上に復元される。くすんだ茶褐色を呈す。

緑釉陶器

壺 (12) 壺蓋形の壺になるものの肩の部分か、やや白っぽい肌色を呈す土師質の柔らかい胎土で、若草色の釉が流れている。釉がかからない部分もあり、三彩や緑釉緑彩の二彩の可能性もある。大宰府十器編年 IV 期の所産であれば大宰府でも初期の資料に属す。

金属製品

鉄滓 (13) 多孔質の鉱物質のもので、長さ 9.0cm、幅 6.5cm、厚さ 5.3cm を測る。

33SK003 出土遺物 (fig. 24, pla. 20)

黒色土器 A

碗 c (14) 内側が黒色に処理された A タイプのもので、高さ 1.7cm が残存する。

33SK007 出土遺物 (fig. 24, pla. 20)

土師器

大坏 c × 大皿 c (15) 断面が四角い高台を有する大型の製品。焼成は良好で橙色を呈す。

33SK010 出土遺物 (fig. 24, pla. 20)

土師器

甕 (16, 17) 16 は口縁端部が短く直線的に開く口縁のもので、高さ 4.4cm が残存する。17 は幅 3.5cm ほどの小ぶりな甕の取っ手部分である。くすんだ褐色を呈す。

金属製品

鉄滓 (18) 多孔質の鉱物質の滓である。長さ 2.7cm、幅 2.5cm、厚さ 1.5cm を測る。

表土出土遺物 (fig. 24, pla. 22・23)

須恵器

蓋 (19) 端部がごく短く下に段をつくる形状の蓋で、高さ 1.8cm を測る。明灰色を呈し、焼成は硬質で良好。

坏 c (20, 21) 20 は底径 9.4cm、21 は 8.2cm に復元される。明灰色を呈し、焼成は硬質で良好。

土師器

碗 c (22) 断面が三角形を呈す高台を持つ。高さ 1.6cm を測り、明橙色を呈す。

甕 (23) 短く反りながら開く厚手の口縁を持つ。高さ 4.3cm を測る。明橙色を呈す。

(5) 小結

33SK005 から出土した三彩の可能性もある緑釉の壺は奈良時代第 3 四半期を前後する時期に位置づけ

られ、大宰府でも始原的な時期に帰属注目される。ちょうどこの頃が宝満山頂において三彩や皇朝銭を使用する山岳祭祀が開始された時期に当たり、遺構が火を焚いた痕跡のある金風加工に係る特殊な遺構であり、周辺に同時代のピットが少数検出されていることから、山中での祭祀に係るような、一時的な性格を持つ遺跡であった可能性が想定される。「崗」銘の黒書土器を出した同時代の原遺跡はここから500mの位置にありその関連性が注目される。山裾のこのような遺跡の存在が山中での活動と連動していた可能性は大きいものと思われる。

また、黒曜石の剥片が少量出土しており、周辺に縄文時代の遺構が存在する可能性を示している。

参考文献

「原遺跡」1994年福岡県教育委員会

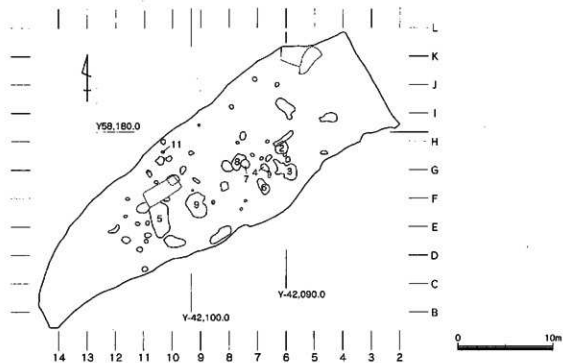


fig. 25 第33次調査略測図 (1/400)

tab. 3 第33次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	土色	時期	地区番号	備考
2		溜まり状	茶灰色土		G6	
3		溜まり状			G6	
4		溜まり状			G6	
5	33SK005	十坑	灰色粘土	8世紀~	E10	
6		溜まり状			F6	
7		溜まり状	茶褐色土		G7	8→7
8		溜まり状	茶褐色土		G7	
9		溜まり状	茶褐色土		E9	
10		溜まり状				
11		pit			G10	
12		pit			E10	

tab. 4 第33次調査 出土遺物一覧表

S-2	須恵器 杯	8c~
土師器 杯 a		
S-3	土師器 杯 a × d 焼	VI期~ 9c~
黒色土器 A 碗		
S-4	黒色土器 A 碗?	9c~
S-5	須恵器 蓋 杯 型	8c~
土師器 皿 a 変 a		
S-5 灰色粘	須恵器 蓋 3 杯 a × c	8c後半~
土師器 杯 d 皿 a 変 a		
金属製品 鉄滓 (2)		
S-5 褐色土	須恵器 杯	
土師器 碗 a		
S-6	土師器 破片	
S-7	土師器 皿 × 大碗	
S-8	土師器 鉢 × 碗	8c~
S-9	土師器 罐	
金属製品 鉄釘 (1)		
S-11	土師器 破片	
S-12	土師器 蓋 3 杯 d	8c後半~
表土	須恵器 蓋 3 杯 c3 焼	
土師器 杯 a 柄 c 変 a		
同安窯系青磁 柄; V?		
同安窯系青磁 皿; I		
国产陶器 瓶? 焼		
金属製品 鉄釘 (2)		

4 宝満山遺跡第34次調査

(1) 調査に至る経緯

調査対象地は太宰府市大字内山字本谷 780-1・16 の個人の所有地に所在する。対象地は昭和 50 年代半ばまで「妙見」祠のあった跡地にあたる。この場所は太宰府天満宮文化研究所（当時）の小西信二氏により昭和 56（1981）年に発見されていた遺跡で、昭和 57 年に太宰府顕彰会から発刊された「宝満山の地宝」（小田富士雄氏編集）において「御塚・本谷 B 地点」「妙見祠礎石群」として報告された遺跡にあたる。今回の調査は同庫補助事業でおこなった重要確認調査であり、調査後は遺構をそのまま地下に保存している。

調査は平成 20（2008）年 1 月 11 日～4 月 30 日にかけて実施した。発掘調査面積は 1150 m² である。

なお、調査終盤で地権者の承諾を得て調査概要を記者発表し、3 月 22 日に現地説明会を実施し、約 100 名の見学者があった。

(2) 調査の概要

本調査地点は宝満山西側の標高 275m の独立峰上に位置する。

調査は地権者の承諾を得て、事前に地元市民組織である宝満山研究会による伐採作業の応援をいただき、その後に着機を用いずに手掘りで調査に着手した。調査は礎石と基礎と考えられる地形を意識した上で着手の順に 1～10 トレンチを設定した。今回の調査は遺跡の概要と残存状況を確認するに止める前提で行ったため、整地や遺構の掘り下げはほとんどおこなっていない。遺構は腐葉土を除去し、褐色のビューな面に至るまでの黒～灰色の層を除去した段階で、瓦や礎石が認識された。

作図は 1/20 の実測を山村、柳、久味木がおこない、1/200 の地形測量を調理職文化財サポートシステムに委託した。

(3) 検出遺構

礎石建物

34S8001 (fig. 28・29, pla. 8～26) 標高 275m にある約 15m 四方の平坦面の中央に展開する遺構で、復元規模が 8.14m 四方の総柱式の礎石建物と認識される。建物の柱間は 252+310+252cm (8.3+10.2+8.3 丈) の一辺 814cm (26.8 尺) の三間四方の規模に復元される。建物の方位は N-2° 48' -W である。16 個の礎石位置のうち、7 箇所の礎石が失われていた。失われた箇所の下には 6 箇所で根石と据えられた痕跡としての浅い窪みが確認された。ただ、遺構の北西側は土取りによって地盤の一部がなくなっており、A4 の位置には礎石を据えた痕跡も確認できなかった。礎石は 60～80cm ほどの扁平な花崗岩（現地周辺由来の自然石）が採用されている。後に触れる SX010 の祠の基礎に採用されていた石材はもともとこの S8001 の礎石を掘り起こして採用したものと思われ、その厚さ 20cm 程度であり、据えられている礎石もその程度の厚さがあるものと考えられる。祠周辺に 5 枚、遺跡北側斜面に 1 枚、移設された祠の下敷きに 1 枚の石があり、これらが移動したものと考えられる。

礎石上面のレベルは標高 275.1m 前後で差は 10cm 以内でのばらつきであり、A3, B3 が若干高い。柱座の作り出しなどは確認できない。

建物外側の施設との関係は、礎石から南側の石列 SX003 まで 5.5m、西側の石列 SX004 まで 2.5m、東側の石列 SX011 まで 3.5m を測り、その幅は一定でない。この間に明瞭な雨落ち遺構は確認できなかった。

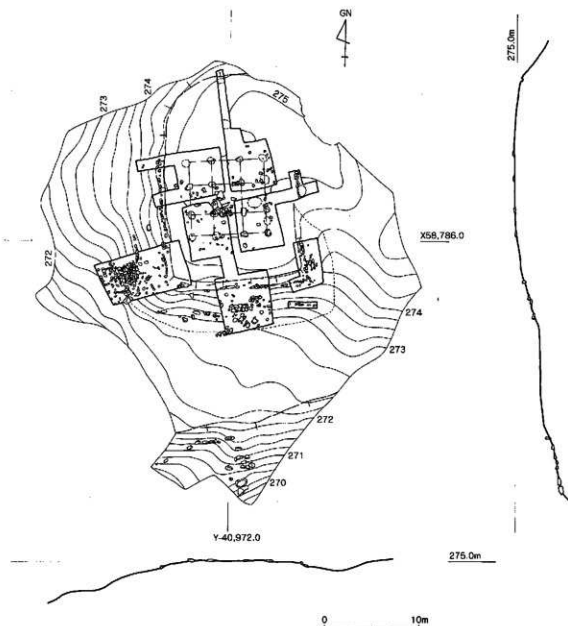


fig. 26 第34次調査地形測量図 (1/400)

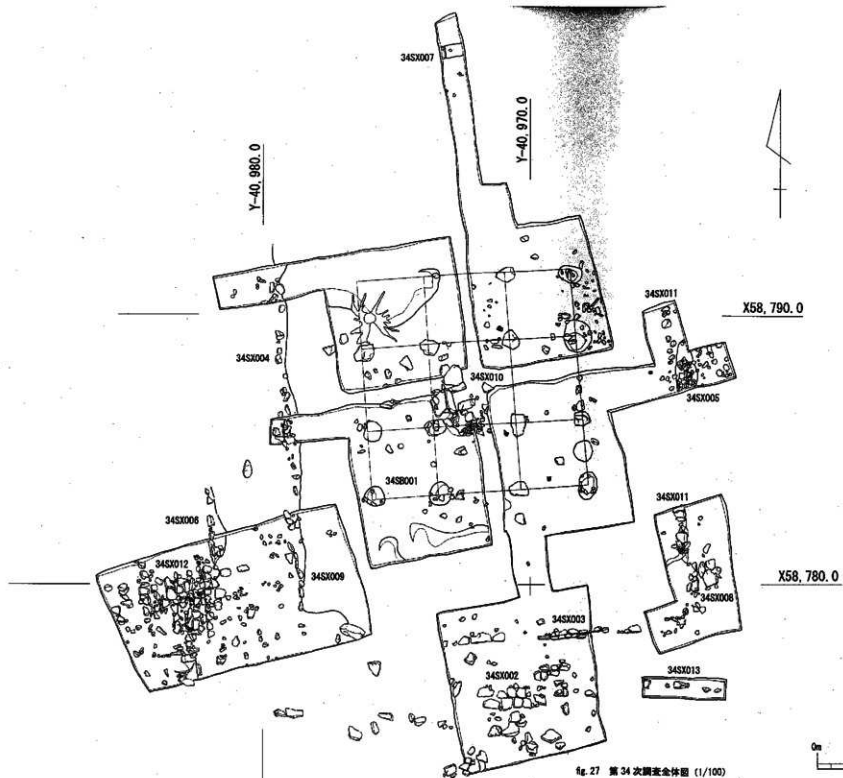


fig. 27 第34次調査全体図 (1/100)

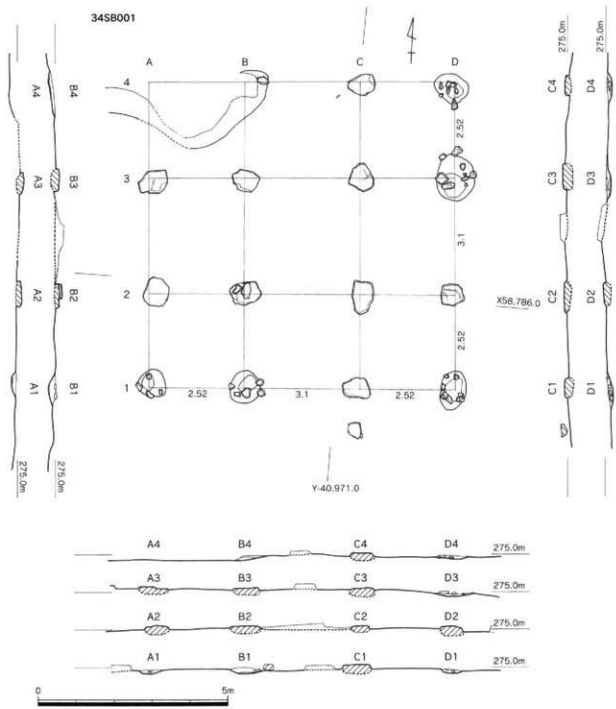


fig. 28 34SB001 遺構実測図 (1/100)

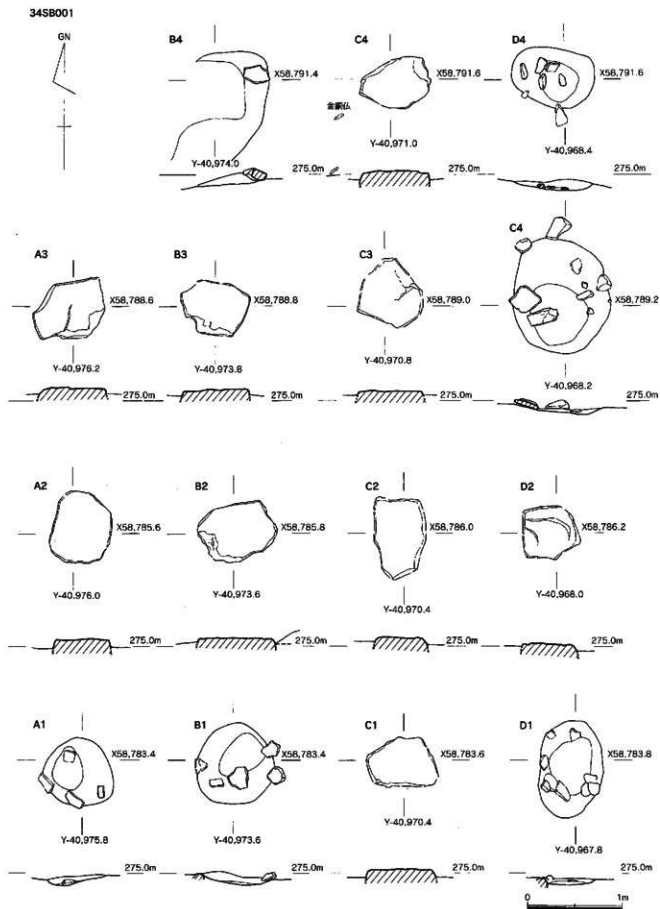


図 29 34SB001 礎石及び抜取痕跡遺構実測図 (1/40)

ただ南西側には深さ 12cm ほどの東西に帯状の土壌の汚れた箇所があり、あるいは雨落ちと関わりがあるのかもしれない。その南側には大きな扁平な石を使用した階段 SX002 があり、基礎の登り口としてはここが正面になっていたと考えられる。この他、基礎南西隅には西側に降る階段 SX012 が、南東角には SX008 が検出された。このことから建物の正面は南側であり、3 方向の動線が想定される。このため礎石と基礎の石列の間隔は南側が広く取られているものと考えられる。

礎石周辺には漆喰などの壁材、被覆材などは検出されなかった。

34SX002.003



34SX002.003 立面図

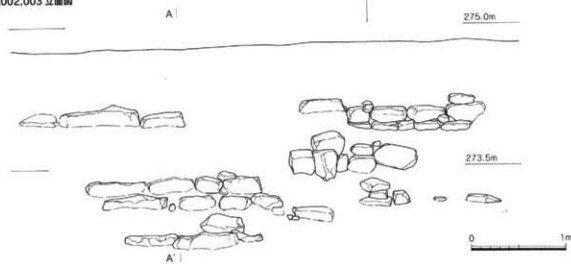
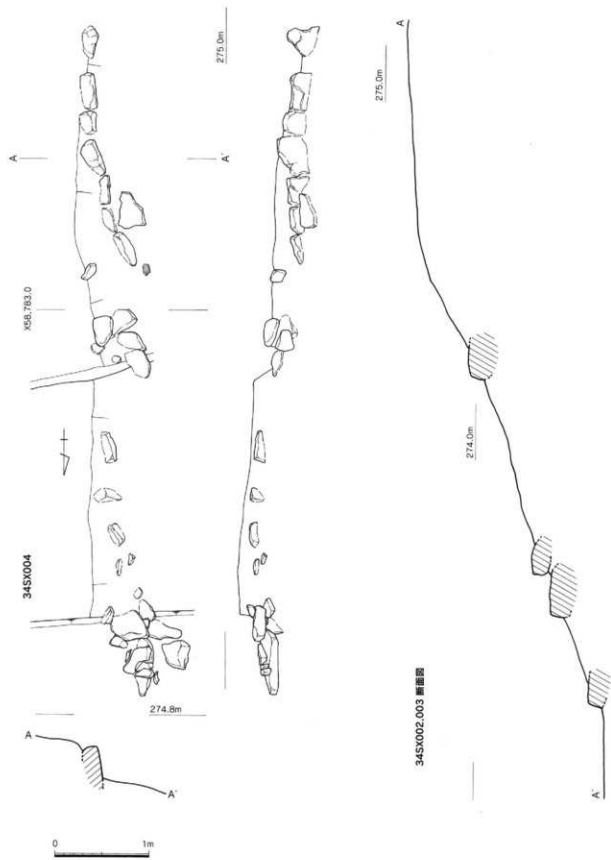


fig. 30 34SX002・003 遺構実測図 (1/40)



34SX002.003 断面図

fig. 31 34SX002・003・004 遺構実測図 (1/40)

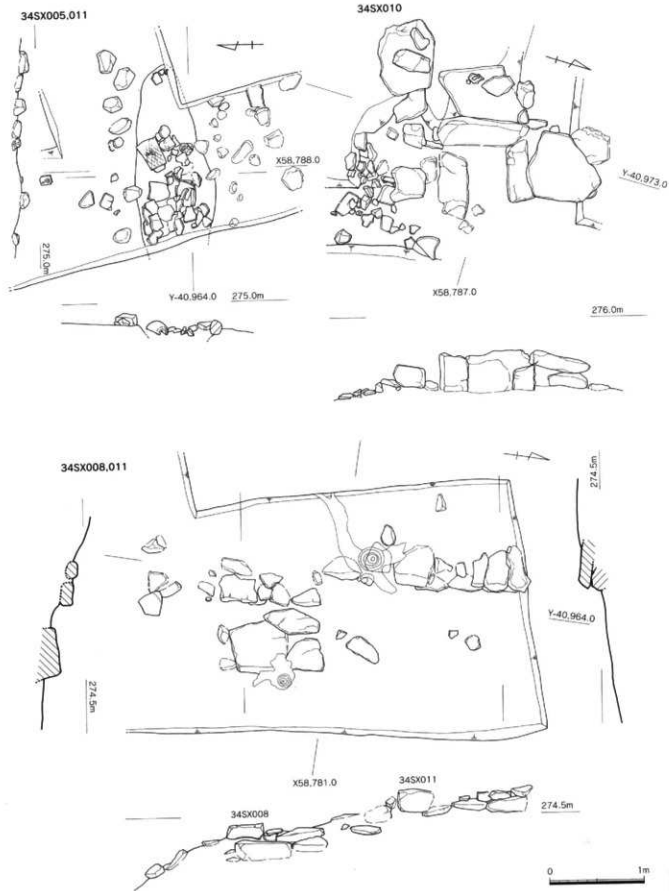


fig. 32 34SX005・008・010・011 遺構実測図 (1/40)

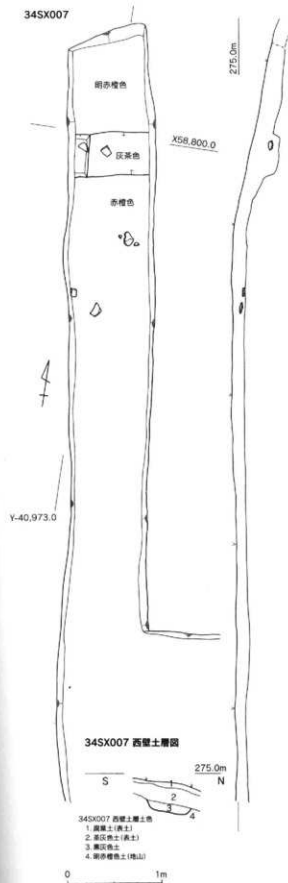


fig. 33 34SX007 遺構実測図 (1/40)

石列 SX004 と東辺石列 SX011 の関係から 15m になるものと考えられる。2 トレンチの東側では石が 2 段に組まれており、隙間のある部分には瓦が差し込まれている。このような手法は他の石列にはない手厚い施工といえる。礎石建物 SX001 の礎石のレベル面から約 1m 下に位置し、基礎南側の土留めのような機能も想定される。

34SX004 (fig. 31, pla. 33・34) 基礎の東側の対面にある南北石列 SX011 との距離は 14.5m を測る。北限は、ボーリングステッキなどで探ったところ、ほぼ 7 トレンチの北あたりと判断され、総延長は 14.5m 程度に復元される。石の配置は南側の 3 トレンチ内では横に隙間を作らず密に置かれているが、北の 7、11 トレンチでは間隔を置いて置かれており、南側より丁寧な施工が施されている。基礎の正面に近い側に手間がかけられたといえよう。

34SX006 西辺石列 SX004 の西 3m の低い側に見られる 3m ほどの石列で、北側への延びはボーリングステッキでの探索では明瞭でなく、途中でなくなるものと考えられる。

34SX011 (fig. 32, pla. 39・40) 基礎の東側にある南北石列である。4、10 トレンチでは密に石が並べられるが、11 トレンチでは間の空いた簡略な並べ方となっており、北に行くほど粗い施工といえる。

34SX013 (fig. 34, pla. 45) 8 トレンチで検出された東西方向の粗雑な石列で、SX002 内の列に連なる可能性がある。南辺石列 SX003 とは水平距離で 2.5m 南の低い位置にある。

溜まり状遺構

34SX005 (fig. 32, pla. 35・36) 東辺石列 SX011 の東外側に穿たれた南北に長い窪みで、その上に瓦が集積されている。最大幅は 90cm を測る。遺物は残りの長い敷点を取り上げて、大半は埋め戻している。

34SX007 (fig. 32, pla. 37) SB001 南辺より 8.5m の位置にある東西に長い遺構で、幅 45cm、長さ 1m を検出した。基礎の南側にある東西石列 SX003 との距離は 22m を測る。深さは 10cm 程度。溝になる可能性もある。黒灰色の土壌で埋没している。この遺構から急に北側に地形が下がっており、地形の変換点に穿たれている遺構である。

祠跡

34SX010 (fig. 32, pla. 39・40) 礎石建物 SB001 の中央付近に板状の花崗岩がコ字に組まれた遺構。昭和 50 年代半ば頃までこの上にもう一枚板状の石が置かれ妙見を祭る

34SX012

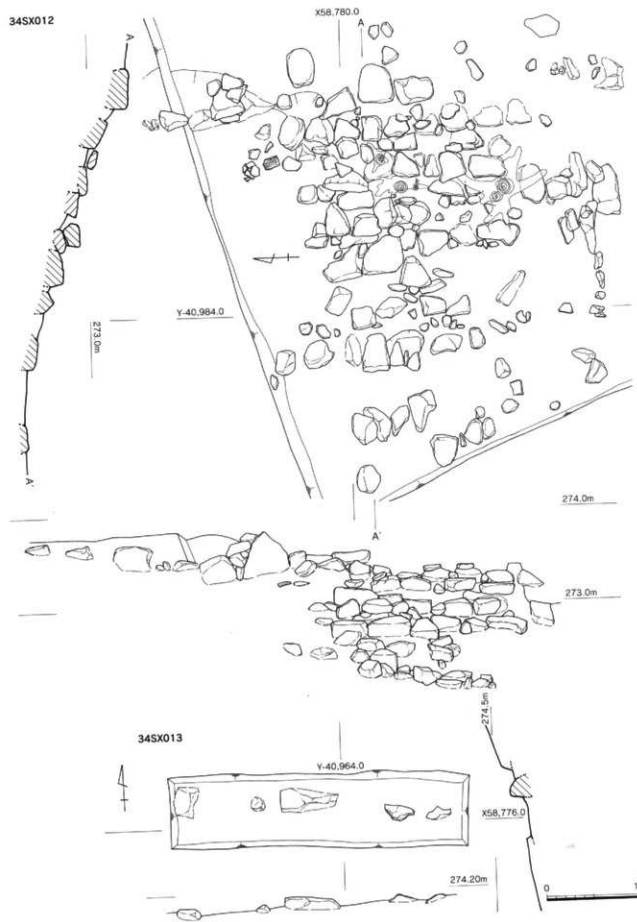


fig. 34 34SX012・013 遺構実測図 (1/40)

祠が置かれていた。現在はここから約 120m 北の南谷池の北側の路傍に移設されている。かつてこのご神体として祭られていた石には蓮華座のうえに「寶塔」と文字が線刻されていたといわれている。また、宝満山における修験道の入峰の際の行場としても使用されていた。

(4) 出土遺物

34SX005 出土遺物 (fig. 35・36, pla. 48～54)

瓦

丸瓦 (1～3) 1 は二重斜格子に「安」の一字が左右逆の左文字であしられたタタキの文様を持つ丸瓦で、側端部は内側から分割裁断のための切り込みが入られた痕跡が明瞭に残る。内面には目の粗い布目が全体に残され、玉縁のところには横方向に紐の痕跡が見られる。灰色を呈し、焼成は良好な還元状態を示す。10 世紀ごろ以降の所産。2 と 3 は横長の菱形を呈す斜格子のタタキ目を有すもので、焼成は酸化気味で軟質。

平瓦 (1) 側端部は内側から分割裁断のための切り込みが入られた段が残ることから、円筒状に形成して分割した製品と理解される。外面は摩耗して文様は不明。焼成は酸化気味で軟質。

34SX007 出土遺物 (fig. 36, pla. 55・56)

瓦

丸瓦 (2) 横長の菱形を呈す斜格子のタタキ目の上からナデが施される。側端部は内側からの分割裁断のための切り込みが残る。内面には目の細かな布目が見られる。

1 トレンチ表土出土遺物 (fig. 36, pla. 55・56)

須恵器

坏 c (3) 高さ 3.5cm を測る直線的な体部を持つもの。底部との境は明瞭に屈曲し、高台は低い四角形を呈す。8 世紀中葉以降 (大宰府 III 期以降) の所産。

土師器

桶 c (4) 外に開く、引き出されたような形状の高台を持つ。9 世紀後半以降の大宰府 VII 期の所産か。金属製品

鉄釘 (5) 頭の幅が 2.6cm、身幅 1cm を測る大型の鉄釘。礎石建物に関す建築部材であろう。

2 トレンチ表土出土遺物 (fig. 36, pla. 57・58)

須恵器

坏 c (6, 7) 底部との境は明瞭に屈曲する形状のもの。8 世紀中葉以降 (大宰府 III 期以降) の所産。

瓦

平瓦 (8, 9) 横長の菱形を呈す斜格子のタタキ目を有す。9 のほうが扁平な菱形を成す。

3 トレンチ表土出土遺物 (fig. 36・37, pla. 57～62・90・91)

須恵器

坏 a (10) 底部との境は明瞭に屈曲し、口縁端部は短く外に開く形状のもの。内面に漆が付着している。山中で漆を採取していたものか。口径 13.2cm、高さ 3.2cm、底径 9.1cm に還元される。

坏 c (11) 体部は厚くやや丸味を持って立ち上がり、高台はやや楕円形に開く形状のもの。8 世紀中葉以降 (大宰府 III 期以降) の所産。口径 15.0cm、高さ 4.2cm、底径 9.6cm に還元される。

壺 (12) 仏華瓶形の長胴でラップ形に短く開く e タイプの頸部の小片。灰色を呈し焼成は硬質で良好。高さ 3.4cm が残る。口径 15.0cm、高さ 4.2cm、底径 9.6cm に還元される。

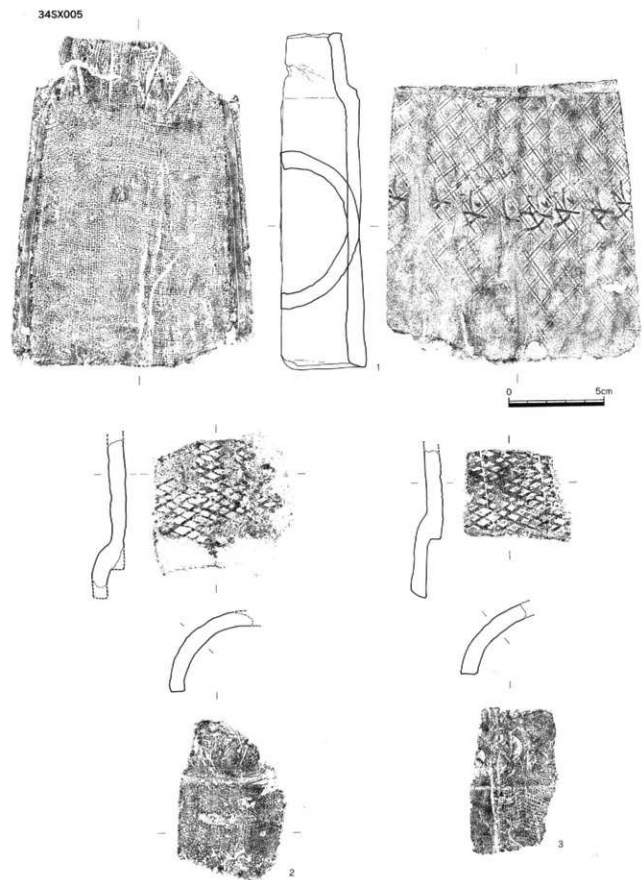


fig. 35 34SX005 出土遺物実測図 (1/4)

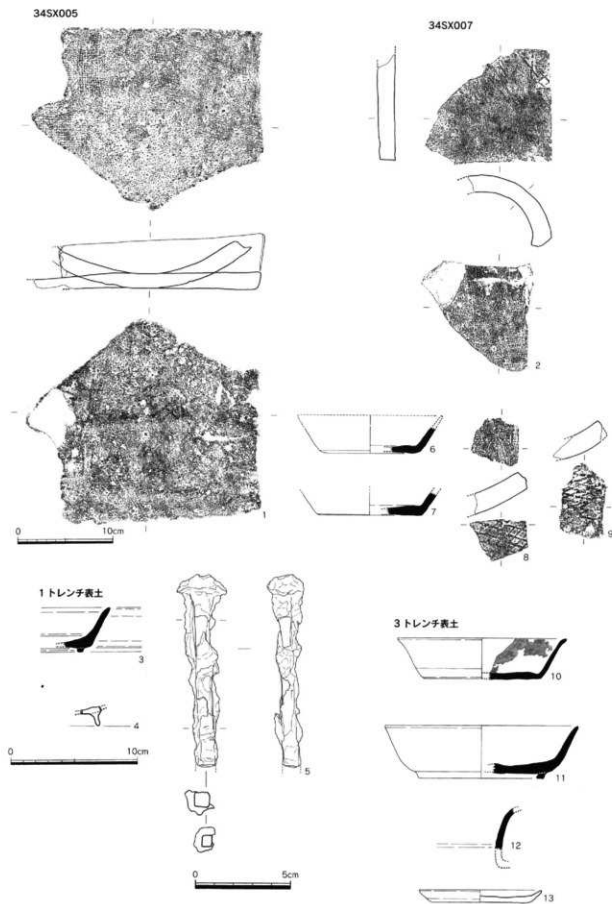


fig. 36 34SX005・007、1・3 トレンチ表土出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

土師器

小皿 a (13) 平たい底部に短く立ち上がる口縁端部で、底部外面にはへら切りの跡が残る。口径 9.4cm、高さ 1.0cm、底径 7.6cm に復元される。大宰府 XII 期の 11 世紀頃の所産か。

瓦

丸瓦 (1, 2) 1 は SX005 の 1 と同じもので、二重斜格子に左文字「安」の一文字のあるタタキの文様を持つ丸瓦。内面は粗い布目が残る。2 は目が 4mm ほどの細かな斜格子の文様を持つタタキが施される。焼成は両者ともやや甘い還元焼成のもの。

平瓦 (3 ~ 5) 3 は縦に長い斜格子中に二重の方形の外区内に「寺」の文字が見られる。「観世音寺」銘の文字瓦である。5 は斜格子に左文字「佐」の一文字のあるタタキの文様を持つ。4 は正格子に近い斜格子のタタキの文様を持つ。焼成は 4 が硬質の青灰色、他は軟質の灰白色を呈す還元焼成のもの。

金属製品

棒状鉄製品 (6) 長さ 24.9cm、直径 6mm ほどの蛇行する棒状の鉄製品で、片方の先端が尖っている。帰属する時期は不明。

5 トレンチ表土出土遺物 (fig. 37・38, pla. 63 ~ 66)

須恵器

坏 a (7) 底部との境は明瞭に屈曲する形状のもの。8 世紀中葉以降 (大宰府 III 期以降) の所産。口径 12.0cm、高さ 2.8cm、底径 8.6cm に復元される。

土師器

坏 a (8 ~ 11) 体部と底部の境目があいまいで丸底の傾向のある形状で、口径は 8 が 10.6cm を測る。9 世紀後半以降 (大宰府 VII 期以降) の所産。

瓦

丸瓦 (12, 13) 12 は目が 4mm ほどの細かな斜格子の文様を持つタタキが、13 は二重斜格子の文様を持つタタキが施される。12 は分割の切り込みの段が残るが、13 は平坦に削って調整されている。灰色の還元焼成だが軟質である。

平瓦 (1, 2) 斜格子のタタキの文様を持つもので、2 は正格子に近い。焼成は 1 が軟質で 2 は硬質。

9 トレンチ表土出土遺物 (fig. 38, pla. 65・66)

須恵器

壺 (3) 長胴の e ~ f タイプの底部片で底径 8.8cm に復元される。底部の角は明瞭でやや肉が厚い。暗灰色を呈し硬質の還元焼成。

10 トレンチ表土出土遺物 (fig. 38, pla. 67 ~ 70)

土師器

小皿 b (4) 口径 7.6cm、高さ 1.8cm、底径 5.8cm に復元される。口縁は明瞭に立ち上がる形状で、底部外面にはイト切り痕跡が残る。大宰府 XIX 期の 14 世紀前半頃の所産か。

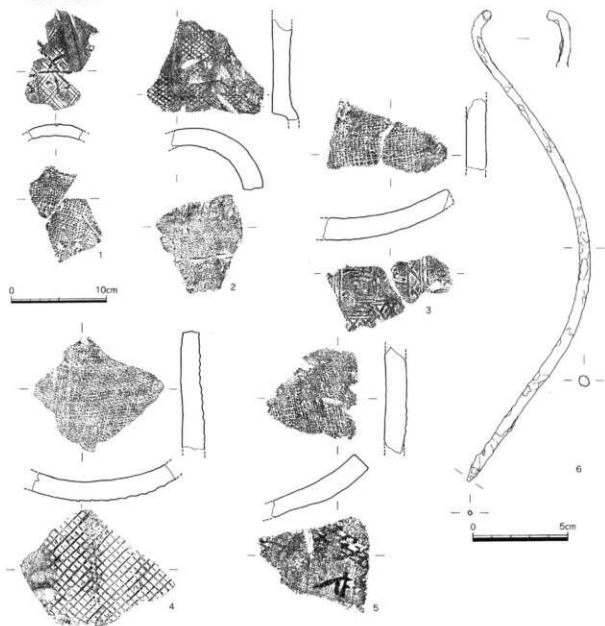
土製品

焼土塊 (5) 直径 5.0cm、厚さ 2.5cm の円盤状で片側の面が幅まんだような隆起のある形状を呈す。土師質の焼成。

瓦

平瓦 (6 ~ 9) 6 は横長、7, 9 は縦長い斜格子のタタキの文様を持つ。9 には方形の外区が見られ文字瓦であったことが分かる。左文字の「佐」銘が入るタタキのもので、8 は正文字の「佐」銘のタタキ

3 トレンチ表土



5 トレンチ表土

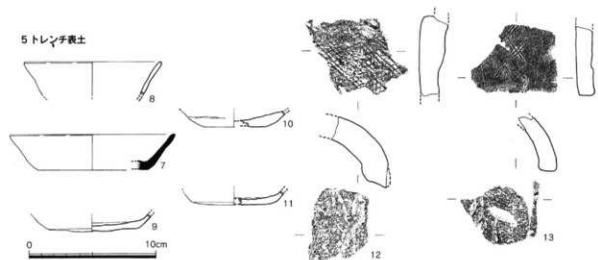
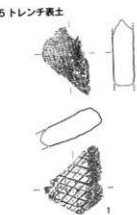


fig. 37 第 34 次 3・5 トレンチ表土出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

5 トレンチ表土



9 トレンチ表土



10 トレンチ表土

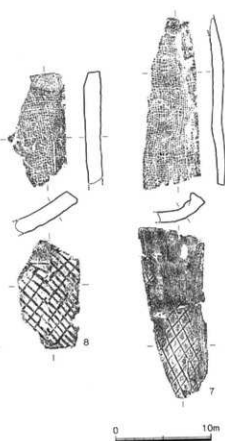
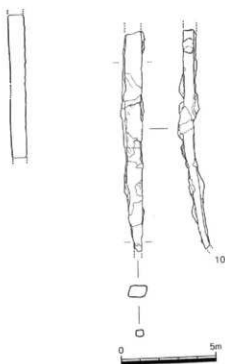
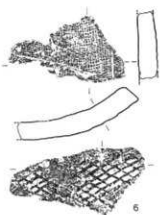
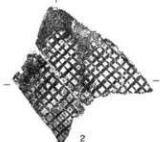
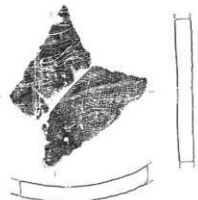
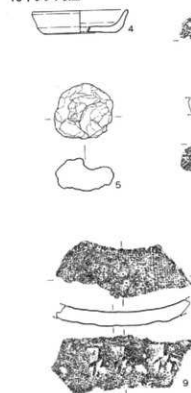


fig. 38 第34次5・9・10 トレンチ表土出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/4)

を持つ。焼成は還元傾向の軟質で、7のみが硬質。7は厚みが1cm程度で極端に薄い。

金属製品

棒状鉄製品 (10) 長さ11.5cm、幅1.1cm、厚さ0.6cmを測る。断面は長方形で、平面形は一方の先が細い形状を成す。建築部材としての釘の可能性が高いと思われる。

表土出土遺物 (fig. 39 ~ 41, pla. 71 ~ 85・90 ~ 98)

須恵器

坏 a (1) やや丸味のある体部を持つ形状で、底径6.8cmに還元される。8世紀中葉以降 (大宰府 III 期以降) の所産。

坏 (2, 3) やや肉の厚い外に開く形状の口縁部で、2は重ね焼きの痕跡が残る。

甕 (4)

土師器

小皿 a (5, 6) 底の平たな形状のもので底径は5が8.6cm、6は8.4cmに還元される。板状圧痕が明瞭に残る。

坏 a (7) 7はイトキリ手法によると思われる底部片で9.0cmに還元される。外面に板状圧痕が明瞭に残る。12世紀以降の所産か。

碗 c (8, 9) 8は引き出したようなやや長めの高台を持ち、9は低平な三角形の高台を持つ。大宰府 VI ~ VII 期の9世紀中ごろから10世紀前半頃に位置づけられようか。

皿 a (10) 口縁は直線的に斜めに開く形状で、へら切りの痕跡が明瞭に残るもの。口径17.0cm、高さ2.5cm、底径12.0cmに還元される。大宰府 VIII 期の10世紀前半頃に位置づけられようか。

丸坏 a (11, 12) 11は口径14.4cm、器高3.3cm、12は口径14.8cm、器高3.6cmに還元される。浅い傾向の丸坏で11世紀後半以降 (大宰府 XII 期以降) の所産。

越州窯系青磁

碗 (13) 輪花の刻り込みが口縁端部に施されるもので、オリーブ色の釉が施される。胎土は堅緻な灰色を呈す。碗 I-2b タイプかとおもわれるが、坏の可能性もある。

国産磁器

盃 (14) 口径5.2cm、器高2.9cm、底径1.8cmを測る。内面に赤色で梅鉢文、外面に金泥で「太宰府天満宮」「老千五十年大祭」と書かれている。太宰府天満宮神忌1050年大祭は昭和27 (1952) 年4月3日、4日に斉行されている。もと現場にあった妙見祠に供えられたものと思われる。

瓦

丸瓦 (15 ~ 17) 横に長い格子目のタタキを有す。17は目が細かなタイプ。端部内側に分割の切り込みが残る。灰色を呈し、焼成は硬質な還元焼成。

平瓦 (18 ~ 30) 横長の格子目のタタキを有す。21は目が細かな、26, 27は二重格子になるタイプ。23, 25 ~ 27は端部内側に分割の切り込みが残り、円筒整形によるものとわかる。19は内面の布の目が際立って粗い。灰色を呈し、焼成はやや軟質な還元焼成。19, 20はやや酸化気味の軟質な焼成。これらの瓦のタタキの傾向としては、追加線や格子中の文様の加飾を持たず、大振りな格子もなく、D群に属すものといえ、9世紀後半から10世紀に位置づけられる一群といえる。

金属製品

小金銅仏 (31) SB001の北東側の礎石 C4 の南西側の表土下面で検出された。高さ11.8cm、幅3.3cm、厚さ2.8cmの立像で、頭頂部に肉髻を表現し、右手を挙げた施無畏、左手を下げた与願の印を成す如来像である。表面は数ミリの穴があくスポンジ状となり、かなり銅成分が土中で失われたものと推察され

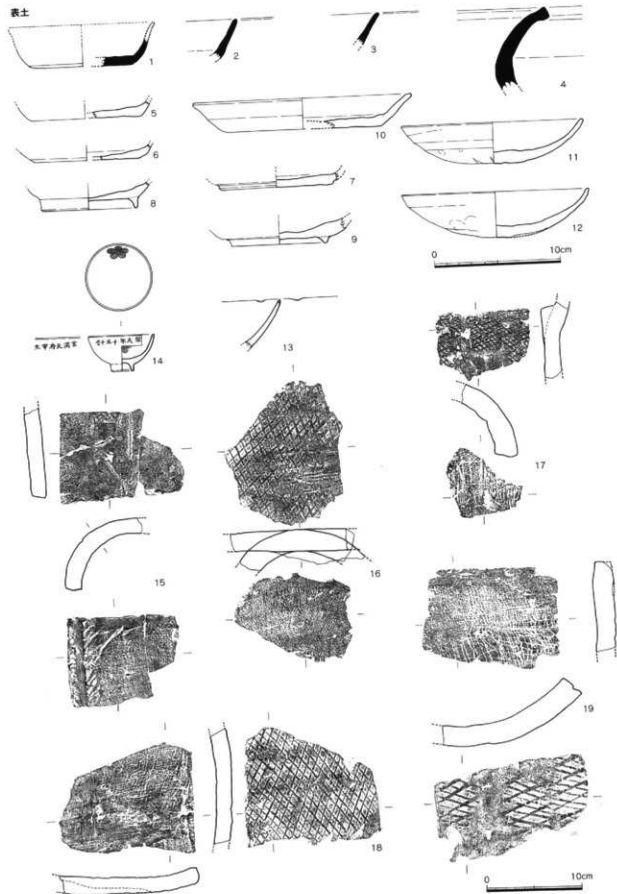


fig. 39 第34次表土出土遺物実測図その1(1/3、1/4)

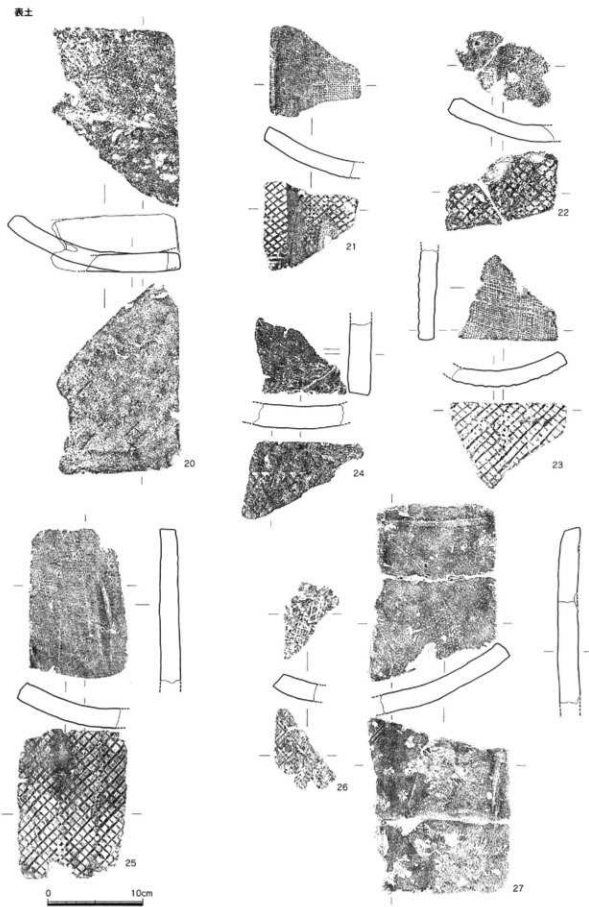


fig. 40 第34次表土出土遺物実測図その2(1/4)

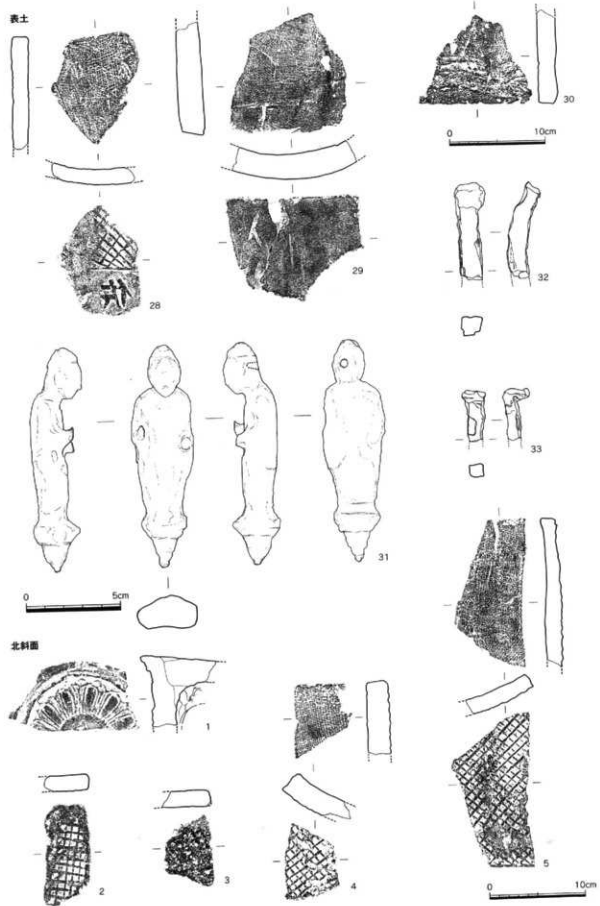


fig. 41 第34次表土、北斜面出土遺物実測図(1/2、1/4)

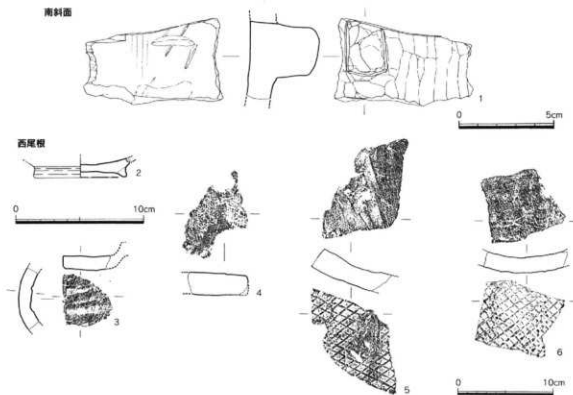


fig. 42 第34次南斜面、西尾根出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)

る。表面の残り具合は良好ではなく、細かな表現は観察できない。しかし、両脇には袖のふくらみがあり、それに続く背面には裾が上がっている衣紋が見られる。背面の背の中央はごく浅く窪む形状で、足元には2条の線ないしごく浅い段があり、裳腰を着た衣装なのかも知れない。足からは円錐状に尖っており、台座に差し込む形式となっている。先端部は幅5mmほどの突起状になっている。手先は欠落しているものと考えられるが、掌まだけが残存するものか。頭部は体部が直線的なのと対照的に前に突き出されたような意匠で、この像の特徴となっている。顔は鼻先が尖るような形状で、額に段があり、さらに頭頂部に至る間にごくわずかに緩やかな段がある。団子を乗せたような形状ではないが、これは肉髻にあたる表現と見られる。後頭部には深さ5mm、直径4mmほどの穴が穿たれる。頭光の接続のためのほぞ穴と思われるが、中心より著しく左側に寄っている。帰属する時期としては、細かな意匠が観察できないことと類例が乏しいため判断に窮するらしいが、八尋和泉氏のご所見では奈良前期以降、井形進氏は平安前期頃とされている。

鉄釘(32, 33) 32は頭部の幅が1.6cm、身の幅と厚みが1.1cmを測り、33は頭部の幅が1.4cm、身の幅1.3cm、厚みが0.7cmを測る。古代の墳墓や中世の集落から出土するものと比較すれば格段に大きなもので、SB001に使用されたものと考えられる。

北斜面出土遺物 (fig. 41, pla. 86・87)

調査区外の北斜面の表面採取で発見された遺物を報告する。

瓦

軒丸瓦(1) 花卉が縦長く外郭線の先端が剣先のように尖る形状を持つ蓮華文で、その外に潰れているが珠文帯が巡る。九州歴史資料館分類の170Aタイプのものである。過去に本遺跡で報告された軒丸瓦はすべてこの形式のものである。焼成は堅緻で灰色を呈す。

平瓦 (2~5) おそらく同形の横長で方形気味の格子目のタキを有す。4と5は側面に分割の切り込みの跡が残る。焼成は2と3は軟質で他は硬質な還元焼成。

南斜面出土遺物 (Fig. 42, pla. 88・89)

石製品

石鋤 (1) 方形の突起状の把手を持つAタイプの石鋤である。上端部は平坦に再加工されている。平安後期の所産。

西尾模出土遺物 (Fig. 42, pla. 88・89)

黒色土器B類

碗c (2) 外に短く開く三角形の高台を持つ。底径は7.0cmに復元される。

瓦

丸瓦 (3) 外面はナデによって整形され、内面は目の細かな布目を残す。硬質な還元焼成。

平瓦 (4~6) 4は無文、5は横長の格子目、6は方形に近い斜格子のタキを有す。調査本体から出したものと同じものと考えられる。焼成は4がやや軟質で他は硬質な還元焼成となる。

(5) 小結

1 出土瓦について

今回出土した瓦は調査区の全地区で出土し、調査区外の周辺の尾根や斜面にまで分布している。このことから礎石建物 SB001 は瓦を所要した建物であったと判断される。軒瓦は今回の調査では北斜面で1点が採取されたが、過去出土したものも含めては同一のものと考えられる。この型式のものは大宰府桑坊跡第68次 SE020 の10世紀中頃埋没の井戸枠として構築された瓦積みに含まれることからそれ以前のものと同様に、九州歴史資料館分類の170Aタイプに当たる。この瓦の叩き文様は目の細かな格子であり、格子内に加飾しないE群(宝満27次分類)の様相であることから9世紀後半以降のものと考えられる。

今回出土した瓦群全体でもD群以降の様相のものはない。「安」の文字のある二重斜格子の丸瓦の帰属時期が問題となる。この瓦は天満宮安楽寺からもたらされたものであるが、安楽寺での既往の調査ではこの瓦の製作年代などは現状では判明していない。大宰府全体ではいかがであろうか。二重斜格子の出現の検証が必要となるが、大宰府政での出土傾向が一つの鍵になる。政庁跡の南門での調査で、政庁第11期再建以前の土坑(941年以前埋没)から出土した軒平瓦の中に600Bタイプ(九歴分類)のものが含まれていると報告されている。この600Bタイプに重格子叩きが施されている。このことから大宰府においては10世紀前半にはすでに重格子叩きの瓦が存在することとなり、本調査で出土した「安」銘の二重斜格子丸瓦の上限もその頃まで考えることができる。安楽寺においては延喜19(919)年、藤原仲平の奉行により社殿造営された記録があり、永観2(984)年大宰大式符原輔正(道真曾孫)による常行堂、宝塔院、中門廊、回廊の建立まで、伽藍の充実が図られた時代であり、その過程で使用された部材が本物件に搬入されたものであろう。今回出土した瓦は既往の年代観から10世紀前半から中頃に位置付けられる一群と言える。その他、観世音寺、佐、銘の文字瓦も出土しており、瓦自体は大宰府の都市域から広域に集められたものが持ち込まれているといえる。建物造営の背景には大宰府の官衙や他神社、都市民などの協力があつたものと推測される。

2 礎石建物について

今回発見された礎石建物 34SX001 の創建は所要瓦の型式や出土土器から10世紀頃のものと考えられる。出土遺物には瓦、土師器、須臾器、越州窯青磁碗、鉄釘、金銅製小型仏像などが出土してあり、土師の帰属年代は9世紀後半から10世紀のものが大半を占め、土器には一部8世紀と11世紀後半頃のものが見られる。瓦は10世紀前半代の年代が想定されている様式のもので、礎石建物の創建はこの時期のものと考えられる。小金銅仏は北側礎石列の間の表土層下瓦や鉄釘などとともに出土している。右手を上げ、左手を下げる印を結ぶもので、厨食のため詳細な像様は指摘できないが老妓での類例などから菩薩立像といえる。

今回の調査により建物は地形を巧みに利用した正面観で高さ3mの基壇を伴う瓦を所要した三軒間の礎石建物であったことが改めて明らかになった。しかもその創建は10世紀半以降であり、金銅仏の出土より仏教関連施設であることも明瞭となった。

調査以前には山中の分布調査により建物の存在が知られており、この建物が『石清水文書之二』937年記事における沙弥僧覚が企画建設していた最澄遺記の「六所宝塔」のうちの「安西塔」であったことが指摘されてきた。今回おこなった宝満山における悉皆的な一連の調査によって、山中において古代の瓦と礎石を伴う遺構の存在は下宮地区とこの場所に限定されることが鮮明となり、先の記事がこの場所を示す蓋然性は高まっている。

この建物は地山削り出しによる基壇上に構築され、正方位を意識した方向性を持つもので、階段の配属状況から南に正面側を正面としている。建物の間間は252+310+252cm(8.3+10.2+8.3)の一辺814cm(26.8)尺、柱配置からいわず三軒堂(間配室が二間四配室)の形式に復原される。創建時の六所宝塔の基本構造はいかなるものであったのであろう。『比叡(山東塔縁起)弘仁12(821)年7月記事には心住建立の記載があるとされ、翌年には未だ完成せずとの記載がありかなりの規模の塔であったことが知られる。その後、この東塔は寺の惣持所となり、何度も焼亡して鎌倉期の絵画資料でしかその様子を知ることしかできない。その構造は下層五間、上層方三間の龜腹を持たない二層塔として表現されている。安東、安北塔について『叡山大師伝』弘仁6(815)年記事には「向於東国 盛修功德 為其事矣 写二千部一万六千卷法華大乘經 上野下野兩國 各起一級宝塔 塔別安置八千卷 於其塔下 每日長講法華經 一日不闕」とあることから、建物は法華經の保管と長講が求められた施設であったことが知られる。

安西、安南塔については『石清水八幡宮文書之二』所収の「大宰府簿」承平7年(937)記事がある。「府簿 富崎宮 応令造立神宮寺多宝塔老基奉

藤 得千部寺備兼祐中状稱、謹案、天台伝教大師去弘仁八年遺記云、為六道衆生直入仏道榮顯、於日本國書寫千部法華經、建立六箇所宝塔、一一塔上層安置千部經王、下壇令修法華三昧、其安置建立之處、叡山東西塔、上野下野四、筑前應門山、豊前宇佐弥勒寺者、而大師在世及滅後、僅所成五地塔也、就中龍門山分塔、沙弥僧覚在俗之日、以去承平三年造立已成。上安千部經、下修三昧法、宛如大師本願、未成一如塔者、謂宇佐弥勒寺分也、伝聞、弥勒寺未究千部、書寫二百部之間、去寛平年中悉燒亡乎、爰末業弟子兼祐、奉歎大師遺誓之未遂、寸心発念、弥勒寺分經火滅之替、於首崎神宮寺、新書備千部、造一基宝塔、於上層安置千部、下壇令修三昧、以可果件願、然則始自承平五年、且唱於知識、令写經王、且選材木、搜置於彼宮辺已了、彼宮此宮雖其地異、權現菩薩垂迹猶同、仍以彼弥勒寺分塔、欲造立此神宮寺也、望請府裁、早欲造作宝塔、弘事之功徳、凡為鎮國利民也者、府判依調、官察之状、早令造立、将令遂本願、故據、

承平七年十月四日 大典惟宗朝臣(花押) 參議仲儀朝臣「公頼」

このことから筑前壺門山の宝塔は法華經の保管と三昧法の実施が求められた施設であったことが知られ、承平三（933）年にはすでに建立されており、その構造は二層式であったことまでが判明する。

今回検出された34SB001は塔の規模であれば筑前国分寺の30尺四方よりやや小さく、宇佐赤袴寺東塔18尺よりほかに大きな26.8尺四方のものである。塔以外の仏堂の可能性も否定はできない。河上信行氏の指摘によれば、この建物の平面は中間10尺、脇間9尺の完数により計画された三間堂と考えられ、規模としては五重塔でも醍醐寺五重塔より大きく、興福寺五重塔より若干小さい程度となる。塔であるなら基礎の痕跡や礎石の検出がでてよく、最澄がらみ時代のあれば心柱礎がでてよいことから塔の可能性は低いとされる。普通の三間堂と異なる要素としての基礎の有無、土間床の有無についての資料があれば塔の可能性について論じることができる、とされている。

多宝塔の一構造として高野山大塔や仁和寺観音院の塔例のごとく心柱が一層目天井から立てられる構造が知られており、心礎の不在が塔でないことにはならないようである。基礎にのぼる地山築形の段そのものが基礎であるとの解釈をしている。土間については今回の調査が表土直下での様相確認に止めたため、タタキのような硬化地面を認識するには至っていない。しかし、整形された面であることは確認され、その面は礎石の輪郭を被覆している。場合によってはこの検出面自体が土間であった可能性も考えられる。

一間四面の構造の仏堂は高野山真言堂、高野山奥院廟堂、法住寺法華堂・常行堂などが10世紀までに成立しており、天台においては法華三昧のための行堂として伽藍中に置かれる例がある。宝満山遺跡においてはこの10世紀は遺跡として空白の時代といえ、本遺構以外に山中に伽藍が大々的に展開した痕跡は指摘できない状況の中、ひとり三昧堂だけが山中にある姿は異様な観を呈している。

層塔でない初期の多宝塔に心礎が必要か否かは、平安前期における具体例が乏しい中において判明しにくい状況と言える。本遺構が多宝塔になりうるかと言う論議は現状では難しいのかも知れない。しかし、構造的には一間四面の身舎の志と軒の対角ラインの交点は完全に一致する構造であり、身舎の上層があった可能性は残されている。今回の悉皆調査の結果、10世紀前半に位置付けられる瓦所用の礎石建物のある箇所がここに限定されるようになったこと、この場が「宝塔」であるという伝承がかつてあったこと、などから、安西塔の比定地として最も有力の遺構と言える状況であろう。一間四面の三昧堂的な構造は、まさに「大宰府藤」の記載した「下修三昧法」の記述に似つかわしく、はるか支笏灘を通して大庭を見据えるロケーションの中、側面に壺門の山頂を背負った尾根に置かれた仏堂は、山中に孤としてありながらも目をかきさず法華三昧を励行した国境祭祀の場であったことを想像させるものである。

参考文献

- 『宝満山の地宝』小田富士雄編 1982年財団法人 太宰府顕彰会
- 「大宰府の造瓦工房と観世音寺の造瓦工房」栗原和彦『藤沢一夫先生卒寿記念論文集』2002年帝塚山大学考古学研究所
- 「多宝塔の初期形態について」浜島正士『日本建築学会論文報告集』第227号1975年
- 「多宝塔についての史的考察」清水擴『建築史学』第1号1983年
- 「九体堂と一間四面堂」清水擴『日本建築学会論文報告集』第207号1973年

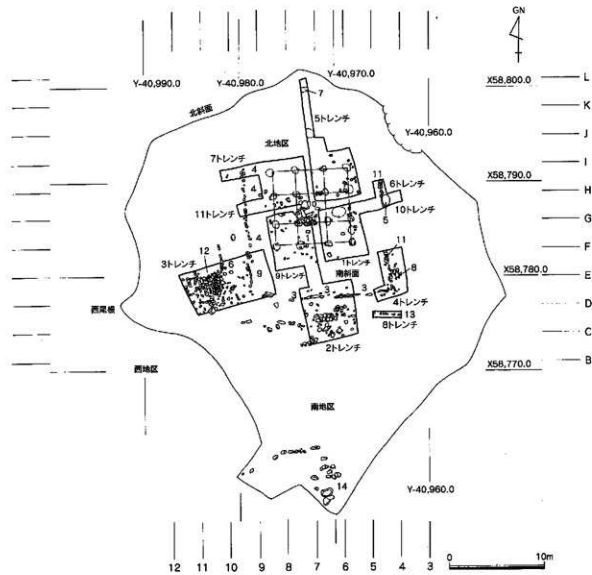


図.43 第34次調査略測図(1/400)

tab.5 第34次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	位置	備考
1	34SB001	礎石建物	1トレンチ	中心建物
2	34SX002	階段	2トレンチ	南階段
3	34SX003	列石	2,4トレンチ	南上段石列
4	34SX004	列石	3,7,11トレンチ	西列石
5	34SX005	瓦溜まり	5トレンチ	東側瓦溜まり
6	34SX006	列石	3トレンチ	西中段石列
7	34SX007	溜まり状	5トレンチ	北側区画施設?
8	34SX008	階段	4トレンチ	東階段
9	34SX009	列石	3トレンチ	西上段列石
10	34SX010	礎跡	1トレンチ	旧妙見祠基礎
11	34SX011	列石	4,6,11トレンチ	東列石
12	34SX012	階段	3トレンチ	西階段
13	34SX013	列石	2,8トレンチ	南下段列石
14	34SX014	階段	トレンチ外	南地区南階段

tab. 6 第34次調査 出土遺物一覧表

S-6		7.13才基土	
瓦	瓦 (須恵質、無文) (1) 丸瓦 (須恵質、二重斜格子) (1) 丸瓦 (土師質、斜格子) (1) 平瓦 (土師質、無文) (1)	土 師 器 類 a? a?	瓦 類 平瓦 (土師質、無文) (1)
S-7		8.13才	
瓦	瓦 (須恵質、無文) (1)	須 恵 器 類 a? a?	
1.13才表土		9.13才	
須 恵 器 類 a 押 a3		須 恵 器 類 器 f × d	
土 師 器 類 c		土 師 器 類 押	
2.13才表土		瓦 類 平瓦 (瓦質、斜格子) (2) 平瓦 (瓦質、無文) (1)	
須 恵 器 類 a2		10.13才	
土 師 器 類 押		土 師 器 類 c	
瓦	丸瓦 (土師質、無文) (1) 丸瓦 (須恵質、斜格子) (2) 平瓦 (瓦質、斜格子) (1) 平瓦 (須恵質、斜格子) (1) 平瓦 (瓦質、無文) (2)	瓦 類 丸瓦 (須恵質、不明) (1) 丸瓦 (土師質、斜格子) (1) 平瓦 (土師質、斜格子) (2) 平瓦 (土師質、斜格子) (8) 平瓦 (土師質、斜格子) (1) 平瓦 (瓦質、無文) (2)	土 師 器 類 土師土 (1)
3.13才表土		11.13才	
須 恵 器 類 a? 押 a3 器 b ~ f		土 師 器 類 a? a?	
土 師 器 類 a 押 c		瓦 類 平瓦 (須恵質、無文) (1)	
黒色土師土 器 b		表土	
瓦	丸瓦 (須恵質、無文) (3) 丸瓦 (須恵質、柳小格子) (3) 丸瓦 (土師質、不明) (2) 平瓦 (須恵質、無文) (2) 平瓦 (須恵質、小斜格子) (6) 平瓦 (土師質、斜格子) (1) (注) 丸瓦 (1) 舟形 (1) (舟) (1) 含む 平瓦 (土師質、無文) (5) 平瓦 (瓦質、二重斜格子) (1) (6) 平瓦 (瓦質、小斜格子) (9) 平瓦 (瓦質、無文) (2)	須 恵 器 類 a × c 押 a2 器	
4.13才表土		土 師 器 類 a × c 押 a? (舟) 丸底押 a 網 c	
土 師 器 類 押 c		黒色土師土 器 b 押 c	
瓦	丸瓦 (土師質、無文) (1) 平瓦 (須恵質、小斜格子) (1) 平瓦 (須恵質、無文) (1) 平瓦 (瓦質、斜格子) (3) 平瓦 (瓦質、無文) (1)	越州弘法寺遺跡 陶 1. 25 (1)	
5.13才表土		国 庫 蔵 籍	
須 恵 器 類 a 押		開口 (「大宰府天満宮第五千五百六号」蔵入) 透孔 (現代?)	
土 師 器 類 a 押 c		丸瓦 (須恵質、斜格子) (2) 丸瓦 (須恵質、柳小格子) (1) 丸瓦 (須恵質、無文) (1) 丸瓦 (須恵質、不明) (1) 丸瓦 (土師質、無文) (1) 丸瓦 (土師質、不明) (1) 平瓦 (須恵質、斜格子) (6) 平瓦 (須恵質、無文) (3) 平瓦 (土師質、斜格子) (1) (注) (舟) (1) 含む 平瓦 (瓦質、大斜格子) (1) 平瓦 (瓦質、二重斜格子) (1) 平瓦 (瓦質、無文) (1) (1)	
6.13才表土		甬 口 面	
瓦	丸瓦 (須恵質、柳小格子) (1) 丸瓦 (須恵質、二重斜格子) (1) 丸瓦 (須恵質、無文) (1) 丸瓦 (土師質、柳小格子) (1) 平瓦 (須恵質、斜格子) (4) 平瓦 (土師質、斜格子) (2) 平瓦 (土師質、無文) (7) 平瓦 (瓦質、斜格子) (6) 平瓦 (瓦質、二重斜格子) (1) 平瓦 (瓦質、無文) (6)	石 製 品 石鏡 A (1)	
		西尾段表土	
		黒色土師土 器 c	
		瓦 類 丸瓦 (須恵質) (1) 平瓦 (須恵質、小斜格子) (1) 平瓦 (土師質、斜格子) (1) 平瓦 (土師質、無文) (1)	
		北斜面表土	
		瓦 類 平瓦 (須恵質、小斜格子) (2) 平瓦 (土師質、小斜格子) (2)	

5 宝満山遺跡群第35次調査

(1) 調査に至る経緯

調査は前年度実施した32次調査に引き続き、宝満山西麓の遺跡分布および測量調査をおこなった。調査は平成20(2008)年2月1日～同年3月31日にかけて国庫補助事業として実施した。調査面積は300,000㎡である。

(2) 調査の概要

調査自体は大宰府市基本図(1/2500)No.3,5の図面の範囲を悉皆調査し、段造成などの人為行為による遺構を探し、簡易図化およびプロットするもので、宝満山山中において10箇所以上で段造成を主体とする遺構群が検出された。

遺構分布図は1/1000で記録したが、現地では既存の都市計画図の情報を下敷きに簡易GPS測量にて原点を設け、国土地院第11座標系により遺構の位置を記録する方法をとった(詳細IV章記述)。

(3) 検出遺構

山中での踏査は対象地区を大宰府市基本図(1/2500)No.3と5について、それぞれ便宜的に東西をA～Hの8区、南北を1～5の5区に分けて記録や遺物の収拾をおこなった。以下に特に所見がある箇所について列挙する。

基本図No.3

B-4区 宝満32次B-1-a, C-1-c地点の北側部分で、石組群が展開し古代末から中世前期頃の墓域と理解される。西隣地の北谷ダムに伴う道路部分では宝満14次として調査している。

基本図No.5

A-2, B-2区 内山字大門の南側にある「ニシヤマ」と呼ばれる丘陵に形成される段造成群。丘陵両側での発掘調査により古代末から中世の坊跡が発見されており、それとの関連がある遺構群と考えられる。A-2地点では西側の丘陵頂部に礎石のような石材が見られ、西斜面には近世以降の炭窯も存在する。

B-2地点側の丘陵頂部には石組を用いたマウンド状の遺構が、南東側の段造成状に小規模な石組などがある。

C-1, 0-2区 内山集落背面の小山池前面の西斜面(C-1区)とその南隣の字山ノ内(C-2区)にある段造成群。後者は伝仲成坊跡とされる西に大きく張り出す丘陵に連なる。土師器小片が散見され、古代末から中世前期頃の坊跡の可能性がある。

F-1区 標高435mの愛嶽(おたけ、おだけ)山頂にある愛嶽神社周辺の段造成群と、その西南にある標高432mの別峰にある伝升形城に係る段造成群である。神社境内には東西にその軸が求められ、西から従って高まる4段構成を採っている。参道の北と南の斜面にも小規模な段造成が見られる。伝升形城跡は愛嶽山頂からの尾根にも平坦面と2条の堀切を持ち、頂部平坦面から南東側に延びる尾根にやや広めの帯状の空間をつくり出している。全体の平面形状は愛嶽山頂と一体で矩形的造成群を呈している。

G-1区 愛嶽神社周辺の段造成群から連なる東西に長い平坦面で、近世の磁器、陶磁器が散在する。宝満二十五坊の内の財行坊の推定地に相当する。

(4) 出土遺物

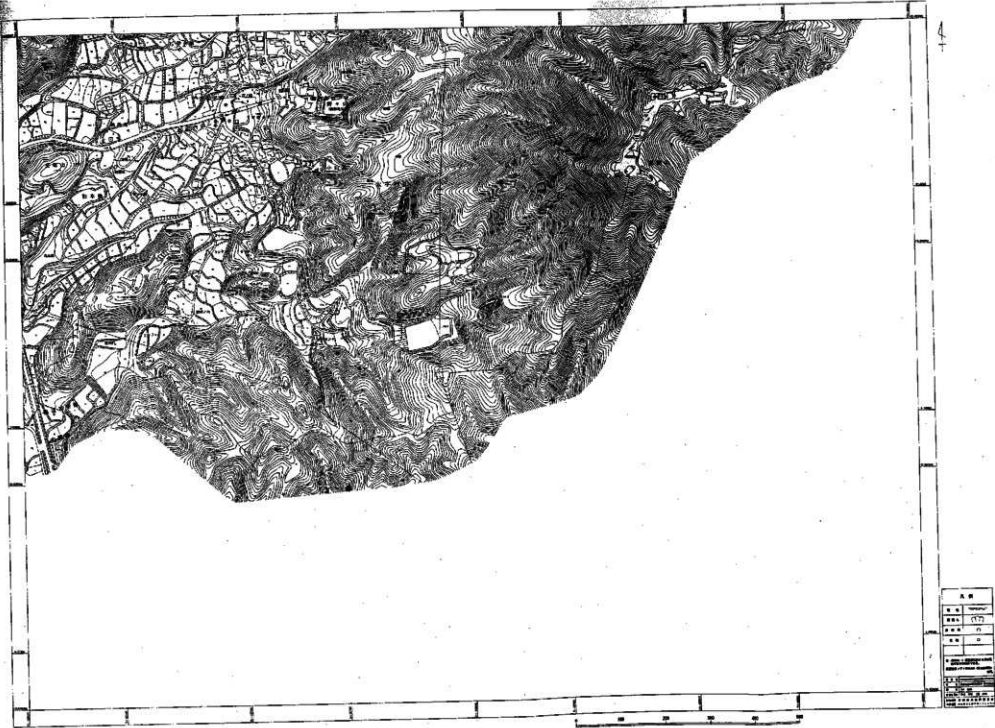


Fig. 44 第35次調査基本図5遺構分布図 (1/6000)

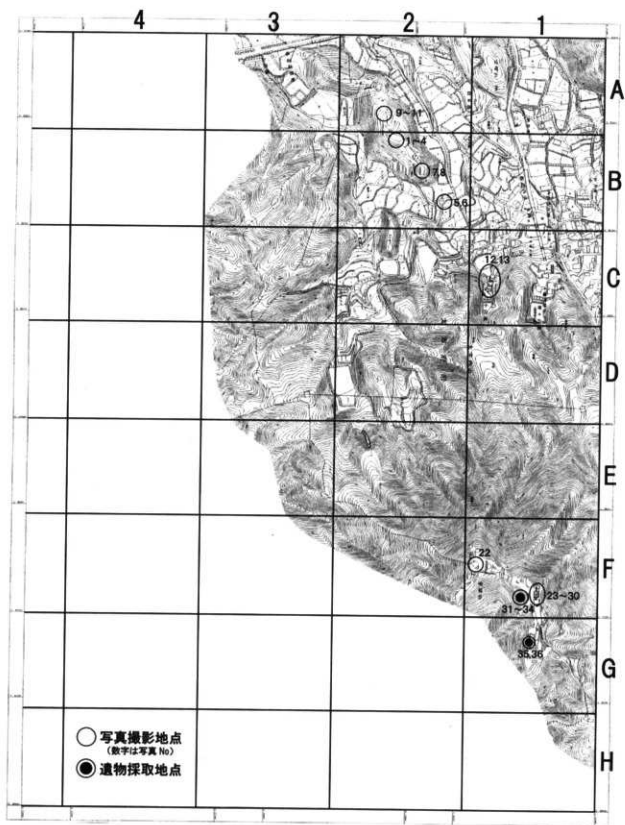


fig. 46 第35次調査基本図5割付図

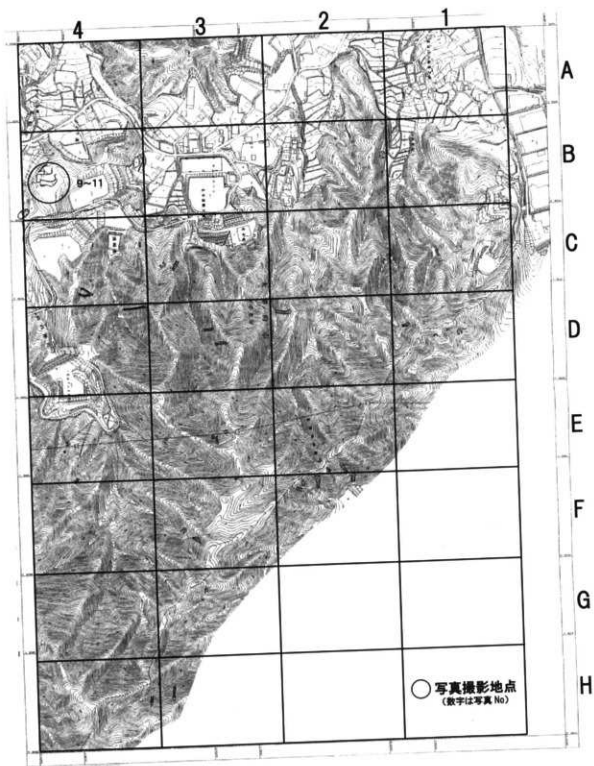


fig. 47 第35次調査基本図3 割付図

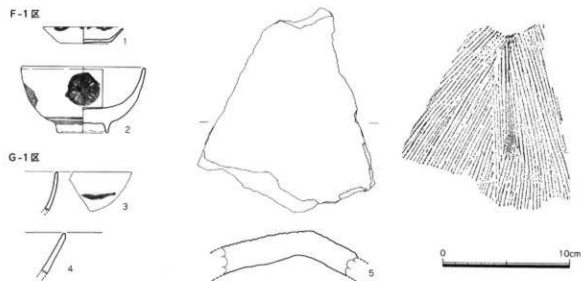


fig. 48 第35次F-1区、G-1区出土遺物実測図(1/3)

F-1区出土遺物 (fig. 48, pla. 1 ~ 3)

土師器

小皿 (1) ごく薄手で硬質に焼かれたもので、底部は糸切り。口縁端部に油煙が黒く付着し、灯火具として使用されたもの。近世の所産か。

肥前系染付磁器

碗 (2) 体部の丸い形状を呈すもので、外面に車輪状のコンニャク印をあしらっている。17世紀後半の所産と考えられる。

G-1区出土遺物 (fig. 48, pla. 1・2)

肥前系染付磁器

碗 (3) 丸碗になるものと思われ、体部外面に呉須による彩色がある。近世後期の所産と考えられる。国産陶器

碗 (4) 直線的に開く口縁端部の小片である。産地などは不明。

家形製品 (5) 屈曲する板状の製品で、表面はハケ状の工具により粗いカキ目が施される。光沢のある褐色の釉薬が施される。小祠の屋根の稜線にあたる部分と思われる。宝満38次で大甕の形状を利用した同様の製品が採取されており、参考になる。

(5) 小結

基本図No. 3については、B-4区以北には地形的には緩やかな斜面や、見晴らしのある一定の尾根などはあるものの、顕著な遺構を発見することができなかった。B-4区は北谷地区の中心的な初期の墳墓群と考えられ、なんらかの保護が望まれる。

基本図No. 5については、内山地区の南側に広がる西に傾斜する緩斜面があり、現在は耕作地となっているが、この個所は本報告の39次に見られるように、谷の底まで平安後期以降の生活域として機能していた場所である。小山池西側や山ノ内などの山裾ぎりぎりまで人為的な段造成群が存在することが明らかになった。

また、愛嶽山頂域は愛嶽神社境内の東側と南側に南北300m、東西300mの範囲でコ字に展開する造成群がある。前者は近世遺物の分布が認められ、宝満二十五坊中の財行坊のあった場所と考えられる。



fig. 49 愛嶽神社周辺の段造成 (1/4000 下高 2008)

長辺 30m、短辺 14m の方形に近い中心的な平坦面があり、それを囲むように周辺の尾根も方形に成形されている。後者は中世山城の升形城に比定されている。南北 180 m、東西約 50 m が造成群となっている。愛嶽神社側から下った尾根の鞍部は里道が抜ける堀切状になっている。堀切は頂部北側直下にもうがたれている。近年、下高大輔による詳細な縄張り図が公表されている。また、氏は『古戦場古城之図』（内閣文庫大倉喜太郎献納本）に記載される「三笠郡吉木村龍城古址ノ図」が、ここを描いたものと指摘しており、江戸後期には「龍城」の呼称があった可能性に言及している。

参考文献

「太宰府市所在愛嶽神社周辺段造成の歴史的位置付け」下高大輔『大宰府学』第 2 号 2008 年

tab. 7 第 35 次調査 出土遺物一覧表

基本図 5F1 区 ①	18c 後半
肥前系陶磁器 丸椀	

基本図 5G1 区 ①	近世～
国産陶器 皿?(透明釉)	

基本図 5F1 区 ②	
国産陶器 家形製品(屋根)	

基本図 5G1 区 ②	18c 後半～
肥前系陶磁器 丸椀	

基本図 5F1 区 ③	近世?
土師器 小皿 a(什)	

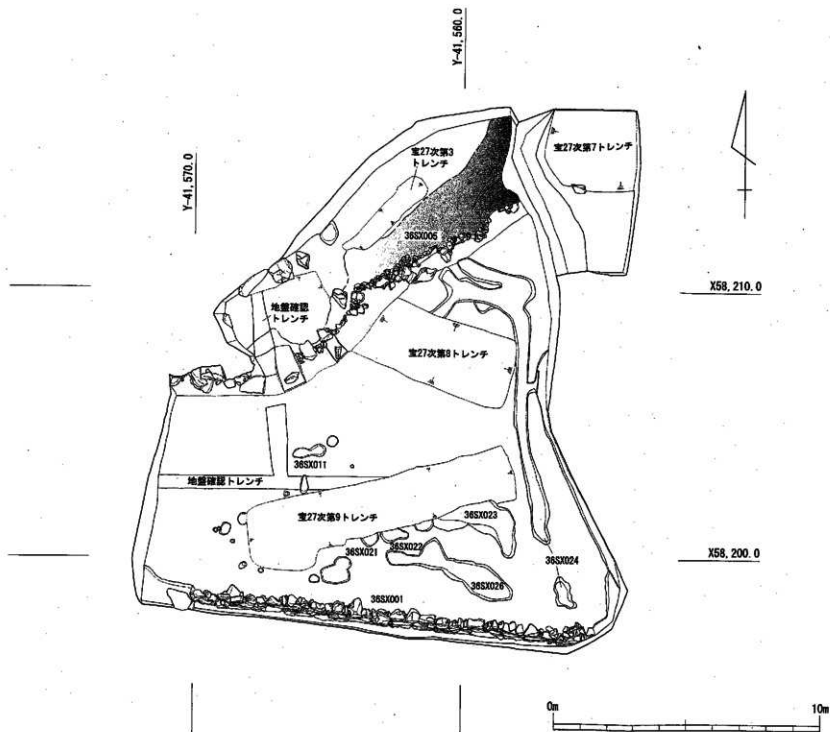


Fig. 50 第36次調査1区遺構全体図 (1/100)

6 宝満山遺跡群第36次調査

(1) 調査に至る経緯

本調査は、農地改良工事に伴う国庫補助事業である。調査地は龜門神社の南西側に位置する谷地形部分である。本調査地の南側隣接地を宝満山遺跡群第24次調査、北側と東側隣接地を第27次調査として過去に発掘調査を実施している（太宰府市教育委員会 2004）。

今回の調査は、記録保存を目的に第36次調査として平成20（2008）年1月21日～同年3月26日において実施した。開発対象面積は479.4㎡・調査面積は243㎡である。調査は下高大輔が担当し、整理は遠藤茜が行った。報告文は、下高の原稿を元に遠藤が修正を行った。

(2) 調査の概要 (Fig64, 65, pla.11・12)

調査地は休耕田で、三段の段造成（以下、「上段・中段・下段」とする）からなっている。上段は平坦面部分とこれを形成する石積み（SX005）で構成された斜面を調査対象とし、中段は平坦面部分とこれを形成する石垣（SX001）を調査対象とした。下段は中段を形成する石垣（SX001）の基底部を確認できる幅約0.5m強でトレンチ状に淡灰色粘土層直上（第二調査面形成土）までを確認した。なお、上・中段には第27次調査トレンチが合計5本入れられていた。

上・中・下段における基本層位は、上位から休耕田に伴う0.5m程度の灰色土・茶灰色土、床土と考えられる0.2m程度の淡灰色土が堆積する。これらを重機により除去してから、第一調査面を設定して人力による遺構検出を行った。この時点までに出土した遺物はすべて「表土」として取り扱っている。なお、これより下層については上・中・下段共に様相が異なることと、各段を形成する盛土に遺構番号を付したために、次節において調査面毎に遺構番号に沿って詳述する。

(3) 検出遺構

調査面は最終面である自然の谷地形を含めると三面存在する。以下、それぞれの調査面毎に主要な遺構と次節において遺物を報告している遺構を中心に詳述する。それ以外に関しては「遺構略測図」・「検

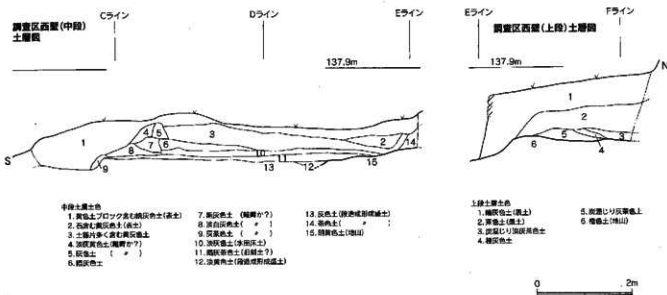


fig. 51 第36次調査区西壁土層図 (1/80)

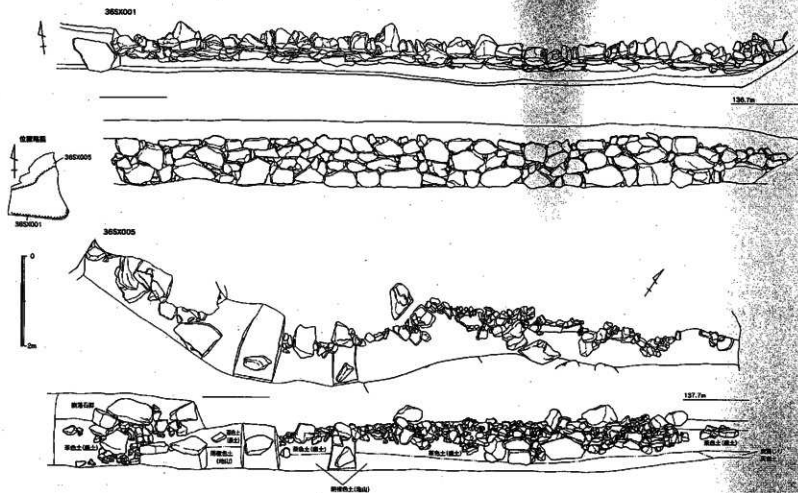


fig. 52 36SX001・005 透視測圖 (1/60)

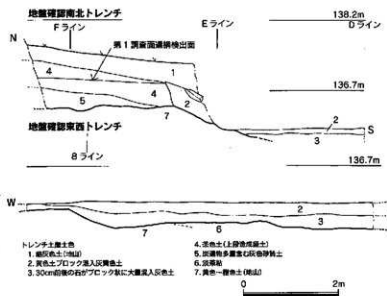


fig. 53 第36次1面地盤確認トレンチ土層図 (1/80)

石である拳から人頭大の石が大量に投入されており、その上に盛土 (SX010・015・030・035として後述) することによって石垣天端の高さに合わせた段を形成している。なお、栗石は中段全面において確認することができた。このことは、栗石自体が単に石垣の一部を形成するものではなく、当地が元々谷地形であったことから水処理を行うための暗渠としての役割も同時に担っていたものと考えられる。石垣裏込めより肥前系磁器広東碗が出土しており、18世紀後半～19世紀前半頃に構築された石垣と考えられる。また、石垣の基底部を確認するために、調査区下段を幅0.5m程度で淡茶色粘土層直上(第2調査面形成土)まで掘削した。この結果、石垣は基本的に淡茶色粘土層で形成されている平坦面上に基底石を設置して構築されていることが判明した。なお、下段の遺構面は宝満山遺跡群第24次調査において一部の淡茶色粘土層と地山に遺構が切り込んでいることが確認されている(太宰府市教育委員会2004)。このことから、この層の上層(上位から暗灰土・灰茶色土・淡灰色土)はすべて休耕田に伴う土層と判断し、出土遺物は「S-1下 表土」として取り上げている。なお、淡灰色土中にはプラスチック製品が含まれていたことから休耕田に伴う土層であることを裏付けている。

36SX005 (fig. 52, pla. 9・10)

調査区上段を形成する南西から北東方向で南北に段差を設けることを目的に構築された石積みである。高さは最も高い場所で1.5mを測り、拳大から人一人では運ぶ事のできない石までが大きさ関係なく乱積みされている。背面は石垣(SX001)にみられるような栗石はなく、盛土(SX020として後述)に貼り付けたような積み方である。石積み(SX005)に伴う出土遺物は13世紀後半が主だが、石積み下段形成過程とその連続性を勘案すると石垣(SX001)と同時期の可能性も捨てきれない。

2. 中段第1調査面形成の盛土

36SX010・015・030・035

SX010は調査区中段ほぼ中央付近で検出した灰黄色土に黄色土がブロック状に混入したものである。これに切られた形でSX015を検出した。これは茶色粘質土に黄色土がブロック状に混入しているものである。さらにSX015に切られた形でSX030(淡灰茶色土に黄色土がブロック状に混入)とSX035(暗灰色土)を検出した。これらはすべて、先述のSX001石垣の栗石を覆うように堆積しており、切り合い関係から

出遺構一覧・「山上遺物一覧」などを参照された。

第1調査面検出遺構

第1調査面は基本的に調査区の上・中・下段における休耕田に伴う土層を重機により除去したところに設定した。

1. 石垣・石積み

36SX001 (fig. 52, pla. 6～8)

調査区中段を形成する東西方向で南北に段差を設けることを目的に構築された石垣である。高さ0.7m前後で、間詰石がある丁寧な野面積みである。石垣背面は栗

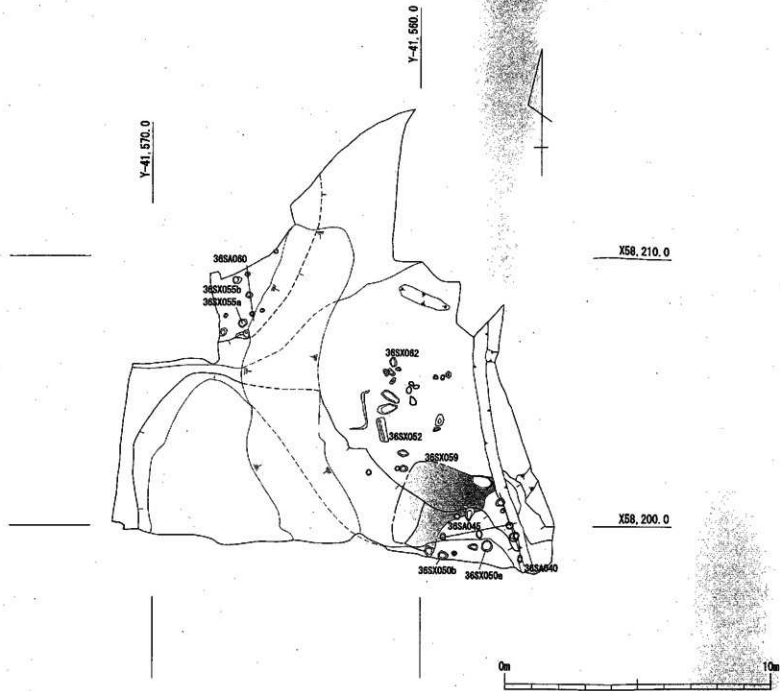


fig. 54 第36次 2面遺構全体図 (1/100)

SX030・035を被せて、SX015、SX010と続けて被せられたものと考えられる。出土遺物から明確な時期差はなく、基本的には盛土造成の際の被せた単位と考えられる。時期は石垣 SX001 が構築された直後である 18 世紀後半～19 世紀前半頃と考えられる。さらにこれらの検出場所とその範囲から、調査区中段形成の盛土は西側尾根上から流し込まれた可能性が高い。

3. 上段第 1 調査面形成の盛土 (SX020・025)

休耕田に伴う暗灰色土を重機により除去した結果、先述の石積み SX005 の天端の高さで平坦面を形成しているのが SX020 (茶色土) である。この直上において遺構検出を行ったが、全く遺構は確認できなかった。そのため、重機で除去した休耕田に伴った盛土の可能性が高い。なお、遺構検出の際の山上遺物は「茶色土」として取り上げている。よって「茶色土」と「SX020」は同一である。また、石積み SX005 と盛土 SX020 を除去すると炭を多く含む灰色砂質土 (SX025=032) が標高の高い方から低い方に向けて堆積していた。念のために、その直上においても遺構検出を行ったが、遺構は確認できなかった。このため、上側から流れ込んだ自然堆積土の可能性が高い。なお、SX020・025 共に 12 世紀後半代の遺物がまどまど出土している。しかし、少なくとも SX020 については石積み SX005 と共に構成されている段造成の利用目的や調査区中段の形成過程などを勘案すると、18 世紀後半～19 世紀前半頃の盛土の可能性もすてきれない。

4. 現代の溝

36SX024

調査区中段の東側においてほぼ南北走行で蛇行する形で検出した。幅 0.5m 程度・深さ 0.2m 程度で、断面形状は V 字を呈する。埋土は二層に分層でき、上層は明灰色土で、下層は淡灰色砂質土からなる。下層埋土からはビニールなどのプラスチック類が出土していることから、現在の休耕田に伴う溝と考えられる。この溝は谷地形に流れ込む水を処理するために掘削されたものと考えられ、調査中においても常に水が流れていた。この溝の底部は拳大の石が粗く敷き詰められており、水による浸食を防ぐ目的があったものと考えられる。

5. その他の遺構

36SX006 (fig. 64)

調査区中段 SX001 の北に隣接して検出した落ち込み状の遺構。埋土は黄色ブロックを含む淡灰色土。出土遺物からの下限は 12 世紀後半だが、第 1 調査面を形成する整地、あるいは SX001 の裏籠めの一部の可能性もある。

36SX011

調査区のほぼ中央で検出した落ち込み状の遺構。東西長 1.25 m、幅 0.2～0.45m、深さ 0.18 m。埋土は灰色土。遺物より時期は 12 世紀。

36SX021

調査区南側ほぼ中央で検出した落ち込み状の遺構。北側を 27 次調査第 9 トレンチに切られる。径約 0.55 m、深さ 0.13 m。埋土は灰色土。

36SX023

調査区中段南東側で検出した不定形の遺構。北側を 27 次調査第 9 トレンチに切られる。現状で長さ 2.6m、幅 0.45～2.4 m、深さ 0.1～0.19 m を測り、南東側ほど浅い。遺物より時期は 12 世紀前半。

36SX026

調査区中段南東側、27 次調査第 9 トレンチ南側で検出した。東西に長い不定形の落ち込みあるいは

たまり状の遺構。全長4.9m、幅0.5～1.2m、深さ0.04～0.1m。遺物より時期は12世紀。

36SX027

調査区中段南東で検出した。不定形な落ち込みあるいはたまり状の遺構。南北長1.25m、最大幅0.6m、深さ9～21cmを測り南側ほど浅い。

36SX029

調査区中段南東側でSX024の東側に隣接して検出した落ち込み状の遺構。西側をSX024に切られる。埋土は暗灰色土。遺物より時期は13世紀後半と考えられる。

第2調査面検出遺構

第2調査面は上段の盛土・包含層(SX020・025)、中段の盛土(SX010・015・030・035)を除去したところに設定した。この結果、調査区北西隅に上段、調査区の中央付近から東隅にかけて中段、調査区の南隅に沿って下段の三段を確認した。なお、下段は宝満山遺跡群第24次調査の遺構面と連続する関係にある。後述の主要な遺構は上段と下段で検出した。中段に関してはピット群と落ち込みを検出したのみである。

1. 櫓

36SA040 (fig. 55, pla. 14)

調査区南東隅で検出した。北北西から南南東方向で谷地形に制約された形で構築されていた櫓である。二間分を確認したが、調査区南外に続いている可能性もある。各ピットの規模は直径0.3m程度の円形であり、深さは0.3～0.5m程度である。ピット間は0.85～1.35mと不統一である。埋土はすべて暗灰色土である。位置関係や埋土の状況から後述するSA045と連続していたものと考えられる。出土遺物から13世紀後半頃と考えられる。

36SA045 (fig. 55, pla. 14)

調査区南東隅で検出した。西南西から東北東方向で先述のSA040に対して垂直に構築されていた櫓である。二間分を確認したが、調査区南外に続いている可能性もある。各ピットの規模は直径0.3m程度の円形であり、深さは0.2～0.4m程度である。ピット間の距離は1.2～1.9mと不統一である。埋土はすべて暗灰色土である。位置関係や埋土の状況から先述のSA040と連続していたものと考えられる。出土遺物から13世紀後半頃と考えられる。

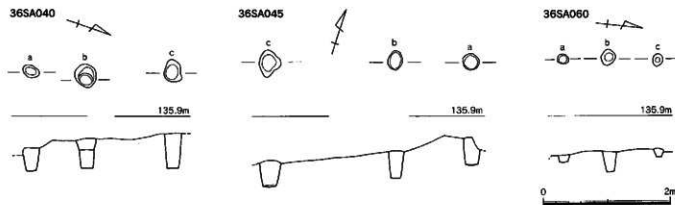


fig. 55 36SA040・045・060 遺構実測図 (1/60)

36SA060 (fig. 52, pla. 15)

調査区北西隅で検出した。若干歪に振れているがほぼ南北方向で二間分確認した。調査区北外に続いている可能性もある。各ピットの規模は直径0.2m強程度の円形であり、深さは0.1～0.3m程度である。ピット間の距離は0.7m。埋土はすべて淡茶色土である。出土遺物から13世紀後半頃と考えられる。

2. その他の遺構

36SX042

調査区南東で検出した。落ち込みあるいは近世盛土の一部と考えられる。埋土は灰色土。

36SX050a・050b

調査区南東隅、櫓SA045の南側で検出した。各ピットは直径0.3～0.4m、深さ0.3～0.6mを測り円形を呈する。ピット間の距離は1.7m。埋土はすべて暗灰色土である。調査当時、北隣の櫓SA045と東隣の櫓SA040らの方向や位置関係、埋土の近似などから、櫓に囲まれた掘立柱建物である可能性が考えられていたが、積極的には断定し得ないため本報告ではその他の遺構として取り扱う。SA040・045とほぼ同時期に機能・廃絶した可能性も考えられ、出土遺物から13世紀後半頃と考えられる。

36SX051

調査区中段東側で検出したピット群。直径0.15～0.3m、深さ0.04～0.1mで、埋土は暗灰色土。

36SX052

調査区中段東側で検出した。落ち込みあるいはたまり状の遺構。南北長0.9m、幅0.3m、深さ0.11～0.18mを測る。埋土は暗灰色土。

36SX055a・055b (pla. 15)

調査区北西隅、櫓SA060の西側で検出した。各ピットは、直径0.3m強、深さ0.1～0.3mの円形を呈する。ピット間の距離は1.6mを測る。埋土はすべて暗灰色土である。調査当時、東隣の櫓SA060の方向や位置関係などから、SA060と併存する掘立柱建物の可能性が考えられたが、積極的には断定し得ないためその他の遺構として取り扱う。出土遺物から13世紀後半頃と考えられる。

第2調査面形成の盛土・包含層

36SX059 (pla. 16)

調査区の南東隅で検出した。第2調査面を形成する淡茶粘土を挟り込むような地形を期めた可能性のある盛土と判断した。この挟り込みは先述の櫓SA040・045、掘立柱建物SB050の立地から、これらを建てるために削り込まれて、櫓・掘立柱建物が廃絶して埋められた可能性がある。よって、出土遺物は13世紀後半頃でままとまっているが、その後の大規模な土地利用の改変である江戸時代後期の可能性もすてきれない。

淡茶色粘土

第2調査面を形成していた遺物包含層である。宝満山遺跡群第24次調査においても一部検出されて、基本的には鎌倉期の遺構が切り込まれている面を形成している。奈良・平安時代の遺物が大量に包含されており、北東側に位置する龍門神社に関する遺物が土砂と共に谷地形に流れ込んだか、流し込まれた可能性が高い。

第3調査面検出遺構

谷地形 (fig. 56, pla. 19・20)

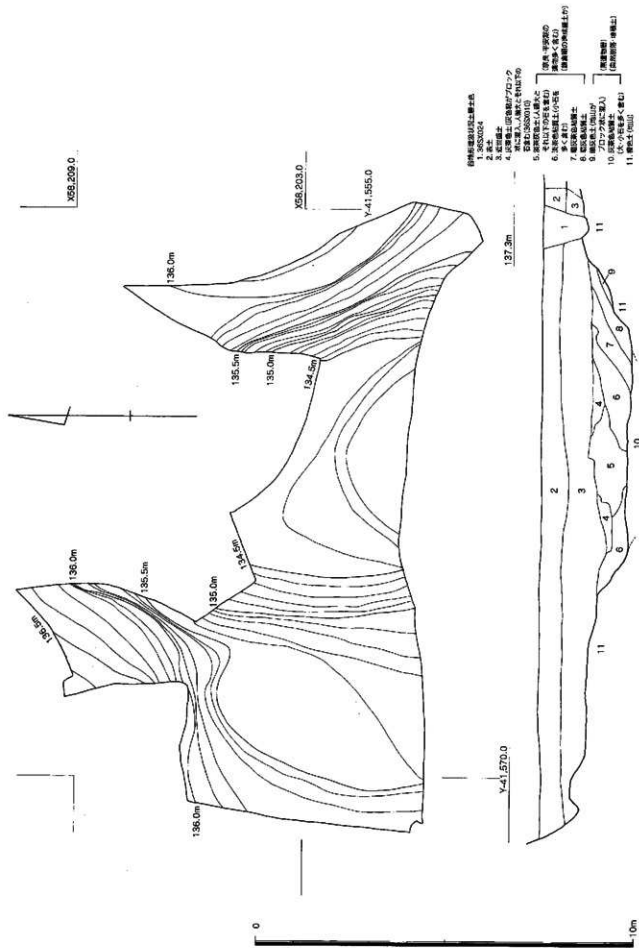


fig. 56 第36次3面谷地形測量図 (1/100)

第2調査面を形成する堆積厚1m程度の淡茶色粘土と自然崩落土を除去すると、竈門神社から南向方に開く谷地形を確認した。上述の淡茶粘土(5~7層)が谷を埋めるように堆積する。

(4) 出土遺物

供膳具の法益については一覽表を参照いただきたい。

第1調査面

36SX001 灰色土出土遺物 (fig. 57, pla. 21・22)

七師器

坏 a(1) 内面内部と底部の境はやや不明瞭。体部内外面に回転ナデ、底部内面中央に不定方向のナデを施し、底部外面に回転糸切り離し痕と板状圧痕がある。にぶい橙色を呈する。

小皿 a(2) 内外面回転ナデ、底部内面に不定方向のナデ、外面に回転糸切り離し痕と板状圧痕がある。焼成良好、にぶい橙色を呈する。

36SX002 下表土出土遺物 (fig. 57, pla. 21・22)

土師器

脚(3) 盤などの脚で、幅3.3cm、残存高3.7cmを測る。全面にナデの痕跡がある。白橙色を呈する。

瓦

平瓦(4) 現状で縦1.0cm、横9.2cm、厚さ2.0cmを測る。凹面に布目痕、凸面には格子目叩き(z-cc)が見られる。淡白灰色を呈する。

36SX006 出土遺物 (fig. 57, pla. 21・22)

土師器

坏 a(5) 全体的に摩耗するが、体部内外面に回転ナデ、内面底部よりに指頭圧痕が見られる。底部回転糸切り離しか。淡橙灰色を呈する。

小皿 a(6) 内外面回転ナデ、底部外面に回転糸切り痕がある。焼成良、にぶい橙色を呈する。

36SX010 出土遺物 (fig. 57, pla. 21~24)

土師器

坏 a(7) 内面は摩耗が著しく調整不明瞭。体部外面に回転ナデ、底部外面に切り離し後ナデ調整を施す。焼成不良、黄茶褐色を呈する。

小皿 a(8-9) 8は全体的に摩耗が著しいが、内面内部と底部の境に沈線を施す。底部へら切り離しか。焼成不良、淡黄橙色・研茶灰色を呈する。9は内外面ともに摩耗が著しい。底部切り離し不明。胎土に3mm以下の茶褐色粒子を多く含む。焼成不良、淡黄橙色から淡橙色を呈する。

須恵器

壺(10) 復元底径11.8cm、残存高7.0cmを測る。外面回転ナデ後一部縦方向にナデ、内面に粗いナデを施す。焼成良好、暗青灰色を呈する。

肥前系染付磁器

広東碗(11) 復元底径5.6cm、残存高2.8cmを測る。壺付を除き全面施釉し、外面に呉須で絵付けする。素地は灰白色で密、釉はかすかな青みをもつ白色、呉須は淡い群青色を呈する。

皿(12・13) 12は器高3.85cmを測る。全面にうすく施釉し、壺付の釉は掻き取る。呉須で内面に松、外面に草花文を描く。素地はやや青みのある白色で密、釉はかすかに緑を帯びたうすい青色、呉須はうすい紺色。13は残存高2.0cmを測る。壺付の釉を掻き取り、内側に剥離材の白色砂粒が附着している。

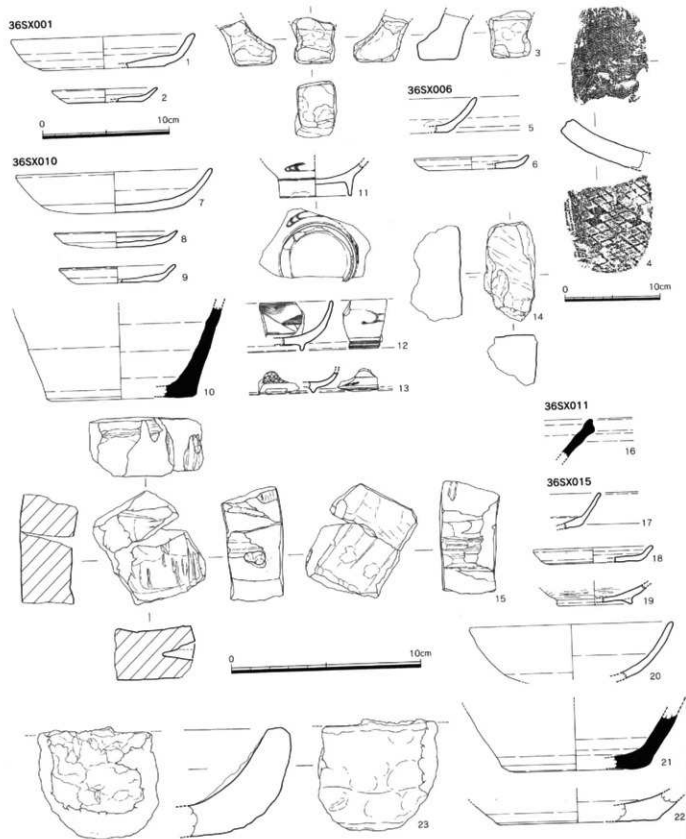


fig. 57 36SX001・006・010・011・015 出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

呉須で内面に水裂文、外面に花卉文を描く。素地は白色で密、釉はほぼ透明、呉須は濃い紺色。

土製品

土壁 (14) 土壁の一部で、現状で縦7.9cm、横4.0cm、厚さ4.1cmを測る。3面のうち2面は、平坦に整形され、にがい橙色を呈する。もう1面は淡白橙色を呈する。胎土は粗く3mm以下の白色砂粒を多く含む。やや軟質。

石製品

滑石製加工品 (15) 滑石の加工品である。縦6.0cm、横3.1cm、厚さ2.7cmを測る。側面には2回の穿孔孔が見られる。穿孔の切り合いは、小(深さ8mm)に次いで大(深さ11mm)の順で、断面はそれぞれ円錐形をなす。使用した工具の先端部は直径2mm程度と考えられる。

36SX011 出土遺物 (fig. 57, pla. 23・24)

須恵質土器

鉢 (16) 東播系鉢の口縁部の破片で、残存高3.0cmを測る。内外面回転ナデを施す。焼成良好、灰色を呈する。口縁部外面は暗灰色、他は灰色を呈する。

36SX015 出土遺物 (fig. 57, pla. 25・26)

土師器

坏 a (17) 内外面とも摩耗し調整は不明瞭。焼成不良で、淡白橙色を呈する。

小皿 a (18) 内面は摩耗が著しいが、体部外面は回転ナデ、底部外面には回転糸切り痕と板状圧痕が見られる。暗茶灰色を呈する。

黒色土器 B

椀 c (19) 復元底径6.0cm、残存高1.3cmを測る。全体的に摩耗するが、体部内外面にミガキcが確認できる。黒色を呈する。

瓦器

椀 (20) 復元口径16.0cm、現状で器高4.4cmを測る。内外面とも摩耗が著しく、調整は不明瞭である。焼成不良、暗灰色を呈する。

須恵質土器

こね鉢 (21) 復元底径11.8cm、残存高5.0cmを測る。内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ後底部付近を除きナデを施す。焼成良好で、灰色を呈する。

中国陶器

鉢 (22) 復元底径13.0cm、残存高2.1cmを測る。内面は使用により表面滑らか。体部外面は回転ナデ後ナデが施される。胎土は淡茶褐色で、1mm以下の白色砂粒を多く含む粗い。焼成良好で、外面は茶灰色、内面は灰色を呈する。

土製品

とりべ (23) 現状で器高5.7cmを測る。全体を手づくね成形する。内面全体に青緑色の流動物が付着し、口縁部では赤褐色を呈しガラス質。外面は淡黄白色で、口縁部がやや黒化する。

36SX020 出土遺物 (fig. 58, pla. 27・28)

土師器

小皿 a (1~3) 1は胎土に1.5mm以下の白色砂粒を多く含む。内外面とも摩耗が著しく調整・切り離しは不明瞭である。焼成は不良で橙色を呈する。2は体部内外面に回転ナデ、底部外面に回転糸切りの痕跡と板状圧痕が見られる。焼成は良好で淡白黄橙色を呈する。3は全体的に摩耗が著しく調整痕跡は不

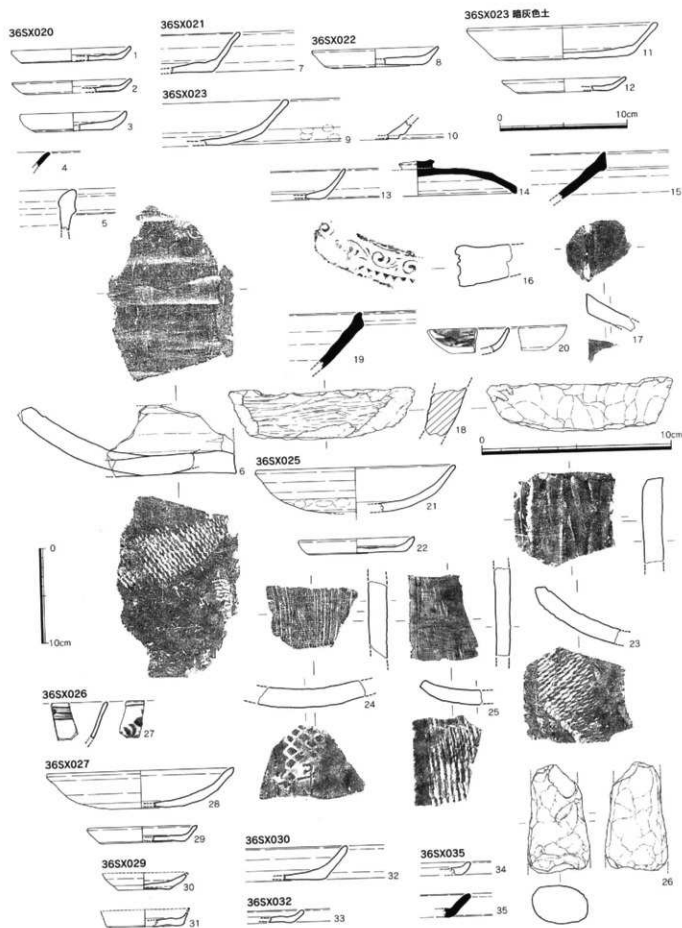


fig. 58 36SX020・021・022・023 暗灰色土・024・024 淡灰色砂・025・026・027・029・030・032・035 出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

明瞭だが、底部は回転ネ切りと考えられる。焼成はやや不良、にぶい淡褐色を呈する。

須恵器

坏 (4) 口縁部の破片で、現存高 1.2cm を測る。内外面とも回転ナデを施す。胎土密、焼成良で灰色を呈する。

中国陶器

壺 (5) 口縁部の破片で現存高 3.3cm を測る。内外面とも回転ナデを施す。口縁部は外側に折り曲げて外面口縁下に断面三角形の突帯を巡らせ、突帯直下に沈線を施す。また、内側は玉縁状に整形する。胎土は白黄灰色で密、1mm 程度の白色砂粒を少量含む。焼成は良好、外面は暗紫灰色を呈し、内面に降灰する。

瓦類

平瓦 (6) 現状で縦 14.0cm、横 19.5cm、厚さ 2.0cm を測る。凹面に布目および模骨痕を有する。凸面には縄目叩きの後ナデが、側片端部にはケズリによる面取りが施される。胎土は密で、白色砂と炭化物粒子を含みきめ細かい。焼成良好、灰色を呈する。

36SX021 出土遺物 (fig. 58, pla. 29・30)

土師器

坏 a (7) 現状で器高 3.1cm を測る。体部内外面に回転ナデを施す。底部外面に回転ネ切りの痕跡と板状圧痕が残る。内外面ともに体部は黄褐色、底部は灰色を呈する。

36SX022 出土遺物 (fig. 58, pla. 29・30)

土師器

小皿 a (8) 口縁から体部外面にかけて回転ナデ、底部外面にネ切り痕が見られる。胎土に微細なウソモ粒を多く含む。焼成良、淡橙茶褐色を呈する。

36SX023 出土遺物 (fig. 58, pla. 29・30)

土師器

丸底坏 a (9) 内外面とも摩耗が著しく調整不明瞭。体部外面屈曲より下には指頭圧痕が見られる。焼成不良、淡褐色から茶褐色を呈する。

坏 a (10) 底部の小破片。内外面摩耗のため調整不明瞭。内面淡黄茶褐色、外面暗茶褐色を呈する。

36SX023 暗灰色土出土遺物 (fig. 58, pla. 29・30)

表土剥ぎ時の耕作土出土の遺物である。

土師器

坏 a (11) 底部外面に回転ヘラ切り痕と板状圧痕が認められる以外は、摩耗のため調整不明瞭。焼成良、淡橙褐色を呈する。

小皿 a (12) 内面は摩耗のため調整確認できない。口縁から体部外面に回転ナデ、底部外面に板状圧痕が見られる。焼成良、淡橙茶褐色を呈する。

36SX024 出土遺物 (fig. 58, pla. 29~32)

土師器

坏 a (13) 器高 2.3cm を測る。全体的に摩耗する。体部内外面に回転ナデを施す。焼成良、橙褐色を呈する。須恵器

蓋 c3 (14) 器高 2.65cm を測る。つまみは完存し、径 2.6~2.7cm。内外面に回転ナデ、天井部内外面に不定方向のナデを施す。焼成良、淡灰色を呈する。

鉢(15) 残存高3.6cmを測る。内外面に回転ナデを施す。焼成良、内外面青灰色を呈し、口縁部外面は自然釉が付着し暗青灰色を呈する。

瓦類

軒平瓦(16) 湯瀧館式軒平瓦。現状で縦6.0cm、横11.5cm、厚さ3.5cmを測る。全体的に摩耗する。瓦当の范が上方にずれ、上外区の珠文が全く見られない。焼成不良、淡灰色を呈する。

平瓦(17) 現状で、縦5.8cm、横5.1cm、厚さ1.55cmを測る。凹面はナデ、凸面・側片はケズリにより表面を整える。胎土はやや粗く、0.5mm以下の白色砂粒、2~3mm大石英粒、微細なウンモ粒を含む。焼成良、暗灰色を呈する。

石製品

石鍋(18) 滑石製石鍋の銅部片。厚さ1.6cmを測る。内面に横方向の筋状の加工痕、外面にノミ痕が見られる。

36SX024 淡灰色砂出土遺物 (fig. 58, pla. 29 ~ 32)

須恵器

鉢(19) 残存高4.4cmを測る。内外面に回転ナデを施す。焼成良好、灰色を呈する。

肥前染付

小皿(20) 残存高1.9cmを測る。全面に施軸し、内面に貝須で雲状の絵付けを施す。胎土は白色で密、軸はかすかに青みをもち、呉須は明るい群青色を呈す。

36SX025 出土遺物 (fig. 58, pla. 31 ~ 34)

土師器

丸底坏a(21) 内外面とも摩耗するが、内面にヘラミガキ(ミガキb)が、体部外面下半には指頭圧痕が認められる。焼成やや不良、淡黄白色を呈する。

小皿a(22) 内外面に回転ナデ、底部外面に糸切り痕が見られる。胎土は精良で0.5mm以下白色砂粒と微細なウンモ粒を含む。焼成良好、淡褐色を呈する。

瓦類

平瓦(23~25) 23は現状で縦9.0cm、横10.3cm、厚さ1.9cmを測る。凹面に布目痕および模痕が残り、凸面には縄目叩き後一部ナデが施される。側片部は2回面取りされる。焼成良好、灰色および青灰色を呈する。24は凸面に「平井」銘の叩き(九曜分類901E)を有する。現状で縦8.2cm、横11.4cm、厚さ1.9cmを測る。凹面に布目痕および桶引き抜き痕が残る。焼成やや不良、淡黄灰色を呈する。25は現状で縦9.6cm、横6.7cm、厚さ1.5cmを測る。凹面に布目痕、凸面に縄目叩き後側辺部にケズリによる面取りが見られる。また凹凸面とも、ヘラ状工具が当たった痕跡がある。

土製品

棒状土製品(26) 現状で縦8.65cm、横6.9cm、厚さ3.05cmを測る。全体的に摩耗するが、手づくね成形で所々にナデおよび指圧痕が見られる。胎土は粗く1~3mmの砂粒を多く含む。焼成やや不良、淡灰色および淡黄色を呈する。実測図の下方より何かに接合されていたようである。把手の可能性がある。

36SX026 出土遺物 (fig. 58, pla. 35 ~ 36)

肥前系染付

鉢(27) 残存高2.9cmを測る。内外面に貝須で草花文を描く。胎土は灰白色で密、軸はかすかに青みをもち、呉須は内面がうすい紺色、外面がやや暗い紺色。

36SX027 出土遺物 (fig. 58, pla. 35 ~ 36)

土師器

丸底坏a(28) 全体的に摩耗するが、内外面回転ナデ、体部下半に押し出しによる指圧痕が見られる。焼成やや不良、淡黄白色を呈する。

小皿a(29) 内外面回転ナデを施し、底部糸切り離し。焼成良、淡黄灰色を呈する。

36SX029 出土遺物 (fig. 58, pla. 35 ~ 36)

土師器

小皿a(30) 口縁部以外ほぼ残存する。内外面回転ナデ、底部糸切り離し。体部内面に被熱による黒化、体部外面に一部油分が付着する。灯明皿。

小皿b(31) 内外面回転ナデ、底部糸切り離し。焼成やや不良、淡黄白色を呈する。

36SX030 出土遺物 (fig. 58, pla. 35 ~ 36)

土師器

坏a(32) 内外面回転ナデ、底部糸切り離した後ナデを施す。焼成やや不良、淡黄灰色を呈する。

36SX032 出土遺物 (fig. 58, pla. 35 ~ 36)

土師器

小皿a(33) 内外面摩耗し調整不明瞭。焼成やや不良、淡黄灰色を呈する。

36SX035 出土遺物 (fig. 58, pla. 35 ~ 36)

土師器

小皿a(34) 全体的に摩耗する。底部外面に板状圧痕あり。焼成良、淡橙褐色を呈する。

須恵器

坏a(35) 内外面に回転ナデを施す。焼成良好、青灰色を呈する。

第2調査面出土遺物

36SA040a 出土遺物 (fig. 59, pla. 35 ~ 36)

土師器

坏a(1) 底部外面に回転ヘラケズリが見えるほかは、摩耗のため調整不明瞭。胎土やや粗く1~2mm大の砂粒、微細なウンモ粒を含む。焼成良、明淡褐色を呈する。

36SA045c 出土遺物 (fig. 59, pla. 35 ~ 36)

土師器

小皿a(2-3) ともに内外面とも摩耗のため調整不明瞭。2は底部ヘラ切り離し。焼成良、淡黄灰色を呈する。3は底部外面に板状圧痕あり。焼成良、淡乳灰色を呈する。

36SX042 出土遺物 (fig. 59, pla. 37 ~ 38)

土師器

小皿a(4) 内外面に回転ナデ、底部ヘラ切り後ナデを施す。底部外面に板状圧痕あり。焼成良、淡黄白色を呈する。

36SX051 出土遺物 (fig. 59, pla. 37 ~ 38)

須恵器

坏a(5) 底部ヘラ切り離し、内外面に回転ナデを施す。焼成良、灰白色を呈する。

36SX052 出土遺物 (fig. 59, pla. 37 ~ 38)

須恵器

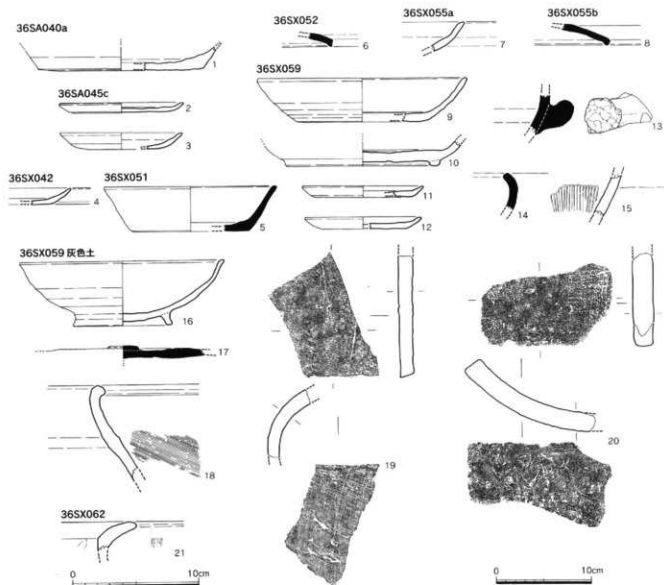


fig. 59 36SA040a・045c, SX042・051・052・055a・055b・059・059 灰色土・062 出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

蓋 3(6) 残存高 1.1cm を測る。内外面に回転ナデを施す。焼成不良、灰白色を呈する。

36SX055a 出土遺物 (fig. 59, pla. 37・38)

土師器

環 a(7) 内外面に回転ナデを施す。胎土はやや粗く 1~2mm 大の白色砂粒を含む。焼成不良、淡黄灰色を呈する。

36SX055b 出土遺物 (fig. 59, pla. 37・38)

須恵器

蓋 3(8) 残存高 1.65cm を測る。内外面に回転ナデ、外面天井部近くは回転ヘラケズリ後に回転ナデを施す。焼成良好、青灰色を呈する。

36SX059 出土遺物 (fig. 59, pla. 37~40)

土師器

環 a(9) 底部へら切り離し、体部内外面に回転ナデ、底部内面に不定方向のナデを施す。焼成良、淡

乳褐色を呈する。

大坏 c(10) 底部のみが 9 割残存する。底部へら切り後高台を添付し、内外面に回転ナデを施す。焼成良、橙色を呈する。

小皿 a(11・12) ともに内外面に回転ナデと底部内面に不定方向のナデを施す。11 は底部へら切り離し、12 は摩耗のため切り離しが不明瞭。

須恵器

壺把手 13(13) 短頸壺の把手破片で、残存高 3.2cm を測る。体部内外面に回転ナデを施し、把手部分は手づくね成形する。焼成良好、青灰色を呈する。

鉢 14(14) 鉢の口縁部破片で、残存高 2.9cm を測る。内外面に回転ナデを施す。焼成良、灰白色を呈する。国産陶器

すり鉢 15(15) 残存高 3.3cm を測る。内外面に褐色の釉を施す。胎土は暗灰色でやや粗く 1~4mm 大の白色砂粒を含む。焼成良好。

36SX059 灰色土出土遺物 (fig. 59, pla. 37~40)

土師器

中丸底坏 c(16) 底部が完存する。体部外面に回転ナデ、底部へら切り離し後高台を添付する。内面にヘラミガキ(ミガキ b)を施す。焼成やや不良、乳白色を呈する。

須恵器

蓋 c(17) 残存高 0.9cm、つまみ径 2.5~2.6cm、つまみ高 0.5cm を測る。天井部外面に回転ヘラケズリ後つまみを添付する。内面は回転ナデ後、天井部に不定方向のナデを施す。焼成良、灰色を呈する。朝鮮無釉陶器

甕 18(18) 残存高 7.65cm を測る。口縁部内外面に回転ナデ、内面に横方向のナデ、外面口縁よりやや下に斜め方向のカキメを施す。胎土は淡紫灰色で微細な白色砂粒を少量含み密。焼成良好、暗青灰色を呈する。

瓦

平瓦 (19・20) 19 は現状で縦 13.3cm、横 7.9cm、厚さ 1.45cm を測る。凹面に布目痕を残し、凸面にはナデを施す。胎土は粗く、3mm 以下の白色砂粒を多く含む。焼成良好、暗青灰色を呈する。20 は現状で縦 9.8cm、横 14.7cm、厚さ 2.0cm を測る。全体的に摩耗が著しいが、凹面にわずかに布目痕を残す。焼成不良、灰白色を呈する。

36SX062 出土遺物 (fig. 59, pla. 39・40)

土師器

甕 21(21) 甕の口縁部片で、残存高 2.2cm を測る。全体的に摩耗が著しく、かすかに外面にハケメ調整、胴部内面のケズリ痕を確認できる。胎土は粗く、1~4mm 大の白色・透明色砂粒を多く含み、2mm 以下の角閃石粒および 1mm 以下ウンモ粒をわずかに含む。焼成やや不良、暗褐色を呈する。

茶色土出土遺物 (fig. 60, pla. 41・42)

SX020 と同一である。

土師器

坏 a(1) 内外面とも摩耗著しく調整不明瞭。底部内面に指圧痕が認められる。焼成やや不良、淡橙灰色を呈する。

瓦器

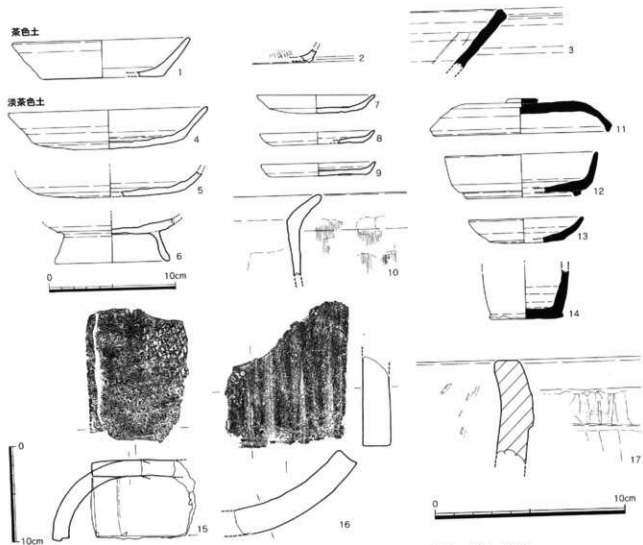


fig. 60 第36次茶色土・淡茶色土出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/4)

- 柄 c (2) 底部小片。内面に暗文状ヘラミガキ (ミガキ), 外面に回転ナデを施す。高台部分は摩耗する。焼成やや不良、暗灰色を呈する。
須恵質土器
- 鉢 (3) 内外面に回転ナデを施す。焼成良好、灰色を呈する。
淡茶色粘出土遺物 (fig. 60, pl. 41 ~ 46)
- 第3調査面で検出した谷地形を埋め第2調査面基盤層を形成していた淡茶粘土層出土遺物である。
土師器
- 坏 a (4~5) 4は底部回転ヘラ切り離し、すだれ状の板状圧痕を有する。体部内外面に回転ナデを施す。5は全体的に摩耗が著しく調整不明瞭だが、底部回転ヘラ切りか、板状圧痕を有する。
即付中碗 (6) 全体的に摩耗が著しい。底部回転ヘラ切り離し後ナデ、高台内外面に回転ナデを施す。焼成やや不良、淡乳白色を呈する。
小皿 a (7~9) 7は底部回転ヘラ切り後ナデを施し、板状圧痕を有する。8は摩耗のため底部切り離し不明瞭だが糸切りか。9は底部糸切り離し。いずれも焼成良好。
甕 (10) 残存高6.4cmを測る。口縁部から外面にかけて摩耗が著しいが、外面に所々ハケメが残る。

胴部内面には横方向のケズリを施す。胎土は粗く、2.5mm以下の白色砂粒と微細なウンモ粒を多く含む。焼成やや不良、暗橙色を呈する。

須恵器

蓋 c (11) 復元口径13.8cm、器高2.8cm、つまみ径2.5cm、つまみ高0.4cmを測る。内外面に回転ナデ、天井部外面に回転ヘラケズリを施す。焼成不良、灰白色を呈する。

坏 c (12) 底部回転ヘラ切り後高台を添付する。体部内外面に回転ナデ、外面底部近くには回転ヘラケズリを施す。焼成良好、底部外面は暗青灰色、他は青灰色を呈する。

小皿 a (13) 底部回転ヘラ切り、体部内外面に回転ナデを施す。焼成良好、青灰色を呈する。

小壺 (14) 底部破片で復元口径5.8cm、残存高3.9cmを測る。底部内面および体部内外面に回転ナデ、底部外面に回転ヘラ切り後ナデを施す。焼成良好、外面暗灰色、内面青灰色を呈する。

瓦

丸瓦 (15) 現状で縦11.0cm、横12.5cm、厚さ1.7cmを測る。凹面は布目痕をナデ消し、凸面格子目きとナデを施す。胎土はやや粗

暗灰茶色土

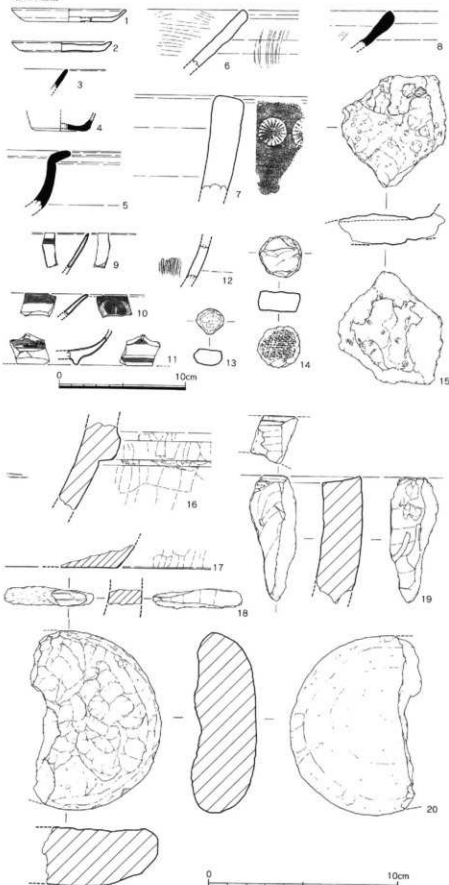


fig. 61 第36次暗灰茶色土出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

く1mm大および3~4mm大の白色砂粒を含む。焼成良好、灰色を呈する。凸面から破断面にかけての一部に黒茶色の液体が付着したような痕跡がある。

平瓦(16) 現状で縦16.0cm、横15.3cm、厚さ2.8cmを測る。全体的に摩耗するが、凹面に模骨痕、凸面にナデの痕跡が見られる。焼成不良、にがい橙色を呈する。

石製品

石鍋(17) 口縁部破片で残存高5.5cmを測る。内外面にケズリ加工を施す。全体的にやや摩耗する。

暗灰茶色土出土遺物 (fig. 61, pla. 47~50)

中段で確認した旧耕土(近世)の出土遺物。

土師器

小皿a(1・2) 1は底部回転糸切り離し、内外面に回転ナデを施す。底部外面に板状圧痕あり。焼成良、淡黄灰色を呈する。

須恵器

坏(3) 口縁部破片で、残存高1.6cmを測る。内外面に回転ナデを施す。焼成良好、灰色を呈する。

小坏a(4) 底部外面に回転ヘラケズリ、体部外面に回転ナデを施す。内面は自然釉がかかり調整不明瞭。

焼成良好、外面は青灰色、内面は暗灰色を呈する。

鉢(5) 残存高4.6cmを測り内外面に回転ナデ、口縁と胴部境に沈線を施す。焼成良好で暗青灰色を呈す。

瓦質土器

鉢(6) 全体的に摩耗するが、内面に横方向ハケム痕跡、外面に縦方向ハケム痕跡が見られる。胎土はやや粗く4mm以下の白色砂粒を多く含む。焼成良、淡灰褐色を呈する。

火鉢(7) 残存高7.5cmを測る。内外面に横ナデ、外面口縁下に菊文のスタンプを施す。焼成良好、暗灰色を呈する。

須恵質土器

こね鉢(8) 東播系こね鉢の口縁部破片で、残存高2.8cmを測る。内面から口縁にかけて横ナデ、外面に不定方向のナデを施す。焼成良、体部内外面は灰白色、口縁部は暗灰色を呈する。

肥前系染付

碗(9・10) 9は残存高2.8cmを測る。全面に施釉し、内面口縁近くに貝須で幅の広い帯線を描く。胎土は白灰色で密。祐はかすかに青みをもち、貝須は淡い青色。10は残存高1.65cmを測る。貝須で内面口縁下に雷文、外面に鶴を描く。胎土は白色で密。釉は透明で、貝須は紺色。

皿(11) 残存高2.4cmを測る。全面に施釉し、貝須で内外面に絵付けする。胎土は白色で密。釉はかすかに青みをもち、貝須は内面が紺色、外面が淡い紺色。

国産陶器

すり鉢(12) 体部下半の小片で、残存高2.8cmを測る。内外面に暗褐色の釉をかける。胎土は暗灰色で微細な白色砂粒を少量含み密。焼成良好。

土製品

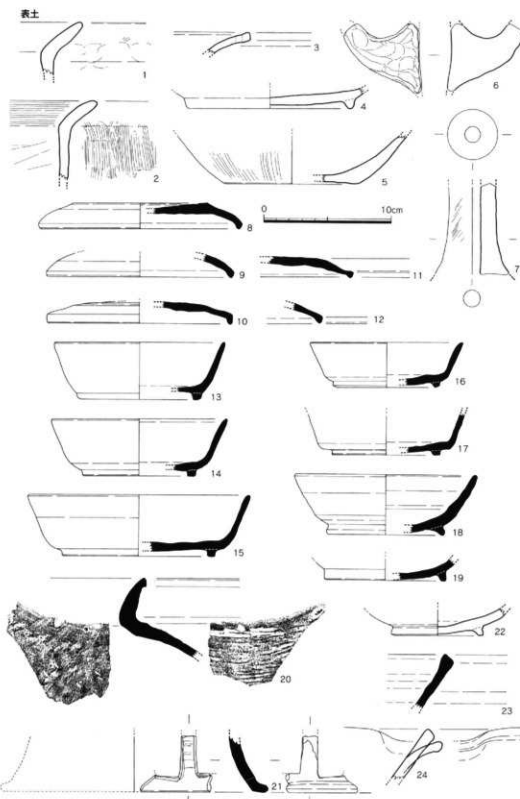
瓦玉(13・14) 13は縦2.2cm、横2.0cm、厚さ1.2cmを測る。側面を打ち欠いて整形する。焼成やや不良、暗灰色を呈する。14は縦3.2cm、横3.3cm、厚さ1.5cmを測る。周囲を打ち欠いて整形するが、一部本来の側面が残る。凹面に布目痕、凸面にナデ調整が見られる。焼成良好、灰色を呈する。

灰燼? (15) 現状で縦5.9cm、横5.5cm、厚さ1.5cmを測る。外面ほぼ全面に藍澤が付着し、砂粒や炭化物も混入する。胎土はやや粗く1~3mm大の白色砂粒、スサを含む。内面は淡橙色、外面付着物は黒

灰色を呈する。

石製品

石鍋(16~19) 16~19は滑石製石鍋の破片。16は口縁よりやや下の破片で残存高4.6cmを測る。内面に横方向の削り、外面に縦方向の削りを施す。17は底部破片で、残存高1.2cmを測る。底部外面はやや摩耗し、煤が付着する。18は小片で厚さ1.8cmを測る。内面に横方向の削り加工、外面に縦方向



の削り加工を施す。19は口縁部破片で、残存高6.6cmを測る。内面に縦方向の削り、外面に横方向の削り、口縁上端には口縁の円弧に沿って削りが施される。外面は被熱により黒化し、煤が付着する。

破石(20) 安山岩製。現状で9.5×6.1cm、厚さ3.1cmを測る。片面に敲打痕がある。

表土出土遺物 (fig. 62・63, pla. 51~60)

土師器

甕(1・2) 1は現状で4.2cmを測る。口縁部内

外面は摩耗により調整不明瞭。

胴部内面にケズリを施し、口頭部以下に指頭圧痕が見られる。

胎土は粗く、2mm以下の白色砂粒

fig. 62 第36次表土出土遺物実測図その1(1/3)

を多く含む。焼成やや不良、橙灰色を呈する。2は残存高6.3cmを測る。口縁部内面に横方向のハケメ、外面に横ナデ、胴部内面に横方向のケズリ、外面に縦方向のハケメを施す。焼成良好、内面は淡橙灰色、外面は淡灰褐色を呈する。

鉢(3~5) 3は口縁部破片で残存高1.7cmを測る。内外面に回転ナデを施し、口縁部近くに穿孔する。胎土は精良で微細な雲母粒を多く含む。焼成良好、橙色を呈する。4は鉢cか。復元底径13.2cm、残存高1.6cmを測る。内外面とも摩耗著しく調整不明瞭。焼成やや不良、淡橙色を呈する。5は復元底径10.6cm、残存高3.9cmを測る。内外面とも摩耗が著しい。外面にわずかにハケメが見られる。胎土は粗く0.5~2mm程度の砂粒を多く含む。焼成やや不良、淡灰褐色を呈する。土器器鉢としたが、瓦質土器である可能性もある。

把手(6) 把手部分の破片で、把手は幅2.8~4.2cmを測る。全体を手づくね成形し、指圧痕が残る。胎土は精良で1~3mm大の白色砂粒を含む。焼成良好、橙色を呈する。

器台(7) 坏部接合付近の破片で、現状高7.1cmを測る。直径1.2~1.3cmの棒に粘土を巻きつけて手づくね成形する。焼成良好、乳灰色を呈する。

須恵器

蓋(3(8~12) 8・10は天井部ほぼ中央につまみが欠損したような痕跡があり、蓋c3である可能性が高い。いずれも天井部外面に回転ヘラケズリ、体内内外面から天井部内面に回転ナデを施す。8は復元口径16.0cm、現状で器高2.0cmを測る。焼成やや不良、灰白色を呈する。10は復元口径14.6cm、残存高1.7cmを測る。天井部内面に不定方向のナデを施す。焼成良好、青灰色を呈する。9・12口縁部破片で、内外面に回転ナデを施す。焼成良好。11は天井部外面に回転ヘラケズリ、体内内外面から天井部内面に回転ナデ、内面にはその後ナデを施す。焼成良好、青灰色を呈する。

坏c(13~19) いずれも底部回転ヘラ切り。体内内外面に回転ナデ、底部内面に不定方向ナデを施す。13を除き焼成良好、青灰色を呈する。

甕(20) 残存高6.3cmを測る。口頸部内外面に回転ナデ、胴部外面に横方向の平行叩きを施し、内面は同心円文状当て具痕をナデ消す。外面に自然釉が付着する。焼成良好内面は青灰色、外面は灰色を呈す。円面視(21) 脚部破片で、復元底径20.4cm、残存高4.4cmを測る。内外面に回転ナデを施し、透かしは外側から切り込まれる。焼成良好、暗青灰色を呈する。

黒色土器B

碗c(22) 全体的に摩耗が著しく調整不明瞭。胎土は精良で0.5mm以下の砂粒を少量含む。焼成良好、底部外面は暗黄灰色、他は黒色を呈する。

須恵土器

こね鉢(23) 東播系こね鉢の口縁部片で、残存高4.3cmを測る。内外面に回転ナデを施す。焼成良好、口縁部外面は暗灰色、他は灰色を呈する。

瓦質土器

片口鉢(24) 口縁部破片で残存高4.0cmを測る。内外面とも摩耗が著しく調整不明瞭だが、内面に横方向のハケメを施すか。焼成不良、暗灰褐色を呈する。

肥前系染付

皿(25) 復元口径15.0cm、復元底径9.5cm、器高4.5cmを測る。全面に施軸し、高台内側および底部外面の軸を蛇の目状に拭き取る。内面に呉須で山水文を描く。胎土は白色で密。軸は無色で呉須は淡い群青色。

表土

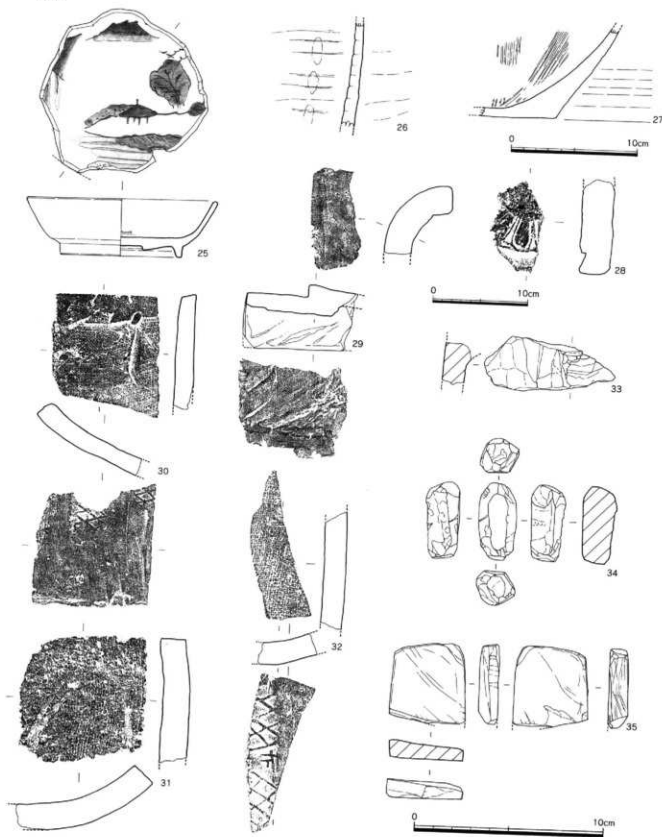


fig. 63 第36次表土出土遺物実測図その2 (1/2、1/3、1/4)

国産陶器

甕 (26) 甕の胴部破片で、残存高 8.2cm を測る。外面に暗茶色の釉をかける。内面は回転ナデを施し、成形時の粘土積み上げ痕が明瞭に残る。胎土は淡灰色で 0.5mm 以下の砂粒を含み密。焼成良好、露胎部は灰色を呈する。

すり鉢 (27) 残存高 7.2cm を測る。底部回転糸切り難し、外面に回転ナデおよびナデ、内面には縦方向の掃り目を施し表面は使用により滑らか。胎土は 1mm 以下の白色砂粒をごく少量含み密。焼成良好、内外面とも茶褐色を呈し一部黒化する。

瓦

軒丸瓦 (28) 複弁蓮華文軒丸瓦の破片で、厚さ 3.4cm を測る。全体的に欠損・摩耗が著しく、瓦当面は内区の一部が残存するのみである。中房部分に蓮子が剥落した痕跡が 1 つある。瓦当裏面には不定方向のナデを施す。焼成良好、暗灰色を呈する。

丸瓦 (29) 玉縁部の破片で長 12.0cm、幅 7.3cm、厚さ 3.0cm を測る。凹面に布目痕を残し、凸面および玉縁接合部に横方向のナデを施す。側縁部と端部にはへら切りを残す。焼成良好、青灰色を呈する。

平瓦 (30~32) 30 は現状で縦 13.4cm、横 12.7cm、厚さ 1.9cm を測る。凹面に布目痕を残し凸面に格子目付き (I-C) 後縦方向のナデを施す。焼成良好、灰色を呈する。31 は現状で縦 13.5cm、横 15.3cm、厚さ 2.8cm を測る。全体的にやや摩耗するが凹面に布目痕を残し、凸面にナデを施す。焼成やや不良、淡黄灰色を呈する。32 は現状で縦 17.5cm、横 7.0cm、厚さ 2.3cm を測る。凹面に布目痕を残し、凸面に反字で「佐」銘の入る格子目付き (I-C) を施す。焼成良好、灰色を呈する。

石製品

石鍋 (33) 口縁近くの破片で、外面に把手が一部残存する。残存高 2.8cm、現状で厚さ 0.8~1.2cm を測る。内面に横方向の削り、外面にノミ痕と把手削り出しの加工痕跡が見られる。

滑石加工品 (34) ケズリ加工による面取りを施した滑石製品で、縦 4.0cm、横 2.0cm、厚さ 1.75cm、重さ 20.5g を測る。片側の頂部に溝状の刻み込みがある。鎌か。

砥石 (35) 泥岩製の砥石で、4.2 × 4.0cm、厚さ 0.9cm を測る。1 面のみ自然面を残し、他はすべて使用による擦痕が見られる。

(5) 小結

本調査地は調査前から石垣 (SX001) と石積み (SX005) によって形成された三段の段造成部分に相当する。これらの裏込めからの出土遺物により、現地表面を形成する段造成は、18 世紀後半から 19 世紀前半頃に形成されたことが確認できた。これらの段造成からは、主に複数の落ち込み状の遺構と、現代まで使用されていた湿気抜き溝が 1 条検出された。よって、江戸時代後期から現代まで耕作地として利用されていたと考えられる。

この耕作地を形成する盛土・包含層 (SX010・015・020・025・030・035) を除去すると奈良・平安期の遺物を多量に包含する盛土 (淡茶色粘土) で形成された上・中・下段の三段の段造成が確認できた。主に上段と下段の東側に櫛 (SA040・045・060) を検出した。出土遺物より 13 世紀後半代に機能した可能性が高い。

さらに、これらを除去すると龍門神社南から南方向に開口する谷地形を検出した。この谷は、出土遺物や周辺地形などを勘案すると、おそらく龍門神社南側の奈良・平安期の遺物を包含する土を削平して、奉大から人頭大までの石も含めて、谷地形に流し込むことによって埋められた可能性がある。その時期

は淡茶色粘土盛土直上に展開する掘立柱建物・櫛から出土する遺物により 13 世紀後半代の可能性がある。そして、これら小規模な段造成を一枚の段に造成したのが江戸時代後期と考えられる。この時、大量の奉大から人頭大の石が投げ込まれて、その上に盛土を被せて自然の暗渠を構築している。これによって谷地形においても流水をコントロールできるようになり、耕作地として利用できるようにしていたと考えられる。

今回の調査によって、鎌倉期と江戸期における谷地形利用に伴う盛土造成工法が具体的に確認できたことは最大の成果といえる。今後、本調査成果を基に、宝満山遺跡群における発掘調査が行われていない段造成について、地表面観察によってある程度の予測がたてられるようになったと考えられる。

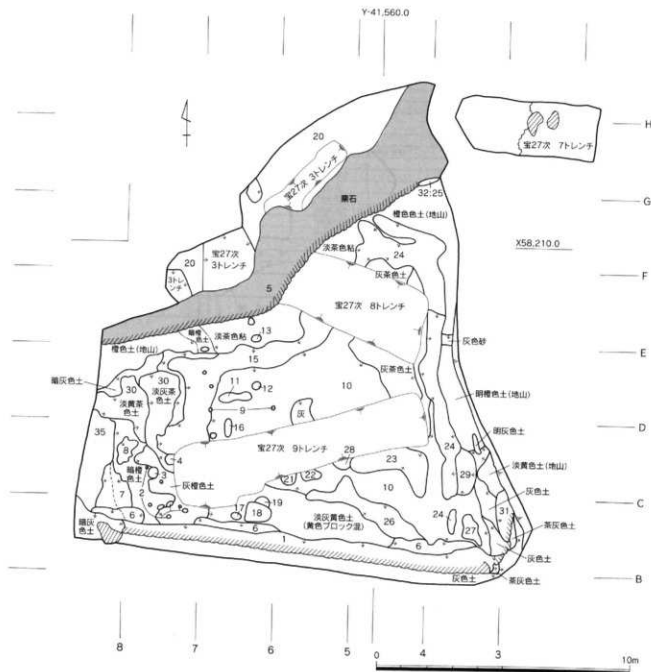


Fig. 64 第36次調査 1面路測図 (1/150)

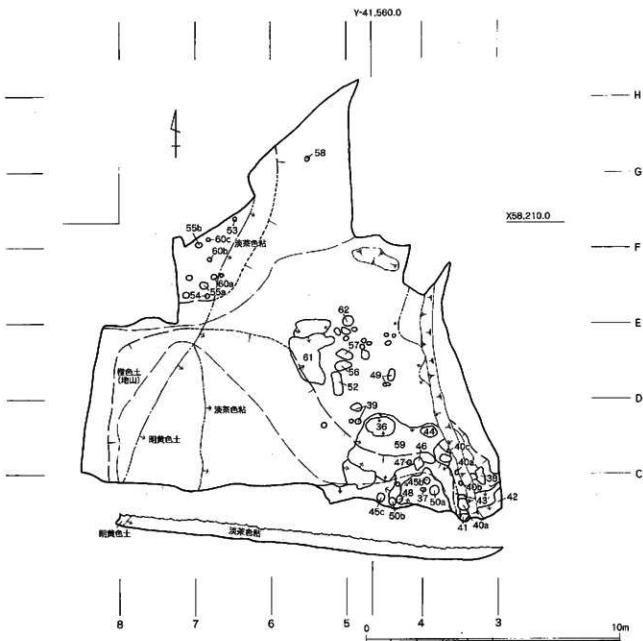


fig. 65 第36次調査2面略測図 (1/150)

tab. 8 第36次調査 遺構番号台帳

第1面	S-番号	遺構番号	類別	備考	埋土状況 (①~④)	調査開始年 (古一期)	遺構面	時期	地区番号
1	36S3001	石垣		①②/下段灰土(灰土)敷出、 段灰土-足沢(肥前系凝灰土)	段灰土	6→1		近世	B7f
2		小小穴群			灰色土				B7f
3		小穴			灰色土				C7
4		小穴			灰色土				C7
5	36S3002	石垣(台組み)		遺構1躯体				13c 遺構	D7→G4
6	36S3006	落ち込み×壁地		S-1石垣跡?/①②/遺構1	淡黄色土(黄色?)/?付含む	6→1			B3→4-B
7		落ち込み×壁地			灰色土				B7f-B
8		落ち込み×壁地			灰色土				C7-B
9		小穴			暗灰色土				B3
10	36S3010	下段凝灰土			淡黄色土(黄色土部?)/?付含む	15→10			B→D3→E
11	36S3010	落ち込み			灰色土				B3
12		小穴			暗灰色土				B3
13		落ち込み			灰色土				B3
14		小穴			灰色土				C6
15	36S3015	下段凝灰土			灰色土(黄色?)/?付含む	39→15→10			C7→E8
16		落ち込み			灰色土				C7
17		落ち込み			灰色土				B3
18		落ち込み			暗灰色土	19→18			B3
19		落ち込み			暗灰色土	19→18			B3
20	36S3020	上段凝灰土			灰色土				E→D2→?
21	36S3021	落ち込み			灰色土(土層)				近世? C5
22	36S3022	落ち込み			灰色土(土層)				近世? C5
23	36S3023	落ち込み×たまり			暗灰色土(下層)	28→23			近世? C4
24					暗灰色土				C4
25	36S3024	壁		下層より?付、S-①出土	暗灰色土				現代 C3f3
26	36S3026	上段凝灰土×包合層			灰色土(赤多く含む)				E→D2→?
27	36S3026	落ち込み×たまり		S-12も同じ	灰色土				近世? B5f
28	36S3027	落ち込み×たまり			暗灰色土				近世? C5
29	36S3029	落ち込み			灰色土	28→23			近世? B3
30	36S3030	下段凝灰土			暗灰色土				C3
31	36S3032	落ち込み			暗灰色土(灰土+上層土部?)/?付含む	30→15			B→A→B
32	36S3032	上段凝灰土×包合層		S-25と同じ	暗灰色土(黄色?)/?付含む				G4
33		穴層			段灰色土				
34		穴層			段灰色土				
35	36S3035	下段凝灰土			暗灰色土				C6

第2面	S-番号	遺構番号	類別	備考	埋土状況 (①~④)	調査開始年 (古一期)	遺構面	時期	地区番号
36		たまり×落ち込み		近世層上の一帯か	暗灰色土(灰色土)/?付含む				C4
37		小穴			暗灰色土				B4
38		たまり×落ち込み			暗灰色土				E3
39		小穴群			暗灰色土				C1
40	36S3400	溝(段壁)			暗灰色土			13c 遺構	B4
41		落ち込み×小穴			灰色土				E3
42	36S3042	落ち込み×近世層上の一帯			灰色土			近世	B3
43		落ち込み×穴層			暗灰色土				E3
44		たまり×落ち込み			灰色土				C3
45	36S3043	溝(段壁)			暗灰色土			13c 遺構	B3-4
46		小穴			暗灰色土				C1
47		小穴			暗灰色土				G4
48		小穴			暗灰色土				B4
49		小穴群			暗灰色土				D4
50	36S3050	縦石柱建物×(壁)			暗灰色土(灰含む)			13c 遺構	B3-1
51	36S3051	小穴群			暗灰色土				D4
52	36S3052	落ち込み×たまり			暗灰色土				B3
53		小穴			暗灰色土				F6
54		小穴			暗灰色土				B3
55		小穴			暗灰色土				B3
56	36S3056	縦石柱建物×(壁)			暗灰色土			13c 遺構	B3
57		小穴×たまり			暗灰色土				B3
58		小穴			暗灰色土				B3
59	36S3059	たまり×落ち込み		土器多量出土	暗灰色土(灰含む)				B7f-4
60	36S4060	溝			暗灰色土			13c 遺構	B3f
61		たまり			灰色土(灰含む)				E4
62	36S3062	小穴			暗灰色土				B1

tab.9 第36次調査 計測表

A: 内径φ; B: 外径φ

S-1 褐色土									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(14.4)	1.1	(6.1)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(14.3)	2.4	(6.9)	○	○	

S-6									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(15.0)	1.2	(6.9)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(15.1)	2.1	(7.2)	○	○	

S-10									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(15.2)	1.3	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(15.4)	1.5	(6.5)	○	○	
中層部	小皿a	イ1	R-003	(15.5)	2.3	(11.1)	○	○	

S-15									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(15.6)	1.1	(7.0)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(15.7)	1.2	(6.6)	○	○	

S-20									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(15.8)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(15.9)	1.5	(6.2)	○	○	
中層部	小皿a	イ1	R-003	(16.0)	1.6	(6.8)	○	○	

S-21									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(16.1)	1.3	(7.1)	○	○	

S-22									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(16.2)	1.5	(6.9)	○	○	

S-25									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(16.3)	1.4	(6.8)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(16.4)	1.4	(6.4)	○	○	

S-23 褐色土									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(16.5)	1.1	(6.3)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(16.6)	2.1	(10.2)	○	○	

S-24									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(16.7)	2.2	(7.1)	○	○	

S-26									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(16.8)	1.3	(6.3)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(16.9)	1.3	(6.4)	○	○	

S-27									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(17.0)	1.3	(6.9)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(17.1)	2.1	(6.9)	○	○	

S-28									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(17.2)	1.2	(6.1)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(17.3)	1.1	(6.1)	○	○	

S-29									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(17.4)	2.0	(7.1)	○	○	

S-32									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(17.5)	1.6	(6.9)	○	○	

S-35									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(17.6)	1.5	(6.1)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(17.7)	1.5	(6.1)	○	○	

S-36									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(17.8)	1.5	(13.1)	○	○	

S-41									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(17.9)	1.3	(6.1)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.0)	0.8	(6.2)	○	○	

S-42									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.1)	1.5	(6.1)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.2)	0.8	(6.2)	○	○	

S-51									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.3)	1.5	(6.9)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.4)	2.4	(6.9)	○	○	

S-52									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.5)	2.4	(6.9)	○	○	

S-59									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.6)	0.9	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.7)	0.9	(6.4)	○	○	
中層部	小皿a	イ1	R-003	(18.8)	2.4	(12.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-004	(18.9)	2.3	(12.2)	○	○	

S-55 褐色土									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.2)	1.1	(6.9)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.3)	1.1	(6.9)	○	○	

S-56 褐色土									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.4)	1.4	(6.6)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.5)	1.6	(6.6)	○	○	

S-57									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.6)	2.0	(7.3)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.7)	1.1	(6.1)	○	○	

S-58									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(18.8)	1.3	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(18.9)	1.3	(6.4)	○	○	

S-59									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(19.0)	1.4	(6.1)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(19.1)	1.4	(6.1)	○	○	

S-60									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(19.2)	1.4	(6.1)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(19.3)	1.4	(6.1)	○	○	

S-61									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(19.4)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(19.5)	1.5	(6.4)	○	○	

S-62									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(19.6)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(19.7)	1.5	(6.4)	○	○	

S-63									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(19.8)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(19.9)	1.5	(6.4)	○	○	

S-64									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(20.0)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(20.1)	1.5	(6.4)	○	○	

S-65									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(20.2)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(20.3)	1.5	(6.4)	○	○	

S-66									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(20.4)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(20.5)	1.5	(6.4)	○	○	

S-67									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(20.6)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(20.7)	1.5	(6.4)	○	○	

S-68									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(20.8)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(20.9)	1.5	(6.4)	○	○	

S-69									
種別	層	層番号	白磁	赤磁	灰磁	A	B	焼存率	備考
上層部	小皿a	イ1	R-001	(21.0)	1.5	(6.4)	○	○	
下層部	小皿a	イ1	R-002	(21.1)	1.5	(6.4)	○	○	

S-70									
種別									

tab.10-4 第36次調査 出土遺物一覧表4

表上	
原 形	高3 坪c 變 織(円形織6)
土 質	野a 坪c 陶c 小粒s 高坪 變
彩色土	赤土
大 形	陶
経州系系青織	織:1-1(1)
経泉系系青織	織:1-1(1) 1-1a(1) 1-2(2) 1-3(1) 1-4(1) 1-4a(1) 1-1(4)
	1-1b(1) 織片(4)
	織:1-1c(1) 織片(1)
経安系系青織	織:1-1b(4) 1-1(1)
	織:1-2a(2) 織片(1)
経泉系土器	織
	こお鉢
肥前系陶磁器	染付:7(1) 黒(肥前高台) 織片 白磁陶
経泉系陶器	染付(7(1)) 變 陶c 天目陶 赤 織片(染付) 織片
経泉系陶器	白磁(現代) 青織
白 磁	織:1-1-2a(1) 1-1(4) 1-1a(1) 4(4) 1-1 × 1-1(1) 2(1) 1-1(1) 1-1(1) 1-1(1) 1-1(1) 2-1(1) 織片(20)
	織:1-1(1) 1-1(1) 1-1(1) 1-1(1) 1-1(1) 1-1(1) 1-1(1) 織片(4)
	織:織片(3)
青 白 磁	合子蓋(1)
	織:織片(1)
中 国 陶 器	地:1-2(1) 變:1(1) 織×鉢(1)
黒 輪 陶 器	變(1)
瓦	平瓦(格子印、圓目印、変文) 瓦瓦(格子印) 軒瓦瓦 横瓦瓦
石 製 物	石製
石 製 品	滑石製石籠 織石

7. 宝満山遺跡群第37次調査

(1) 調査に至る経緯

調査地は、太宰府市大字内山字御供屋 883、884 に所在する。現地では古くから地表面に礎石が露出しており、神功皇后御座所跡との伝承があることから注目をされていた。昭和 36 (1961) 年に宝満山文化総合調査会(代表西高辻信貞)の小田富士雄先生が、調査を担当され一部を発掘調査し、平安時代後半の地層の上に構築された礎石建物であったことが確認された。また、昭和 58 (1973) 年には太宰府顕彰会の事業として礎石周辺の測量調査がおこなわれている。

近年、登山ブームがおこり、宝満山に登山する人が増える人が増えるに従って、登山者の駐車場確保が切実な問題となっている。この礎石が所在する平坦面も場合により車両が出入りをしており、露出している礎石の上に停車している状況も見受けられた。今後の遺構の保全や保護の方向性を考えるうえでも、遺跡の年代と範囲を確定する情報を得るために、今回補助金による重要遺跡確認調査として調査を行った。

調査地面積は 893 m²、調査面積は 747.5 m²。調査期間は平成 21 (2009) 年 1 月 14 日から同年 3 月 26 日までであり、高橋学が担当した。

(2) 調査の概要 (fig. 66)

現況地表面に礎石が露出していることからわかるように、ほとんど包含層遺物がない状態である。便宜的に過去のトレンチを検出した際に、遺物を取り上げるための検出土として茶色土を設定した。今回は確認調査のため、昭和 36 年段階のトレンチ番号を踏襲するかたちで新規にトレンチ番号を付与し

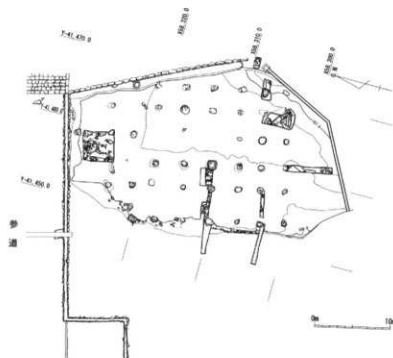


fig. 66 第37次調査遺構全体図 (1/500)

ている。(礎石の番号も同じものを使用するが、英文字+数字列の順番とする) 昭和36年段階では1T~8Tの8本のトレンチを入れているが、今回は、それに引き続き9トレンチ~16トレンチの8カ所のトレンチを設定した。トレンチの設定目的としては、主に礎石建物が占める範囲を確定させることとした。以下、それぞれのトレンチの土層の分析をしていき、トレンチ内で検出された遺構については後でまとめて記述をする。

(3) 検出遺構

8 トレンチ (fig. 67, pla. 9~13)

調査区中央部西側で、礎石B4とC4の間に東西方向に設置したトレンチ。このトレンチは昭和36年の調査時のトレンチ内の埋土を除去して、壁面を精査し直したものである。北壁の土層観察では、表土を除去すると黄色土が0.2mほど水平堆積していることがわかる。その下層に北壁9層(黒茶色土)、北壁16層(明褐色土)等が0.25~0.3mが堆積し、その下に地山(明赤茶色粘質土)が検出される。東壁の土層では、礎石C4と土層の関係が明らかになっている。礎石は地山のの上に置かれた東壁土層7、8の上に据えられている。東壁土層7には礫を多く含むことであり、礎石の安定を図る目的で入れられたと推定される。その後東壁土層6(褐茶黒色土)を敷き詰めて、東壁土層5(黄色土)で覆われていることがわかる。南壁の土層では礫相が変わり、下層の南壁土層13(黒茶色土)は0.3~0.35mと安定して堆積しているが、上層の南壁土層11(黄色土)が0.05mほどの厚みでしかない。この南壁土層11に関しては、同じ黄色土層が堆積している北壁と東壁の状況から判断して、上層から削平を受けて残りが悪いと考えられる。南壁土層12は礎石B4の掘方にあたる可能性が高い。

9 トレンチ (fig. 67, pla. 14~17)

調査区北部で、6Tと7Tの間に9トレンチとして設定した。トレンチの範囲はおおよそ東西南北4m四方である。またここは昭和36年の調査では建物の西側の落ちを推定している箇所である。表土を除去すると北壁土層では2層(茶褐色土、暗茶褐色土)、南壁土層では1層(茶褐色土)が検出され、これらを除去すると花崗岩風化土で形成された地山が露出する。推定されていた東西方向の落ちのラインは検出されなかった。ただし、北へ向くほど土層の堆積が厚くなるため、地形的に礎石部から北側へ傾斜しているのは間違いない。

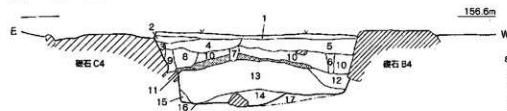
10 トレンチ (fig. 67, pla. 18~21)

調査区南東隅に位置し、礎石F2の周辺に設定したトレンチ。トレンチ北壁の土層を見ると、東の山手から西側に向かって傾斜堆積しているのがわかる。礎石の周りは攪乱を受けており、土層の連続性はない。これは昭和36年の調査、及び昭和58年の測量段階で礎石の周りを掘り下げて露頭させたため、埋め戻しの土が攪乱状態に入ってしまったものと思われる。(これについては過去の調査風景などからも確認できる。Pla. 108 など)

11 トレンチ (fig. 68, pla. 22~25)

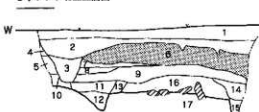
調査地南部に南北方向に設定したトレンチ。一部、昭和36年調査の3Tと重複している。現地表面から0.40~0.55mの深さまでは掘削されていることが推定できる。理由としては、土層20(灰色粘質土)から明治以降と思われるプリント転写の染付碗が出土していることがあげられる。上層22(明褐色黄色粘質土)、土層23(黄色粘質土)はわずかにしか残存していないが、8トレンチで確認された黄色土と同じ性格を持つものと思われる。本来は他のトレンチで検出されたように礎石の下半を覆うように敷き詰められていた黄色土が何らかの原因(おそらくは谷からの湧水か)で、流出したのではないかと推

8 トレンチ南壁土層図



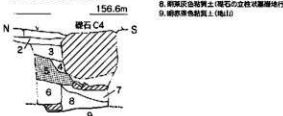
- 8トレンチ南壁土層土色
1. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)
4. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)
5. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)
6. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)
7. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)
8. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)
9. 黄褐色土(腐植層堆積物層?)

8 トレンチ北壁土層図



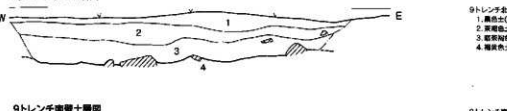
- 8トレンチ北壁土層土色
1. 黄褐色土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色土
8. 黄褐色土
9. 黄褐色土
10. 黄褐色土
11. 黄褐色土
12. 黄褐色土
13. 黄褐色土
14. 黄褐色土
15. 黄褐色土
16. 黄褐色土
17. 黄褐色土

8 トレンチ東壁土層図



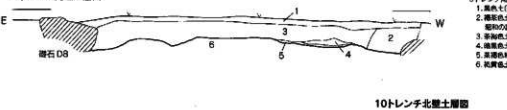
- 8トレンチ東壁土層土色
1. 黄褐色土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色土
8. 黄褐色土
9. 黄褐色土

9 トレンチ北壁土層図



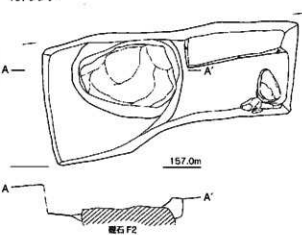
- 9トレンチ北壁土層土色
1. 黄褐色土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土

9 トレンチ南壁土層図

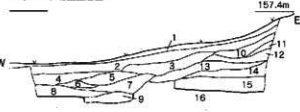


- 9トレンチ南壁土層土色
1. 黄褐色土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土

10 トレンチ



10 トレンチ北壁土層図



- 10トレンチ北壁土層土色
1. 黄褐色土
2. 灰褐色土
3. 黄褐色土
4. 黄褐色土
5. 黄褐色土
6. 黄褐色土
7. 黄褐色土
8. 黄褐色土
9. 黄褐色土
10. 黄褐色土
11. 黄褐色土
12. 黄褐色土
13. 黄褐色土
14. 黄褐色土
15. 黄褐色土
16. 黄褐色土

fig. 67 第37次8トレンチ東・南・北壁、9トレンチ南・北壁、10トレンチ北壁土層、10トレンチ遺構実測図 (1/40)

測する。その下には土層 24 (褐茶色土) としての遺物を多く含む 0.2m 程度の厚みの土層が安定的に堆積している。この土層からは縄目瓦も出土している。出土した輸入陶磁器は D 期を中心としている。(但し 1 点のみが E 期に下る白磁 IX 類が出土している。) XV ~ XVI 期か。

褐茶色土の下には灰黄色粘質土の地山が確認された。ただし、トレンチの北部の礎石 C1 に近い部位の地山は埋没した巨石 E1 として利用された巨岩であろう。これと同様なものが礎石 E1 として利用された巨岩であろう。

12 トレンチ (fig. 68, pla. 26 ~ 33)

調査区南西部に東西方向に設定したトレンチ。礎石 A2 と南北方向の石列 (SX015 とする) との関係性の把握を目的としたトレンチである。土層観察によると、最下層は土層 11 (暗褐色土) であり、この土層には大量の礫と土器・陶磁器・瓦が含まれていた。現地表面から 1.2m 下げて暗褐色土が確認でき、少なくとも 0.9m 以上堆積していることがわかる。狭いトレンチでは安全のため地山を全域にわたって検出できなかった。礎石 A2 に近い部位では明黄色粘質土に礫が混じる地山が確認でき、西側に向かって急激に落ち込んでいるのがわかる。層位からすると、暗褐色粘質土が堆積後に、褐灰色土が埋まり淡灰褐色土の堆積後に 37SX015 が構築されている。同じ層の上には礎石 A2 が構築されていることから、両遺構の時期差は少ないと考えられる。暗褐色土の遺物の年代は陶磁器 D 期を中心とするもので、土師皿の年代観から XVI 期以降の埋没と考えられる。

13 トレンチ (fig. 68・69, pla. 34 ~ 43)

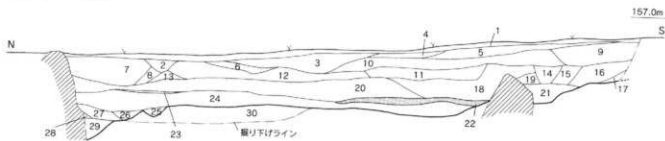
調査区西部中央に東西方向に設定したトレンチ。礎石 A4 と西側の傾斜した地形の関係を把握するために設定した。一部、昭和 36 年の 5T と重複する。北壁の土層では傾斜面の当初のラインが観察できた。平坦面と傾斜面下場とのレベル差は 0.85m になる。南壁の土層は土層 13 とした明褐色土が礎石 A4 の根石を含む層であることがわかった。本来、北壁の土層 15 (淡茶色土) のような斜面の保護層が流失してしまい、南壁土層 8 (褐色土) が後に堆積している可能性がある。この褐色土はバサバサとして締まりが悪いので新しい堆積と考えている。西側では落ち込みがあるが、これは現代の廃棄物が出土しているため現在の廃棄土坑であろう。

14 トレンチ (fig. 69, pla. 44 ~ 53)

調査区西部中央に東西方向に設定したトレンチ。礎石 A4 と B4 を繋ぐように設定しており、昭和 36 年の調査での課題であった西側の礎石列の配置についての情報を得るのが目的である。土層 7 (黄色土) は他のトレンチでも検出したものと同じ土層である。この層の下層にはこれも同じように土層 8 (黒茶色土) が安定的に堆積している。この層には土器片・炭化物片を多量に含んでいる。特筆すべきは昭和 36 年の調査の第 5 トレンチ南壁での観察で予想されたように、礎石 A4 を据えた根石層 (土層 3, 明褐茶色土) は黄色土層を切り込んでおり、明確な切り合い関係が観察できた。礎石 B4 についても、地山を掘り回めておいてから土 (土層 12 黒灰色土 (取り上げ時は S-6 とした)) を入れて設置した状況が観察できる。

出土遺物が少ないため確実性は低いという前提の上で、遺物からそれぞれの土層の年代について考えてみたい。黒茶色土からは白磁、龍泉窯系青磁、同安窯系青磁などが出土している。陶磁器の出土傾向としては陶磁器 D 期であることを示している。土師器皿は少量のうえ破片のため明確ではないが、口径の縮小化と器高の扁平化が起きているため XV ~ XVI 期の幅を考えたい。瓦器碗の底部破片なども出土していることを考えると、総合的には西暦 1200 年前後の時期の遺物が整地土に入っていると理解できる。

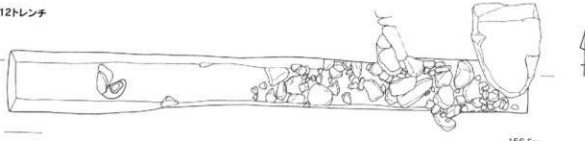
11 トレンチ東壁土層図



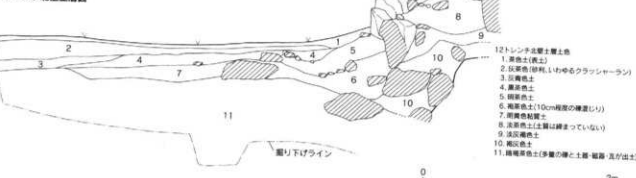
11 トレンチ東壁土層土

- | | | |
|---------------------|---------------------------|--------------------------------------------------------|
| 1 黄褐色土 | 11 灰黄色粘質土 (遺物が多量に堆積した層を要) | 21 褐色土 (南壁の遺物多量の埋没層を要) |
| 2 黄褐色土 | 12 黒灰色土 | 22 明褐色粘質土 (礎石 A2 に埋められた地山由来の礫土。礎石 A2 の黄褐色土と同一年代のものと考え) |
| 3 淡黄色粘質土 (炭化物を少量含む) | 13 褐色粘質土 | 23 黄褐色土 (遺物土に埋められた地山由来の礫土。礎石 A2 の黄褐色土と同一年代のものと考え) |
| 4 淡黄色粘質土 | 14 灰黄色粘質土 | 24 褐色土 (土層 13 以上堆積させた地山由来の礫土。礎石 A2 の黄褐色土と同一年代のものと考え) |
| 5 暗褐色粘質土 | 15 暗褐色粘質土 | 25 暗褐色土 (小穴埋) |
| 6 暗褐色粘質土 | 16 暗褐色粘質土 | 26 暗褐色土 (小穴埋) |
| 7 暗褐色粘質土 (礫を多く含む) | 17 暗褐色粘質土 (礫を多く含む) | 27 暗褐色粘質土 (黄褐色土に埋められた) |
| 8 暗褐色粘質土 | 18 暗褐色粘質土 | 28 暗褐色粘質土 (礎石 A2 の埋没層を要) |
| 9 暗褐色粘質土 (礫を多く含む) | 19 暗褐色粘質土 | 29 暗褐色粘質土 (礎石 A2 の埋没層を要) |
| 10 暗褐色粘質土 (礫を多く含む) | 20 暗褐色粘質土 (礫を多く含む) | 30 灰黄色粘質土 (地山) |

12 トレンチ



12 トレンチ北壁土層図



13 トレンチ北壁土層図

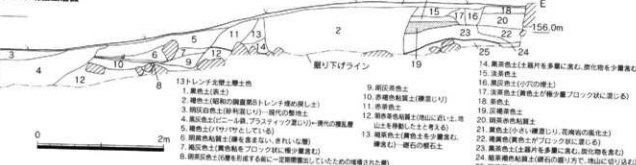
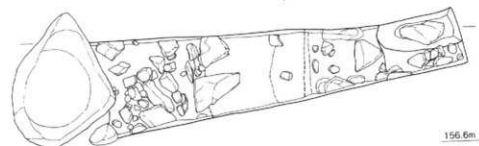
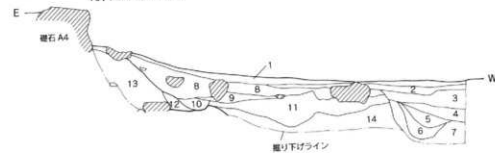


fig. 68 第 37 次 11 トレンチ東壁、12 トレンチ北壁土層・遺構実測図 (1/40)、13 トレンチ北壁土層実測図 (1/60)

13トレンチ

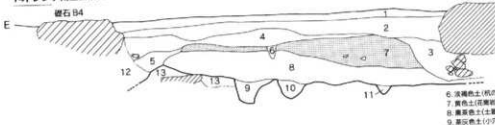


13トレンチ南壁土層図



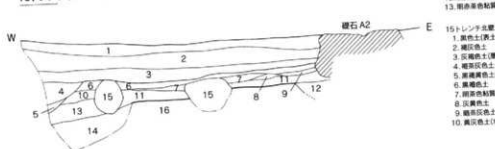
- 13トレンチ南壁土層土質
 1. 黄粘土(赤土)
 2. 黄粘土(赤利多層に黄土)
 3. 黄粘土
 4. 黄粘土
 5. 黄粘土
 6. 黄粘土
 7. 黄粘土
 8. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 9. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 10. 黄粘土
 11. 黄粘土
 12. 黄粘土
 13. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 14. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 ※15-1層は現代の堆積

14トレンチ南壁土層図



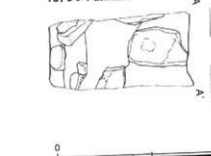
- 14トレンチ南壁土層土質
 1. 黄粘土(赤土)
 2. 黄粘土(赤利多層に黄土)
 3. 黄粘土
 4. 黄粘土
 5. 黄粘土
 6. 黄粘土
 7. 黄粘土
 8. 黄粘土
 9. 黄粘土
 10. 黄粘土
 11. 黄粘土
 12. 黄粘土
 13. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 ※15-1層は現代の堆積

15トレンチ北壁土層図

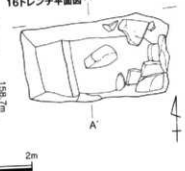


- 15トレンチ北壁土層土質
 1. 黄粘土(赤土)
 2. 黄粘土
 3. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 4. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 5. 黄粘土(少量の黒土を含む)
 6. 黄粘土
 7. 黄粘土
 8. 黄粘土
 9. 黄粘土
 10. 黄粘土
 11. 黄粘土
 12. 黄粘土
 13. 黄粘土
 14. 黄粘土
 15. 黄粘土
 16. 黄粘土(少量の黒土を含む)

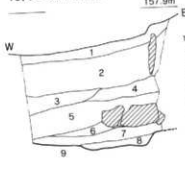
16トレンチ西壁土層図



16トレンチ平面図



16トレンチ北壁土層図



- 16トレンチ北壁土層土質
 1. 黄粘土(赤土)
 2. 黄粘土
 3. 黄粘土
 4. 黄粘土
 5. 黄粘土
 6. 黄粘土
 7. 黄粘土
 8. 黄粘土
 9. 黄粘土(少量の黒土を含む)

fig. 69 第37次 13・14トレンチ南壁、15・16トレンチ北壁土層、13・16トレンチ遺構実測図 (1/40)

暗茶色土については、陶磁器が出土しておらず土師器皿も細片のため、具体的な時期を設定することは厳しい。ただ、土層の切りあい関係より、礎石 A4 は礎石 B4 より後に築造されることは明白である。ただし、その時期差をどうとらえるかは今後の課題になる。

15 トレンチ (fig. 69, pla. 54 ~ 56)

調査区南部西側、礎石 A2 と礎石 B2 の間に設定した東西方向トレンチ。ここでは黄色土がまったく確認できない。土層 1 ~ 3 は後の堆積か、土層 4, 5 は礎石 A2 の掘方と考えている。土層 15 層は穴熊による擾乱である。土層 12 は礎石 B2 の掘方である。土層 6 ~ 13 は整地土と考えられる。

16 トレンチ (fig. 69, pla. 57 ~ 58)

調査区西部南側に設置したトレンチ。石列と U 字側溝の BOX のためここにしか設置できなかった。よって非常に狭い範囲となっている。トレンチの設置目的としては、礎石建物が建てられている平坦面と東側の丘陵との関係性を把握するために設置した。ここでは地山に直接掘り込み形で落ち込みが検出された。これを SD005 とする。SD005 については後述する。トレンチ内から石が多く検出されたが、これは現地表に露出している石列が崩壊して落ち込んだものと考えられる。この南北方向の石列の時期は不明だが昭和 36 年調査の段階ですでに確認されている。

検出遺構

建物

37SB010 (fig. 70, pla. 60 ~ 64)

標高 157m の平場に展開する南北方向に 7 × 5 間の礎石建物である。規模は 23.2 × 17.5m を測る。桁行の方位は N-12° 54' -W となり、西へ振れている。礎石群の一部が古くから露頭しており、注目をあつめていた。昭和 36 年に行われた小田富士雄先生の調査より、埋没した礎石を検出し直すと 5 間 × 7 間の巨大な礎石建物になることがわかった。礎石については、以下のことが上げられる。①礎石の有無について。礎石 A8 と、中央部の礎石 D4 ~ 6 については昭和の調査でも検出されなかった。②礎石 E1 は、露頭した巨石にそのまま南北方向への地覆層と円形のほぞ穴が穿たれている。③礎石 C3 で確認されていた平面方形のほぞ穴は東西方向 0.14m、南北方向 0.12m、深さ 0.03m を測る。今回、礎石 C4 を観察してみると、礎石の北東部に平面方形のほぞ穴らしきものを確認した。これは、東西長 0.12m、南北長 0.16m、深さ 0.02m を測る。礎石 C3 のほぞ穴と対応するものか。両方のほぞ穴の中心部の距離は 4m である。④礎石の表面は荒れているものが多く表面が剥離しているものがある。これらは火をうけたものか。

溝

37SD005 (fig. 69, pla. 57, 58)

16 トレンチで確認された南北方向の溝。東西幅 0.8m、深さ 0.05 ~ 0.1 m を測る。埋土は青灰色粘土。遺物は土師器の破片が少量出土している。破片の土師器の胎土や焼成から江戸期などの新しいものではなく、奈良 ~ 平安時代のもと思われる。溝の東側に石が検出されているが、これは地山に含まれるものである。37SD005 の役割としては、山手からの湧水を礎石建物の方に流さないための排水路であると考える。

その他の遺構

37SX003 (fig. 37, pla. 11, 13)

第 8 トレンチで検出された小穴。地山に直接掘り込み、直径 0.1m、深さ 0.09m を測る。埋土は黒茶

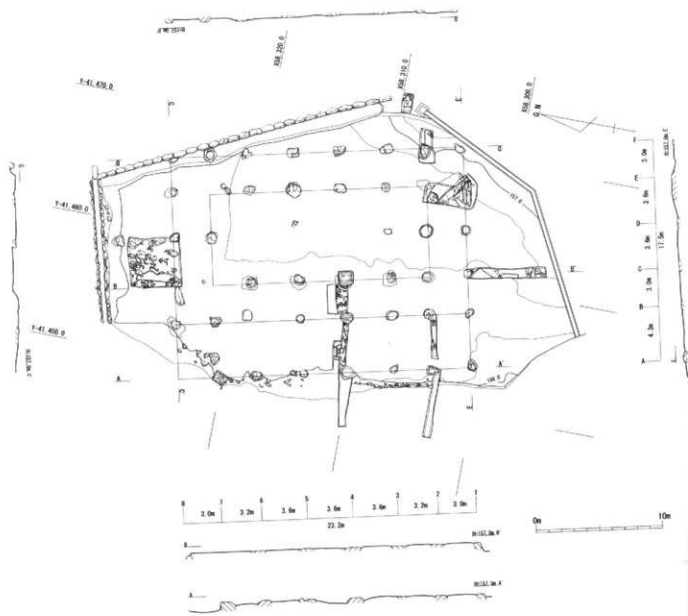


fig. 70 37S010 遺構実測図 (1/300)

37SX015

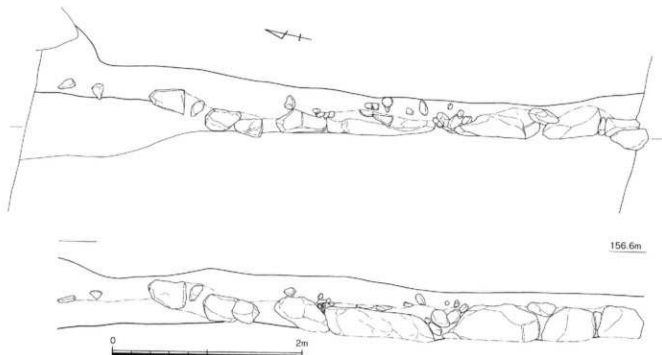


fig. 71 37SX015 遺構実測図 (1/40)

色粘質土。瓦器碗の口縁部が出土している。出土遺物から埋没年代は12～13世紀と考えられる。

37SX008 (fig. 37, pla. 52, 53)

第14トレンチで検出された小穴。地山に直接掘り込み、直径0.1m、深さ0.1mを測る。埋土は灰茶色土。出土遺物は無文の平瓦の破片。

37SX015 (fig. 71, pla. 59)

調査区南西部で露頭している南北方向の石列。現況では礎石A列の西側、おおよそ1mほどの距離に平行して存在している。横方向に長い花崗岩を組み合わせて土留めをしているものと思われる。ただし、その規格はまちまちで、幅0.6m、高さ0.4m程度の物から、幅1.1m、高さ0.4mのものも多様である。(高さは露出している箇所からの計測) 第12トレンチの土層観察の成果から、この石列は礎石A列を設置する際に斜面の土留めのために同時期に設置されたものと考えられる。ただし、この石列の設置時期については時代が新しいのではないかという指摘がある。理由としては、1. 礎石A列との距離が短い。2. 石列の配置が縦置きではなく横置きなので新しく感じる。3. 石列の石の雰囲気は新しい、等があがっていた。これらの指摘に関しては以下のように考えている。指摘1に関しては、福岡県久山町で最近発掘調査されて注目されている首羅山遺跡の本谷本堂跡の事例が参考になる。同時代の礎石建物の礎石と土留めの処理だが、37SX015の事例と比べても礎石と土留め石の間隔としては違和感はない。指摘2に関してはこれも首羅山の事例で横置きの事例を確認している。指摘3に関しては、見た目の印象よりも第12トレンチでの土層確認を優先して考えたい。ただし、石列の部分に後世の補修が入って、ちぐはぐな印象になっている可能性もある。

(4) 出土遺物

その他の遺構出土遺物

37SX003 出土遺物 (fig. 72, pla. 109・110)

瓦器

碗 (1) 口縁部の破片。内面は摩耗しており調整が不明。口縁端部が黒色化している。

37SX008 出土遺物 (fig. 72, pla. 109 ~ 110)

瓦

平瓦 (2) 側縁部の小破片。縦 9.8cm、横 7.9cm、厚み 2.2cm。凹面に布目痕、凸面はナデ消し。

第 3 トレンチ表土出土遺物 (fig. 72, pla. 109 ~ 112)

肥前系染付

碗 (3, 4) 3 は口縁部破片。外面にやや暗い呉須で絵付けをする。4 は高台部破片。高台部外面に呉須で二条の細い圈線を施す。高台の畳付部は軸を掻き取っている。

瓦

丸瓦 (5) 側縁部破片。側縁部はヘラ切りによる分割界面のあと割られて未調整。凹面は粗い布目痕で、一部ナデている。凸面は格子目叩きが施された後にナデ消されている。格子目叩き分類 I-Bc 類。

金属製品

壺 (6) 銅製品。口縁部の破片。緑青をふいている。色調は暗黒色。口縁端部は丁寧に研磨している。

第 3 トレンチ出土遺物 (fig. 72, pla. 109 ~ 112)

土師器

坏 a (7) 復元口径 14.6cm、器高 2.9cm、復元底径 10cm。底部は回転糸切り技法。色調は淡黄褐色。XVI 期に属するものか。

瓦質土器

火鉢 (8) 口縁部破片。体部は直立ぎみに立ち上がり、口縁外面は丸く肥厚する。全体的に摩耗しているが、内面にはカキ目が残る。破片の下部は透かし窓のための削りが施されている。色調は暗灰色。焼成は良好。

陶産陶器

鉢 (9) 口縁部破片。口縁端部は折り曲げて玉縁状を呈する。軸は自然軸のような灰茶褐色に発色している。

瓦

平瓦 (10, 11) 10 は凸面に格子目叩き。凹面に布目痕。焼成は良好で、須恵質。側縁部はヘラ削り調整を施す。格子目叩き分類 I-Bc 類。11 は凹面が剝離によって調整が不明。凸面は細長い格子目叩き。格子目分類は I-D 類。側縁部は切断のための切りこみを入れてから割っており、その後未調整である。金属製品

釘 (12) 釘の一部で上下両端は不明。現在長は縦 2.2cm、横 0.5cm、厚さ 0.45cm。

石製品

砥石 (13, 14) 13 は砂岩製。色調は乳白色～黄褐色。図上下部の平坦面以外はすべて使用されている。縦 8.7cm、横 5.3cm、厚み 2.6cm。14 は砂岩製。色調は乳白色～黄褐色。現存長縦 8.5cm、横 6.7cm、厚み 2cm を測る。全面を使用しており、とくに幅広い平坦面にはとががついたものを研磨したためか溝状に彫り込んである。

第 5 トレンチ出土遺物 (fig. 72, pla. 111 ~ 112)

瓦器

碗 (15) 口縁部破片。全体が摩耗している。焼成は不良。残存長 2.9cm。

第 7 トレンチ出土遺物 (fig. 72, pla. 111 ~ 112)

須恵器

坏 (16) 口縁部破片。焼成・還元ともに良好。色調は暗灰色～黒灰色。

坏×皿 (17) 口縁部破片。色調は淡褐灰色。

皿 (18) 口縁部破片。色調は淡褐灰色。胎土は密だが、0.5mm 未満の砂粒をごく少量含む。

石製品

滑石製石鍋 (19) 縦 1.9cm、横 6.7cm、厚さ 0.9 ~ 1.0cm を測る。断面などを削り、二次加工を行われている。

第 8 トレンチ出土遺物 (fig. 72, pla. 111 ~ 112)

須恵器

坏 a (20) 底部破片。底部ヘラ切りのちにナデ。器高 1.5cm。

壺 (21) 体部破片。内面不定方向へのナデ調整、外面はヨコナデ後にナデ調整を施す。外面に指頭圧痕が見られる。色調は淡灰色。胎土は 1.5mm 以下の口黄色砂および、炭化物粒子を含む。焼成・還元ともに良好。

肥前系染付

碗 (22) 口縁部破片。内外面に淡灰青色の呉須で絵付けをする。

瓦

平瓦 (23) 凹面は細かい布目痕をナデ消し、凸面は格子目叩きを施す。格子目叩き分類 II-Cc 類。

第 9 トレンチ表土出土遺物 (fig. 72, pla. 111 ~ 112)

土師質土器

七輪 (24) 口縁部破片。口縁部は逆し字形を呈し、内側に突出する。端部は丸みをおびる。端部外面には幅 4mm 程度の太い沈線を施す。色調は淡褐灰色～褐灰色。胎土は密で、0.5mm 未満 ~ 1.5mm 程度の砂粒を少量含む。焼成は良好。

第 9 トレンチ茶色土出土遺物 (fig. 72, pla. 111 ~ 112)

金属製品

釘 (25) 縦 4.1cm、横 2.1cm、厚み 0.5cm。錆びに覆われていない部位での釘の大きさは、一辺が 0.4cm の断面四角形を呈す。

第 9 トレンチ褐色土出土遺物 (fig. 72, pla. 111 ~ 114)

土師器

小皿 a (26, 27) 26 は復元口径 8.8cm、器高 1.05cm、復元底径 7.1cm。底部切り離し技法は不明。27 は口縁部破片。口縁部端部周辺が帯状に黒色化しており、灯明皿として使用されたと推測される。

須恵器

壺 (28) 口縁部破片。口縁は外反し端部をやや下方向に肥厚させている。

須恵質土器

捏ね鉢 (29) 体部破片。外面はヨコナデ調整。内面は使用により摩滅して平滑になっている。

金属製品

鉄釘 (30) 縦 4.3cm、横 1.9cm。釘本体は断面四角形で一辺が 0.4cm を呈す。

土製品

土鈴 (31) 残存率は約 1/2。縦 4.0cm、横 2.7cm、厚さ 0.4cm。上部に直径 0.5cm の穴が穿たれている。

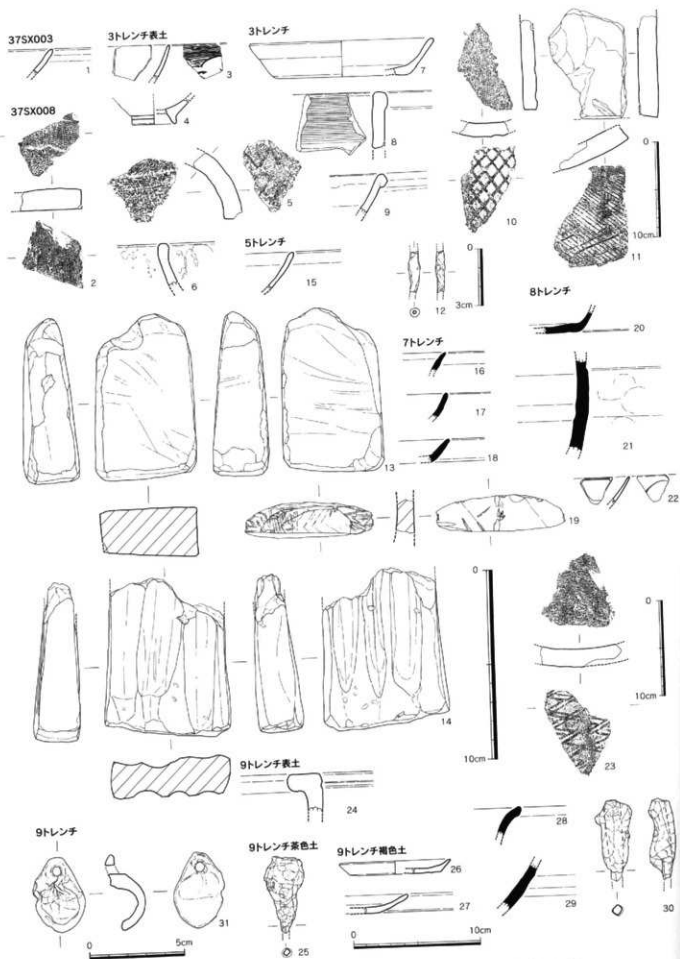


fig. 72 37SX003・008、3トレンチ、3トレンチ表土、5・7・8・9トレンチ、
9トレンチ表土・茶色土・褐色土出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

体部は空洞で、内面には成型時のしぼり痕が確認できる。色調は淡褐色。胎土は密で、0.5mm未満の白色粒子がわずかに見られる。焼成は良好。

第10トレンチ表土出土遺物 (fig. 73, pla. 113・114)

国産磁器

紅皿 (1) 型整形による紅皿の身。口径4.2cm、器高1.2cm、底径1.2cm。

国産陶器

皿 (2) 復元口径10.1cm、器高2.1cm、復元底径5.2cm。底部へら削り。釉は掛かっている。色調は淡靑乳白色。体部の内外面ともになめらかに研磨されている。

瓦 (3) 棧瓦の一部。色調は黒灰色。胎土は密。焼成・還元ともに良好。

第10トレンチ出土遺物 (fig. 73, pla. 113・114)

須恵質土器

握ね鉢 (4) 口縁部破片。上部は欠けている。色調は灰色だが、口縁部下半から黒灰色変している。重ね焼きの痕跡か。東播系握ね鉢の可能性ある。

肥前系染付

坏 (5) 底部破片。底部は削りだし高台。外面に呉須で絵付される。畳付部の釉は拭き取られている。瓦

棧瓦 (6) 縦9.4cm、横12.1cm、厚さ1.5cm。凹面に縦方向の押し型を施す。滑り止めのためか。

第11トレンチ表土出土遺物 (fig. 73, pla. 113・114)

金属器

鉄釘 (7) 縦2.0cm、横1.65cm、厚さ1.2cm。釘本体の断面形は四角形であり、一辺0.5cm。

第11トレンチ灰色粘質土出土遺物 (fig. 73, pla. 113・114)

肥前系染付

湯呑み茶碗 (8) 器高3.6cm、底径4.22cm。外面に呉須で絵付を施す。

国産陶器

華瓶 (9) 底部破片。器高2.9cm、復元底径8.5cm、底部糸切り。素地の色調は暗灰赤色、淡灰褐色の0.5mm大の砂粒をわずかに含む。釉調は鈍い茶赤色。

第11トレンチ褐色土出土遺物 (fig. 73, pla. 115・116)

瓦

平瓦 (10～13) 10は凹面に布目痕、凸面はナデ消しで無文。縁辺部に、切断のための切りこみがあり、割れている箇所は無調整。11は凸面、凹面ともにナデ消しを行われており調整不明。焼成は良好で瓦質。側縁部は削り調整。12は凹面布目痕跡が残り、凸面には綱目叩きを施す。焼成は良好で、焼き締まり瓦質。網目1類。13は凸面に格子目叩きを施す。格子目叩き分類I-Cc類。

丸瓦 (14) 内面布目痕跡、凸面は無紋。側縁部は半分程まで切りこみを入れたあとに切断しており、切断面は無調整。

石製品

滑石製石鍋 (15) 縦4.4cm、横4.95cm、厚さ1.5cm。破片の二次加工品。

棒状加工品 (16) 縦11.8cm、横3.8cm、厚さ2.3cm。調整して平坦面を作り出していると考えられるが、使用目的は不明。石材は雲母片岩。

金属製品

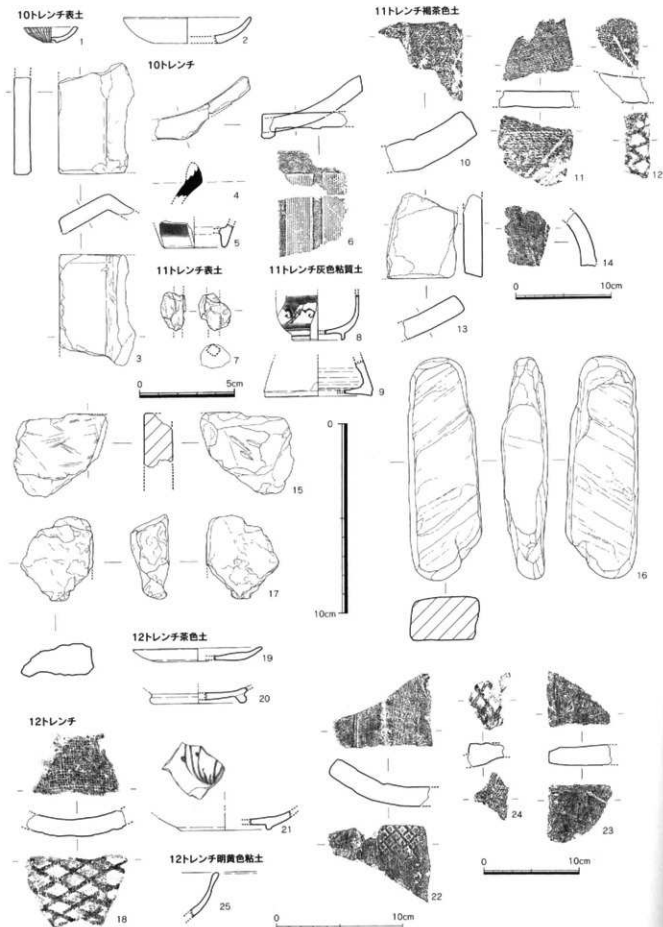


fig. 73 第37次10～12トレンチ出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

鉦澤 (17) 縦4.4cm、横3.8cm、厚さ2.0cm。全体的に淡茶色、部分的に黒茶褐色を呈す。

第12トレンチ出土遺物 (fig. 73, pla. 117～118)

瓦

平瓦 (18) 凹面、布目痕あり。凸面は格子目叩きを施す。格子目叩き分類 I-Cc 類。焼成は良好だが、還元が不良のため土師質の焼き上がりを呈す。

第12トレンチ茶色土出土遺物 (fig. 73, pla. 117～118)

土師器

小皿 a (19) 復元口径 10.2cm、器高 1.05cm、復元底径 7.7cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。器壁全体が摩耗しており、調整は不明瞭。XIII 期。

坏 c × 碗 c (20) 底部破片。やや外に張る貼り付け高台。底部は回転ヘラ切りをされる。焼成はやや不良。断面の色調は、中心部が暗灰色～灰色で、表面は淡灰茶褐色を呈す。

肥前系染付

皿 c (21) 器高 1.5cm、復元底径 7.2cm。内面に淡青色の呉須で絵付けをする。畳付部は軸を掻き取っている。

瓦

平瓦 (22, 23) 22 は凹面に布目痕跡があり、一部抜き紐の痕跡が確認できる。凸面は格子目叩きの跡にナデ消している。焼成は良好で瓦質を呈す。格子目叩き分類 I-Ab 類。側縁部はヘラ切り。23 は端面破片。凹面ナデ消し、凸面もナデ消しだが、端面に近い 2cm ほど細かい布目痕跡確認できる。

丸瓦 (24) 玉縁部近辺の破片。凸面に格子目叩きを施す。格子目叩き分類 I-Cc 類。

第12トレンチ明黄色粘土出土遺物 (fig. 73, pla. 117～118)

土師器

丸底坏 a (25) 口縁部破片。器壁は摩耗により調整が不明。器高 3.6cm。

第12トレンチ暗褐色土出土遺物 (fig. 74～75, pla. 117～126)

土師器

小皿 a (1, 2) 1 は復元口径 9.2cm、器高 1.2cm、復元底径 8.2cm。底部糸切り後に板状圧痕。XVI 類。2 は復元口径 10.4cm、器高 1.2cm、復元底径 7.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。やや口径が大きいが、口縁部がやや外反ぎみに開き扁平化していることから XVI 期と考えられる。

坏 a (3) 器高 1.4cm、復元口径 9.6cm。底部の切り離し技法は回転糸切り。胎土は砂粒を少量含む。碗 c × 皿 c (4) 貼り付け高台。器高 2.0cm。色調はやや鈍い褐色。

瓦器

碗 (5, 6) 5 は口縁部破片。器高 2.65cm。器壁は内外面摩耗して調整は不明。色調は内外面ともに灰白色。口縁部付近は暗灰色。胎土は密。焼成は不良。6 は口縁部破片。器高 4.7cm、内面にミガキ c がわずかに残る。

須恵器

蓋 (7) 体部破片。器高 4.0cm。内外面に回転ナデ調整を施す。

甕 (8) 体部破片。器高 5.6cm。内面は回転ナデ調整。外面は叩き目調整。焼成は良好。須恵器土器

握ね鉢 (9) 口縁部破片。直線的に立ち上がり口縁部を外側に折り曲げて外面に帯状の縁を巡らす。東播系握ね鉢か。

軒丸瓦(10) 瓦当面の破片。焼成は不良。単弁素弁。中房1+7の蓮子。外区に内縁尾のついた珠文が巡る。九歴分類066。

丸瓦(11) 11は縦12.1cm、横11.2cm、厚み2.1cm。凹面には布目痕跡があり、それには布を重ねた痕跡が観察される。凸面は格子目叩きのあとにナデ消されている。格子目叩き分類I-Cb類。

平瓦(12~24) 12は側縁部破片。厚みが1.5cmとやや薄い。凸面に格子目叩きを施し、部分的にナデ消す。格子目叩き分類I-Ab類。13は側縁部破片。分割界線の下半は未調整。内面は布目痕。凸面に格子目叩きを施す。格子目叩き分類I-Ca類。14は小破片。凸面に格子目叩きI-Cb類。15は凹面に布目痕、中央に布重ね痕が見られる。側縁部は分割界線が認められ、下半は未調整。凸面は格子目叩きを施す。格子目叩き分類I-Cc類。16は小破片。格子目叩き分類I-Cc類。17は端面を削り調整し、側縁部は分割界線が認められる。残りは未調整。凸面に格子目叩き後にナデ調整。18は凹面に布目痕跡が残るが、直軸方向のケズリにより残存が悪い。凸面には格子目叩きが施される。格子目叩き分類I-Cc類。22は凹面の摩滅により調整の観察が不能。凸面はナデ調整により不明。19は凹面に布目痕あり、凸面に格子目叩き。格子目叩き分類I-Cc類。20は凹面に細かい布目痕あり。凸面は格子目叩きを施す。格子目叩き分類は11-A類。21は凹面布目痕、凸面は格子目叩きを施す。格子目叩き分類では、I-Aa類。22は、凸面はナデ消しおろし、詳細は不明。23の凸面はナデ調整をている。24は凹面に粗い布目痕跡、凸面はナデ消しにより不明。

石製品

滑石製石鍋(25、26) 25は、縦5.9cm、横7.4cm、厚さ2.3cm、重さ241.3gを測る。鐔の下半を再加工している。石鍋分類11I-a類。26は、縦2.9cm、横11.0cm、厚さ4.2cm、重さ167.2gを測る。口縁部に瘤状把手がつくタイプか。石鍋分類11類。

滑石製板状石製品(27) 縦8.3cm、横9.0cm、厚さ2.25cm、重さ318.8gを測る。下半部を欠損しているが、全体としては長方形を呈す板状のものになると推定される。中央やや上端よりに直径7~11.0mmほどの孔を穿っている。表面はケズリ加工を施し平滑に仕上げている。色調は淡灰色~灰黒色~黒灰色。参考遺物として、大宰府条坊跡第224次調査灰黄色土から出土した滑石製板状石製品(同報告書内Fig. 91-34)があげられる。こちらはほぼ完形で、縦11.1cm、横9.1cm、厚さ2.0cmを測り、全体の1/5にあたる上端側に穿孔が施されている。両者とも寸法的にも同じ規格であることがわかる。孔が穿たれていることから紐を通し吊り下げて使用したことが想定される。分銅として計量に使われたものと考えている。

第13トレンチ出土遺物 (fig. 75, pla. 127・128)

国産陶器

鉢(28) 底部破片。器高2.5cm、色調、暗茶褐色。艶がない自然釉が認められる。底部はナデ調整。内面は表面が使用時の摩滅により調整が不明。

瓦

平瓦(29、30) 29は凹面に布目痕跡、凸面に格子目叩きを施す。側縁部はケズリ調整。格子目叩き分類はI-Cc類。文字瓦「つ」。30は側縁部破片。凹面にわずかに布目痕跡、凸面は摩耗により調整不明。

第13トレンチ暗茶黄色土出土遺物 (fig. 75, pla. 127・128)

土師器

小皿c(31) 復元口径7.2cm、器高1.8cm、復元底径5.2cm。器壁が摩耗しているため調整は不明。色調は淡褐橙白色。焼成は不良。

12トレンチ暗茶褐色土

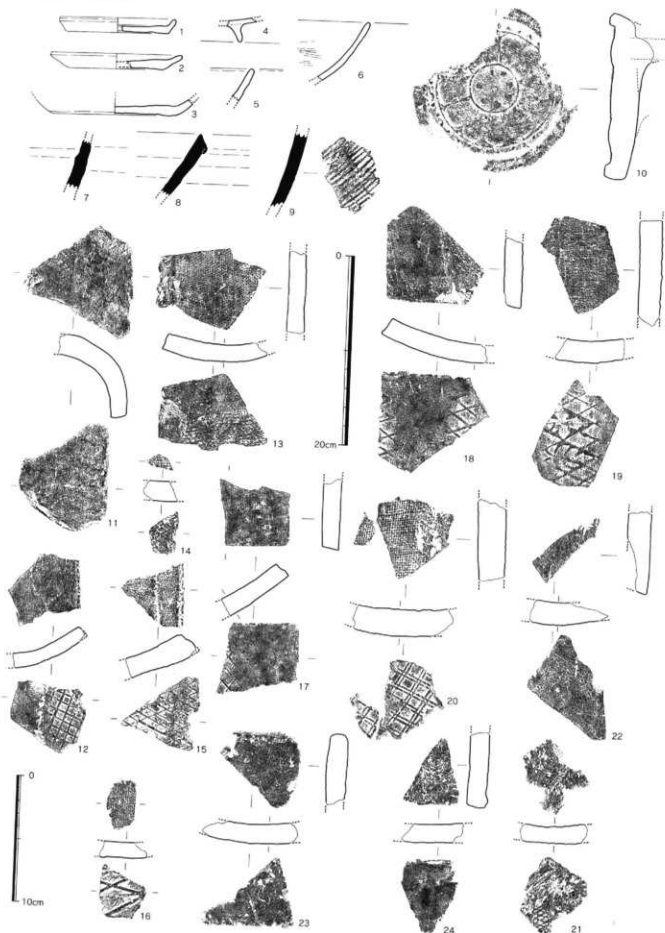


fig. 74 第37次12トレンチ暗茶褐色土出土遺物実測図 (1/3, 1/4)

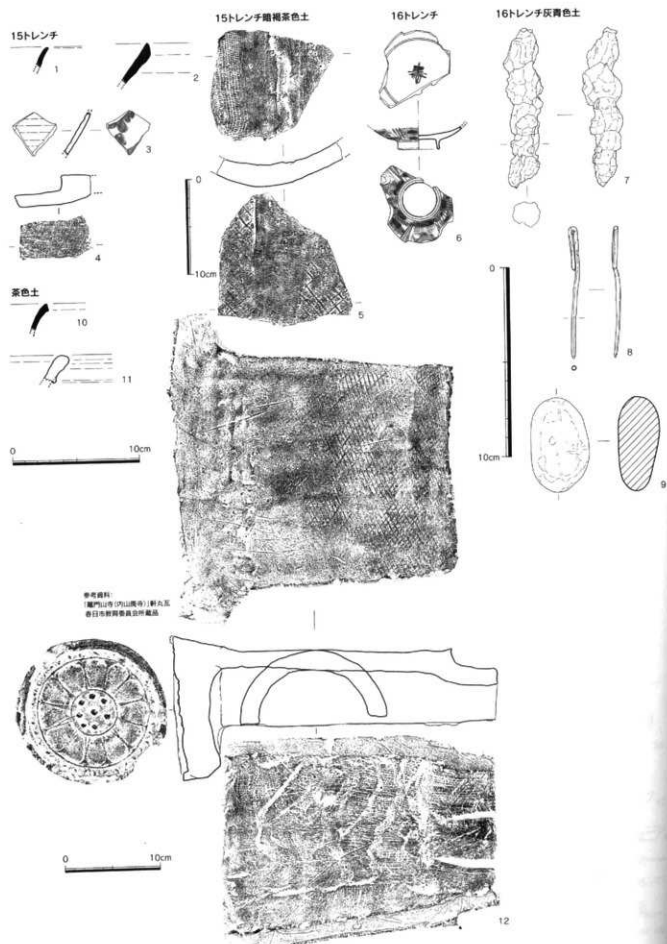


fig. 76 第37次15トレンチ、15トレンチ暗褐色茶色土、16トレンチ、16トレンチ灰青色土・茶色土出土遺物実測図(1/2、1/3、1/4)、参考資料実測図(1/4)

須恵質土器

捏ね鉢(2) 口縁部破片。口縁部をやや三角形きみに肥厚させている。国産陶器

壺(3) 体部破片。外面のみ施釉。暗茶色～黒茶色の呉須で絵付けされる。瓦

丸瓦(4) 玉縁部の破片。凹面は細かい布目痕、凸面はナデ消しにより無紋。焼成は良好で、須恵質に焼き上がっている。

第15トレンチ出土遺物 (fig. 76, pla. 131・132)

瓦

平瓦(5) 凹面は布目痕と粘土の接合痕が確認できる。凸面は格子目叩き後にナデ調整。格子目叩き分類I-Bc類。焼成・還元ともに良好。須恵質。

第16トレンチ出土遺物 (fig. 76, pla. 131・132)

肥前系染付

椀(6) 底部から体部までの破片。内面中央に「壽」を呉須で絵付けし、見込み部に圓線を二重に回す。外面は草花文を絵付けしている。外面は高台内まで施釉するが、疊付部は釉を掻き取っている。

第16トレンチ灰青色土出土遺物 (fig. 76, pla. 131・132)

金属製品

釘(7) 縦8.4cm、横2.1cm、厚み1.4cm。

ピン状製品(8) 縦7.0cm、横0.5cm、厚み0.2cm。先端の2cmほどを折り返して重ねている。全面に淡緑灰色の緑青をふいている。銅製。

石製品

不明製品(9) 縦5.0cm、横3.1cm、厚み2.2cm。丸みを帯びた小石だが、表面に火を受けており、その箇所は黒茶色を呈す。

茶色土出土遺物 (fig. 76, pla. 131・132)

須恵器

甕(10) 口縁部破片。器高2.2cm。焼成・還元良好。国産陶器

壺(11) 口縁部破片。器高2.2cm。端部は丸みを帯びており、外面の口縁部直下には突帯状の膨らみが見受けられる。内外面に暗茶褐色の光沢のない釉が施される。

参考資料：「龍門山寺(内山庵寺)」軒丸瓦 (fig. 76, pla. 133・134)

瓦

軒丸瓦(12) 春日市教育委員会所蔵の資料である。来歴は明らかではないが、「龍門山寺(内山庵寺)」出土とされている。長さ34.2cm、幅15.4cm、瓦当面積15.3cm²。胎土は2～3mmまでの白色砂粒を多く含む。焼成は良好で硬質で須恵質である。色調は灰～白灰色。凹面には目の粗い布目の圧痕が認められ、凸面には斜格子の格子目叩きを施す。格子目は線が細めで、小口側は格子の目は均等だが、反対側は片側の線が省略されている特徴がある。I-Ca類で、E群ととらえられる。瓦当は、九塵分類066類。

(5) 小結

37SB010について、確認トレンチの成果を元に以下の点についてそれぞれ記述してみたい。

1. 造成について

A 造成計画とその時期について

この礎石建物が立地している土地は、山の中原標高157mの場所にあるため、東から西へ下る緩やかな緩斜面となっている。現地は現状では1000㎡近く平坦面が広がっているが、これらは礎石建物をつくるための整地だと考えられる。今回の確認トレンチ(8、14、15)で判明したことが、少なくともC列から西側の礎石は特殊な据えられ方としていると考えられる。この巨大な礎石建物を支えるための礎石を据えるためには、本来の古代寺院などでは地行や盛り土をしてそれらを叩き締める、いわゆる版築工法が使われることが多い。しかし、この37SB010ではその逆で、8トレンチの東側土層をみると顕著だが、柱状工法ともいえるような作り方をしている。これは、地山に目印となる浅い穴を掘り、まず礎石の位置決めをしておいてから、東側の地山に据え置いた礎石の上面レベルに合わせて西側の低くなっていく地山との差を埋めるように小規模な盛土と栗石を入れて根石固めをしていくものである。そうして礎石の位置決め、レベル合わせをしたのちに、黒茶色土を全面に0.3mほど敷き詰めて基礎土としている。しかしながら、この土は包含層と見間違える程でまったく締まっていない。その上には黄色土(真砂土)を化整土として入れている。この黄色土の厚さだが、本来はおおよそ0.35mほどあり礎石の面からくまで覆っていたと思われる。近世以降、この土は攪乱をうけてかなり場所が削られたか流れてしまっている。礎石の位置決めの際に地山の巨石に当たってしまったE1地点に関しては、そのまま柱穴と地覆層を岩に彫るなど、現地での自然地形に逆らわない臨機応変さがみえてくる。

昭和の調査でも指摘されていたことに、礎石A列の存在がある。礎石の配置からすると長尺な配置となっていることから、この礎石建物に伴うものかどうかという指摘があった。今回の調査の第14確認トレンチで、先述の黄色土層を切り込んで礎石Aが据えられているのが確認できた。これにより、礎石A列は少なくともB列より東の礎石より後出することがわかった。時期については本文中でも触れたが、整地土の黒茶色土の出土遺物は、輸入陶磁器(龍泉窯系青磁1類、同安窯系青磁陶)よりD期と考えられる。礎石A列がのる土層として第14トレンチの暗茶色土、第12トレンチの暗褐色土の出土遺物のみをみると、輸入陶磁器の種類よりD期と考えられる。つまり、礎石A列の造作はさほど時期差がない可能性がある。

造営に関連してだが、調査区南西部隅で大規模な整地が確認できた。昭和の調査では第4トレンチで地表面から1.2m下がったところでも黒色土層が確認され、格子目瓦と七師皿(XIV~XV期)が出土している。地山は地表面から1.8mさがって確認されている。今回の調査では、12トレンチでも深さ0.9m以上まで暗褐色土(陶磁器D期=12世紀後半~13世紀初頭)が堆積しており、これらは相互に関連して考えられる。自然地形では調査区の南西方向へ向かって急激に落ち込んでおり、37SB010を現地に造営する際の周辺地の整地として、南西部は埋められたと考えている。

まとめると、礎石建物37SB010は自然地形を埋めておおまかな整地をした後に、礎石の上面のレベルを合わせるために柱状に基礎地行を行い、12世紀末から13世紀初頭に降に建てられた。西側端の1列は後で追加されたことは間違いないが、時期差があったかどうかは出土遺物からは確認できなかった。施工の工程差の問題ではほぼ同時に造られた可能性も十分ある。

B 造営の範囲

まず東限だが、これは37SD005とした東側の溝である。これを山手と建物との間の排水施設として考えた。次に南限は、第11トレンチで確認された整地土層の範囲までである。整地層の南端は礎石C1より約4.4mを測る。この整地層の南側には土層で確認しているが、土層21(fig.68)とした白色砂層が

ある。これが水の流れて堆積したものと仮定するならば、ここに溝状のものが東西方向に走っていたと考えられる。遺構の性格とすれば、37SD005と同様に山からの雨水を排水するものであったであろう。よって、これを南限の可能性の1つとしてあげておきたい。礎石C1からの地積層の中心までは5mである。西限は本来、礎石A列の雨落ち溝が存在していればそこにならうが、現状では確認できない。よって、37SX015とした礎石A列に伴う石列が範囲になると考える。北限については昭和の調査で推定された雨落ち溝が今回の第9トレンチで否定されたため、現状では判別が難しい。北側の参道とのレベル差が0.6m以上あるため、これが37SB010の基礎として残存している可能性も考慮すると、現況の参道溝までを範囲としておきたい。まとめると、南北長34m、東西長22mの範囲が礎石建物の造営範囲と言えよう。また、この造営範囲は周囲から1.1mほど、整地により盛土されており、これがいわゆる龜籠(ここでは白漆喰は出ていない)に相当する建物の基礎となっていたと推定している。

2. 建物のプランについて

a. 礎石の検討 現存する礎石には柱座が彫り込まれているものとそうでないものがあるが(tab.24(CD収納)を参照のこと)、明確な規則性は見いだせない。して言えば、南西部と中心部に比較的多いという印象である。地覆層としては、礎石E1と礎石E4、E5があげられる。礎石E1は東西方向、礎石E4、E5は東向きに南北方向に地覆層が掘られている。これらの情報から身舎に関しては、上間構造であったと推定できる。黄色土とした化整土は全面に敷かれていたと推定しているが、本来はその黄色土の上にcmの厚みで白色細砂粒などを敷き詰めていたと考える。残念ながらそれらは流されたか、削られており、土間自体は残っていない。

b. 礎石の被熱範囲 被熱したと思われる礎石はTab.24(CD収納)にまとめている。これをみると規則性は認められない。ただ、礎石建物の廃絶を考える上では参考になる。

c. A列礎石の時期と性格 先述した通り、第13・14トレンチの土層を検討した結果、従来想定していた当初施工された建物の少し時期において、礎石A列を継ぎ足したという考えより、先後関係はあるが、作業行程上の問題であったと考えている。礎石ABの間が他に比べて広いのは、礼堂(向拝)空間の確保のためだと推定したい。礎石AB列間に雨落ちに関係する遺構が確認できていないという点で当初から礼堂を設定していたと考えている。

d. 礼堂について 礼堂とは正堂(仏像や曼荼羅を安置している)に対して、礼拝者が使用するための施設である。本来は双堂と呼ばれ奈良時代から存在しているもので、正堂に対して別棟として棟を平行させて軒を接して並ぶものであった。平安時代になると寺院の主要建築に礼堂が付加されるようになる。これは軒を接した特徴であり、仏教建築上からは大きな変化である。時代が下って中世段階には1つ屋根の下で一連のものとして建てられて密教本堂形式として完成する。この流れとは別に、奈良の當麻寺本堂(曼荼羅堂・国宝)などは前面に孫庇をつけて、これを礼堂にしていたものもあった。すくなくとも、當麻寺本堂では永暦2(1161)年以前には5間4面の全面に孫庇を付けた形式であったことが解体修理で確認されている。(註1)37SB010は當麻寺本堂と同様の正堂に1間の孫庇を付けた形式と考える。これを踏まえて考えると、中央で発展したこうした本堂形式が宝満山天台宗下での礎石建物の建造において、大いに参考にされたものと思われる。建物の規模もfig.77で比較するとわかるが、古代寺院の講堂、金堂級の大さきであり、同時代のものとしてはかなり大きいものであったことがわかる。

3. 建物の性格について

先述の通り、37SB010は5間×7間の礎石建物で、西側1間分の礼堂をもつ密教的寺院本堂形式に則り建てられたものと推定できる。確認調査での限界として、上部構造には踏込みがない。出土遺物から

造営年代は1200世紀を前後する時期であろう。内部構造としては2間×5間が内陣となり、礎石D・E、3～6の間に須弥壇が構築されて仏像が置かれていたと推測される。(註2)

4. 建物の出入りについて

現在の地形などから、礎石建物37SB010には西側から入るのではなく、南側の礎石A・Bあたりから入っていたと考えられている。(註3) そこに至る経路についてはFig. 124で図示されているように仏像などが推定されている南側の細い路地を通ってくることになり、5mほど低いところから徐々にせり上がって建物が見えることになり、礎石建物の威容をより強調することになったと思われる。(註4)

註

- 『文化財講座日本の建築2 古代Ⅱ・中世Ⅰ』文化庁監修1976年 第一法規
- そのため、礎石D4、D5に関しては当初より礎石は存在しなかったと思われる。礎石D6に関しては根石の存在が昭和の調査で確認されていることから礎石の抜き取りをされていると考える。
- 現存の建物で参考になるのは、奈良県室生寺金堂への入り方があげられる。
- 礎石建物の南西部から西側にかけては現代の盛土により高くなっているが、本来は高低差がある崖であったとのこと。(調査現場時に現場南西地に在住の松田廣美氏より聞き取りを行った)

参考文献

- 『宝満山の地宝』小田富士雄編1982年 財団法人太宰府顕彰会
 『宝満山及び龍門神社周辺の遺跡分布調査報告書』小西信二編1984年 財団法人太宰府顕彰会

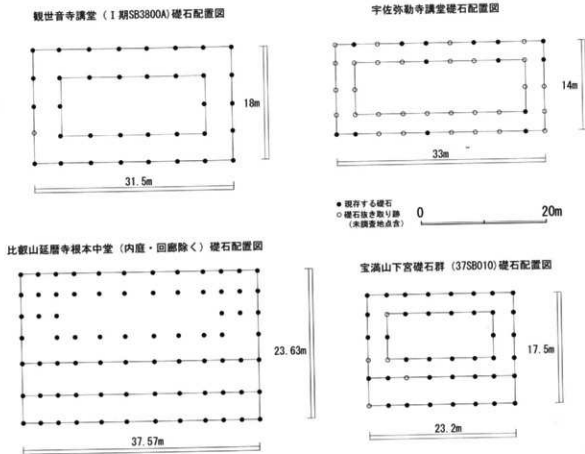


fig. 77 堂舎比較図

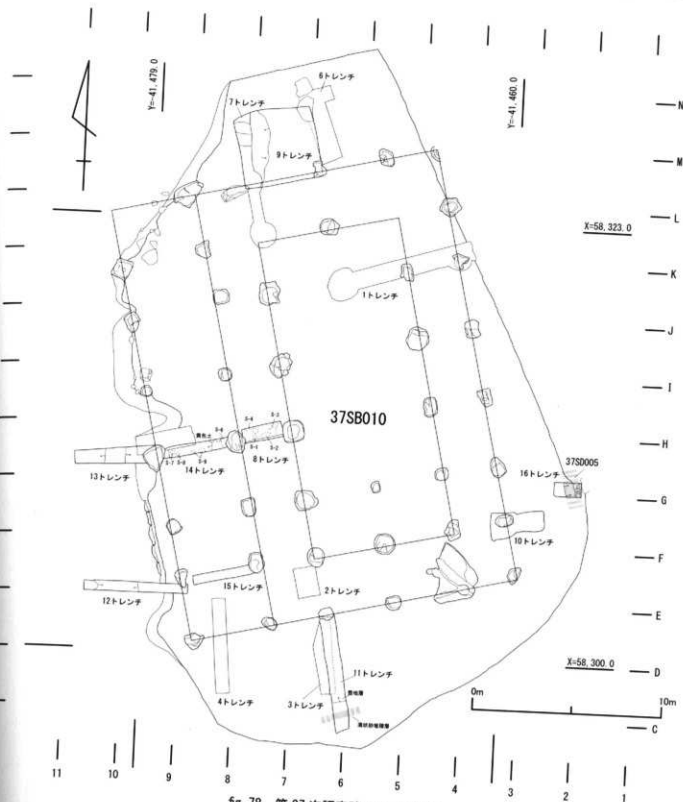


fig. 78 第37次調査略測図 (1/200)

tab. 11 第37次調査 遺構番号台帳

点番号	遺構番号	種別	備考	埋土状況(有/無)	遺構形状(長×幅)	遺構出	時期	地区番号
1		本穴						
2		石室						
3	37SB003	小穴						07
4		小穴						07
5	37SB006	礎						07
6		土盛り	土盛り(礎石)					07
7		小穴						08
8	37SB008	小穴						08
9		小穴群						08
10	37SB010	礎石建物						08
11		文庫	本堂×了園					08
12		文庫						08
13		文庫						13 群配跡南
14		文庫						08~14
15	37SB015	石刻						13 群配跡南
								08~10

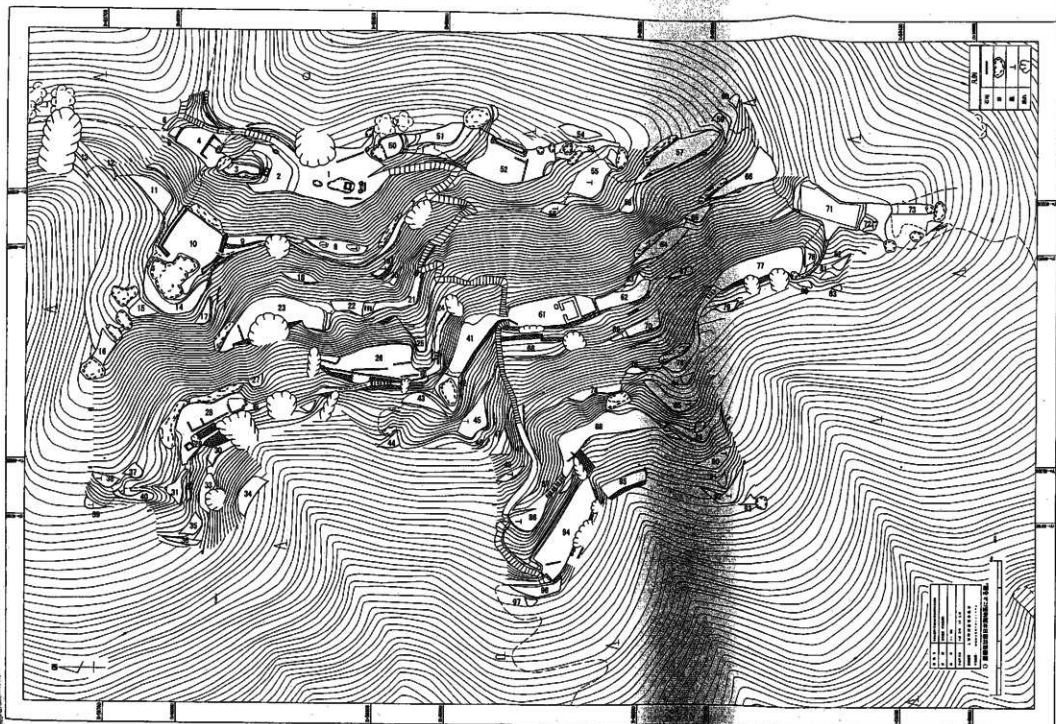


Fig. 80 第38次調查地形測量圖 (1/1000)

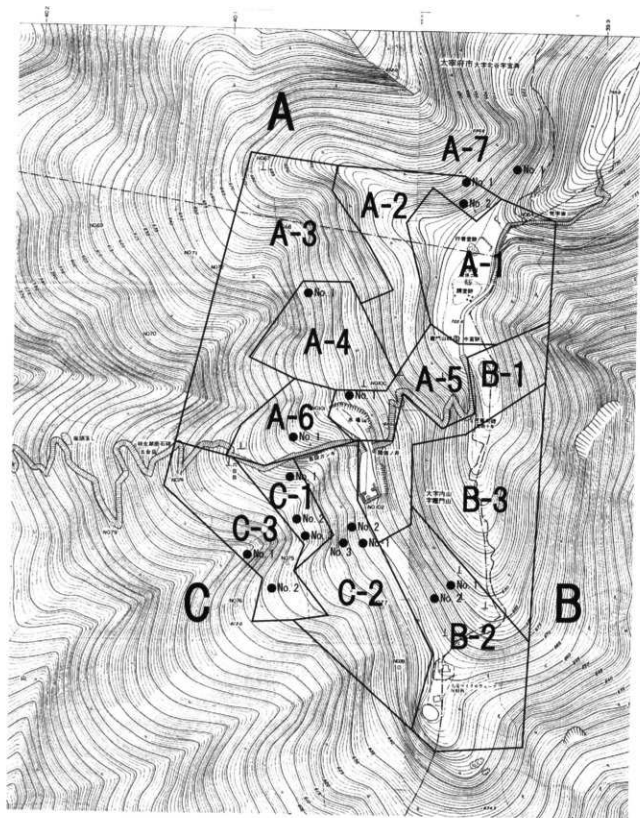


fig. 81 第38次調査地区割付図

中宮の梵字磨崖のある面4の直下に当たり、不明瞭ながら面11から13までがあり、その先は土砂流出でかなり乱されている。明梁付、土師器坏、須惠器小壺、土師質土器火鉢などの破片が採取されている。

さらにその群の西下方には通路21に連なる22、23の面がある。22の南側は石を並べた階段があり、23は長辺41m、短辺10mを測るこの群の主体を成す空間である。法側は石垣を形成するが、水害により中央が大きく崩壊している。南端には棚状の段があり、西側には低い石列による敷地内の区画がある。

その西下方には通路24から北に連なる平坦面40までの群がある。通路24と面26の境には石を並べた階段があり、26はこの群の中心的な面で長辺35m、短辺12mを測る。法側は石垣を形成するが、2か所で崩壊している。石垣際に沿って一段高い石段があり、面の中にも3か所で低い石段で区画が見られる。北側奥には2m×6mほどの基壇状の小規模な高まりがある。面26南側の25付近には板碑が散在し墓所と見られる。

この石垣直下に幅50cmほどの通路が通り、さらに北側奥に面28～40の群がある。28がその中心になる面で長辺35m、短辺10mを測る。法側は上下2段の石垣を形成するが、南側半分が崩壊している。面の中に低い石段による区画が見られ、南側7m×6mと北側の面29に3m×2.5mの石による基壇の痕跡があり、小祠があった可能性がある。面29北東側には安政3(1856)年銘の、28には寛文9(1669)年銘の石灯籠の竿が残されている。さらに北奥の尾根の稜線に小規模な面があるが、面38、39には延宝5(1677)年銘などの板碑が散在し墓所となっている。

この西側下には「開伽の井」の面から続く41～44の群がある。41はこの群の中心で、長さ26m、幅10mを測る。法側は石垣を形成する。中央東の法際に水場がある。

さらに西側下には45～49の尾根に従う小規模な造成面があり、A区の西端の群となっている。面45が中心と見られ長辺20m、短辺6mを測る。

B区

琴山道南側のB区は山の南に延び愛嶽山に至る稜線にある登山道を東限とし、その西下側に標高に沿った方向で列状に平坦面が並ぶ。西限は「開伽の井」のある平坦面の法側としている。南限はNTTの反射板のある平坦面南側の巨石群である。

通称「愛嶽道」と呼ばれる動線上には中宮から南に一段上がった面50と51が近接し、一段降りて52～56までが一つの小群をなすように見える。50と51は長さ31m、幅6mで、その下の中心的な面52は長辺30m、短辺16mを測る。面の東には長さ15m、幅2mの棚状の石垣による壇があり、南側にはL字形の石列による仕切り状のものがある。西斜面の面55、56には天明4(1784)年銘の墓石などがあり墓所と思われる。さらに先の尾根には長辺35m、短辺11mを測る面57、長辺26m、短辺12mを測る面66がある。その南下にはNTTの反射板が設置されているが、もともとある平坦面であり、長辺29m、短辺12mを測る。南端に2基の墓石があり墓所となっている。

西側の一群は「開伽の井」のある平坦面61が登山路(往還路)からの入り口となっており、ここには南側に通称「岩窟ホテル」といわれる9m×7mのコンクリートの建物跡がある。面は長辺32m、短辺10mを測る。西は表面を平たんに補えた2段の立派な石垣が特徴的で、南に長辺22m、短辺5mを測る面62につながっている。この部分は南端の屈曲部分のみに石垣が用いられている。さらに南側には「愛嶽道」に至る間に面64、65、がレベールに沿った小道沿いに展開し面66につながっている。この間の東斜面や面から龍泉系青磁椀、青白磁、白磁、瓦質土器など古代末から中世の遺物が採取されており、古い時期の生活域であったことが知られる。

C区

登山道南側のB区の西斜面、「愛嶽道」までの間に広がる壇造成群である。レベールに沿っておよそ3段の列に分けられる。

1列目は「百段雁木」登り口南側から入る小道沿いで、面74～83までがそれである。道の最奥にある面77がメインの平坦面で長辺36m、短辺9mを測る。西の法は石垣だが2か所以上で崩落し、荒廃化が進んでいる。北側の入り口は飛び石で階段状になっている。東端は6m×4mの棚状の段がある。B群との境に小さな面69、70があるが、ここから8世紀中頃の須惠器坏aが採取されている。域内において最も古い遺物であり、山頂祭祀がおこなわれた段階での遺物で注目される。

2列目は「吉田墨敷」の石製の標識が建つ面86を入口とし、88へと進み、西に降りる尾根に連続して造られた小規模な平坦面84から93がそれである。面86は16m×9mを測る。天明4(1784)年銘の墓石が北側にいる。86の南側は飛び石状のスロープ87があり、長辺40m、短辺9mを測る面88につながっている。ここからは近世陶磁器に交じって白磁、同安窯系青磁皿、須惠質甕など中世土器が出土しており、基層に中世の生活面があるのかも知れない。石垣の使用は北側の一部に止まる。ここも一部が崩壊している。南東奥の壁面は巨石が露出し、それを辿ると上段の1列目に合流する。段85から93は連続した尾根筋の小段で、五輪塔など墓石が埋没しており墓所として使用されている。

3列目は2列目西下の琴山道脇にある面94から96であり、長辺40m、短辺10mを測る方形に近い平面形を成す。西の法面は石垣によるもので2か所が崩落している。一部はその下にもう一列石垣を備えている。この部分が次の面95への動線になるものかも知れない。その奥の面95は長辺18m、短辺4mを測る。これも西の法面に石垣を用いている。

D区

場所は調査対象地A区面72から「愛嶽道」を水平距離で100m下った地点にある。尾根の地形変換地点で、自然な狭い平場がある箇所である。近世陶器の甕らしい破片が散乱しており、回収された遺物の復元からそれは甕でなく、壺の形を利用してあつた祠であったことが考えられるようになった。寛政9年の「宝清山中絵図」中に窟や八童子などが祀られた箇所「瓶」と記載されており(森2000年)、この「瓶」の正体が甕を改良して造ったこの祠とみられる。

(4) 出土遺物

A-2地区(面11東側)No.1(fig.82, pl.1~4)

国産磁器

白磁皿(1) 復元口径9.2cm、器高2.6cm、復元底径5.0cm、素地は淡白褐色の0.5mmの砂粒をわずかに含む。乳白色。焼成は良好。釉調は淡灰色の薄い施釉を施す。全面に施釉するが、量付部は釉を掻き取る。

A-2地区(面11東側)No.2(fig.82, pl.3~4)

肥前系染付

椀(2) 復元口径9.8cm、器高4.3cm、底部が欠損する。外面には暗緑色の呉須による草花文を絵付けする。内面には口縁部に二重の圓線、見込みに圓線をそれぞれ絵付けしている。

A-2地区(面14北側)No.3(fig.82, pl.3~5)

肥前系染付

椀(3) 復元口径10.0cm、器高5.3cm、底径4.2cm。外面にすんだ紺色～青色の呉須での絵付けを施す。花卉文と、圓線。高台内面中央に「壽」の退化した文字を描く。全面に施釉するが高台の量付部は釉の

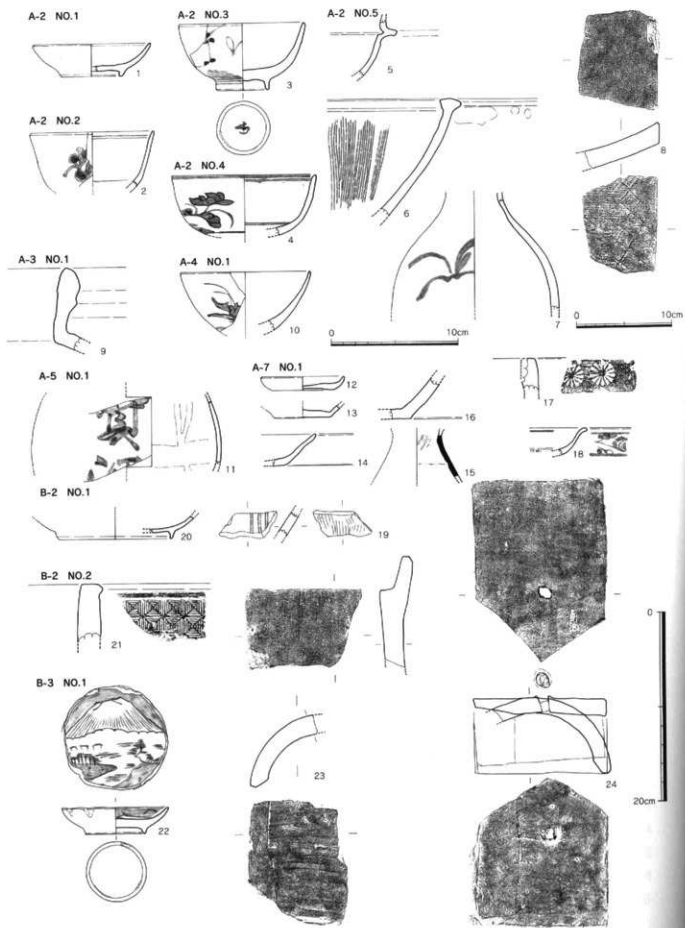


fig. 82 第38次A-2No. 1~5、A-3No. 1、A-4No. 1、A-5No. 1、A-7No. 1、
B-2No. 1~2、B-3No. 1 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

掻き取りをする。部分的に目跡が観察できる。

A-2地区(面8)No. 4 (fig. 82, pla. 3・4)

肥前系染付

柄(4) 復元口径11.4cm、器高4.8cm、底部を欠損する。釉調は内外に青褐色の呉須で絵付けを施し、その後青味かかった透明釉を薄く施釉する。外面は、花蝶文と高台接合部あたりに圈線、内面は口縁部と見込みに圈線を巡らす。

A-2地区No. 5 (fig. 82, pla. 3・4)

国産陶器

羽釜(5) 体部の踵周辺の破片。器高4.3cm。焼成は良好で堅く焼き締まる。ロクロ成形で、調整には回転ナデを施している。素地は灰青色、淡灰褐色の0.5~1mm大の砂粒をわずかに含む。釉調は明褐色で、踵などに暗褐色の釉が掛かる。

播鉢(6) 口縁から体部までの破片。内面に細かい播目を施す。口縁部に近づくほど播目の一単位の間隔が広がる。播目原体は1.2cm幅。播目には使用により摩耗している。口縁部は丁字形を呈す。焼成は良好。素地は暗茶褐色で、淡白褐色の0.5~1.0mm大の砂粒を多く含む。淡灰褐色の2mm大の砂粒をわずかに含む。外面は斑目に鈍い黄灰色の釉が点在する。

徳利(7) 口縁部と底部を欠損する破片。器高9.7cm。素地は鈍い赤灰色で、淡灰褐色の0.5mm大の砂粒をわずかに含む。焼成は良好。素地の上に白色の化粧土を施す。その上に鉄釉で草花文を描き、薄い黄灰色に発色する釉を掛ける。内部には化粧土は施されず、素地に茶褐色の釉が軸垂れをおこしている。

平瓦(8) 側縁部の破片。側縁部はヘラケズリあとに軽くナデ調整。焼成は良好。色調は凹面に鈍い茶褐色の暗灰青色を重ねる。凸面は鈍い茶褐色。胎土は粗い。淡白褐色の1mm以下の砂粒をわずかに含む。5mm以下の赤色粒を多量に含む。凸面に格子目叩きを施す。格子目叩き分類I-Bc類。

A-3地区(面23西斜面)No. 1 (fig. 82, pla. 1・2)

国産陶器

甕(9) 口縁部破片。器高6.5cm。口縁は肩部より直立し、端部は外側に向かって折り重ねることで肥厚させている。肥厚部には突帯ぎみに稜線をもつ。焼成は良好。胎土は、淡灰褐色の0.5mm~1mmの砂粒を多く含む。色調だが外面は暗青黒色、部分的に灰かぶりで暗灰緑色。内面は明青灰色。

A-4地区(面6北側)No. 1 (fig. 82, pla. 1・2)

肥前系染付

柄(10) 底部を欠損する口縁部から体部の破片。外面に暗青色の呉須で絵付けをする。破片のため判別しづらいが草花文か、釉の表面に白色粒と暗黒赤粒が多量に認められることから、焼成時の窯管理が不安定だったと想定される。

A-5地区(面24)No. 1 (fig. 82, pla. 1・2)

国産陶器

徳利(11) 体部破片。器高5.3cm。素地は明灰白色。外面に暗青色の呉須で絵付けをしている。「賀酒」と読める。表面に墨の痕跡のようなものがあるが明確には判別出来ない。内面は軸垂れをしている。

A-7地区(面6北側)No. 1 (fig. 82, pla. 1・2)

土師器

小皿a(12、13) 12は復元口径6.6cm、器高1.1cm。復元底径4.8cm。底部切り離しは回転糸切り技法。

13は、口縁部が欠損している破片。器高0.9cm、底径4.5cm。底部切り離しは回転系切り技法。

坏a(14) 口縁部破片。器高2.5cm。底部切り離しは回転系切り技法。

須恵器

小壺(15) 頸部の破片。器壁が3mmとやや薄手。内面に粘土の接合痕跡と、粘土を絞った跡がある。

土師質土器

火鉢(16) 底部破片。胎土は淡白褐色の0.5mm~1mm程度の砂粒をごく少量含む。焼成はやや良好。底部はヘラ削り。内面はヨコナデ、外面は丁寧なヨコナデで平滑にしている。色調は外面が淡黄褐色、内面がぶい褐色。断面は内面が暗黒色で外面にいくと淡黄褐色を呈す。

瓦質土器

火鉢(17) 口縁部破片。器高2.6cm。口縁部外面に菊花文のスタンプを連続して押す。灰褐色の0.5mm~5mm砂粒を多く含む。焼成はやや不良。色調は外面がぶい黄褐色、断面は黒灰色を呈す。

青花

皿(18) 底部を欠損する口縁部の破片。口縁部は端反り。外面には薄い青紺色の呉須で牡丹唐草を描く。内面には團縁。透明釉の表面は細かい粒子が毛羽立っているように荒れている。上田分類Ⅵ類。

B-2地区(面57下) No.1(fig.82, pla.6・7)

須恵質土器

播鉢(19) 体部破片。器高3.9cm。胎土は淡灰褐色の0.5~1.0mm大の砂粒を含む。焼成は良好。色調は、暗赤灰色~暗赤褐色。内面に3条の播目を施す。

国産白磁

皿(20) 高台部から体部への破片。器高1.9cm、復元底径9.2cm。釉調は光沢のある淡白灰色。高台畳付部は釉を掻き取っている。

B-2地区(面65) No.2(fig.82, pla.6・7)

瓦質土器

火鉢(21) 口縁部破片。器高4.7cm。胎土は淡灰色の0.5mm~1mm程度の砂粒を少量含む。焼成は良好で堅固だが、炭素の吸着はやや悪く瓦質化していない。色調は暗褐色。内面の口縁部下はヨコナデ、外面はスタンプ文を隙間無く施す。少なくとも二段構成で施している。口縁端部はわずかに外面に突出させるが、丁寧なナデのより平滑に仕上げられている。

B-3地区(面51裏斜面) No.1(fig.82, pla.6・7)

肥前系染付

皿(22) 口径8.4cm、器高2.1cm、底径4.8cm。口縁部に輪花を施す。内面に深い紺色の呉須で山、おそらくは富士山を描く。全面に薄い透明釉を施すが、高台畳付部は釉をはぎ取っている。

瓦

丸瓦(23, 24) 23は陶器製の瓦。縦11.7cm、横11.6cm、厚さ2.0cm。玉縁部の破片。焼成は良好で堅く焼き締まっている。凹面はナデ調整、凸面はヘラ削りのあとにナデ調整。釉調は暗緑黒色。凸面に塗る。素地は明濁灰色を呈す。24は陶器製の瓦。丸瓦というより道具瓦というのが正しいかもしれない。縦14.1cm、横11.2cm、厚み1.6cm。三面で側面を確認している。側縁部はヘラ削りの後に軽くナデ調整を施す。両端面ともヘラ削り後にナデで丁寧に仕あげている。狭端面は端より5cmほどヘラ削りを施し器壁を薄くしている。端部の厚さは8mm程度と削りこまれている。中央に直径1.6cmの孔を穿っている。それは瓦固定用の孔であるが、その中に固定時につかった金属製品がわずかに残存している。

C-1地区(面88北東斜面) No.1(fig.83, pla.8~11・14・15)

土師器

小皿a(1) 復元口径6.6cm、器高0.8cm、復元底径4.8cm。底部切り離し技法は回転系切り。非常に扁平で、口縁端部を丸く処理している。

皿(2) 底部破片。器高1.2cm。底部切り離し技法は摩擦により不鮮明。ヘラ削りの可能性が高い。色調は明黄白色。

須恵質土器

祝ね鉢(3) 体部破片。器高6.5cm。外面には回転ナデ調整。内面は回転ナデ調整のあとに不整方向のナデ。内面の器壁はあまり摩擦していない。

国産陶器

碗(4) 体部破片。内面に淡灰白色の象眼を施す。外面は緑灰色の釉を施す。素地面で暗灰色を呈す。

播鉢(5) 体部破片。焼成は良好。表面は暗赤褐色の釉を掛ける。胎土は1mm以下の白色粒をやや多く含む。やや粗である。内面に密に播目を施す。

甕(6) 底部の破片。器高5.7cm。胎土はやや粗。淡白色の0.5~1mm前後の砂粒を多量に含む。5mm以下の暗灰色砂粒を少量含む。焼成はやや不良。内外面の器壁表面が火ぶくれではじけている。焼き締まっている。色調、内面は暗茶赤灰色。外面は暗茶褐色。底部はヘラ削りのあとにナデ調整。

肥前系染付

碗(7, 8) 7は器高3.0cm、復元底径4.5cm。底部から体部の破片。内外面に紺色の呉須の濃淡で絵付けをしている。内面に松などの風景を描き、外面には草、変形雷文、團縁を描く。高台はへの字状に外側に張る。8は口縁部を欠損する。器高2.8cm、復元底径3.2cm。外面に中央あたりに淡紺色の呉須で絵付けを施す。全面に白色釉を施し、高台畳付部は掻き取る。ただし、内面、見込み部は釉の掛かりがまばらで素地がまだに見える。

鉢(9) 口縁部から体部への破片。体部はやや内湾気味に立ち上がり口縁部は外側に反する。口縁部には輪花が認められる。口縁部内面に帯状に紺色の呉須の濃淡で絵付けをしている。全面に薄い緑灰色の釉を掛ける。

瓦

平瓦(10, 11) 10は陶器瓦の一部。焼成はやや良好。焼き締まっている。凹面に暗赤褐色の薄い塗り釉が施されている。摩擦しており明瞭ではないが、端部が確認される。凸面に格子目叩き1-B類を施す。11は陶器瓦。端面と側縁部が確認できる。胎土は、1mm程度の暗灰色粒子を少量含む。焼成は良好で固く焼き締まっている。凹面全域、凸面は側縁部から3.5cmほどの範囲に暗茶褐色の釉を施す。凸面の暗茶褐色釉が掛かっていない範囲は薄く褐色の釉が下地のように施されている。

丸瓦(12) 側縁部と端部の破片。陶器瓦。凸面全域に暗褐色の釉が掛けられる。凹面は褐色の薄い釉に部分的に暗褐色の釉が掛けられている。側縁部はヘラ削りで調整している。端面はヘラ削りのあとにナデ調整か。焼成は良好で堅く焼き締まっている。平瓦の11とは釉調が似ているため、セットで使われていた可能性を考える。

C-1地区(面88中央) No.2(fig.83, pla.10~13)

国産磁器

壺(13) 白磁の壺。体部の破片。器高8.5cm。釉調、外面は淡青白色、内面は明青白色。外面の下部は露胎している。胎土は暗灰色を呈し、淡白褐色の0.5mm程度の砂粒を少量含む。素地が粗いため陶産

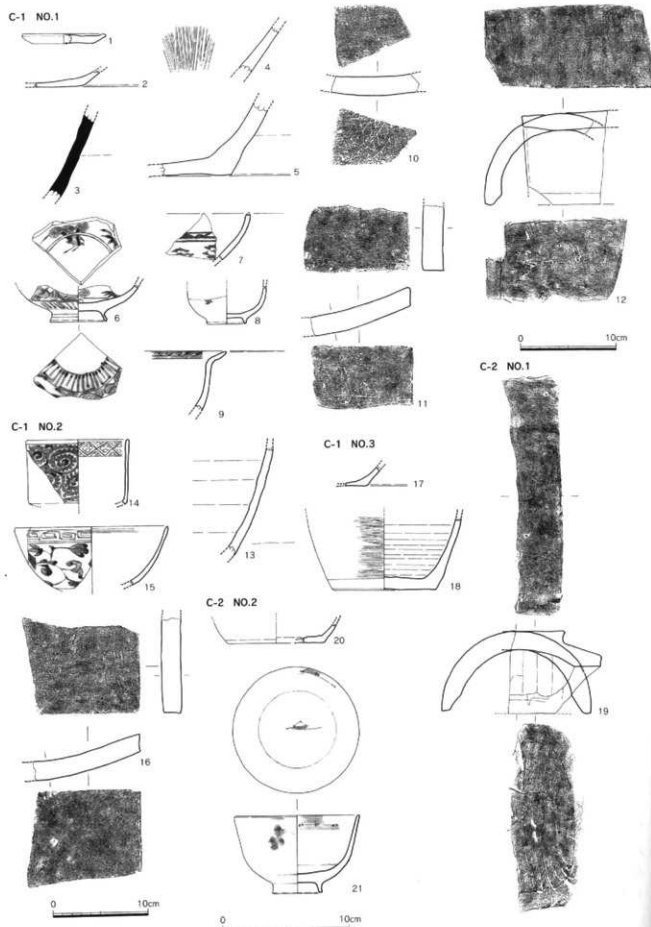


fig. 83 第38次 C-1NO.1～3、C-2NO.1・2 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

と判断した。

肥前系染付

碗 (14, 15) 14は底部を欠損した筒型碗。復元口径8.2cm、器高5.2cm、淡紺色の呉須で絵付けをしている。外面は蛸唐草文。内面は口縁部近くに四方禪文を帯状に展開させている。15は復元口径12.1cm、器高4.8cm。底部を欠損する。淡紺色の呉須の濃淡で絵付けを施している。外面には、口縁部下部に雷文を帯状に展開させ、体部中央には草花文を描く。内面は口縁端部近くに2重の圏線を巡らす。

瓦

平瓦 (16) 陶器瓦。胎土はやや密。2mm以下の白色粒を少々含む。焼成は良好で堅く締まっている。色調は暗茶褐色で、釉を重ねて塗っている箇所は暗赤黒色を呈す。凹面は端面から4cmほど暗赤黒色の釉が塗られている。凸面は全面に塗られるが側縁部には塗られていない。(先ほどの凹面の端面からの釉が塗られている。凸面はナデ調整。側縁部はヘラ切り後にナデ調整をしている。

C-1地区 (面88南側) No. 3 (fig. 83, pla. 10～13)

土師器

小皿 a (17) 底部破片。器高1.5cm、底部切り離し技法は回転糸切り。

蓋 (18) 器高5.8cm、底部8.2cm。焼成はやや良好。色調は暗黄灰色。内面は回転ナデ、外面は口ノナデ。底部近くでヘラ削りを施す。底部切り離しは、回転糸切り後にナデ消している。

瓦

丸瓦 (19) 陶器瓦。焼成は良好。胎土は淡灰褐色の0.5～1mm大の砂粒を少量含む。釉調は凹面が暗褐色で光沢がある。凹面は暗褐色。側縁部と玉縁部はヘラ切りで成形している。

C-2地区 (面70) No. 2 (fig. 83)

須恵器

坏 a (20) 底部破片。器高1.7cm、復元底径7.6cm、底部切り離しは不明。乱雑なナデ調整。

肥前系染付

碗 (21) 復元口径9.9cm、器高6.2cm、底径3.9cm、薄い紺色の濃淡で絵付けを施す。外面は木を描いていると思われる。内面見込みに吉祥文が崩れた記号を書き込み、口縁端部ちかくには帯状に雷文状のものを巡らす。呉須の発色から明治以降のものと考えられる。

C-3地区 (面95) No. 1 (fig. 84, pla. 14・15)

国産陶器

蓋 (1) 口径7.4cm、器高2.6cm。外面に縮み部を中心に黒褐色の鉄釉を掛け、その上から透明感がつよい黄灰色の釉を掛ける。素地は灰白色で密。

肥前系染付

碗 (2) 器高3.6cm、底径3.6cm、口縁部を欠く。淡紺色で内外面に絵付けを施す。外面には草花文、内面見込みに草花文と思われるものを絵付けしている。丸みを帯びた器形と呉須の発色から江戸時代後期のものか。

徳利 (3) 器高8.5cm、復元底径6.8cm、暗紺色の呉須の濃淡で描く。外面に草花を描く。焼成は良好。内面は回転ナデ調整。外面は釉のため不明。胎土は密。底部を薄く仕上げしており、体部との接合痕跡が明瞭ではない。おそらくは現代の大量生産の品。

C-3地区 (面89) No. 2 (fig. 84, pla. 14・15)

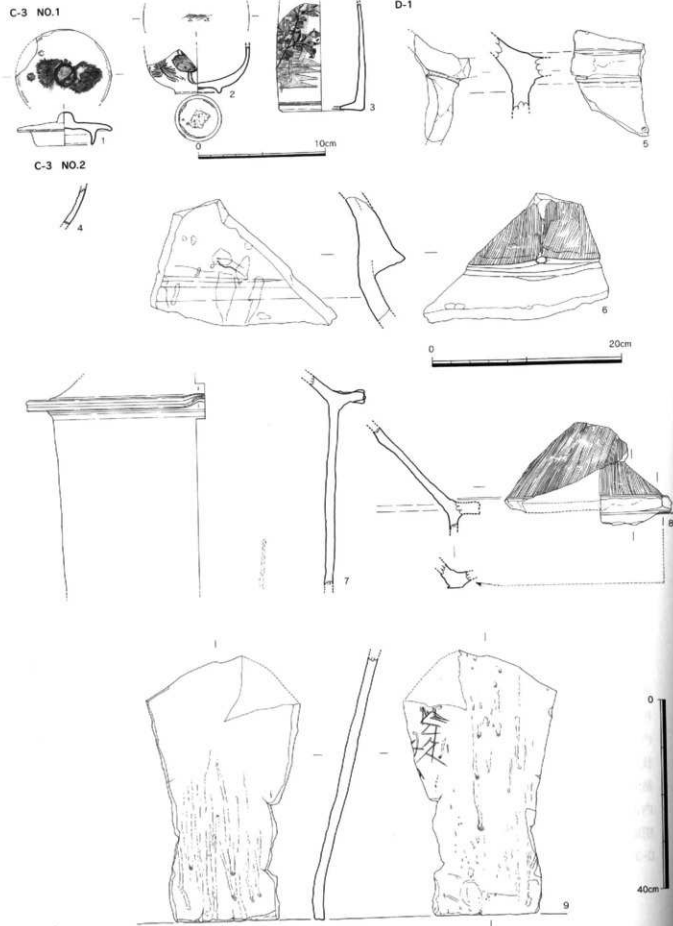


fig. 84 第38次C-3NO.1・2、D-1出土遺物実測図 (1/3、1/4、1/8)

国産磁器

碗 (4) 器高 2.8cm。内面に横方向のくぼみが段をもって並ぶ。白磁片か。現代のものか。
D-1 地区 No. 1 (fig. 84, pla. 16 ~ 23)

国産陶器

甕状製品 (5 ~ 9) 5は接合部破片。器高 11.4cm。直立する体部から斜め内側に傾斜する変換点に鈔状のものがとりつくとして推定している。鈔部にへらによる切りこみあり。軸調は、内外面に暗茶色 ~ 一部黒茶色で、暗茶褐色のやや光沢のある軸が施されている。胎土は暗灰色茶色 ~ 暗灰色で密。0.5mm 未満 ~ 3mm の砂粒を少量含む。焼成は良好。内面はヨコナデ調整。外面は施軸によって不明だが、鈔の取り付け横ナデが観察できる。6は器高 13.6cm、厚さ 1.7cm の器壁に、粘土板を両側から合掌するように貼り付けて、間の空間は下から屋根の軒先のように三角形に突出している。稜線の先にやや不格好ながら直径 2cm 程度の貼り付けがある。これが意図したものならば軒先の枕木の出と考えられる。貼り付け部は縦方向の粗いナデを施す。内面はヨコナデ調整。軸調だが、外面は暗褐色のやや光沢のある軸を全面に施す。内面はやや明るい茶褐色の露胎だが、外面に施された軸が軸垂れしており、上部に開口部があったことを想定できる。胎土は密。0.5mm ~ 1mm と、3mm 程度の砂粒を多量に含む。7は器高 44.8cm、最大径 72cm。直線的に立ち上がる体部と水平に張り出す鈔部、そして鈔から内側に向かって斜めに傾斜している。鈔部は水平だが、部分的に上部にせり上がっている箇所がある。軸調は内外面に暗茶色 ~ 茶色の軸を施す。外面の一部に淡茶灰色の軸が切れ切れの筋状に流れている箇所がある。胎土は密。暗茶褐色 ~ 褐色で 0.5mm 未満 ~ 3mm の砂粒を多量に含む。焼成は良好。8は器高 21.9cm。軸調、外面は暗茶色 ~ 暗茶褐色と一部に黒茶色の軸が施される。内面一部に暗茶色の軸が施されるが基本、露胎している。0.5mm ~ 1mm と、3mm 程度の砂粒を多量に含む。胎土は密。鈔部と内側に傾斜する部位の破片。ここでは6のような軒先状の貼り付けはない。ただし、傾斜部は縦方向に刷毛目調整される。部分的な断面図を図化しているが、鈔の下部に切りこみがあることから窓状の空間が鈔の下にあると思われる。9は底部から体部の破片。器高 55.3cm。底部は粗いへら切り。直立気味に立ち上がって外反していく。体部外面にへらで漢字らしきものを刻印しているが読み取れない。外面は暗茶色 ~ 黒茶色の軸を全体に流した後、淡茶白色の軸を五月雨状に流している。軸溜まりは暗緑褐色を呈す。内面は暗茶色 ~ 淡茶褐色の軸を流す。体部の中 ~ 下部に淡茶白色の軸が筋状に垂れる。胎土はやや密。0.5mm 未満 ~ 6mm の大小様々な砂粒を多量に含む。焼成は良好。これらの破片を総合的に考えると、甕の上下逆さにしたもの下部に窓のような空間を作り、その上に鈔を回して庇をつける特殊品の姿が想定できる。おそらくは何かにかぶせて中のものを恒常的にみせるための用品だと考えられる。祠であった可能性が高い。

(5) 小結

今回の調査対象地は近世にあっては宝満二十五坊と呼ばれた修験道の一山組織の拠点のうち「西院谷」と呼ばれた坊跡群に相当する。今回認知された人工的な造成による 97 の面は、一部には古代・中世の遺物が採取されているが、大半が江戸時代に利用されたものと考えられる。遺構で記述してきたように、段造成群は中宮から山頂方面に向かう登拝道、反対に南に下る「愛蔵道」を頂点にし、中央を内山方面からの登拝道で分かたれる 3 つの群で捉えられた。段造成群は中宮ライン以下のレベルは等高線に沿う水平方向に延びる小径に沿って展開する小群があり、長辺 25m を越える石垣を多用した中心的な面があり、至近の斜面中などに墓所が設けられている。

一山は明治初期の神仏分離や修験道廃止令などにより離山したため、残念ながら一つ一つの面の名称



fig. 85 「宝満山絵図」(西図)(福岡県立美術館所蔵資料に加筆)

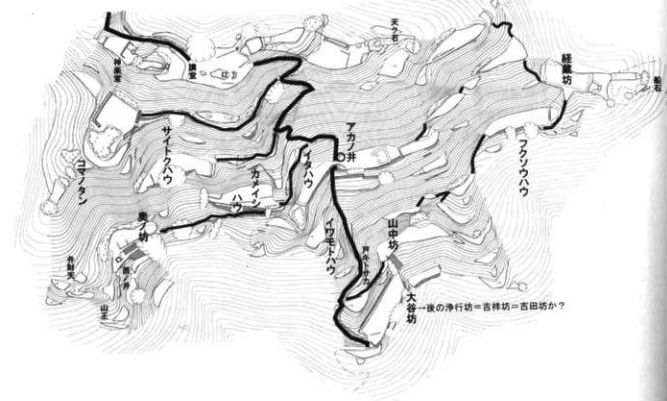


fig. 86 「宝満山絵図」による西院谷地区の坊の復元図



fig. 87 宝満山中宮・西院谷地区境内平面図(1/3000、岡寺2008より)

などが伝わっていない。山中の坊の所在については、複数の文字資料と若干の絵画資料が残されているが、その位置については諸説が出されてきたところで、一定した結論は得られないのが現状といえよう。近年、岡寺良が中世山城の図化方法で山中の段造成を資料化してその成果を公表している(岡寺2008年)。宝満の近世史を考察するうえでは欠くことのできない労作であり、今回調査対象とした西院谷地区も図が提示されている。その中で段造成面に一つ一つ坊名を充てる作業をしているが、江戸初期から幕末までの間に坊の盛衰に従って屋敷地が変更されたり、一つの坊が複数所有する状況が派生したりしていること、史料の記述内容に齟齬があるために客観的な充て作業が困難になってしまうきらいがあること、などが垣間見られる。時系列に従ってそれぞれの時代の図を作成することが必要であるが、文字資料では一つの坊の絶対的な位置が測れず類推を重ねなければならない。坊中の井本坊伝来の「龍門山水帳」には寛文11(1673)年の各坊の位置と持ち山の場所が記載されるが、これにおいても四至の表現が当時の地名などを用いる箇所があるなど、自ずと限界がある。

相互の位置関係が示された江戸時代の西院谷地区を描く「宝満山絵図」(福岡県立美術館所蔵)は寛水18年頃までに成立したとされる絵画資料で、坊全体の名称を示す初期の情報として重要である。ありがたいことにこの図には、坊をつなぐ小径が記されていることから、今回の調査成果との対照が可能となる。これによれば北東側から、面11は神楽堂、その西下の面23は財徳坊、さらに西下の面26は亀石坊、北の面28は奥ノ坊、面41は伊多坊、面45付近は岩本坊、百段ガンギ南西の面88は山中坊、その南奥の面77が福蔵坊、NTTの反対板のある面71が経蔵坊、一番下の面94,95は大谷坊に比定される。遺跡は当然、残された最後の形状であり、「宝満山絵図」成立からの改変があるものと思われるが、絵図に示された相互の位置関係に近い場所に、今回抽出された各小群の中心的な広めの面が存在する形となっている。これをまず足がかりにして、文献にあらわれる各坊の盛衰を時系列で整理していく中で、最終的に宝満から山伏が離山した段階の最後の姿が見えてくるのではなかろうか。

遺構においては墳墓が坊を考察する重要な鍵を握るものと考えられる。墓石には古くは延宝5(1677)年銘のものが含まれており、江戸前期から坊と墓がセットで営まれていることが理解される。これら年記のある資料と遺構の関係を整理することも望まれる。

一方では豪大な石垣も雑木の根が貫入し、度重なる集中豪雨によって近年崩壊が進行しており、遺構



fig. 89 第39次調査遺構全体図 (1/130)

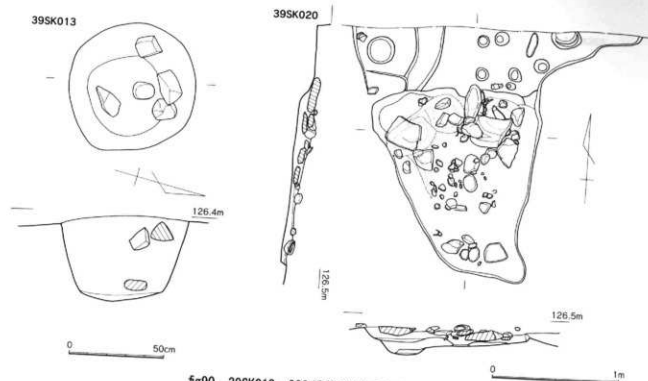


fig. 90 39SK013・020 遺構実測図 (1/20・30)

礫と遺物が多く検出され、プランが確認できたため、別途SK020として報告するが、SK020と溝の幅や深さが同じ部分が多く、溝とSK020は関係があるものと推測される。この溝に囲まれた内側にはSK013ほかビットが検出されたが、特別な遺構は確認できていない。

土坑

39SK013 (fig. 90, pla. 1)

径0.66m、深さ0.45mの円形土坑で、灰褐色土の埋土に花崗岩礫が5個検出された。

39SK020 (fig. 90, pla. 2～5)

SD025の屈曲部で礫や土器が集中して確認された。その範囲は南北2.0m以上、東西2.3mの不定形で、遺物は完形になるものは全くなく、礫下からも同様の遺物が検出されることから廃棄土坑と推測される。

その他の遺構

39SK001 (fig. 91, pla. 6～8)

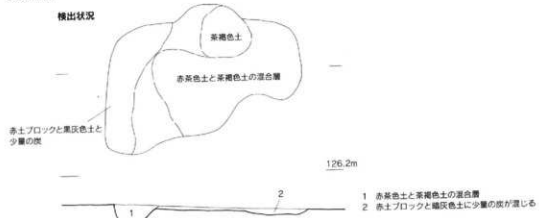
焼け土がアレーバ状に東西1.02m、南北0.68mの範囲で検出された。部分的に炭を多く含んでいる所や赤茶色土が多い所が見られたが、焼土の厚さは深い所で0.1m程あるが、おおよそ0.01～0.03mである。

39SK010・030 (fig. 92・93, pla. 9～34)

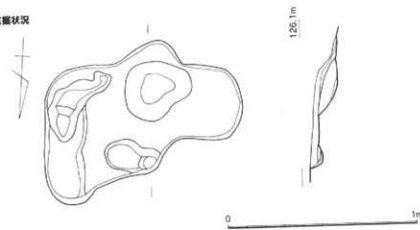
調査区の南側丘陵裾で検出された礫を含む茶褐色土層で、幅1.2～1.8m、深さ0.15～0.4mを測る。東側で枝分かれた部分があったため、2つの遺構番号を付したが、同一のものと考えられる。調査を進める中で、以下の所見を得た。

- ・礫の間を埋める灰茶褐色土や灰茶色土が礫そのものも覆っていること。
- ・礫層を覆う上面の埋土に礫が殆ど含まれない。
- ・表土除去時点で礫の露出は少量であったが、茶褐色土層は帯状に確認された。
- ・砂層は全く確認していないが、砂粒が大きい粘土質層や砂質土が下層に多い。

39SX001



完備状況



39SX015

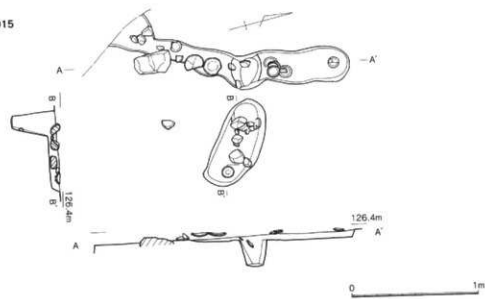


fig. 91 39SX001・015 遺構実測図 (1/20・30)

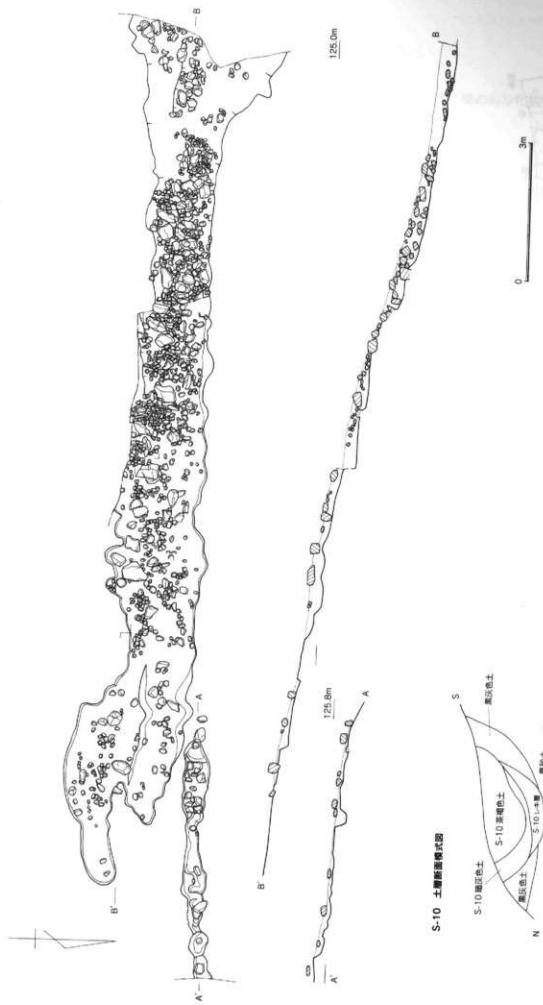
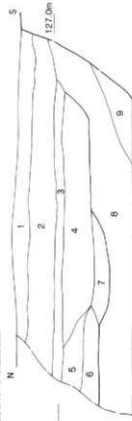


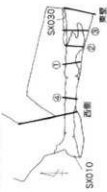
fig. 92 39SX010・030 遺構実測図 (1/80)

39SX010 遺構土層図

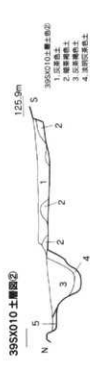


39SX010(遺構)土層図
 1. 黄砂土(100%以上) (厚約10cm)
 2. 黄砂土(約50%) (厚約10cm)
 3. 黄砂土(約20%) (厚約10cm)
 4. 黄砂土(約10%) (厚約10cm)
 5. 黄砂土(約5%) (厚約10cm)
 6. 黄砂土(約2%) (厚約10cm)
 7. 黄砂土(約1%) (厚約10cm)
 8. 黄砂土(約0.5%) (厚約10cm)
 9. 黄砂土(約0.2%) (厚約10cm)

土層断面位置図

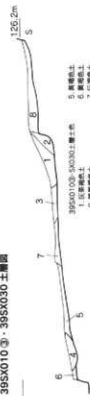


39SX010 土層図②



39SX010(遺構)土層図
 1. 黄砂土(約50%) (厚約10cm)
 2. 黄砂土(約20%) (厚約10cm)
 3. 黄砂土(約10%) (厚約10cm)
 4. 黄砂土(約5%) (厚約10cm)
 5. 黄砂土(約2%) (厚約10cm)

39SX010 ③・39SX030 土層図



39SX010(遺構)土層図
 1. 黄砂土
 2. 黄砂土
 3. 黄砂土
 4. 黄砂土
 5. 黄砂土
 6. 黄砂土
 7. 黄砂土
 8. 黄砂土

39SX010 土層図③



39SX010(遺構)土層図
 1. 黄砂土(約50%) (厚約10cm)
 2. 黄砂土(約20%) (厚約10cm)
 3. 黄砂土(約10%) (厚約10cm)
 4. 黄砂土(約5%) (厚約10cm)
 5. 黄砂土(約2%) (厚約10cm)
 6. 黄砂土(約1%) (厚約10cm)
 7. 黄砂土(約0.5%) (厚約10cm)

39SX010 遺構土層図



39SX010(遺構)土層図
 1. 黄砂土(約50%) (厚約10cm)
 2. 黄砂土(約20%) (厚約10cm)
 3. 黄砂土(約10%) (厚約10cm)
 4. 黄砂土(約5%) (厚約10cm)
 5. 黄砂土(約2%) (厚約10cm)
 6. 黄砂土(約1%) (厚約10cm)
 7. 黄砂土(約0.5%) (厚約10cm)
 8. 黄砂土(約0.2%) (厚約10cm)
 9. 黄砂土(約0.1%) (厚約10cm)
 10. 黄砂土(約0.05%) (厚約10cm)
 11. 黄砂土(約0.02%) (厚約10cm)
 12. 黄砂土(約0.01%) (厚約10cm)
 13. 黄砂土(約0.005%) (厚約10cm)
 14. 黄砂土(約0.002%) (厚約10cm)
 15. 黄砂土(約0.001%) (厚約10cm)
 16. 黄砂土(約0.0005%) (厚約10cm)

※1-39SX010(遺構)土層図は、1/40縮尺で示す。

fig. 93 39SX010・030 土層実測図 (1/40)

- ・礫上やそれを覆う土層の境界部分に硬化面などの土層は確認できない。
- ・礫の隙間に一部粘土が確認できる。
- ・礫を除去した真砂土の地山面に径 0.05m 前後の順穴状のピットが検出され、溝の兩岸に順穴や抉られ部分の確認できる。
- ・礫層は南側にやや片寄って多くみられる。
- ・南側の地山に礫の露頭が含まれている。
- ・0.1m 前後の礫に混じて、0.3~0.5m の大きな礫が平らな面を上にして、0.6m 前後の間隔で直線的に検出された。また、大きな礫が小さな礫より高いレベルにある。
- ・溝状になっているが、底面の礫は不規則で人為性がみられない。
- ・北隣の地盤が粘土質で、谷という立地上、雨天時や雨天後湿気を帯び、歩行に困難をきたす状況である。
- ・雨天後数日は特に湧水があり、歩行には不適な状態になる。

以上のことから考えると、当初から人為的に礫を敷いたか否かについては明確ではないが、当初谷底の沢がある時期から通路として利用したと推測される。よって、階段などの明確な道を造り上げたものではなく、現在でも登山道に見られるような、部分的に礫が見え隠れしているような通路が想像できる。当然遺構からの利用頻度は窺い知ることはできない。白磁碗 IV 類や V 類が礫の間から出土するため、II 世紀後半~12 世紀まで使用されたものと推測されるが、使用開始年代は不明である。

遺構は東側の調査地外にも続いていたが、試掘調査で遺構が未確認とされたため、すでに工事に着手し盛り土が行われ、調査は不可能な状態であった。盛り土のため、遺構が破壊されているわけではないので、今後通路がどのように続くのか確認できる日があるのかもしれない。

39SX015 (fig. 91, pla. 35~37)

表土除去時に土師器と礫が確認されたので、当初墳墓に伴う遺物かと考えられたが、その後の精査でもそれに類する遺構プランは確認できなかった。遺構は淡灰茶色土が溝と土坑状に確認され、完形もしくは破片の土師器が正位置で検出された。溝は南側が削平され検出長 1.9m、幅 0.15~0.27m、深さ 0.01~0.05m を測り、中央付近にピットがある。土坑は溝の東隣にあり、遺物の出土状況から同一の意味を持つ遺構と考えた。長さ 0.74m、幅 0.35m、深さ 0.28m で、西端にピットがあり深さ 0.37m である。溝には土師器が多く、土坑には礫が多く検出された。土師器の小皿は重ねて置かれたものもある。

墳墓としてのプランが確認できなかったが、人為的に置かれたことは間違いないとみられる。その目的については不明だが、土坑内のピットから土師器の小壺も見つかっており、特殊な意図も若干感じられる。

(4) 出土遺物

39SD025 出土遺物 (fig. 94, pla. 56)

土師器

小皿 a (1) 口径 9.4cm、器高 1.2cm、底径 8.0cm。底部切り離しは不明瞭。

39SX020 出土遺物 (fig. 94, pla. 57)

土師器

小皿 a (2~9) 口径 8.8~10.2cm、器高 0.9~1.8cm、底径 6.8~8.6cm。底部切り離しは回転ヘラ切りである。全体的に磨滅が目立つ。

椀 c × 小皿 c (10) 高台は低く尖り気味で、復元高台径 7.2cm。

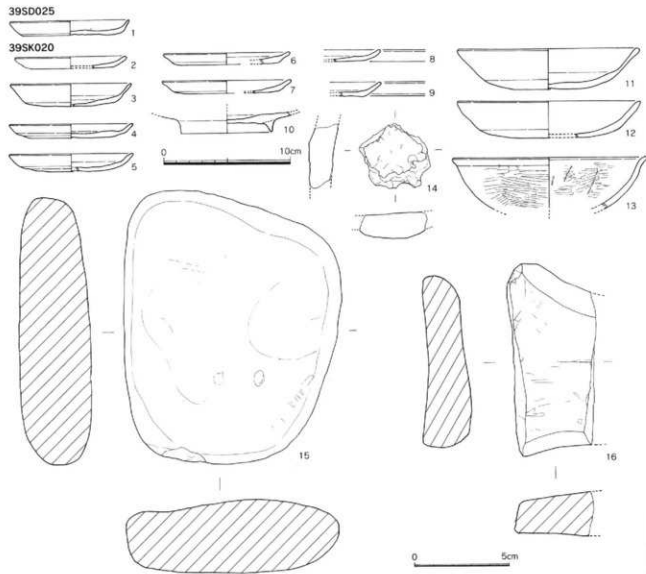


fig. 94 39SD025・SK020 出土遺物実測図 (1/2、1/3)

九底杯 a (11・12) 復元口径は 14.3cm と 14.4cm、器高は 3.2cm と 2.9cm である。磨減が目立ち調整不明瞭。

黒色土器

碗 (13) 復元口径 15.4cm、口縁端部が僅かに外反する。内面にはミガキ b の後にミガキ c を施す。外面はミガキ c₀ B 類。

土製品

炉壁 (14) 小片で全形は掴めにくい。内面は灰色に硬化しているが、融解しては無く、ナデで平坦にしており、炉壁の一部ではないかと推測される。背面にも粗いナデ痕が残る。

石製品

砥石 (15・16) 15 は自然石の川原石を利用した砥石とみられ、表裏 2 面に僅かに使用痕跡が確認できる。16 は欠損しているが、4 面の使用が確認できる。

39SX010 茶褐色土出土遺物 (fig. 95、pla. 58・59)

39SX010 茶褐色土

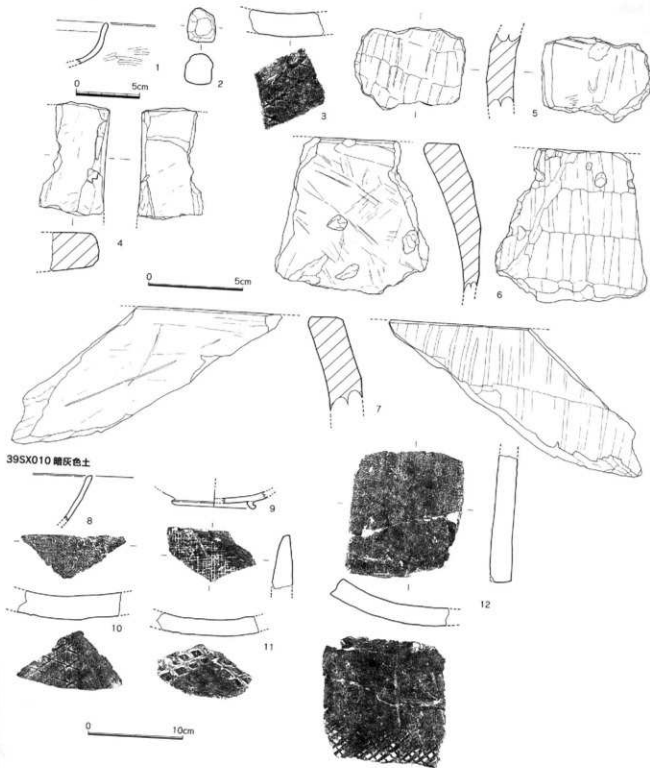


fig. 95 39SX010 出土遺物実測図 (1/2、1/3、1/4)

土師器

碗 (1) 口縁端部を僅かに外反させる。内面はナデ、外面はミガキを施す。淡茶褐色を呈する。

瓦類

瓦玉 (2) 大きさは2.6×2.2cm、厚さ2.4cm。

平瓦 (3) 焼成は不良で、鈍い茶褐色や黒灰色を呈する。外面は格子叩き、内面は磨滅し調整不明。

石製品

砥石 (4) 部分的に欠損しているが、3面の使用が認められる。砂岩製。

石鍋 (5~7) 全て滑石製で、内外面にケズリで、外面は特にケズリ痕跡を残す。5は断面部の加工痕があり、再利用したものとみられる。6は口縁部に近いほど分厚く仕上げている。内面には細かい傷が多い。

39SX010 暗灰色土出土遺物 (fig. 95)

黑色土器

碗 (8) 口縁端部を平坦に仕上げる。内外面とも磨滅し調整不明。B類。

柄c (9) 高台は丸く屈曲した高台を貼付する。復元高台径6.6cm。焼成不良で灰黒色を呈する。

瓦類

平瓦 (10~12) 10は細い格子叩き。11の格子は陰文である。12は細かい格子叩き。

39SX015 出土遺物 (fig. 96, pla. 60~62)

土師器

小皿 a (1~12) 復元口径8.8~10.0cm、器高1.0~1.5cm。底部切り離しは、8は底部切り離しが斜切りで、それ以外は回転ヘラ切り。

小碗 c (13) 口径9.4cm、器高3.4cm、高台径4.1cm。口縁端部を僅かに外反させる。胎土は僅かに砂粒を含み、焼成は不良で鈍い黄褐色を呈する。

碗 c (14) 高台径7.4cm。全体的に磨滅するが、外底部には板状圧痕が残る。色調は淡茶褐色を呈する。

丸底平 a (15~18) 15は復元口径14.8cm。16・17は口縁部を欠損する。全体的に磨滅するが部分的にミガキ痕跡が確認できる。

小壺 (19) 口縁端部を僅かに欠損し、現存高9.4cm、底径5.9cm。焼成は不良で、調整は不明で底部外面に板状圧痕が残る。色調は淡白褐色を呈する。

黄褐色土出土遺物 (fig. 97, pla. 71・72)

須恵器

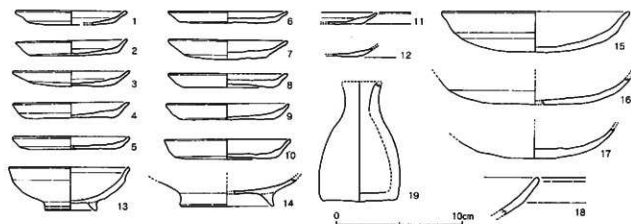


fig. 96 39SX015 出土遺物実測図 (1/3)

蓋 3 (1) 外面上半部はヘラ切り後粗いナデ。内面は研磨され、転用碗とみられる。復元口径11.8cm、土師器

小皿 a (2~7) 復元口径7.8~9.8cm、器高1.0~1.5cm。全体的に磨滅しているが、底部切り離しはヘラ切り。色調は暗褐色や淡茶褐色を呈する。

丸底平 (8) 外面はヘラ切り後押し出しで、指頭痕が残る。

竇×鍋 (9) 器壁は比較的薄く、口縁部を僅かに外反させる。磨滅も目立つが部分的に回転ナデ調整が残る。胎土は淡褐色で砂粒を僅かに含む。

須恵質土器

鉢 (10) 口縁端部を肥厚させる。色調は端部外面が青灰色で、他は灰色を呈する。東播系。

石製品

石鍋 (11) 石鍋の底部部分で、内面には加工時のものとみられる深い傷が残る。断面部に加工痕が見られるため、石鍋を再利用しようとしたことが窺える。外面には表十 (Fig. 99-13) で出土した石鍋の再利用品と同様の浅い溝があり、接合こそしないものの同一品であった可能性が高い。

茶褐色土 (S-5) 出土遺物 (fig. 97, pla. 71・72)

土師器

小皿 a (12~14) 復元口径8.2~8.4cm、器高0.9~1.3cm、復元底径6.1~6.7cm。全体的に磨滅している。

石製品

石鍋 (15) 石鍋の口縁部で内外面ともケズリ痕跡が残る。径0.8cmの穿孔と内面には径・深さとも0.3cmの穴が彫り込まれている。

滑石加工品 (16) 大きさは縦5.6cm、横1.8cm、厚さ2.0cmで、全体的に研磨され穿孔や細かい条痕が見られるが、用途は不明である。

暗灰色土 (S-5) 出土遺物 (fig. 97・98, pla. 63~70)

土師器

小皿 a (17~31) 復元口径8.2~10.0cm、器高1.0~1.55cm、24はやや深く1.8cm、底径6.4~7.7cm。底部切り離しは全てヘラ切りである。外面底部に板状圧痕が残るものが多い。29はヘラ切り後未調整。色調は茶灰色や黄褐色を呈する。

脚付皿 (32) 一脚しか残っていないが、三脚になるものと考えられる。皿部分は浅く、端部を若干折り曲げ丸く仕上げる。焼成は若干不良で、色調は淡黄褐色を呈する。復元口径11.0cm。

平 a (33・34) 33は復元口径16.0cm、器高2.3cm、復元底径12.8cm。切り離しは不明だが、外面底部に板状圧痕が残る。色調は白褐色を呈する。34は復元口径15.8cm、器高3.35cm、復元底径9.6cm。切り離しは回転ヘラ切りで、板状圧痕が残る。内外面とも回転ナデ。色調は淡褐色を呈する。

丸底平 a (35~37) 復元口径13.3~15.6cm、器高3.0~3.6cm。底部は回転ヘラ切り後押し出している。内面は36と37の一部にミガキを施す。

鉢 (40~43) 40は復元口径41.0cm、器面は荒れているが内面ヨコナデ。口縁端部は折り曲げて丸く仕上げる。胎土は0.4cm以下の砂粒を多く含み、色調は淡褐色を呈する。41は口縁部を折り曲げ丸く仕上げる。胎土は0.3cm以下の白色砂粒を多く含み、淡黄褐色を呈する。42は口縁部のみで全形が想像しがたいが、鉢状になるものと推測する。端部は僅かに外反し、内面を斜めに成形する。全体的に磨滅するが内面はナデ調整か。胎土は砂粒を多く含み、色調は茶褐色や灰褐色を呈する。43は復元

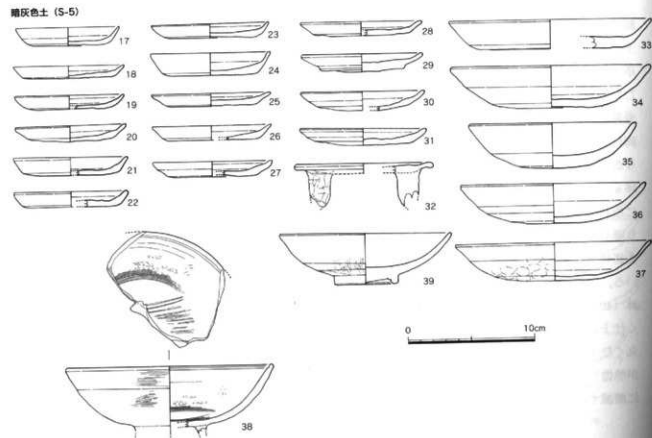
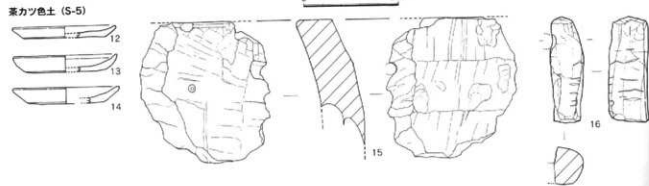
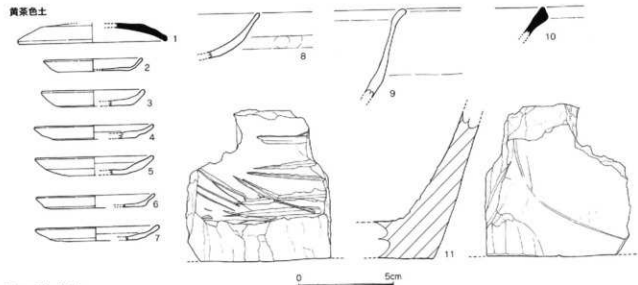


fig. 97 第39次黄茶色土・茶カツ色土・暗灰色土出土遺物実測図 (1/2、1/3)

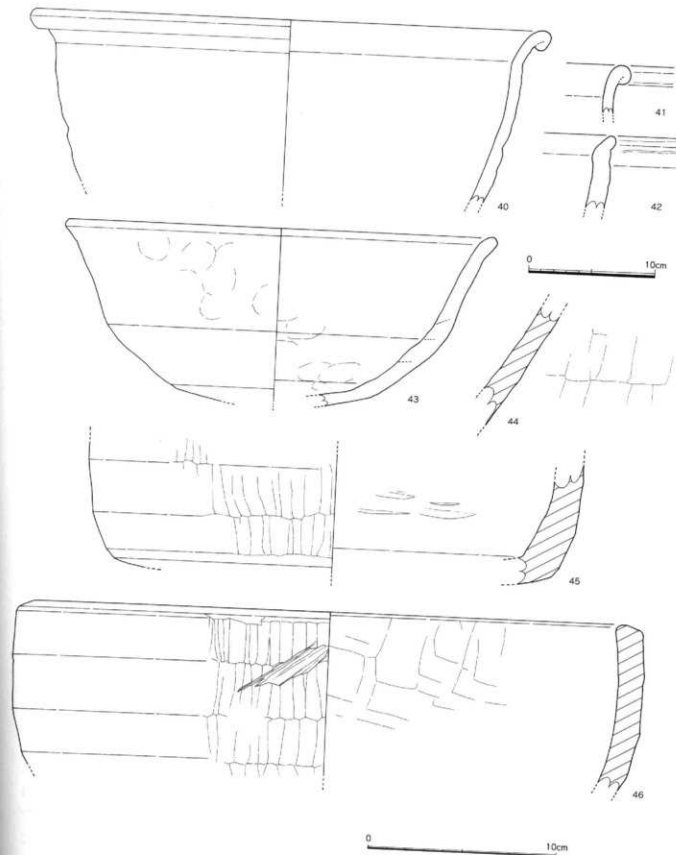


fig. 98 第39次暗灰色土出土遺物実測図 (1/2、1/3)

口径 34.0cm, 内外面には指頭痕が僅かに残り、外面下半には煤が一部付着している。内面には粘土紐の接合痕が確認できる。色調は淡褐色を呈する。

瓦器

碗 c (38) 口縁部内面に浅い沈線が巡る。内外面にミガキ c を施す。復元口径 16.4cm。

白磁

碗 (39) 口径 13.5cm, 器高 4.05cm, 高台径 5.0cm, 釉はやや黄色みがかった灰色で光沢がある。高台笠付および内面以外は施釉される。素地は若干灰色がかかった白色で、微細な黒色粒を僅かに含む。

石製品

石鍋 (44~46) 全て滑石製で、内外面にケズリ加工し、外面には明瞭にケズリ痕跡が確認できる。44 は外面に煤が付着し、熱により若干脆くなっている。45 は底部付近で外面に煤が付着する。46 は口縁部付近で、外面に薄く煤が付着する。端部を外側にやや斜めに削る。

茶色土出土遺物 (fig. 99)

須恵器

釜 3 (1) 焼成・還元は良好で、灰青色を呈する。外面上半部はヘラ切り未調整。その他は回転ナデ。

坏 a (2・3) 焼成・還元は良好で、灰褐色を呈する。底部外面はヘラ切り後ナデ調整。その他は回転ナデ。2 についてはヘラ切り挿入痕が明瞭に残る。

坏 c (4) 体部と底部の境は明瞭で、やや潰れた高台を貼付する。復元高台径 9.3cm。焼成不良で淡灰

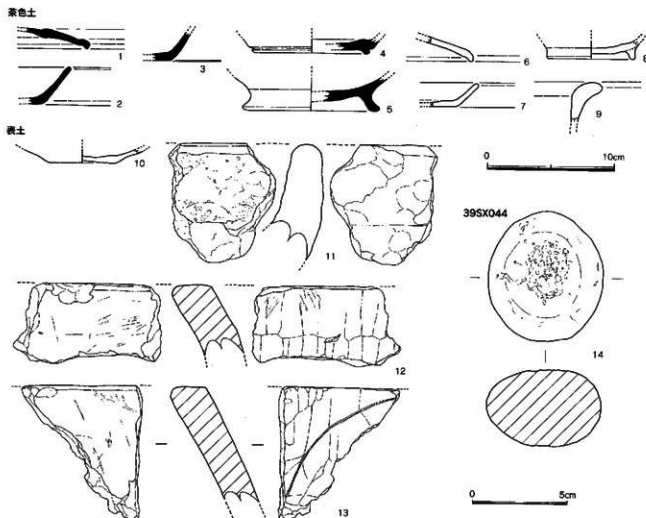


fig. 99 第 39 次茶色土・表土・SX044 出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

褐色を呈する。

壺 (5) 復元高台径 10.7cm。焼成は若干不良で、調整は若干不明瞭である。

土師器

壺 (6) 口縁部が僅かに屈曲させている。調整は内外面とも回転ナデ。色調は暗茶褐色を呈する。

皿 a (7) 焼成は不良で、淡茶褐色を呈する。器高 1.9cm。

碗 c (8) 焼成は不良で、淡黄灰色を呈する。復元高台径 7.0cm。

甕 (9) 若干肥厚した口縁部で、調整は磨滅し不明瞭であるが、体部と口縁部の境は明瞭である。

表土出土遺物 (fig. 99, pla. 73・74)

土師器

小皿 a (10) 体部は底部から大きく外開する。底部径 5.2cm。色調は黄褐色で、胎土は少量の白色砂粒を含むが精製されている。焼成は不良で、調整は不明瞭。

土製品

埴壇 (11) 胎土は 0.5cm 以下の白色砂粒を多く含み、内面は熱により硬く焼き締まり、細かな気泡やヒビがみられ、灰色を呈する。外面は黄茶灰色を呈し、指頭痕が僅かに確認できる。大きさは復元するほど残っていないが、外径 25cm 前後になるものと推測される。

石製品

石鍋 (12・13) 2 点とも内外面にケズリ調整し、外面はケズリ痕跡が明瞭に残る。上面は平坦に仕上げる。13 は断面部分にもケズリ加工が見られるため、石鍋を再利用したものと考えられる。外面には弧を描く浅い溝がある。二次加工時のものか。

39SX044 出土遺物 (Fig. 99)

石製品

叩き石 (14) 大きさは 6.85 × 6.0cm、厚さ 4.1cm。叩き痕が両面に残り、側面は研磨されている。

(5) 小結

遺構はピットが殆どで、8 世紀代の遺物を含む堆積層とそれに切り込んで 11 世紀後半～12 世紀前半の遺構が展開する状況である。焼け上がが検出されているが、氈滓類は偏かしか出土していないため、生産活動は小規模であった可能性が高い。出土遺物も大きく 2 時期だけで、これ以後の遺物は全く出土せず、11 世紀後半～12 世紀前半の短期間だけ人の活動があったものと推測される。この谷の下流に当たる第 12 次調査では、筑紫野市原から小宇大門に上がる道筋で、平安時代後期を中心とする遺構が確認され、遺構や井戸が検出されている。遺物も 14 世紀前半や 18 世紀後半の時期のものも出土しているため、今回の調査地以上に時期幅のある活動が見受けられる。

また、11 世紀後半～12 世紀前半埋没の沢を利用した通路 (39SX010) については、すぐ上方に浄戒座主の墓敷や墓所があったと言われている丘陵が見えているため、簡単に言えば、そこへ続く通路と考えたくなるが、発掘調査は行われていない。浄戒座主の実態を記した資料は少ないが、『龍門山田記』には 10 世紀～文禄元年 (1592) まで続いたと書かれている (森 2000 年)。浄戒座主屋敷跡を含む周辺一帯では土器や瓦の採集は行われているため、浄戒座主屋敷跡のある丘陵も含め、この東方のジル谷一帯にこの通路の行き先があるものと推測される。しかし、この狭い谷を通らなくても、往來が可能な広い谷が西や南に存在するため、利用頻度はさほどなかったと推測され、それが限定的な時期と遺物量に反映されているものと考えられる。

参考文献

『宝満山歴史散歩』森弘子 2000 年葎書房

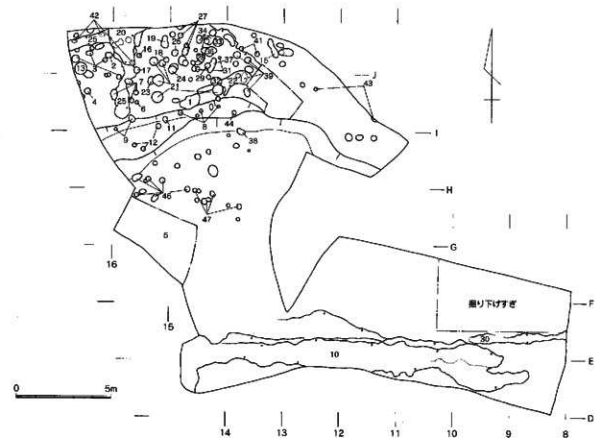


fig. 100 第 39 次調査略測図 (1/200)

tab. 18 第 39 次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	種別	埋上はか	時期	地区
1	39SX001	焼け土			I14
2		ビット			J16
3		ビット群			J16
4		ビット			I16
5		堆積層	暗灰色上。礫と炭多く混じる		G15
6		ビット			I15
7		ビット群			I15
8		ビット群		平安時代	I14
9		ビット群			I15
10	39SX010	沢と通路	礫堆積	XII 期	E ライン
11		ビット			I15
12		ビット群			H15
13	39SK013	土坑	灰褐色土。5 個礫あり	平安後期以降	J16
14		ビット	場所不明		J16
15	39SX015	土器埋蔵遺構		XII ~ XIII 期	J13
16		ビット	炭多く混じる		J15
17		ビット	中心に炭あり		J15
18		ビット			J15
19		ビット			J15
20	39SK020	土器だまり		平安時代後期	J15
21		ビット群	黒灰色砂質土		I15
22		濠状遺構			I13・14
23		ビット			I15
24		ビット			J14
25	39SD025	溝	茶褐色土	平安時代後期	IJ15・16
26		ビット	炭多い		J14
27		ビット群			J14
28		ビット			J14
29		ビット			J14
30	39SX030	溝	明灰白色粘土、その上に礫		E8・9
31		ビット群			J14
32		ビット			I14
33		ビット			J14
34		ビット群			J14
36		ビット			J14
37		土坑			J14
38		ビット			I13・14
39		ビット群			J13
41		ビット群			J13
42		ビット群	S-25 の下		I15
43		ビット群			I12
44	39SX044	ビット	礫 1 個あり		I13
46		ビット群		奈良時代?	H15
47		ビット群			G15
黄茶色土		遺構検出時の土色			
茶色土				奈良時代	
暗灰色土				XIII 期前後	
茶褐色土				XIII 期前後～	
淡褐色土					

Y-41, 540.0

Y-41, 530.0



fig. 101 第40次調査遺構全体図 (1/100)

10. 宝満山遺跡群第40次調査

(1) 調査に至る経過

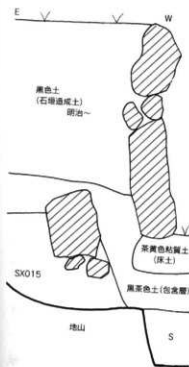
調査地は、太宰府市大字内山 927、929、928-1 に所在し、旧小字では大門にあたる。地権者より、個人による農地改良（田普請）を行いたいという願いが、太宰府市教育委員会文化財課にあり、遺跡包蔵地区にあたるため平成 21（2009）年 3 月 5 日に確認調査を行った。その結果、対象面積 320 ㎡中、北側の一部において遺構・遺物が確認されたため、埋蔵文化財発掘調査を行うことで地権者と合意をした。地権者から文化財保護法第 93 条が提出され、埋蔵文化財の発掘調査が行われた。開発対象面積は 320 ㎡、調査面積は 165.4 ㎡。調査期間は平成 21（2009）年 4 月 20 日から同年 7 月 17 日。調査は高橋学が担当した。

(2) 調査の概要 (fig. 103)

調査前の対象地は農地として使われていた。南北に敷設された畦道とそれに伴う水路の東側に隣接しており、農地の形としては上下を逆さにして反転した L 字形をしている。L 字の内側の土地は畦道と同じレベルで、外側の土地とは 2m ほどの段差があるため、乱雑に組まれた石垣で土留めをしている (pla. 1-4)。

この農地の周辺では、過去に表面調査により遺物が採取されている。対象地の東側（大門 916-1～919、遺跡番号 04601）では、古代から中世の遺物が採取されている。対象地の西側（大門 932、934-1、遺跡番号 04603）でも古代から中世の遺物が採取されている。また、北部から北西部にかけては太宰府市教育委員会文化財課によって宝満山遺跡群第 24、27、36 次調査として発掘調査されている。fig. 102 でまとめているように、現在の耕作面を区画している石垣は明治時代のものであった。この石垣により、

上段と下段に明確に分かれた耕作地が存在していた。石垣の裏込の黒色土層からは大量の中世以降の土器と瓦が出土している。これは上から流れた包含層を含んでいることを示す。遺物以外にも大量の礫、岩石などを含んでいた。これを除去すると中世の遺物を含む包含層である黒茶色土となる。黒茶色土層を除去すると遺構が検出される (pla. 5)。ただし、調査区北部では少し様相がかわり、耕作土の下層に、暗黒茶色土層（大量の礫混じり）があり、その下層に明茶色土（遺物包含層）が厚く堆積している。fig. 103 の北壁土層図を参考にすると、40SK001 とした遺構は土層の観察から、明茶色土の上層から掘られていた可能性が考えられる。そのことは新しい時期にも遺構面が存在していたが、調査段階では見逃していた可能性を示している。今後の課題としたい。



(3) 検出遺構

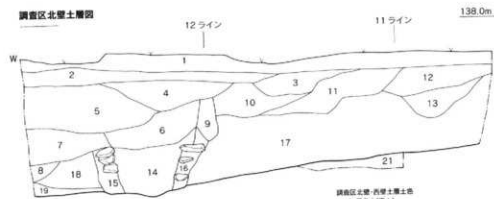
住居

40SI055 (fig. 104, pla. 53～57)

fig. 102 第40次調査基本層位図

調査区の北部で検出した遺構で 40SK050 により大部分が欠出しているが、遺構の切り合いや土層から南北長 3m、東西長 3.1m 以上、深

調査区北壁土層図



- 調査区北壁土層土名
1. 黒色土(粘土)
 2. 黄褐色土(粘土)
 3. 黄褐色土(土層、瓦も多数含まれる)
 4. 黄褐色土
 5. 黄褐色土(磚も多数含む)
 6. 黄褐色土
 7. 黄褐色土(やや粘質強い)
 8. 灰黄色粘質土(灰黄色部)
 9. 黄褐色土(粘土)
 10. 黄褐色粘質土(黄褐色土を70%以上含む)
 11. 黄褐色土(粘土)
 12. 黄褐色土
 13. 黄褐色土(小礫も少量含む)
 14. 黄褐色土(2000g礫も多く含む、40SK001層土)
 15. 黄褐色土(40SK001層土)
 16. 黄褐色土(40SK001層土)
 17. 黄褐色土(磚も含む)
 18. 黄褐色土
 19. 黄褐色土(粘質土(5-7層土))
 20. 黄褐色粘質土
 21. 黄褐色土

調査区西壁土層図

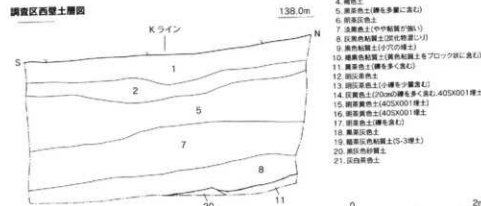


fig. 103 第40次調査区北壁、南壁土層図 (1/40)

は花崗岩の風化土であるが、推定床面には灰赤色粘質土が薄く広がっており使用時の汚れと思われる。遺構保存のためにこの層を掘り下げてはいない。これらの情報から、この遺構は竈穴住居もしくは工房として使用されたものと想定している。出土遺物と切り合い関係から、XII期以降に掘削し、その後使用されたが、XIV期には埋没したと考えられる。

溝

40SD020 (fig. 105)

調査区中央部西端で検出した東西方向の溝で、調査区外に展開する。長さ7.0m、幅0.5~0.8m、深さ0.06mを測る。埋土は褐茶色土で土師器片と小石を少量含む。埋土は固く締まっていた。後述する40SD030と対になるものと考えられる。出土遺物は少量で時期の決定には至らないが、瓦器片と白磁板片から12~13世紀代中には埋没したと推測される。

40SD030 (fig. 105, pla. 34~38)

調査区中央部で検出した東西方向の溝で、調査区外に展開する。長さ6.9m、幅0.4~1.1m、深さ0.11~0.33mを測る。北西部の2.5mほどの範囲は溝の幅と深さが深くなっている。これは掘り返しか別遺構の可能性もあるが、検出時には同じ茶褐色土の埋土だったため同一の遺構として報告をする。埋土は茶褐色土。出土遺物より12世紀中頃~後半に埋没したと考えられる。40SD020とは対になる溝と想定している。

40SD040 (fig. 105, pla. 42)

調査区南部中央に位置する南北方向溝だが、南側端はつまり状の遺構に切られて不明。長さ4.9m、幅0.45m~0.8m、深さ0.16mを測る。埋土は黒茶色土。遺構の埋没年代は、出土遺物から8世紀の

き0.3mの正方形に近いプランに推定復元可能である。東側は40SK036の堆積層の上に作られていた可能性が高い。北辺中央部に、東西長0.8m、南北長0.8m、深さ0.15mを測る円形の掘り込みがあり、その掘り方の北側に並列して2つの石が配置してある。埋土は暗黒色を呈す炭化物。これらの状況から、このくぼみは竈跡と考えている。この遺構の埋土は北側から傾斜して堆積している。地山

40SI055

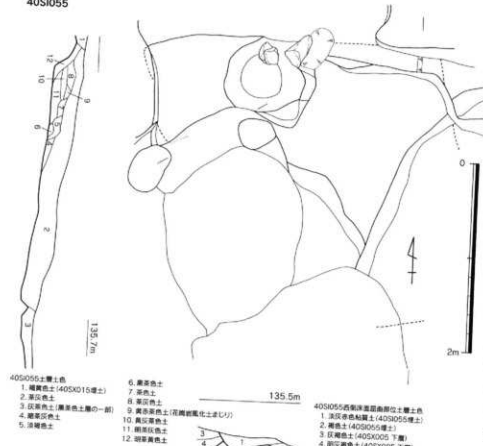


fig. 104 40SI055 遺構実測図 (1/40)

南北長1.07m、東西長1.02m、深さ0.9mを測る。埋土は古い段階から、黄茶黒色粘質土→暗茶黒色粘質土→暗茶黒色土→茶黒色土→明茶色土。遺構の切り合い関係としては40SK050を切り40SD030に切られている。出土遺物と遺構の切り合い関係から埋没年代は、12世紀中頃以前と考えられる。

40SK035 (fig. 107, pla. 39)

調査区西部東側に位置する不整形の土坑。調査区外に展開する。南北長1.83m、東西長0.65m、深さ0.93mを測る。埋土は古層から、暗茶色粘質土→明茶色粘質土→茶色粘質土(上記3層は取り上げ時、灰黄色粘土)→茶赤色土→茶褐色黄色土(上記2層は取り上げ時褐黄色土)→灰黄色粘質土→明赤黄色粘質土(やや粘質強い)→明赤黄色粘質土→茶褐色土→茶褐色土(上記4層は取り上げ時、黄灰黄色土)。遺構の埋没年代は奈良期のものが多いが、出土遺物の新しい要素として越州窯青磁片が出土していることから、陶磁器A期(V~IX期)の幅を考えている。

40SK037 (fig. 107, pla. 40・41)

調査区東部中央に位置する土坑。調査区外に展開する。南北長2.6m、東西長1.7m、深さ1.1mを測る。西側の壁面はオーバーハングしている。埋土は古層から暗褐色土→茶褐色土→黄茶色土→赤褐色土→黄茶色土となる。遺物はほぼ底面に堆積している暗褐色土(取り上げ時は灰黒色土)から炭化物といっしょに大量に出土している。土器の取り上げ時の土層は、最下層以外は赤茶色土とした。最上面の堆積土である黄茶色土は真砂土に近く、0.5~0.8mと均一で厚く堆積していることから、人為的に埋戻しを行っている可能性がある。出土遺物から埋没年代は、XIII~XV期と比較的時間幅があると考

のも出ているが白磁片がでているため、平安時代まで下ると思われる。前出の40SD020・40SD030に関連する溝と考えられる。

土坑

40SK026 (fig. 101)

調査区中央やや北側に位置する円形土坑。南北長1.2m、東西長1.1mを測る。埋土は暗黒灰黄色土(炭化物混じり)。遺構の切り合いから40SK050より埋没は新しい。出土遺物から埋没時期はXIII期と考えられる。

40SK027 (fig. 106, pla. 33)

調査区中央やや北側に位置する円形土坑。

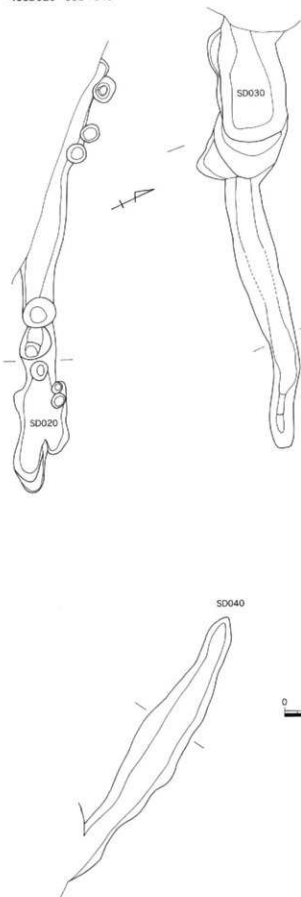


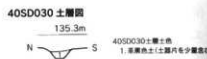
fig. 105 40SD020・030・040 遺構実測図 (1/60)



- 40SD030土層図
- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1. 黄褐色土(土層片を多く含む) | 4. 暗茶褐色土(土層片を多く含む) |
| 2. 赤褐色土(土層片を多く含む) | 5. 灰褐色土 |
| 3. 黄褐色土(土層片を多く含む) | 6. 暗茶褐色土 |
| 7. 暗茶褐色土 | |



- 40SD030北壁土層図
- | | |
|--------------------|----------------------|
| 1. 赤褐色土 | 7. 暗茶褐色土(5層土) |
| 2. 黄褐色土(土層片を多く含む) | 8. 赤褐色土(赤褐色土を多く含む) |
| 3. 黄褐色土(S-4層土) | 9. 赤褐色土(土層片を多く含む) |
| 4. 黄褐色土(40SD030層土) | 10. 暗茶褐色土(赤褐色土を多く含む) |
| 5. 赤褐色土(40SD030層土) | 11. 赤褐色土(土層片を多く含む) |
| 6. 暗茶褐色土 | 12. 赤褐色土 |
| | 13. 赤褐色土(土層片を多く含む) |



- 40SD040土層図
- | |
|-------------------|
| 1. 黄褐色土(土層片を少量含む) |
|-------------------|

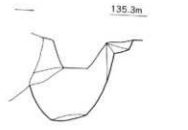


fig. 106 40SK027 遺構実測図 (1/40)

その他の遺構

40SX001 (fig. 101・103)

調査区北部北寄りに位置するたまり状遺構。調査区外に展開する。東西長1.3m、南北長0.5m、深さ0.17mを測る。浅いたまり状の一部、東側が小穴状に落ち込んでいる。北壁土層を検討している段階で、40SX001に対応する土層は、両側が石が縦方向に並んで中央に直径1mほどの掘り込みになることから、検出面から0.7mほど上層から切り込んだ石組み井戸の底を掘っていた可能性がある。遺構の埋没時期は、出土遺物から XVIII 期以降と考えられる。

40SX002 (fig. 121)

調査区北部北寄りに位置する小穴。東西長0.2m、南北長0.25m、深さ0.03mを測る。埋土は茶色土。

40SX004 (fig. 121)

調査区北部東寄りに位置するたまり状遺構。南北長1.5m、東西長0.65m、深さ0.12mを測る。埋土は茶灰色で黄色粘質土混じりである。

40SX005 (fig. 109, pla. 48 ~ 52)

調査区北部西寄りに位置する炉跡。遺構としては炉跡とその周辺の炉に関係するであろう範囲まで遺構と考えている。炉跡は南北長0.54m、東西長0.56m、高さ0.12cmの円形炉である。東方向に開口し

えられる。

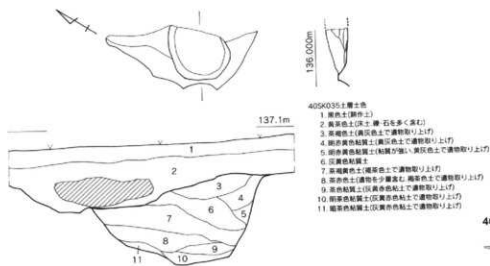
40SK042 (fig. 107)

調査区西部中央に位置する土坑。調査区外に展開する。南北長0.2cm、東西長1.6m、二段掘りになっており、深さ0.2 ~ 0.57mを測る。埋土は暗茶色粘質土。遺構の埋没年代は出土遺物より、12世紀代と考えられる。

40SK050 (fig. 108, pla. 48 ~ 52)

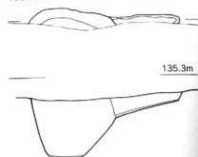
調査区北部中央に位置する土坑。検出時は不整形の大型土坑だったが、掘り下げていくと南北二連の円形土坑の連なりとなった。南北長3.95m、東西長2.2m、深さ0.5 ~ 0.65mを測る。土層の堆積状況からは最終埋没は北側から埋まっていったことがわかる。埋土は古層より、灰茶黄色土→明黄茶色粘質土→明茶褐色土→暗黒色土(炭化物層)→暗灰色粘質土→灰色粘質土→灰黒茶色土→茶灰色土→暗茶色土→灰茶色粘質土→明茶褐色土→明茶褐色土→茶色土となる。遺物取り上げ時には、上層を一括で茶灰色土とし、南北それぞれのプランが見えた時点で、北の土坑埋土を明茶灰色土、南の土坑埋土を黒茶色土とした。南側の土坑は XIII 期に埋没しており、その北側の土坑も時期差はあまり無く埋没したと考えられる。この土坑全体に堆積がはじまったのは XIV ~ XV 期と考える。理由としては、最終堆積層の茶灰色土層は、古い土器を含んでいるが輸入陶磁器の様ことから XIV ~ XV 期にわたり埋没したと考えられる。

40SK035

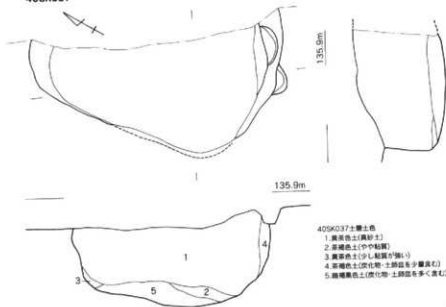


- 40SK035土層断面
 1. 赤褐色土(砂土)
 2. 赤褐色土(灰土) 骨・石を多く含む
 3. 赤褐色土(灰土)上で遺物あり(土片)
 4. 磁器片粘土(灰土)上で遺物あり(土片)
 5. 磁器片粘土(灰土)上で遺物あり(土片) 灰褐色土(灰土)で遺物あり(土片)
 6. 磁器片粘土
 7. 磁器片粘土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 8. 磁器片粘土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 9. 磁器片粘土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 10. 磁器片粘土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 11. 磁器片粘土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)

40SK042



40SK037



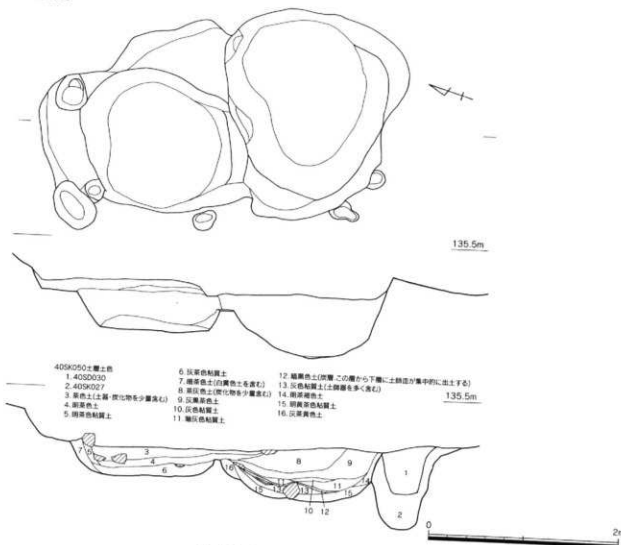
- 40SK037土層断面
 1. 赤褐色土(砂土)
 2. 赤褐色土(砂土)粘土
 3. 赤褐色土(砂土)粘土(灰土)
 4. 赤褐色土(砂土)粘土(灰土)上で遺物あり(土片)
 5. 赤褐色土(砂土)粘土(灰土)上で遺物あり(土片)

fig. 107 40SK035・037・042 遺構実測図 (1/40)

ており、中央に向かって楕円状に凹んでいる。北側の炉部は上部ならびに内側が白色化しており温度が上がったことがわかる。西側の開口部の先には幅 0.25m 程度で西に向かって真砂土が敷き詰めであった。厚みは 0.02m。東側の開口部からは図示した範囲、おおよそ南北長 1.4m、東西長 0.8m の範囲に厚み 0.06m の炭層が堆積していた。この 40SK005 が基盤とする堆積層である 15 層からは鍛造剥片が確認されている。おそらく、この炉は西側に輪羽口を設置し、東側から燃焼後の炭を掻き出していたのではないだろうか。

炉跡の南側にも南北長 0.3m、東西長 0.3m、高さ 0.17m を測る高まりがあり、ここでも赤褐色に変化

40SK050



- 40SK050土層断面
 1. 40SK030
 2. 40SK037
 3. 赤褐色土(砂土)粘土(灰土)上で遺物あり(土片)
 4. 赤褐色土
 5. 赤褐色土
 6. 赤褐色土
 7. 赤褐色土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 8. 赤褐色土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 9. 赤褐色土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 10. 赤褐色土
 11. 赤褐色土
 12. 赤褐色土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 13. 赤褐色土(灰褐色土)上で遺物あり(土片)
 14. 赤褐色土
 15. 赤褐色土
 16. 赤褐色土

fig. 108 40SK050 遺構実測図 (1/40)

した土と炭層の残存が確認できることから、炉跡の可能性を指摘しておきたい。

埋没年代は炉跡を覆っていた灰色土層の出土遺物から XVI ~ XVII 期には埋没していることがわかる。この炉跡群は地権者との協議により、保全がされることが調査の途中段階で判明したため、完掘せず真砂土で埋め戻して保全している。

40SK008 (fig. 121)

調査区中央部東側に位置する小穴。直径 0.25cm、深さ 0.2m を測る。埋土は茶色土。

40SK010 (fig. 110, pla. 13 ~ 20)

調査区中央部西側に位置する平面プラン隅丸方形の土坑状遺構。長軸長 1.6m、短軸長 1.15m、深さ 0.2m を測る。南側に小穴状に落ち込みがあり、寸法は南北長 0.35m、東西長 0.25m、深さ 0.1m を測る。埋土は古層から茶褐色土→明茶褐色土となる。中央部から西側にかけて 20cm 前後の礫が据え置かれており、その周辺に完形に近い土器部環 a を中心に 5 枚置かれていた。環 a ②には合わせ口のように口縁部を下にした環 a ①が重ねている。環 a ③は口縁部を下にして二枚重ねて伏せていた。環 a ④は口縁部を上にしてあった。小皿 a ⑤は口縁部を上に向けて据えてあり、周辺からは碗片が出土している。こ

40SX005

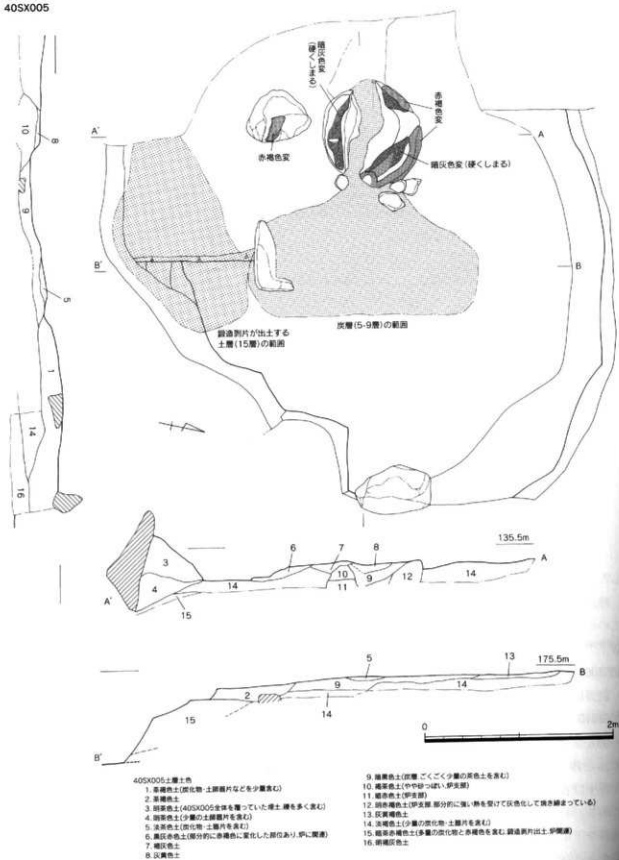


fig. 109 40SX005 遺構実測図 (1/20)

40SX010

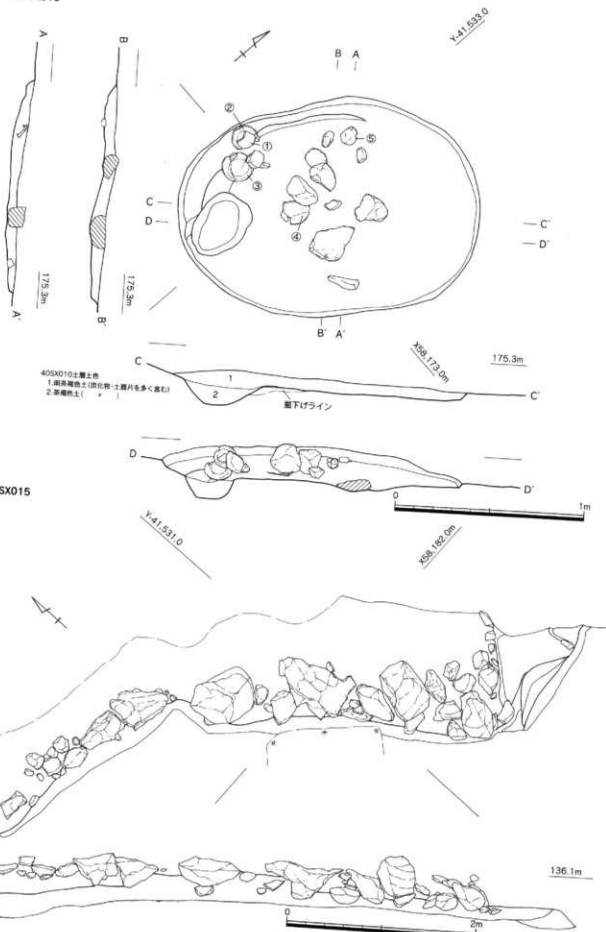


fig. 110 40SX010 - 015 遺構実測図 (1/20, 1/40)

の土師皿群を副葬品と見ると、この遺構は土壌層と認定しても良いと考えられる。遺構が浅いのはおそらく削平により、遺構の掘り方の大部分が欠損しているためであろう。出土遺物から XV ~ XVI 期に構築されたものと考えられる。

40SX015 (fig. 110, pla. 21 ~ 23)

調査区北部中央に位置する石列とそれを覆う堆積層。石列は南東部から北東部へ直線的に 3.5m ほど延びた後に、西へ 2.2m 延びる。0.5 ~ 0.7m ほどの大きさの石を乱雑に並べ、その間を 0.2m 程度の石でふさぐように組み合わせられて構築しており、検出時には 1 段のみだった。この石列と石列を覆うように黒茶色土層が 0.5m ほど堆積しており、調査区中央に向かって、最大で幅 5m、長さ 6m の範囲に埋土が広がっていた。石列は地形の変換部に構築された土留めであった可能性を考えている。

出土遺物を見ると土師器には古い様相が多いが、龍泉窯系青磁碗 I 類片が出土していることから陶磁器時期区分 D 期まで下げて考えられる。よって遺構が埋没したのは、XIV ~ XV 期と考えておく。

40SX016 (fig. 121)

調査区中央西側に位置する小穴群。埋土は茶色土。

40SX025 (fig. 111, pla. 25 ~ 32)

調査区中央東側に位置するたまり状遺構。南北長 5.7m、東西長 1.7m、深さ 0.4m。埋土は古層より灰黄色粘質土 → 黒灰茶色土 → 明茶灰色土 → 茶黄色土 → 暗黒灰色土 → 明茶色土。遺構中央を中心に土師皿が口縁部を上に向けて据えられるように検出されたため、それぞれにアルファベットで番号をつけて取りあげた。埋土は大きく上層と下層に分かれており、先述の土器群は下層の黒灰茶色土から出土している。土師皿の配置に強い意図を感じないこともあり、廃棄の状況を示していると理解している。出土遺物から埋没時期は、XVI ~ XVII 期になる。

40SX032 (fig. 121)

調査区中央に位置する堆積土層。S-22 や 40SX025 に切られている。埋土は淡灰赤色粘土。出土遺物から XI 期以降に堆積した土層と考えられる。

40SX036 (fig. 121)

調査区北部中央に位置するたまり状遺構。南北長 1.6m、東西長 2.0m、深さ 0.39m を測る。埋土は暗赤褐色土。出土遺物から埋没時期は XII 期以降と考えられる。

40SX039 (fig. 121)

調査区中央西側に位置する小穴群。埋土は暗褐色土。

40SX045 (fig. 111, pla. 43 ~ 47)

調査区南部東側に位置するたまり状遺構。南北長 2.0m、東西長 2.2m、深さ 0.38m。南側に一段落ち込み、そこに 0.4m 程度の礫岩と土師皿が集中して出土した。埋土の暗茶色土層から完形の土師皿が集中して出土した。出土遺物から XIV ~ XVII 期と時期幅が認められる。坏 a の傾向としては XVI を中心とした埋没と考えておく。

(4) 出土遺物

住居出土遺物

40SI055 灰褐色土出土遺物 (fig. 112, pla. 66 ~ 67)

瓦

平瓦(1) 側縁部の破片。縦 14.5cm、横 13.2cm、厚さ 2.0cm。焼成は良好で須恵質。凹面に細かな布目痕、

40SX025

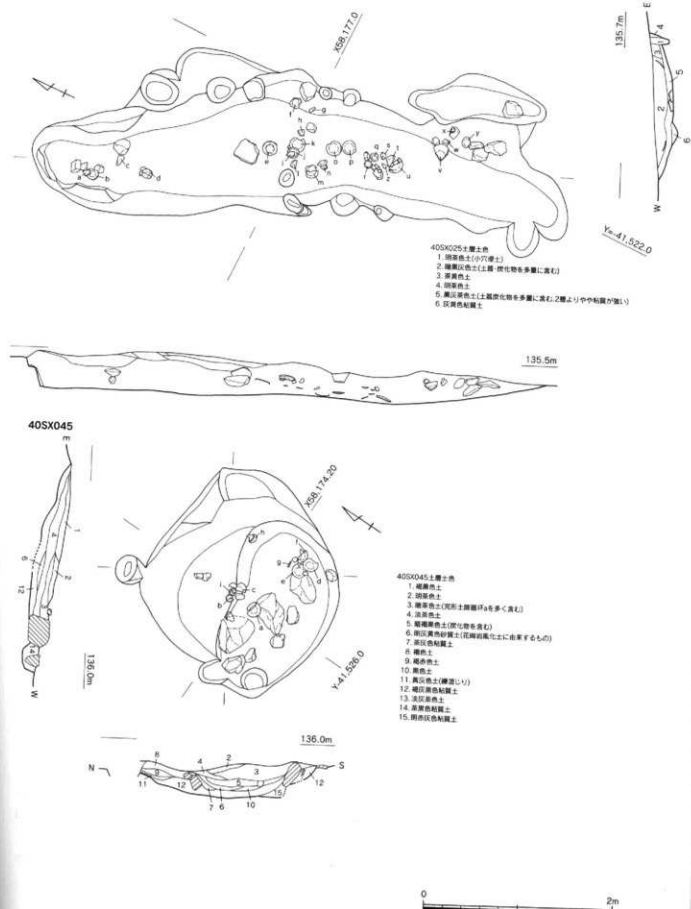


fig. 111 40SX025 - 045 遺構実測図 (1/40)

碗 (2) 口縁部破片。器高 1.9cm。内外面が摩耗して調整が不明。焼成は不良。
土製品

瓦玉 (3) 縦 2.5cm、横 2.7cm、厚さ 1.55cm を測る。

40SK027 出土遺物 (fig. 114, pla. 70・71)

瓦器

碗 (4) 口縁部破片。器高 2.0cm。内外面回転ナデ。焼成は良好。色調は淡灰色。

輸入陶器

壺 (5) 底部から体部への破片。中国製。器高 4.85cm。内面はヨコナデ調整、外面は回転ヘラ削り。底部はヘラ削り後にナデ調整。胎土分類 A-1 群。

40SK035 出土遺物 (fig. 114, pla. 70・71)

須恵器

坏 c (6) 底部破片。器高 1.7cm、復元底径 7.6cm。高台貼り付け。焼成・還元は良好。色調は淡青暗灰色～灰色。

瓦

軒丸瓦 (7) 瓦当面の破片。焼成は良好で瓦質。

40SK037 赤褐色土出土遺物 (fig. 114, pla. 68・69)

土師器

小皿 a (8) 復元口径 9.2cm、器高 1.1cm、復元底径 7.4cm。底部切り離しは回転糸切り技法の後、板状圧痕。XVI 期。

40SK037 灰黒色土出土遺物 (fig. 114, pla. 68・69)

土師器

小皿 a (9～12) 復元口径 8.8～9.6cm、器高 0.9～1.1cm、復元底径 6.9c～7.4m。底部切り離し技法は 10 の回転ヘラ切りを除けば、すべて回転糸切り技法である。XIV～XV 期。

坏 a (13～15) 復元口径 14.8～15.8cm、器高 2.5～3.4cm、復元底径 9.6～11.5cm。底部切り離し技法はすべて回転ヘラ切り後に板状圧痕を伴う。XIII～XIV 期。

瓦器

碗 (16) 口縁部破片。摩耗が激しく内外面の調整は不明。焼成はやや不良。色調は淡灰白色。

白磁

皿 (17) 底部破片。VI 類。底部外面に墨で文字を描いているが破片のため文字の全景は不明。瓦平瓦 (18) 端部と側縁部の破片。縦 14cm、横 11.2cm、厚さ 1.55cm。凹面は細かい布目痕を一部ナデ消し。凸面は縄目叩きで一部ナデ消し。焼成はやや良好で土師質気味。還元はやや良好。

40SK042 出土遺物 (fig. 114, pla. 74・75)

瓦

軒平瓦 (19) 小破片。唐草文様の一部が確認できる。縦 4.4cm、横 6.3cm、厚さ 1.4cm。

40SK050 茶灰色土出土遺物 (fig. 114, pla. 74・75)

土師器

小皿 a (20, 21) 20 は口径 9.2cm、器高 1.4cm、底径 7.3cm を測る。底部切り離し技法は回転ヘラ削り。X1 期。21 は口径 9.2cm、器高 1.4cm、底径 7.6cm を測る。底部切り離し技法は回転ヘラ削り技法。XII 期。

瓦器

碗 (22) 口縁部から体部の破片。復元口径 14.4cm、器高 3.7cm。内面はやや粗いミガキ c を施す。外面はわずかにミガキ c が認められる。外面には底部押し出し技法に伴う指圧痕あり。筑紫型。

丸瓦 (23, 24) 23 は玉縁部破片。凹面は布目痕があり、布筒の綴じ合わせ痕跡が確認できる。凸面は格子目叩き。格子目叩き分類 I-Cc 類。24 は側縁部破片で、文字瓦。側縁部は切断時の切りこみが残り、他は未調整。縦 14.5cm、横 9.2cm、厚さ 2.0cm。凹面は布目痕。凸面は格子目叩きの後に不定方向のナデ調整を施す。格子目の間に十字菱文や、劍姿をモチーフにした文様を施す。格子目叩き分類 I-Cc 類。石製品

滑石製石鍋 (25) 縦 5.8cm、横 2.2cm、厚さ 1.9～2.3cm。口縁部の破片。上部に内外面を貫通する直径 0.6cm ほどの孔があり、その穿孔内部に金属の残存が確認できる。再加工品。
40SK050 黒茶色土出土遺物 (fig. 114, pla. 76～81)

須恵器

蓋 3 (39) 口縁部破片。器高 1.4cm。焼成・還元とも良好。天井部は回転ヘラ削りを施す。土師器

小皿 a (26～28) 26 は口径 9.4cm、器高 1.25cm、底径 7.7cm。底部切り離しは回転ヘラ削り。XIII 期。27, 28 は復元口径 9.4～9.6cm、器高 1.4～1.45cm、底径 7.3～8.0cm。底部切り離しは回転糸切り。XIII 期。

坏 a (29～32) 口径 14.8～15.8cm、器高 3.1～3.6cm、底径 10.6～11.4cm。底部切り離し技法が判別出来るものはすべて回転ヘラ削り。XIV 期前。

丸底坏 a (33～38) 口径 15.0～16.4cm、器高 3.0～3.65cm。底部切り離しは回転ヘラ削り後にナデ消している。35 のように底部押し出し技法が簡略化されていることから、XIV 期と考えられる。須恵質土器

片口捏ね鉢 (40) 捏ね鉢の片口部の破片。器高 4.9cm。焼成は良好で硬質に焼き上がっている。色調は淡灰色。片口部には黄灰色～黒色の自然釉がかかる。

40SK050 明茶灰色土

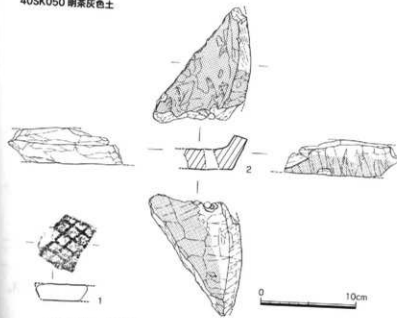


fig. 115 40SK050 暗茶灰色土出土遺物実測図 (1/4)

瓦

平瓦 (41) 凹面は布目痕、凸面は縄目叩き。焼成はやや良好で、瓦質。土製品

ミニチュア脚 (42) 縦 1.6cm、横 2.1cm。手捏ね成形。上部に体部との接合面がある。

40SK050 明茶灰色土出土遺物 (fig. 115, pla. 76・77)

瓦

平瓦 (1) 側縁部の破片。凹面の調整は摩耗で不明。凸面に格子目叩きを施す。格子目叩き分類 I-Cc 類。

石製品

滑石製石鍋 (2) 底部破片。再加工品。縦 3.8cm、横 12.1cm、厚み 2.1cm、重さ 347.2g。内面に炭化物が多く付着している。底部には内面見込み部から 10.0mm ~ 15.0mm の穿孔が認められる。

その他の遺物

40SX001 出土遺物 (fig. 116, pla. 82・83)

土師器

小皿 a (1) 復元口径 7.9cm、器高 1.2cm、復元底径 6.7cm。底部切り離しは回転糸切り技法。XVIII 期。

坏 a (2) 復元口径 14.2cm、器高 2.5cm、復元底径 9.4cm。底部切り離しは回転糸切り技法。XVI 期。

40SX002 出土遺物 (fig. 116, pla. 82・83)

瓦

平瓦 (3) 側縁部の破片。焼成は良好で須恵質の焼き上がり。凹面は布目痕、凸面は細かい格子目を施す。格子目叩き分類 I-Ca 類 (D-1 群)。

40SX004 出土遺物 (fig. 116, pla. 84・85)

須恵器

坏 (4) 口縁部の小破片。器高 2.6cm。

石製品

磨り石 (5) 縦 7.2cm、横 3.3cm、厚さ 1.65cm、重さ 60.2g。石材は安山岩。全面を使用しているが、特に側縁部が摩擦により使用痕が多く残っている。

40SX005 出土遺物 (fig. 116, pla. 82 ~ 85)

土師器

小皿 a (6) 口縁部の破片。器高 0.9cm。底部切り離し技法は不明。

坏 a (7) 小破片。器高 2.25cm。底部切り離し技法は回転糸切り。

須恵器

坏 a (8) 底部破片。器高 1.7cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。焼成・還元とも良好。

瓦器

皿 (9) 底部破片。器高 0.9cm。全体に摩耗しており調整が不明瞭だが、内面にわずかにミガキ c が残っているのを確認できる。

碗 (10) 口縁部から体部への破片。器高 5.3cm。内外面にミガキ c を施す。色調は内面が灰白色。外面が黒褐色。断面が灰白色。焼成はやや不良。

須恵器質土器

握ね鉢 (11) 口縁部破片。器高 3.15cm。内外面回転ナゲ調整。焼成は良好。

瓦

平瓦 (12) 側縁部の破片。側縁部処理は切断のための切り離し線を入れて折っており、その後は未調整。凹面に布目痕。凸面に格子目叩き文を施す。格子目叩き分類 I-Cb 類。

丸瓦 (13) 玉縁部の破片。凹面は布目痕。凸面は格子目叩きを施す。格子目叩き分類 I-Cc 類。

40SX005 茶色土出土遺物 (fig. 116, pla. 84・85)

土師器

坏 a (14) 復元口径 13.8cm、器高 2.3cm、復元底径 9.4cm。底部切り離し技法は回転糸切り。XVI ~ XVII 期。

中丸底坏 a (15) 復元口径 12.3cm、器高 2.5cm、復元底径 4.4cm。底部外面に指頭圧痕が残る。

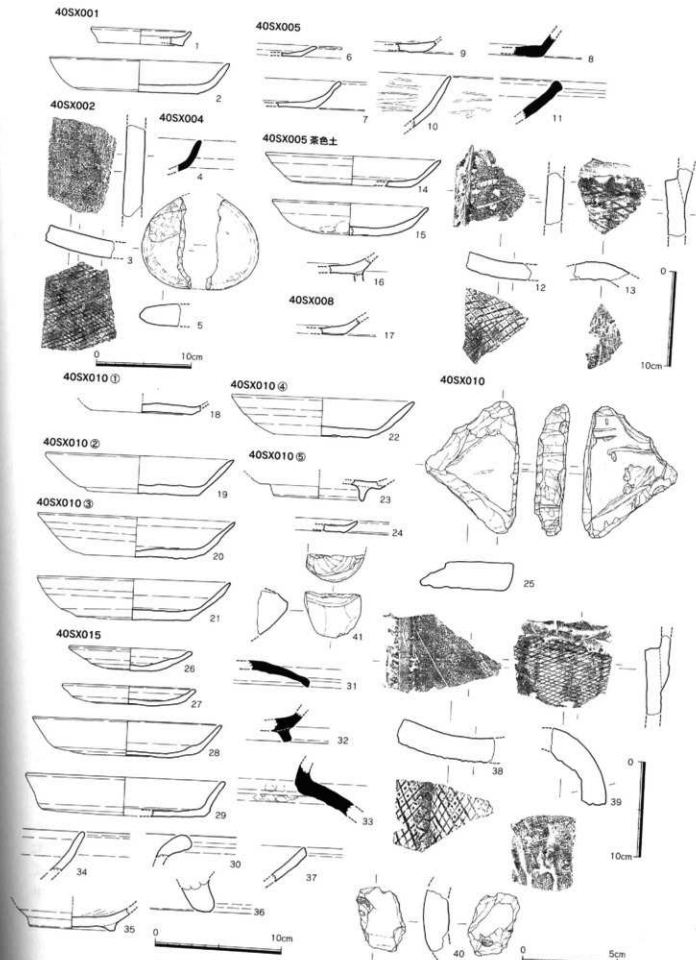


fig. 116 40SX001・002・004・005・005 茶色土・008・010・010 ①~⑤・015 出土遺物実測図 (1/2, 1/3, 1/4)

椀 c (16) 高台部破片。器高 1.4cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り、その後にはナデ調整。

40SX008 出土遺物 (fig. 116, pla. 84 ~ 85)

土師器

坏 a (17) 小破片。器高 1.35cm。全面摩耗して調整不明。底部に板状圧痕あり。

40SX010 ① 出土遺物 (fig. 116, pla. 84 ~ 87)

土師器

坏 a (18) 底部の破片。器高 0.8cm。復元底径 8.2cm。底部切り離し技法は摩耗のため判別不能。

40SX010 ② 出土遺物 (fig. 116, pla. 84 ~ 87)

土師器

坏 a (19) 口径 14.8cm、器高 2.95cm、底径 9.0cm。底部切り離し技法は回転糸切り技法。胎土に 1mm 以下の金色雲母を含む。残存率 9 割以上。XVI 期。

40SX010 ③ 出土遺物 (fig. 116, pla. 84 ~ 87)

土師器

坏 a (20, 21) 20 は口径 15.5cm、器高 3.15cm、底径 8.3cm。底部切り離し技法は摩耗のため断言はできないが、糸切りの可能性がある。21 は口径 15.2cm、器高 3.25cm、底径 9.1cm。底部切り離し技法は回転糸切り技法。ほぼ完形。内面見込み部に黒茶褐色付着物あり。20、21 ともに XV 期か。

40SX010 ④ 出土遺物 (fig. 116, pla. 84 ~ 87)

土師器

坏 a (22) 復元口径 14.4cm、器高 3.0cm、復元底径 7.2cm。底部切り離し技法は回転糸切り技法。残存率は 8 割程度。XVI 期。

40SX010 ⑤ 出土遺物 (fig. 116, pla. 84 ~ 87)

土師器

小皿 a (24) 小破片。器高 0.9cm。底部切り離し技法は摩耗のために不明。焼成は不良。色調は明橙褐色。

椀 c (23) 高台の破片。器高 1.55cm。復元底径 7.0cm。貼り付け高台。

40SX015 出土遺物 (fig. 116, pla. 84 ~ 87)

石製品

砥石 (25) 縦 7.0cm、横 4.9cm、厚さ 1.45cm。重さ 55.7g。色調は乳白色。石材は泥岩。側面は打ち欠いて加工している。その側面には長軸方向に浅い擦痕 (使用痕)、短軸方向にやや深い使用痕あり。両面の平坦面は砥石として使用しており、摩耗して平滑になっている。

40SX015 出土遺物 (fig. 116, pla. 88 ~ 91)

土師器

小皿 a (26, 27) 26 は復元口径 9.8cm、器高 1.75cm、復元底径 2.9cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。焼成は良好。XII 期。27 は復元口径 10.6cm、器高 1.45cm、復元底径 9.0cm。底部切り離しは回転ヘラ切り。XI 期。

坏 a (28, 29) 28 は復元口径 15.0cm、器高 2.8cm、復元底径 11.4cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。XIII 期。29 は復元口径 15.6cm、器高 3.0cm、復元底径 13.0cm。底部切り離しは回転糸切り。その後には板状圧痕。XIV 期。

甕 (30) 口縁部破片。器高 1.9cm。内外面ヨコナデ調整。焼成は良好。

須恵器

蓋 a3 (31) 器高 1.85cm。大井部はヘラ削り調整。焼成・還元ともやや良好。

坏 a (32) 高台部の破片。器高 2.4cm。貼り付け高台。焼成良好。色調は淡灰色。

短頸甕 (33) 頸部の破片。内面の頸部と体部の境に指頸圧痕が残る。外面はヨコナデ調整。

瓦器

椀 (34) 口縁部破片。器高 3.3cm。内外面摩耗のため調整は不明。焼成は良好で瓦質。

椀 c (35) 底部破片。器高 1.9cm、復元底径 6.6cm。やや低い貼り付け高台。内面はミカキ c が確認できる。色調は外面が黒褐色で内面が灰白色。断面は淡暗灰色。

土師質土器

鉢 (36) 高台破片。器高 2.6cm。焼成は良好で焼き締まっている。

瓦質土器

鉢 (37) 口縁部破片。器高 2.8cm。外面調整は摩耗で不明。内面は摩耗しているがわずかに斜め方向に刷毛目が残る。焼成は不良。

瓦

平瓦 (38) 側縁部破片。凹面に布目痕と糸に引き抜き痕あり。凸面には I-Cb 類の格子目叩きを施す。格子目叩き文の中心に「●」をいれ、菱形の文様を作っている。側縁部はヘラ切り後未調整。焼成は良好で須恵質。

丸瓦 (39) 側縁部と玉縁部の破片。凹面は布目痕 (布の重ね痕あり)、凸面は I-Cb 類の格子目叩きを施す。側縁部はヘラ切り後に未調整。

土製品

輪羽口 (40) 縦 3.2cm、横 2.2cm、厚み 1.3cm。小破片。外面と、器壁内部に剥離痕あり。内面は暗灰色で、器壁は内側から灰色→灰茶色と色調が変化する。

石製品

水晶製不明品 (41) 破片。縦 2.35cm、横 2.8cm、厚み 1.5cm。外面をなめらかに研磨している。色調は外面が黄茶褐色。断面は黄色味がかった半透明の灰褐色。

40SX015 黒茶色出土遺物 (fig. 117, pla. 92 ~ 93)

瓦

丸瓦 (1, 2) 1 は側縁部と下縁部の破片。凹面は布目痕。凸面は I-Cb 類の格子目叩きを施す。焼成は良好だが、還元はやや不良。2 は側縁部破片。側縁部はヘラ切り後に未調整。凹面は布目痕。凸面は I-Cb 類の格子目叩きを施す。焼成は良好で焼き上がりは須恵質。

平瓦 (3, 4) 3 は端面破片。端面はナデ調整。凹面は布目痕。凸面は I-Cc 類の格子目叩きを施す。焼成は不良で瓦質。4 は側縁部破片。側縁部はヘラ切り後に未調整。凹面は布目痕と模青痕あり。凸面は I-Bc 類の格子目叩きをほどこす。焼成は良好で須恵質。

40SX016 出土遺物 (fig. 117, pla. 94 ~ 95)

土師器

小皿 a (5) 復元口径 9.4cm、器高 1.1cm、復元底径 8.1cm。底部切り離し技法は摩耗しており、判別し辛いのが、回転糸切り後に板状圧痕と思われる。

瓦

平瓦 (6) 端面破片。端面はヘラ削り調整。凹面は布目痕。凸面は縄目痕。

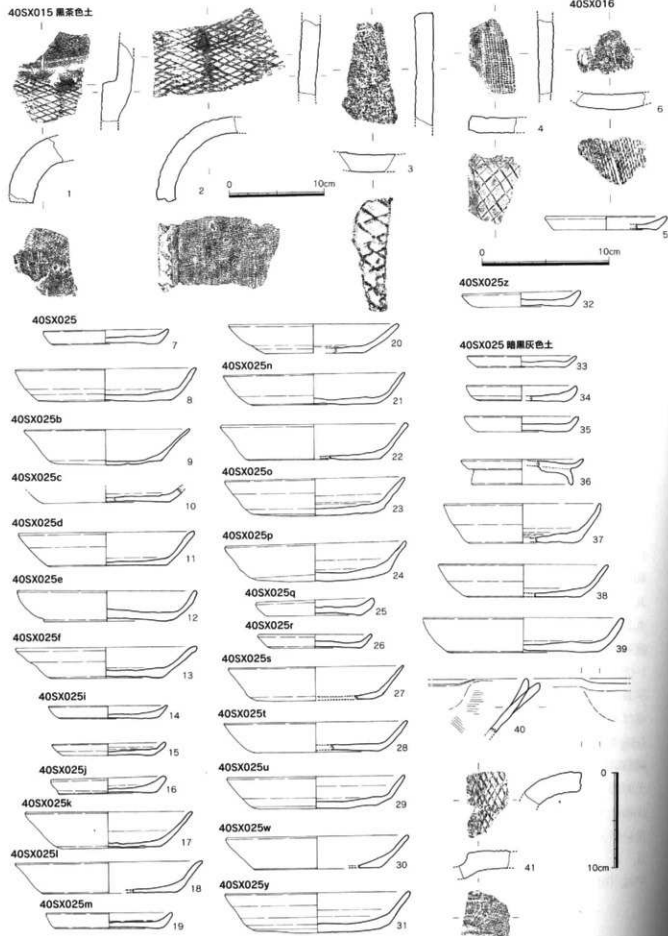


fig. 117 40SX015 黒茶色土・016・025・025 暗黒灰色土出土遺物実測図 (1/3、1/4)

40SX025 出土遺物 (fig. 117, pla. 94・95)

出土遺物にアルファベット付与してとりあげている。個別に出土した土層の違いはないので、ここで一元的に取り上げていく。

土師器

小皿 a (7) 復元口径 9.8cm、器高 1.15cm、復元底径 8.5cm、底部切り離し技法は摩滅しているが、回転糸切り技法か。

坏 a (8) 復元口径 14.1cm、器高 2.6cm、復元口径 10.6cm、底部切り離し技法は摩滅しており不明だが、回転糸切り技法と思われる。XVI 期。

40SX025b 出土遺物 (fig. 117, pla. 94・95)

土師器

坏 a (9) 復元口径 13.0cm、器高 2.8cm、底径 9.0cm、底部切り離し技法は摩滅のため、判別しづらいがわずかに回転糸切り痕跡が残る。焼成は不良。XVII 期。

40SX025c 出土遺物 (fig. 117, pla. 94・95)

土師器

坏 a (10) 底部の破片。器高 1.1cm、復元底径 10.0cm、底部切り離し技法は回転糸切り。

40SX025d 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (11) 復元口径 13.8cm、器高 2.65cm、底径 9.4cm、底部切り離し技法は摩滅のため、判別しづらく不明。焼成は良好だが、器形はゆがんでいる。内側口縁部へ体部にかけて黒褐色の付着物がつく。XVI 期。

40SX025e 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (12) 口径 14.2cm、器高 2.65cm、底径 9.9cm、底部切り離し技法は回転糸切り。ほぼ完形。XVI 期。

40SX025f 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (13) 復元口径 14.3cm、器高 2.5cm、底径 8.5cm、底部切り離し技法は回転糸切り。XVI ~ XVII 期。

40SX025i 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

小皿 a (14, 15) 14 は復元口径 9.4cm、器高 1.0cm、復元底径 8.0cm、底部切り離し技法は摩滅しているが回転糸切り。焼成はやや不良。胎土は 0.5mm 未満 ~ 1mm 程度の雲母片を大量に含む。XVI 期。15 は復元口径 9.4cm、器高 1.0cm、底径 7.3cm、底部切り離しは回転糸切り。胎土は雲母片を少量含む。

40SX025j 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

小皿 a (16) 口径 9.0cm、器高 1.25cm、底径 7.6cm、底部切り離し技法は回転糸切り。ほぼ完形。底部切り離し時の粘土のあまりによって底部近くには稜線が生じている。XVI 期。

40SX025k 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (17) 口径 13.15cm、器高 2.85cm、底径 8.4cm、底部切り離し技法は回転糸切り。焼成は不良。色調は淡褐色。内面見込み部に黒灰色 ~ 暗灰色に変化している箇所がある。XVII 期。

40SX025l 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (18) 復元口径 14.8cm、器高 2.5cm、底径 10.8cm。底部切り離し技法は器壁の摩耗が激しくて不明。焼成は不良。色調は淡褐色～淡灰白褐色。XVI 期。

40SX025u 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

小皿 a (19) 復元口径 10.0cm、器高 1.25cm、底径 8.5cm。底部切り離し技法は回転系切り。その後、板状圧痕を施す。

坏 a (20) 復元口径 13.4cm、器高 2.3cm、復元底径 7.6cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。その後、板状圧痕あり。焼成は良好。色調は白褐色～淡褐色。XVII 期。

40SX025n 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (21) 復元口径 14.4cm、器高 2.4cm、底径 10.2cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。焼成はやや不良。色調は淡灰褐色～淡灰色。XVI 期。

坏 a (22) 復元口径 14.8cm、器高 2.4cm、底径 10.8cm。底部切り離し技法は器壁が摩耗しており不明瞭だが、回転系切り技法。焼成は不良。色調は淡褐色～淡灰白褐色。XVI 期。

40SX025o 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (23) 復元口径 14.2cm、器高 2.9cm、底径 9.6cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。焼成は良好。色調は淡褐色。XVI 期。

40SX025p 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (24) 復元口径 14.3cm、器高 3.0cm、底径 11.0cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。焼成は不良。色調はやや淡い褐色。XVI 期。

40SX025q 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

小皿 a (25) 口径 9.4cm、器高 1.25cm、底径 7.8cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。焼成はやや不良。色調は淡灰褐白黄褐色。XV 期。

40SX025r 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

小皿 a (26) 復元口径 9.0cm、器高 1.1cm、底径 7.8cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。焼成は良好。色調は灰茶色。XVI 期。

40SX025s 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (27) 復元口径 13.8cm、器高 2.7cm、底径 10.4cm。底部切り離し技法は器壁の摩耗により不明。焼成は不良。色調は淡橙白色～淡灰灰白色。XVI 期。

40SX025t 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (28) 復元口径 14.4cm、器高 2.4cm、底径 9.9cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。焼成はやや良好。色調はやや淡い褐色。XVI 期。

40SX025u 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (29) 口径 14.0cm、器高 2.65cm、底径 9.9cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。焼成は良好。色調は淡黄褐色。ほぼ完形。XVI 期。

40SX025w 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (30) 復元口径 14.4cm、器高 2.6cm、底径 9.9cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。焼成は不良。色調は淡灰橙白色～淡橙灰色。XVI 期。

40SX025y 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

坏 a (31) 復元口径 14.6cm、器高 3.2cm、底径 9.7cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。焼成は不良。色調はにぶい褐色。XVI 期

40SX025z 出土遺物 (fig. 117, pla. 96 ~ 104)

土師器

小皿 a (32) 口径 9.4cm、器高 1.2cm、底径 7.7cm。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。焼成は良好。色調は暗褐色。ほぼ完形だが、歪みは大きい。XVI 期

40SX025 暗黒灰色土出土遺物 (fig. 117 ~ 118, pla. 96 ~ 104)

土師器

小皿 a (33 ~ 35) 口径 8.6 ~ 9.0cm、器高 0.9 ~ 1.2cm、底径 7.2 ~ 7.4cm (すべて、復元値も含む)。底部切り離し技法は回転系切り技法。板状圧痕あり。XVI 期～。

小皿 c (36) 復元口径 9.6cm、器高 2.05cm、復元底径 8.0cm。貼り付け高台。色調は淡灰橙褐色。

坏 a (37 ~ 39) 37 は復元口径 12.3cm、器高 3.2cm、復元底径 8.6cm。底部切り離し技法は摩滅のため不明。回転ヘラ切りの可能性がわずかにある。38 は復元口径 13.4cm、器高 2.6cm、復元底径 9.2cm。底部切り離し技法は摩滅のため不明瞭。39 は復元口径 15.8cm、器高 2.75cm、復元底径 12.0cm。焼成は不良。底部切り離し技法は摩滅のため不明。板状圧痕あり。

土師質土器

捏ね鉢 (40) 片口部の破片。器高 4.4cm。内面は横方向の刷毛目調整。外面は摩滅により調整不明。焼成は不良。色調は淡灰白褐色。胎土は密で、0.5mm ~ 2mm 未満の砂粒を少量含む。

瓦

丸瓦 (41, 42) 41 は側縁部と玉縁部の破片。凹面は布目痕、凸面は I-Cb 類の格子目叩きを施す。焼成は良好で須恵質の焼き上がり。側縁部はヘラ切り後に未調整。42 は破片。凹面は粗い布目痕、凸面は I-Cc 類の格子目叩きを施す。焼成は良好で須恵質の焼き上がり。

平瓦 (43, 44) 43 は小破片。凹面は細かい布目痕、凸面は I-Ca 類の格子目叩きを施す。焼成は良好で、焼き上がりは須恵質。44 は小破片。凹面と凸面に弓引き痕が残る。焼成は良好で焼き上がりは須恵質。色調は淡灰色。胎土には 0.5mm ~ 4mm の砂粒を多く含む。

土師器

飯 (45) 把手部の破片。表面は指押さえて表面を調整している。焼成はやや不良。

瓦質土器

捏ね鉢 (46) 復元口径 31.9cm、器高 4.9cm。内面調整は刷毛目調整。外面は摩滅して不明だが、指頭

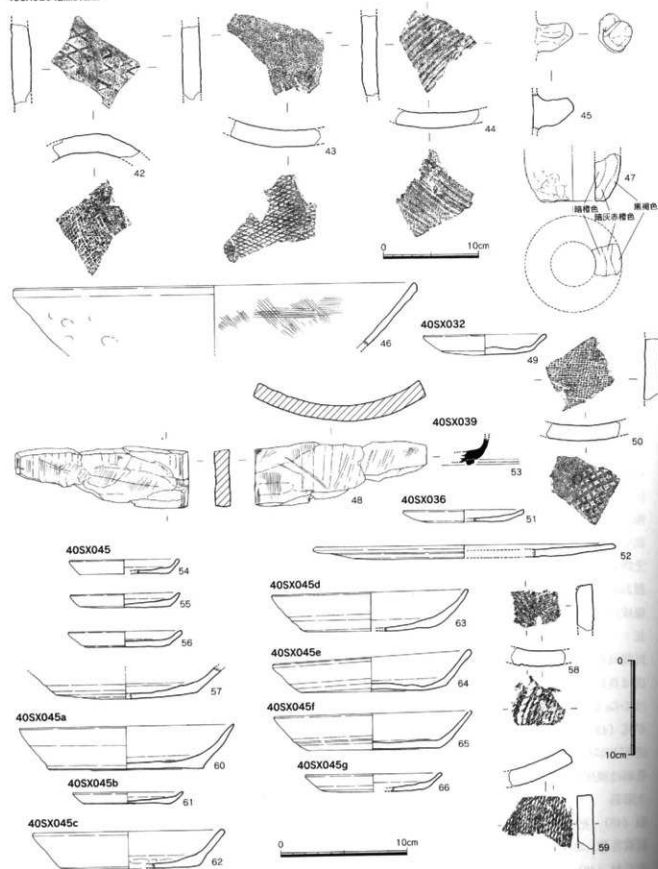


fig. 118 40SX025 暗黒灰色土・032・036・039・045 出土遺物実測図 (1/3、1/4)

圧痕が確認できる。焼成はやや良好。色調は淡灰白色～淡灰黄白色。胎土は密。
土製品

輪郭口 (47) 小破片。復元外径 7.6cm、復元内径 2.6cm。色調は内面が暗灰橙褐色～暗赤黒褐色、外面が黒色～黒灰色、断面が内面より暗橙色→暗灰赤橙色→黒褐色となる。胎土は 0.5mm～2mm の白色砂粒を多く含む。焼成は良好。外面は焼成による温度変化で器壁が荒れているが、内面の器壁はなめらかで

石製品

滑石製石鍋 (48) 石鍋の再加工作品。破片の短辺を研磨している。縦 5.0cm、横 13.7cm、厚さ 1.15cm。
40SX032 出土遺物 (fig. 118, pla. 105・106)

土師器

小皿 a (49) 復元口径 9.7cm、器高 1.6cm、復元底径 7.1cm。底部切り離し技法は、回転ヘラ切り後に粗いナデ調整。XI 期。

瓦

平瓦 (50) 破片。凹面は布目痕、凸面は 1-Aa 類の格子目叩きを施す。焼成は良好で、瓦質。
40SX036 出土遺物 (fig. 118, pla. 105・106)

土師器

小皿 a (51) 復元口径 9.6cm、器高 1.0cm、復元底径 6.8cm。底部切り離し技法は摩滅のため不明。板状圧痕あり。XII 期～か。

托 (52) 復元口径 23.8cm、器高 1.0cm、復元底径 17.0cm。底部は回転ヘラ切り後にナデ調整。色調は淡灰橙白色～淡橙白色。胎土は 0.5mm～1mm の砂粒を少量含む。焼成はやや不良。口縁部端部が直線的な処理ながらやや外反しており蓋にはならないと思われる。珍しい器形だがここでは托と考える。
40SX039 出土遺物 (fig. 118, pla. 105・106)

須恵器

坏 e (53) 高台部破片。低い貼り付け高台。器高 2.0cm。焼成・還元ともに良好。
40SX045 出土遺物 (fig. 118, pla. 105～108)

土師器

小皿 a (54～56) 口径 8.2～9.0cm、器高 1.1～1.2cm、底径 6.8～7.1cm。(復元値を含む) 底部切り離し技法は確認できる 2 例は回転糸切り技法。XVI 期。

坏 a (57) 口縁部が欠損した底部破片。器高 2.2cm、復元底径 11.2cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。焼成は不良。XIV 期以前か。

瓦

平瓦 (58、59) 58 は端部破片。凹面は布痕跡、凸面は縄目叩き。焼成は良好で瓦質。59 は端部と側縁部破片。凹面は摩滅により調整不明。凸面は縄目叩き。焼成はやや不良で、土師質。
40SX045a 出土遺物 (fig. 118, pla. 105～108)

土師器

坏 a (60) 口径 16.8cm、器高 3.4cm、底径 12.2cm。底部切り離し技法は回転ヘラ切り。焼成は不良。XIIB 期。
40SX045b 出土遺物 (fig. 118, pla. 105～108)

土師器

小皿 a (61) 復元口径 8.6cm、器高 0.9cm、底径 6.8cm。底部切り離し技法は回転糸切り。XVI～XVII 期。

灰黒色粘質土出土遺物 (fig. 119, pla. 111・112)

須恵器

鉢 (6) 口縁部から体部への破片。口縁部は回転コナデ。内面は使用により器壁が摩滅。外面は回転コナデ調整。焼成は良好。色調は淡灰色。口縁部は暗灰色は重ね焼きのためか暗灰色変化している。

須恵質土器

捏ね鉢 (7、8) 7は底部破片。器高4.4cm、復元底径9.6cm、底部へラ削り。色調は暗灰色。内面は回転コナデ調整だが、使用による表面摩滅。外面は回転コナデ調整。東播系か。8は底部破片。器高5.7cm、復元底径12.4cm、底部はへラ削り調整。内面は刷毛目調整。使用により表面が摩滅している。外面は指頭圧痕の後に部分的に刷毛目調整を施す。焼成・還元は良好で硬質に焼き上がっている。在地産か。

土製品

輪羽口 (9) 破片。縦7.8cm、横9.4cm、厚さ3.4cm。羽口の復元直径は10.2cm、内径は3.61cm。胎土は、大粒の砂粒やスサを多く含む粗である。色調は外面から淡灰白紫色～暗灰色～橙色。

茶色土出土遺物 (fig. 119, pla. 113・114)

土師器

坏 a (10) 復元口径14.8cm、器高2.9cm、復元底径9.2cm。底部切り離し技法は回転糸切り。XVI期。

越州窯青磁

鉢 (11) 底部破片。未分類。器高3.6cm、底径8.5cm。素地は微細な黒色粒子を少量含む、密。淡黄白色～淡橙黄色を呈す。釉調は細かな貫入が入り、光沢のない緑がかった淡緑茶色の不透明釉。焼成は良好で硬質。内面に目跡が残る、回転コナデ調整。外面は回転へラ削り。底部切り離しは回転糸切り。

黒茶色土出土遺物 (fig. 119, pla. 113～116)

土師器

小皿 a (12) 口径8.4cm、器高1.3cm、底径6.5cm。底部切り離し技法は回転糸切り。XVII～XVIII期。須恵質土器

捏ね鉢 (13～15) 13は口縁部破片。器高3.2cm。色調は、青灰色だが、口縁部外面は暗青灰色。東播系。14は口縁部破片。器高4.0cm。色調は青灰色だが、口縁部外面は暗青灰色。15は底部破片。器高4.6cm。底部は回転糸切り技法。その後に粗いナデを施す。焼成・還元は良好。

土製品

輪羽口 (16、17) 16は縦6.2cm、復元外径7.2cm、内径3.4cm。色調は内側から淡灰橙灰色～暗褐色～暗褐色～暗黒色～黒灰色を呈す。外面は焼成時の熱の影響か、ポコポコと荒れている。内面は縦方向の細かいナデ調整。17は小破片。外面に指頭圧痕が残る。焼成は不良。

瓦

平瓦 (18) 側縁部破片。側縁部はへラ削り後に未調整。凹面に布目痕。凸面にI-Cb類の格子目叩きを施す。焼成は良好で須恵質。

石製品

滑石製石鉢 (19) 口縁部破片。器高3.6cm。色調は若干緑青みのある灰色。III-a-1類。

基石 (20) 縦1.9cm、横1.8cm、厚み0.7cm。色調は黒灰色。全面にわたり滑らかに研磨されている。

表土出土遺物 (fig. 120, pla. 117・118)

須恵器

蓋 1 (1) 口縁部破片。器高0.9cm。

焼成・還元ともに良好。口縁内側にかえりがあり、大宰府編年1B期か。瓦質土器

鉢 (2) 口縁部破片。器高3.5cm、内面に刷毛目調整。外面は回転コナデ調整。A11b類。

須恵質土器

捏ね鉢 (3) 口縁片口部破片。器高5.5cm。焼成・還元は良好。口縁端部に自然釉が掛かる。

国産陶器

甕 (4) 口縁部破片。器高3.7cm、N字口縁。常滑焼。5型式。

越州窯系青磁

合子 (5) 合子身。復元口径15.0cm、

器高3.5cm。素地は微細な黒色斑点を含み密で、淡灰黄白色を呈す。釉調は細かな貫入が入り、やや光沢のある淡緑茶色の不透明釉が掛かる。焼成は良好で硬質。全面施釉。口縁の合わせ部には重ね焼き痕あり。

瓦

軒丸瓦 (6) 瓦当面の破片。縦7.8cm、横8.5cm、厚さ2.8cm。瓦当裏面は不定方向のナデ調整。胎土は5mmまでの大粒の白色砂粒を多く含む粗である。色調は瓦当部が黒灰色で、その他は淡灰色。焼成は良好で、須恵質に焼き上がっている。九歴瓦当分類066類。

土製品

輪羽口 (7) 破片。縦7.1cm、横4.8cm、厚み2.8cm。復元外径6.4cm。外面はコナデ調整。色調は内面から橙色～淡灰褐色～淡灰黄色～灰色となる。胎土は5mm前後の白色砂粒とスサ片を含み、やや粗である。焼成は良好。

(5) 小結

調査地の土地利用について時代ごとの変遷を述べてまとめたい。表採資料だが、須恵器蓋の裏りがついている資料 (fig. 120-1) は、1B期 (7世紀末) のものと考えられるため、当該地の土地利用の初現として注目されるものである。次に古い様相としては、40SK035が奈良時代末～平安時代初期に埋没している。調査地からは8世紀後半の須恵器の破片が少量ながら出土しており、なにかしらの土地利用が行われていたのだと思われる。調査地の土地利用が明確に行われるようになったのは、工房もしくは住居と考えられる40SI055の段階である。XII期には使用されはじめ、XIV期には埋没していたと考えられる。40SX001を井戸と考えるならば、これにも12世紀前半には利用されていた。これは12世紀初頭から前半までに、調査地がある程度利用されはじめたことを示す。XIV～XV期 (12世紀中～後半) には40SK037、40SK050や大型の土坑が掘られて、土師皿の大量投棄が行われている。また、石垣 (40SX015) を設置して地帯を利用することを進めている。少し遅れて、40SD020.030.040が掘られたが、

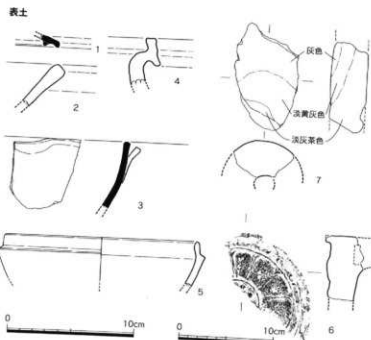


fig. 120 第40次表土出土遺物実測図 (1/3、1/4)

その間の空間は通路として利用された可能性が考えられる。これは南東方向から入ってきて、北西方へ進む道ではないだろうか。その後、40SX045のような土器廃棄は続くが、通路的に利用されていた空間に40SX010のように墓の可能性のある遺構が構築されている等、土地利用が移り変わっていったことが考えられる。最終的には炉遺構40SX005が13世紀前半(XVI～XVII期)に埋没しており、周辺の炉遺構関連の遺構の広がりか確認できると言える。

北西部の第24次の調査成果では、24SX010とした金属工房の使用のピークはXVII期としてしており、40SX005がわずかに先行するものとも考えられる。周辺地の金属工房の広がり1つとして貴重な成果であろう。40SX005周辺の下層で確認された鍛造剥片を含む層の存在からも、もう少し古い段階からも金属生産に関係していた可能性は否定できない。

第27次調査で道路状遺構として推定されていた27SF070、073、074は年代の上限を平安～鎌倉時代と報告されており、その下限は不明だが、今回の40SD020・030・040と関係すると考えるのであれば、12世紀中～後半頃に利用されていた可能性が高くなったといえる。

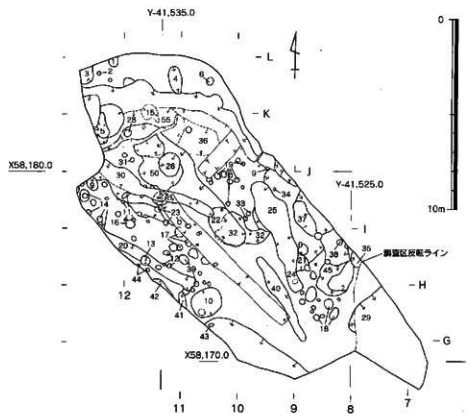


Fig. 121 第40次調査略地図(1/200)

tab. 20 第40次調査 遺構番号台帳

S-番号	遺構番号	類別	備考	埋土状況(古→新)	遺構関係切合(古→新)	遺構四時期	地区番号
1	40SX001	小穴		茶褐色土		12c～	K12
2	40SX002	小穴		茶褐色土			K12
3		土坑		茶褐色土		12c～	K12
4	40SX004	たまり		茶灰色黄色粘質土掘り		～13c前半	K11
5	40SX005	土坑		茶灰色黄色粘質土掘り			K10
6		小穴		暗灰色粘質土		13～14c	J19
7		たまり		赤土			J9
8	40SX008	小穴		褐色土			J12
9		土坑		茶灰色土			J12
10	40SX010	土坑×墓		茶灰色土		XV～XVII	G10
11		小穴群		茶色土			I11-12
12		小穴群		茶色土			H11
13		小穴		茶灰色土			H11
14		小穴群		茶色土			J12
15	40SX015	壺×たまり		黒茶色土石掘り		12c～	J9～K12
16	40SX016	小穴群		茶色土		12c～	H10
17		小穴群		褐色土			H10
18		小穴群		褐色土			G8
19		小穴群		暗褐色土			I10
20	40SX020	溝		暗赤褐色土		12～13c	H10～H12
21		たまり		明黄灰色砂質土	21→25		H8
22		土坑×たまり		暗赤灰色粘質土			I10
23		小穴群					H10～H12
24		たまり	25の土層から検出				H9
25	40SX025	溝×たまり	多量の土器群			XVI～XVII	G8～J9
26	40SX026	土坑		暗黒灰色土炭化物掘り		12c～	J11
27	40SX027	土坑		褐色土	27→30		I11
28		小穴	S-15の石積み部を除去したら検出	黒茶灰色土炭化物掘り			J11
29		たまり		明茶赤色粘			G8
30	40SD030	溝	S-20と対になるものか	茶黒色土		12c中～後半	J12～H9
31		小穴		赤灰色土			J11
32	40SX032	たまり状		淡灰赤色粘土	32+22	XI	I10
33		小穴		茶色土			J9
34		小穴		灰赤色土			J9
35	40SX035	土坑				奈良～	H7
36	40SX036	たまり状			36→55	XII～	J10
37	40SX037	たまり状		灰黒色土→赤黄色土		XIV～XV	H8
38		たまり		赤褐色粘土			I8
39	40SX039	小穴群		暗褐色土		奈良～	H10
40	40SD040	溝×たまり		暗褐色粘質土		平安～	G9～H9
41		たまり		暗褐色粘質土			G11
42	40SX042	土坑		黒色土礫を多く含む		12c～	H11
43		小穴		茶褐色粘質土			G10
44		小穴群		茶色土			H11
45	40SX045	たまり	完形の土器群が多量に出土			XIV～XV	H8
46		欠番					
47		欠番					
48		欠番					
49		欠番					
50	40SX050	たまり×溝		黒茶色土→茶灰色土		XIV～XV	J11
51		欠番					
52		欠番					
53		欠番					
54		欠番					
55	40S1055	住居跡×1房				XVI～XIV	J11

tab. 22-4 第40次調査 出土遺物一覧表 4

黒色土		灰黒色粘土	
1	銅 鍔 a(1)	灰 土 鍔	
1	銅 鍔 a(1)	三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	二十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	三十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	四十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	五十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	六十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	七十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	八十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十一 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十二 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十三 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十四 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十五 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十六 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十七 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十八 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	九十九 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)
1	銅 鍔 a(1)	一百 角 鍔 a(1)	小皿 a(1)

V. 総括

1 遺跡の分布状況

今回の体系的な分布でおこなった第 32、35 次の人為的造成面などの遺構を図化した作業の結果を小西氏が実施した分布調査結果（太宰府顕彰会 1983 年）と重ね合わせると、山中で見つかった人為的造成による段状の平坦面が平安後期から中世を主体とする遺跡であることが判明した。また、これらの段状の造成面は山裾の北谷、南谷、内山地区の集落と耕作面に連続しており、ここにおいても遺物が分布し、40 次に至る発掘調査によって明らかにされてきたように、現在の集落と周辺の耕作地では古代・中世の遺跡群が形成されていることが明確にされた。その範囲は、北谷においてはおおよそ現在の北谷集落域の西限の字山ノ内やソイヤ辺りであり、北は字地蔵谷、東は字熊崎の東側斜面に至り、南は不断に大字内山につながっている。内山地区は字中堂、南谷、辛野（南谷地区）にかなり濃厚な遺跡の分布が認められ、この群の最も東側に伝有智山城の土塁がある。この群は三角形を横にした形状で広がりその頂点に土塁があり、そこを抜けて山頂に至る登山ルートが現在でも生きている。内山集落周辺において、東側は龍門神社境内の字御供屋谷から南の山ノ内の山裾段の谷から不断に、南は字ジル谷、西は字地蔵原や大門を越えて筑紫野市大字原へとつながっている（fig.122）。この的な広がりとは別に山中には字本谷や辛野では点的な展開で小規模な遺構や遺物の散布地が山頂に至る間に散在している。その中に第 34 次で調査した本谷（山妙見洞）礎石群がある。

これらの遺跡群の主体は平安後期に始まる坊跡であることが明確になった。生活域としての広い面と墳墓としての狭小な面との組み合わせによる小単位が集積した遺跡として捉えられる。もちろん場所によってはこの時期に先行する遺跡も含まれているが、この広域な遺跡群は一体的な盛衰を共有しており、不可分な関係で成り立つものである。遺跡群の衰退時期は遺物の分布状況や既往の発掘調査の所見から室町前期頃と推定される。

生活域としての広い面と墳墓としての狭小な面との組み合わせは中宮跡周辺で行った第 38 次調査で明らかになった近世の坊跡にも認められる。中世のものと比較すれば、その占有面積はかなり小さなものとなっているが、中世の段階では個別の小単位の区別が難しい一体的な様相であるのに対し、近世の坊は各中心の施設は石垣を多用して個別的な様相が顕著になっている。これは集団としての社会性が変化したことに依るのか、江戸後期成立の「龍門山水榎」によれば山中は坊ごとに屋敷地と山の土地管理が明確にされていることが伺える。天台系の寺坊から修験道として坊組織に再編されたことに伴う遺跡様相の変化なのかも知れない。

2 下宮地区について

下宮地区とされている内山集落の龍門神社周辺では、宝満山遺跡群中での平安後期から鎌倉前期の中心的な施設が存在する場所として改めて注目されることとなった。本報告の第 37 次調査ではこの時期には九州最大規模クラスの瓦を所要する礎石建物 37SB010 が存在し、過去に行った第 27 次調査ではこれに接続する谷部の参道遺構と考えられる道路遺構が見つかった。この間には過去に平安期の瓦が多量に採取されており、37SB010 以外に瓦所要の建物が複数存在して、この一帯で堂舎が群を成していたことが想定される。採取された瓦の中には大宰府系瓦も含まれており、堂舎の中には 8 世紀後半頃にまで遡るものがあつた可能性がある。谷部から上がる通路は本報告の第 39 次調査でも見つかったおり、その上の平坦面が浄戒坊（鹿土坊）の伝承があり、平安後期以降には堂舎群の南には優位な坊形

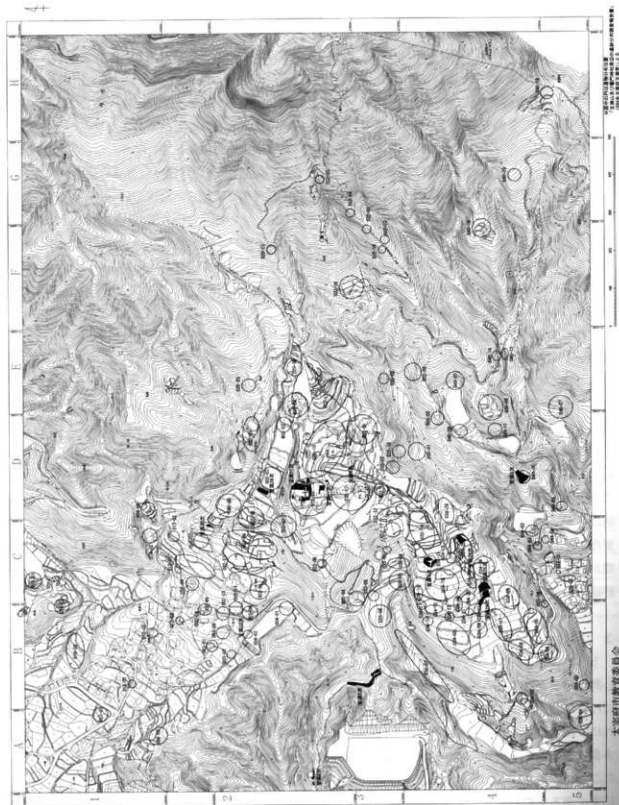


fig. 122 宝満山遺跡遺構・遺物分布図 (1/10,000)

成されていた可能性が高まっている (fig.124)。

3 筑前宝塔院について

本報告の第34次調査で検出された34SB001の礎石建物は、完数によって設計された一辺814cm (26.8尺)、三間四方の建物であったことが判明した。また、今回実施した宝満山中における悉皆的な一連の調査によって、山中において古代の瓦と礎石を伴う遺構の存在は下宮地区とこの場所に限定されることが鮮明となり、しかもこの遺構が10世紀代に創建されたものであることから、以前から推定されていた、承平7年(937)『石清水八幡宮文書之二』所収「大宰府様」記事中の「六箇所宝塔」中の沙弥證覚が承平三年以前に建立した筑前壺門山の宝塔の最有力の物件となった(小田1982、森2008)。この34SB001が宝塔であるかどうかについては、平安前期の宝塔や多宝塔の建築学的な構造研究が今以上に深化する必要があるが、先の「大宰府様」の記載した「下修三昧法」をおこなう施設としては、まさに的を得た一間四面の三昧堂的な構造をもつものと評価されよう。

この塔はもとも天台宗を開いた最澄が企画した、弘仁9(818)年のものとされる「六所造宝塔願文護国縁起」記載の「筑前宝塔院」にあたるもので、国分寺の制度に代わって天台宗が企画した国家安寧を目的とする仏教施設であり、古代前半に国境祭祀がおこなわれた宝満山遺跡との関係では、その性格においてまさにそれを引き継ぐ宗教施設といえる。



fig. 123 六所宝塔分布図

4 残された課題

筑紫野市側の遺構群との連関をさぐり、一山としての遺構構成を明確にする必要がある。また、山頂や辛野、壺門岩周辺での古代祭祀遺跡の実態解明のための確認調査も行われる必要がある。近世の西院谷については第38次の調査によって平面的な情報が整ったが、近年の集中豪雨などによる石垣などの遺構の崩壊が進行しており、墳墓や石垣などの構造物の記録化は必要性が増している。

近年、文化財を目的とした個人や業者による盗掘登山の報告もあり、坊の一部にはそれと思われる掘削の跡も見られることから、積極的な施策を確立する必要がある。周知することによる兼損の恐れもあるが、多くの市民に親しみやすい登山の山としてのみではなく、地域の歴史を物語る重要な遺跡であることを啓発し、次世代に引き継ぐ手立てを整えることが必要になっていると考える。

今回は埋蔵文化財の資源調査に限った報告となっているが、今後は修験道関係の史料(中野1980)の追跡調査や民俗学的な行事や伝承などの「こと」の記録化も一体的におこなうことによって、宝満山の歴史的価値が担保されるものになると考えられる。

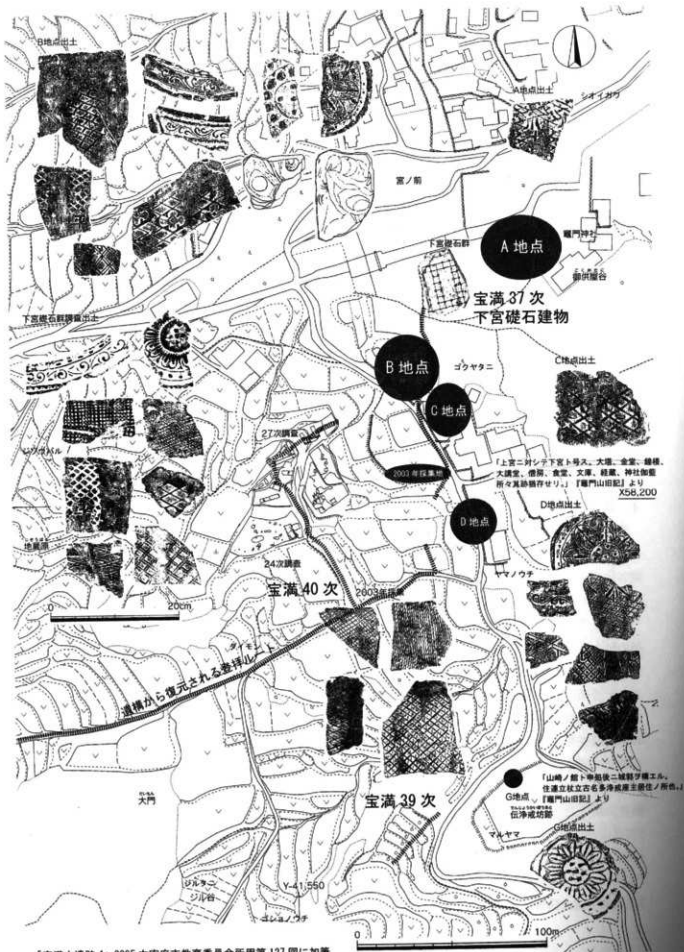
参考文献

- 『宝満山及び壺門神社周辺の遺跡分布調査報告書』小西信二編 1984年財団法人太宰府顕彰会
- 『宝満山の地宝』小田富士雄編 1982年太宰府顕彰会
- 『宝満山の環境歴史学的研究』森弘子 2008年財団法人太宰府顕彰会
- 『筑前国宝満山信仰史の研究』中野幅能編 1980年名著出版

写真図版



太宰府天満宮東神苑よりの宝満山の眺望（昭和初期）



「宝満山遺跡4」2005 太宰府市教育委員会所用第127図に加筆

fig. 124 宝満山遺跡下宮地区遺構相関図 (1/2000、1/6)



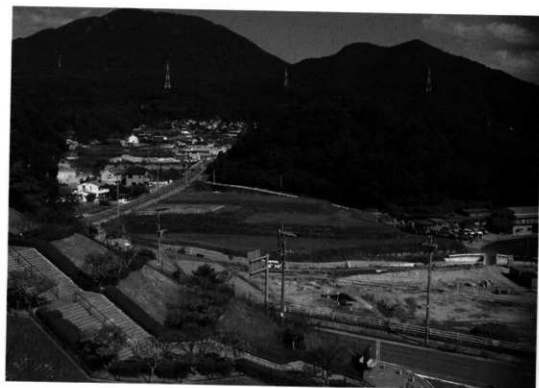
phot.1 SX005.010 遠景 (南から)



phot.2 SX004,005,006,010 (南から)



phot.3 調査区全景 (下が北)



phot.4 調査区遠景 (南西から)



phot.5 調査区遠景（北東から）



phot.6 34SB001 全景（北から）



phot.7 第1遺構面 完掘状況（上が東）



phot.8 第2遺構面 完掘状況（北から）



phot.9 調査区全景 近接（上から東）



phot.10 14トレンチ南壁土層（北から）



phot.11 調査地全景（東から）



phot.12 39SX010 礎状況（北西から）



phot.13 調査区全景(上が東)



phot.14 40SX005号跡検出状況(上が東)

報告書抄録

ふりがな		所在地		調査期間		調査面積		調査理由			
ふりがな	所在地	コード	座 標	開始	終了	㎡					
ふりがな	ほうまんざんいせきでん										
番 名	宝満山遺跡群 6										
調査名	第31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40次調査										
シリーズ名	太宰府市の文化財										
シリーズ番号	111集										
編者名	山形恒美・高橋亨・宮崎亮一・下高久雄・遠藤典										
編集機関	太宰府市教育委員会										
所在地	福岡県太宰府市観世音寺1丁目1番1号										
発行年月日	2010(平成22)年3月31日										
発行部数	111集										
宝満山遺跡群	今院跡, 墓塔	備 考	命兵~江戸	石版, 土器, 埴, 道釘 陶器片	土師器, 須恵器, 小倉銅山 陶磁器	銅内山寺, 大山寺, 有賢山寺, 有賢山城, 宝満山寺内に關する築山と石垣跡の遺構					
ふりがな	番 名	ふりがな	所在地	コード	座 標	調査期間	調査面積	調査理由			
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第31次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-031	59190	-41010	20091128	20090331	127,000	測量調査
宝満山遺跡群 第31次	条外	宝満山遺跡群 第31次	大字内山6-10他	40214	301-031	59190	-41010	20091128	20090331	127,000	測量調査
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第32次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-032	59190	-41010	20061101	20070331	300,000	測量調査
宝満山遺跡群 第32次	条外	宝満山遺跡群 第32次	大字内山8-10他	40214	301-032	59190	-41010	20061101	20070331	300,000	測量調査
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第33次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-033	58182	-42096	20071010	20071025	467	民衆開発
宝満山遺跡群 第33次	条外	宝満山遺跡群 第33次	大字内山445-1	40214	301-033	58182	-42096	20071010	20071025	467	民衆開発
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第35次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-034	54790	-40967	20080111	20080430	1,150	確認調査
宝満山遺跡群 第35次	条外	宝満山遺跡群 第35次	大字内山780-1・16	40214	301-034	54790	-40967	20080111	20080430	1,150	確認調査
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第35次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-035	58200	-40500	20090225	20090331	306,000	測量調査
宝満山遺跡群 第35次	条外	宝満山遺跡群 第35次	大字内山793, 大字北谷905他	40214	301-035	58200	-40500	20090225	20090331	306,000	測量調査
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第36次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-036	58201	-41561	20090121	20090326	543	農地改良
宝満山遺跡群 第36次	条外	宝満山遺跡群 第36次	大字内山620, 621, 930	40214	301-036	58201	-41561	20090121	20090326	543	農地改良
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第37次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-037	58312	-41468	20090114	20090326	748	確認調査
宝満山遺跡群 第37次	条外	宝満山遺跡群 第37次	大字内山883, 884	40214	301-037	58312	-41468	20090114	20090326	748	確認調査
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第38次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-038	59200	-40900	20090121	20090326	38,600	測量調査
宝満山遺跡群 第38次	条外	宝満山遺跡群 第38次	大字内山2-1, 2-2他	40214	301-038	59200	-40900	20090121	20090326	38,600	測量調査
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第39次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-039	57947	-41462	20090408	20090527	208	農地改良
宝満山遺跡群 第39次	条外	宝満山遺跡群 第39次	大字内山1036, 1032	40214	301-039	57947	-41462	20090408	20090527	208	農地改良
ほうまんざんいせきでん	宝満山遺跡群 第40次	ほうまんざんいせきでん	太宰府市	40214	301-040	58182	-41468	20091015	20091208	324	農地改良
宝満山遺跡群 第40次	条外	宝満山遺跡群 第40次	大字内山88-4, 68-8, 75, 78-2, 78-3	40214	301-040	58182	-41468	20091015	20091208	324	農地改良

太宰府市の文化財 第111集

宝満山遺跡群 6

— 第31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39, 40次調査 —

平成22(2010)年3月

編集・発行 太宰府市教育委員会
〒818-0101 太宰府市観世音寺1丁目1番1号

印刷 有限会社 システム・レコ
〒813-6591 福岡市東区多の津一丁目14番1号
FRCビル